

# 現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究 ——学生の「生徒化」に注目して——

課題番号 24531072 機関番号 32502

平成 24 年度 ～ 平成 26 年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））

研究成果・最終報告書  
平成 27 年 2 月

研究代表者 武内 清  
(敬愛大学 国際学部 こども学科 特任教授)

研究分担者 岩田 弘三  
(武蔵野大学 人間科学部 教授)  
浜島 幸司  
(同志社大学 学習支援・教育開発センター 准教授)

## はじめに

今回の調査報告書は、我々の研究グループ（代表・武内清）の7冊目のものである。

1冊目は、『学生文化の構造と機能に関する実証的研究』（1999年）

この内容は、武内清編『キャンパスライフの今』（玉川大学出版部、2003年）に収録。

2冊目は、『12大学・学生調査—1997年と2003年の比較』（2004年）

この内容は、武内清編『大学とキャンパスライフ』（上智大学出版、2005年）に収録。

3冊目は、『学生のキャンパスライフの実証的研究——21大学・学生調査の分析——』（2005年）

4冊目は、『現代大学生の生活と文化——学生支援に向けて——』（2007年）

5冊目は、『キャンパスライフと大学の教育力——14大学・学生調査の分析——』（2009年）

6冊目は、『大学の「教育力」育成に関する実証的研究——学生のキャンパスライフからの考察——』（2010年）

7冊目にあたる本報告書は、平成24年度～平成26年度 文部科学省補助金（基盤研究（C））「現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究——学生の「生徒化」に注目して——」（課題番号24531072、研究代表 武内清）の成果をまとめたものである。

第Ⅰ部では、2013年度に実施した14大学1771名を対象にした大学生調査のデータ分析の内容を掲載している。そこでは、過去の大学生調査のデータと比較すると同時に、調査した大学生のキャンパスライフのさまざまな側面（勉学、部・サークル活動、アルバイト、将来像、趣味行動、メディア行動、ジェンダー意識）を実証的に明らかにしている。今回の分析のポイントの一つは、学生の「生徒化」現象である。その社会的要因を探ると同時に、キャンパスライフに与えるインパクトや意味を考察している。

第Ⅱ部では、学生文化や学生支援の背景となっている青年文化や大学の様子を、個別的に考察したものやその理論に関して言及したものを収録した。

我々の研究グループ（大学生文化研究会）では、大学教育と学生のキャンパスライフとの関連を、意識調査という実証的データと、観察や理論的考察によって、明らかにする作業をすすめてきた。

**<大学生文化研究会・研究メンバー>（五十音順）** ○は代表者

伊藤素江、岩田考、岩田弘三、大島真夫、大野道夫、黒河内利臣、小原孝久、小林雅之、佐野秀行、笠原雅人、白石義郎、鈴木美伸、○武内清、浜島幸司、谷田川ルミ、山口晶子。

調査の実施にご協力いただいた多くの友人、知人、そして学生諸君に感謝したい。

本報告書が、これからの大学改革、学生支援の資料として役立つことを願っている。

2015年2月

研究代表 敬愛大学・国際学部・特任教授 武内 清

## 目次

はじめに	武内 清	
目次		
<b>第Ⅰ部 学生文化の実証的研究</b>		
第 1 章 調査の目的と方法	武内 清 浜島幸司	1
第 2 章 現代学生文化の特質 ——2013年調査データ(14大学1771名)の分析——	浜島幸司	7
第 3 章 「大学の学校化」と大学生の「生徒化」	岩田弘三	
第 4 章 4時点における学生の「生徒化」と大学の「学校化」の検討 ——1997年・2003年・2007年・2013年データの比較から——	浜島幸司	
第 5 章 「生徒化」した学生の授業への期待	黒河内利臣	
第 6 章 大学生の趣味とキャンパスライフ ——オタク趣味に着目して——	山口晶子	
第 7 章 大学生の携帯電話・スマートフォン利用とキャンパスライフ	山口晶子	
第 8 章 現代大学生のキャリアとジェンダー ——女子学生と男子学生の意識の関係性の分析——	谷田川ルミ	
<b>第Ⅱ部 学生文化と学生支援</b>		
第 9 章 個人化・液状化した社会における「仲間」志向の量的・質的研究 ——AKB48と「 <small>ワンピース</small> ONEPIECE」を対象として——	大野道夫	
第 10 章 生徒から学生へのキャリア教育の実践 ～教育社会学による学生再生アプローチ～ 「大学生のキャリア」を理解させる授業	鈴木美伸	
第 11 章 公設民営大学の公立化に伴う大学生文化への影響 ——名桜大学の事例をもとにした試論——	竺原雅人	
おわりに	武内 清	
<b>資料</b>		
調査票見本		
全体・性別・学年別・大学別集計表		
大学別自由記述(Q32)		

## 第 I 部

# 学生文化の実証的研究

第1章

## 調査の目的と方法

武内清（敬愛大学）・浜島幸司（同志社大学）

### 1 はじめに

#### 1-1 有効な学生支援に向けて

大学改革の焦点は、これまでのところ、授業や教育課程に焦点が当てられることが多かった。しかし、学生の成長を促すという視点からすると、学生の生活や学生支援に注目すべきであろう。

大学全入時代になり、さまざまなタイプの学生が大学に入学するようになり、大学生生活の送り方に途惑う学生も多い。高校時代までに基礎学力のみならず、学習態度の形成されていない学生も多い。

初年次教育やリメディアル教育が教員によってなされているが、それらは学生の意欲や生活態度と結びつきが重要になっている。高校までの習慣で、授業には出席するがおしゃべりはやめられない学生、クラスに友人のいないため不安で授業で打ち込めない学生、アルバイトで夜遅くまで働いてつい授業に遅刻したり、授業中に居眠りしたりしてしまう学生など、授業への意欲や受講態度には学生の生活態度との関連が見られる。

これまで、学生支援は教育指導とは切り離され、大学の補助的な活動として、主に大学職員によって担われてきた。しかし、学生の大学でのトータルな生活や成長を考える時、教育支援と学生支援との結びつきや、学生支援に対する教員の役割や教員と職員の協働（教職協働）が今求められている。

キャリア支援やボランティア活動が単位化され、職員も学生の学習に関与するようになっている。学生支援 GP や各種 GP の企画、運営には職員が中心となることが多く、職員の教育力が問われるようになっている。

学生支援を巡って、昨今の大学教員と職員の役割分担はどのようになり、またどのようになり今後すべきとそれぞれが考えているのか、そして学生の文化やキャンパスライフの実態から考えると、どのような学生支援の形態が好ましいのか、その点を明らかにする必要に迫られている。

#### 1-2 学生調査の知見と有効性

「大学生文化研究会」（代表：武内清）では、これまで「コミュニティとしての大学」のキャンパスライフの重要性を指摘し、大学生のキャンパスライフ調査を過去 3 回（1997 年、2003 年、2007 年）実施してきた。

その学生調査の内容は、大学や教員や職員や授業への満足度のみならず、サークル活動、友人関係、アルバイト、生活時間、キャリア展望、高校時代の経験、自己概念などを含んだトータルなものであり、大学の教育支援や学生支援のキャンパスライフへの影響も明らか

かになるような設計になっている。

これまでの学生調査から、大学生といっても一様ではなく、大学格差等に規定された大学類型によりキャンパスライフや大学生の意識は大きく違っていることが明らかになっている。

詳細はこれまでの報告書に譲るが、たとえば、2003年および2007年のデータをもとに、調査対象の大学を「伝統総合大学」「中堅大学」「新興大学」の3タイプに分け、それぞれの学生文化の違いを確認した<sup>(1)</sup>。タイプにより、日頃の授業への取り組み、サークル活動への参加、将来のキャリア意識等が大きく違っている。

「伝統総合大学」には、教養志向、モラトリアム志向の学生が多く、学生に自主性があり、学生の「生徒化」もそれほど進んでいないのに対して、「新興大学」の学生は、学生の自主性は乏しく、学生の受け身化、「生徒化」が進んでいる。

「新興大学」の学生は、専門志向が強く、資格を求めて大学に入学し、アルバイトも多くしながら、教員から言われたことだけはきちんと果たす「生徒化」傾向が強い。一方、この「新興大学」には、基礎学力が低く、学習意欲も乏しい学生も多く入学している。このような「新興大学」の学生に対する「学生支援」は、初年次教育や学習支援も関連させ、重点的に行われる必要がある<sup>(2)</sup>。

2007年調査から6年を過ぎた2013年の学生文化はどのようなものなのだろうか。

### 1-3 調査の目的と本報告書の構成

本報告書では、2013年に大学生に実施したアンケート（質問紙）調査による量的な研究方法を用いて、現代の大学生の意識及び行動（学生文化）を分析する。最新のデータに限らず、過去に本研究会が実施したデータも一部使用する。

アンケートでの調査項目は、キャンパスライフ全体に及んでいる。すなわち、大学の授業、部・サークル活動、友人関係、恋愛、アルバイト、家庭教育、高校生活、進学動機、将来像、職員、キャリア支援、大学チャーターの効果などである。

本報告書は、Ⅱ部構成となっている。第Ⅰ部は、上記の2013年に実施した学生調査のデータの分析を、多方面から行ったものである。第Ⅱは、実施した学生の調査と関連しながらも、その他のデータや資料を参照しながら、学生文化、学生支援に関して論じたものである。

これらの論稿が、現在の大学・大学生、そして学生支援に関して考察する資料になることを願っている。

## 2 調査内容

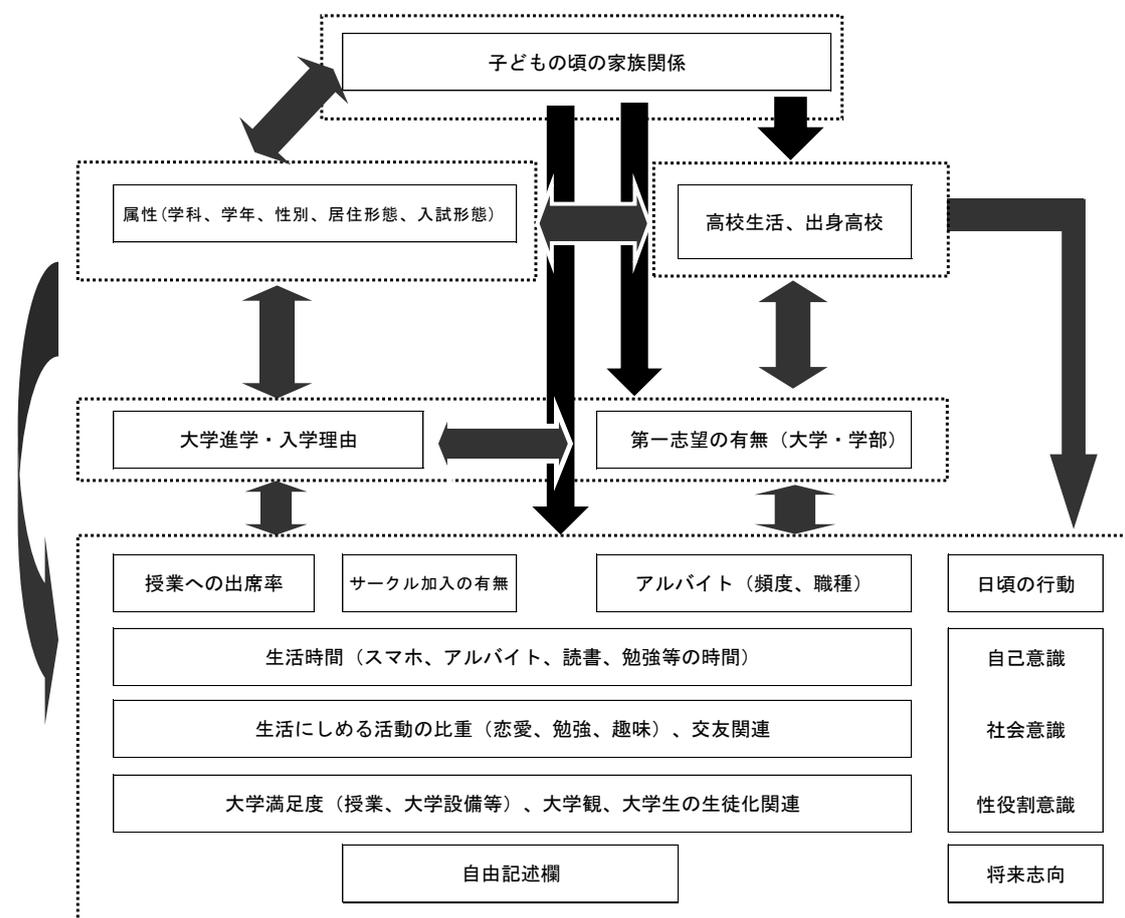
2013年度大学生調査の調査項目は、以下のような項目から成る。

属性（学科、学年、性別、居住形態、入試形態）、大学入学・選択理由、授業への出席率、サークル、友人関係、大学満足度（授業、大学設備等）、生活時間（スマホ、読書、勉強時間）、アルバイト（頻度、職種）、生活に占める活動の比重（恋愛、勉強、趣味）、子どもの頃のこと、高校生活、大学観、サブカルチャー、自己意識、社会意識、性役割意識、将来展望、自由記述欄。

調査票は、巻末に収録してある。

同様に、全体、性別、学年別、大学別の集計表と、大学別の自由記述も巻末に収録した。質問間の関連図を図1-1に示した。

図1-1 2013年度調査項目関連図



### 3 調査の方法

2013年度調査は以下のように実施した。

- 調査時点： 2013年9月～12月
- 調査大学： 15大学（国立4校、私立大学11校）
- 調査方法： 授業時に学生に記入してもらう自記形式（一部持ち帰り方式）
- 調査対象： 人文・教育・社会科学系学部所属する大学生

### 4 大学別・サンプルの属性

大学別のサンプル属性は表1-1に示した。今回の調査対象は、すべて4年制大学である。設置別の内訳は、国立大学3校（A、C、D、ホ）、私立大学12校（F、G、H、J、L、W、Z、イ、ロ、ハ、ニ）である。

所在地は、東京6校、関東（東京除く）3校、関西4校、九州2校と全国に渡っている。

標本数は、2789名（男子学生1356名<48.6%>、女子学生1433名<51.4%>）であるが、ハ大学は1018名からの回答を得ている。1大学のみ突出したサンプルを全体に統合しての分析は、複数の地域、そして多様な特性を持つ大学から集めた回答が少数派となってしまうことになる。

ゆえに、14大学1771名（男子学生674名<38.1%>、女子学生1095名<61.9%>）の分析が主となる。

なお、本調査は全国の大学をランダムサンプリングしたものではない。しかし、文系を中心とした学生を対象に、さまざまなタイプの大学の学生を調査対象にしている。

表 1-1 2013年データの概要

大学名	A大学	C大学	D大学	ホ大学	F大学	G大学	H大学	J大学	L大学	W大学	Z大学	イ大学	ロ大学	ニ大学	14大学	ハ大学	15大学	
設置形態	国立				私立										全体	私立	全体	
地区	東京	関東	九州	関西	東京	関西	東京	東京	九州	東京	関東	関西	関西	東京		関東		
入学難易度	A	B	B	A	A	A	B	C	C	C	B	C	C	B		C		
サンプル数	127	187	114	42	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	1771	1018	2789	
性別	男	73.2%	32.1%	38.6%	47.6%	30.1%	50.2%	47.9%	29.5%	45.6%	7.8%	50.4%	—	50.7%	38.1%	66.8%	48.6%	
	女	26.8%	67.9%	61.4%	52.4%	69.9%	49.8%	52.1%	70.5%	54.4%	92.2%	100.0%	49.6%	100.0%	49.3%	33.2%	51.4%	
専攻	人文科学系	36.5%	0.0%	0.0%	7.1%	65.9%	0.0%	32.4%	12.6%	38.8%	0.0%	67.1%	0.8%	0.0%	43.3%	21.5%	0.0%	13.6%
	社会科学系	4.8%	0.0%	0.0%	71.4%	4.0%	100.0%	44.7%	77.9%	48.3%	0.0%	26.8%	99.2%	0.0%	50.7%	38.6%	81.1%	54.2%
	社会福祉系	0.0%	0.0%	46.5%	0.0%	8.1%	0.0%	16.0%	7.4%	9.5%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.8%	0.0%	4.3%	
	教員養成系・教育系・子ども系	27.0%	100.0%	51.8%	7.1%	11.6%	0.0%	6.9%	0.0%	0.7%	99.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	28.5%	18.9%	25.0%
	その他	31.7%	0.0%	1.8%	14.3%	10.4%	0.0%	0.0%	2.1%	2.7%	0.0%	6.1%	0.0%	0.0%	6.0%	4.6%	0.0%	2.9%
学年	1年	0.8%	37.4%	26.3%	33.3%	39.3%	39.9%	35.6%	0.0%	57.7%	0.0%	61.8%	24.8%	0.0%	98.5%	32.6%	25.8%	30.1%
	2年	93.7%	39.6%	31.6%	33.3%	31.2%	26.6%	42.6%	76.0%	13.4%	98.0%	29.2%	24.8%	0.0%	38.8%	24.6%	33.6%	
	3年	3.1%	16.0%	21.9%	28.6%	15.0%	22.9%	5.3%	19.8%	15.4%	1.0%	9.0%	26.3%	95.2%	1.5%	18.3%	27.0%	21.5%
	4年	1.6%	7.0%	19.3%	4.8%	13.3%	10.6%	15.4%	4.2%	12.8%	1.0%	0.0%	24.1%	4.8%	0.0%	9.8%	22.5%	14.5%
	その他	0.8%	0.0%	0.9%	0.0%	1.2%	0.0%	1.1%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	0.1%	0.3%

※入学難易度は、代々木ゼミナールのHP記載の2013年度大学入試難易度(偏差値)を使用し、A:60以上、B:59~50、C:49以下とした  
 学科が複数にわたる場合には、各学科の偏差値の中央値をとった

本調査は本研究会が実施した1997年、2003年（2004年追加調査）、2007年に続く大学生調査であり、一部の調査大学は、1997年から、継続して実施している。

また、各回の調査ごとに質問紙も改定/追加をしているが、一部の設問については、1997年から継続して使用しており、16年間の比較が可能となっている（調査大学、サンプル数の詳細については、表1-2を参照のこと）。

具体的な論考に入る前に次章にて、2013年データ、つまり14大学のものを用いた全体結果と性別、学年別の傾向について提示する。今回のデータがどのような特性を持つものであるのかを、うかがい知る手掛かりになるだろう。

表 1-2 4 時点の調査大学（延べ 35 大学）と回答サンプル（延べ 10287 名）

調査名称	1997年調査	2003年調査	2007年調査	2013年調査	
調査時期	1997-1998	2003-2004	2007-2008	2013	
調査大学数	19	21	14	15	
(うち短大)	4	0	0	0	
記号	回答サンプル数				計
A	83	114	84	127	408
B	67	130	-	-	197
C	87	117	169	187	560
D	147	99	67	114	427
E	148	105	-	-	253
F	201	399	337	174	1111
G	202	433	442	219	1296
H	34	73	335	188	630
I	68	127	-	-	195
J	114	111	70	96	391
K	96	-	-	-	96
L	119	131	146	149	545
M	142	86	-	-	228
N	122	-	-	-	122
O	74	-	-	-	74
p(短大)	112	-	-	-	112
q(短大)	126	-	-	-	126
r(短大)	139	-	-	-	139
s(短大)	49	-	-	-	49
P	-	120	280	-	400
Q	-	197	-	-	197
R	-	24	-	-	24
S	-	99	-	-	99
T	-	85	-	-	85
U	-	59	-	-	59
V	-	34	-	-	34
W	-	77	67	102	246
X	-	101	-	-	101
Y	-	-	64	-	64
Z	-	-	80	89	169
イ	-	-	151	133	284
ロ	-	-	355	84	439
ハ	-	-	-	1018	1018
ニ	-	-	-	67	67
ホ	-	-	-	42	42
計	2130	2721	2647	2789	10287

<注>

- (1) 他にも「学生文化研究会」では、日本の学生文化の変遷を、さまざまな社会的・文化的要因との関連で、データをもとに考察してきた。たとえば、次のようなことを、明らかにしてきた。
- 1 文部科学省の大学改革が、大学の研究より教育を重視するようになっている。
  - 2 学問の進化により、どの分野でも基礎的な部分の積み重ねがあり、その部分の学習は必須になっている。
  - 3 経済不況の中で、資格の修得、仕事に役立つ技術、知識の習得が求められ、実学志向が強まっている。
  - 4 各大学も、初年次からの教育を重視し、教員も職員も、学生に手厚い教育&指導を行うようになっている。
  - 5 学生は、大学の勉強を重視し、素直に、大学の教育や支援に従うようになっている。
  - 6 一方、学生文化の広範な広がりや深さが失われ、実利（俗）のみが追求され、聖や遊へ離脱が少なくなり、学生の自立性も失われがちである。
- (2) 教育支援、学生支援を考える時も、このような学生文化の違いに対応した方策がとられる必要がある。それは、各大学の教育力や大学文化や教員や職員の実態、また学生文化の特性により、各大学で違いがあるであろう。

## 第2章

## 現代学生文化の特質

## —2013年調査データ(14大学1771名)の分析—

浜島幸司(同志社大学)

## 1 はじめに

本調査データの各項目の集計結果を中心に概観する。全体は14大学1771名である。全体の結果だけでなく、性別、学年別にもみる。

もちろん、本データはランダムサンプルではないため、昨今の大学生を代表する結果とはいえない。しかしながら、2013年に日本の大学に在籍している大学生1771名であることは間違いない。本データセットがカバーできる範囲がどこなのか意識しながら、傾向を読み解くことで、より有効な分析が可能となるだろう。

本来ならば、全部で15大学のデータセットであるが、1つの大学サンプルが1000名を超えており、全体の3分の1を占めてしまうため、本章では使用していない。

以下、2節で各項目を「2-1 子ども時代～高校時代」「2-2 属性」「2-3 授業」「2-4 学生生活」「2-5 意識と行動」に分類して、報告する。

なお、欠損値は分析から外し、有効回答が100%となっている状態で数値を読み解く。

2節での結果を踏まえつつ、3節でまとめをおこなう。

## 2 設問項目別の特徴と傾向

## 2-1 子ども時代～高校時代

まずは、入学前の本調査回答者の経験を概観していこう。

## ・子どもの頃の経験

彼らの子ども時代について、とりわけ家族での経験について5項目を用意した。全体の結果が、図2-1である。

「よくあった」+「まああった」の回答割合が多い順にみると、「家族に本を読んでもらうこと」、「家族に勉強を見てもらうこと」、「家族と社会のしくみや時事問題などについて話すこと」、「家族に美術館や博物館へ連れて行ってもらうこと」で半数以上経験していることがわかる。一方、「家でクラシック音楽を聞いたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったりすること」は3割未満となっている。

性別では、表2-1のように、「家族に本を読んでもらうこと」、「家族に勉強を見てもらうこと」、「家族に美術館や博物館へ連れて行ってもらうこと」、「家でクラシック音楽を聞いたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったりすること」で、女性の経験回答が男性を大きく上回っている。家族との経験では、男女差が大きいことがわかる。

図 2-1 子どもの頃の経験 (全体)

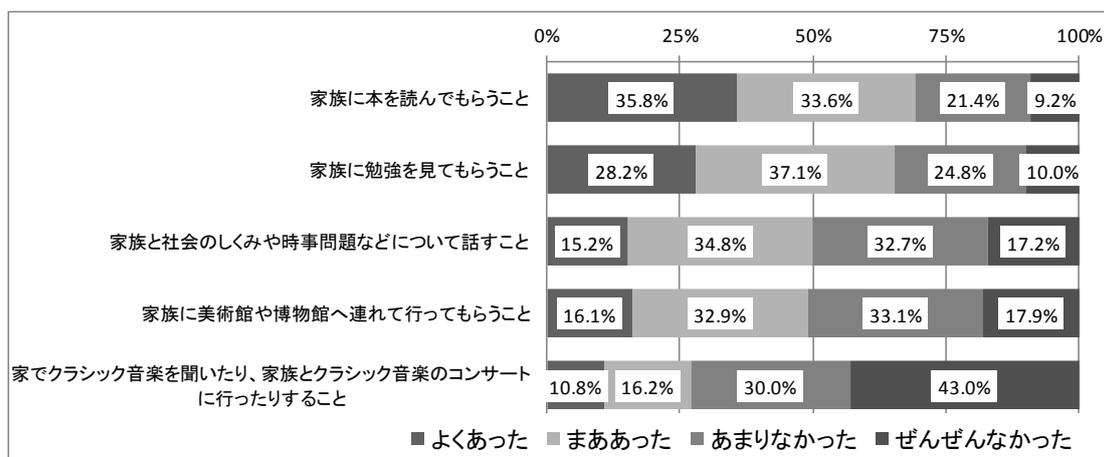


表 2-1 子どもの頃の経験 (全体・性別)

Q22(子どものころ)	「よくあった」+「まああった」の%		
	全体	性別	
		男	女
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095
家族に本を読んでもらうこと	69.4%	61.4%	<b>74.3%</b>
家族に勉強を見てもらうこと	65.3%	58.7%	<b>69.3%</b>
家族と社会のしくみや時事問題などについて話すこと	50.1%	50.7%	49.7%
家族に美術館や博物館へ連れて行ってもらうこと	49.0%	43.0%	<b>52.6%</b>
家でクラシック音楽を聞いたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったりすること	27.0%	18.8%	<b>32.1%</b>

・高校時代にしたこと

高校時代の経験について、7項目で尋ねてみた。全体の結果が、図 2-2 である。

「かなりした」+「まあした」の回答割合が多い順にみると、「部活動をした」、「受験勉強をした」、「髪形や服装に気がついた」でおよそ6割以上が経験している。次いで、「異性とつきあった」、「本をたくさん読んだ」が4割程度で、「ボランティア活動をした」、「アルバイトをした」については2割を下回っていることがわかる。

性別では、表 2-2 のように、「部活動をした」では、男性の回答が女性よりも多い。一方、「受験勉強をした」、「髪形や服装に気がついた」、「ボランティア活動をした」では女性の回答が男性よりも多いことがわかる。

図 2-2 高校時代にしたこと (全体)

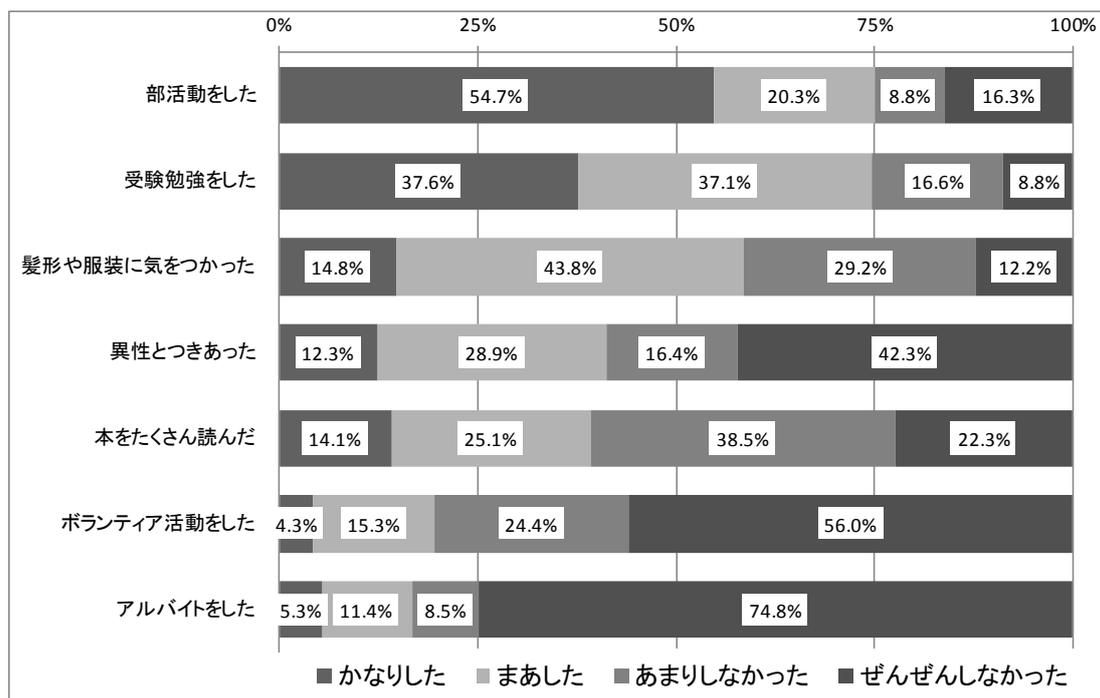


表 2-2 高校時代にしたこと (全体・性別)

Q23 (高校時代)	「かなりした」+「まあした」の%		
	全体	性別	
		男	女
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095
部活動をした	75.0%	78.2%	73.0%
受験勉強をした	74.7%	71.0%	77.0%
髪形や服装に気がついた	58.6%	45.2%	67.0%
異性とつきあった	41.2%	42.0%	40.9%
本をたくさん読んだ	39.2%	36.6%	40.8%
ボランティア活動をした	19.6%	13.6%	23.3%
アルバイトをした	16.7%	14.4%	18.1%

・出身高校

彼らを通った高校について、全体の結果が、表 2-3 である。

「ふつうの大学が多い」(51.5%)、「国公立や難関大学が多い」(38.5%)で、9割を占める。一方で、「短大・専門学校等が多い」、「就職者が多い」、「その他」は少ない。

性別では、表 2-3 のように、男女による出身高校の差はみられない。

調査した大学の難易度に関係するが、本調査の回答者は、4年制大学への進学が前提となっている高校出身者である。

表 2-3 出身高校 (全体・性別)

Q24.出身高校は、次のどれにあたりますか	全体	性別	
		男	女
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095
国公立や難関大学が多い	38.5%	40.7%	37.3%
ふつうの大学が多い	51.5%	49.6%	52.7%
短大・専門学校等が多い	4.9%	3.9%	5.5%
就職者が多い	3.0%	4.2%	2.3%
その他	2.0%	1.8%	2.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

## 2-2 属性

現在の所属大学に進学した彼らの特徴をみていこう。

## ・現/浪

彼らが現役進学か、それ以外かについて尋ねてみた。全体の結果が、表 2-4 である。

「現役」が 87.3% を占める。「1 年浪人」はおよそ 1 割である。「2 年浪人」、「3 年以上浪人」はほとんどいない。

性別では、表 2-4 のように、「現役」では女性の回答が、男性の回答を上回る。一方、「1 年浪人」は男性の回答が女性を上回る。女性に浪人を忌避する規範は存在している。

表 2-4 現役か浪人経験者か (全体・性別)

	全体	性別	
		男	女
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095
現役	87.3%	80.4%	<b>91.5%</b>
1年浪人	10.5%	<b>16.1%</b>	7.0%
2年浪人	0.7%	1.5%	0.3%
3年以上浪人	1.5%	2.1%	1.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

## ・入学形態

経験した入学形態 (入試) について尋ねてみた。全体の結果が、表 2-5 である。

「一般入試 (センター試験含む)」経験がおよそ 6 割である。次いで、「推薦入試」が 3 割程度となり、「AO 入試」、「その他」、「編入学・学士入学」、「帰国子女入試」、「社会人入試」となっている。一般入試以外の多様な選抜方式によって入学した学生は、本調査ではおよそ 4 割であった。

性別では、表 2-5 のように、「一般入試」で男性の回答が女性を上回る。一方、「推薦入試」は女性の回答が男性を上回る。

表 2-5 入学形態 (全体・性別)

	全体	性別	
		男	女
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095
一般入試(センター試験含む)	62.2%	<b>69.9%</b>	57.4%
推薦入試	28.6%	24.2%	<b>31.3%</b>
帰国子女入試	0.6%	0.4%	0.6%
編入学・学士入学	0.7%	0.6%	0.8%
社会人入試	0.2%	0.1%	0.2%
AO入試	6.6%	3.3%	8.7%
その他	1.2%	1.5%	1.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

#### ・通学形態

現在の大学までの通学形態について尋ねてみた。全体の結果が、表 2-6 である。

「自宅」がおおよそ 6 割である。次いで、「アパート、マンション、下宿」が 3 割ほどである。「学生寮」、「親戚知人の家」、「その他」は少数であることがわかる。

性別では、表 2-6 のように、「自宅」で女性の回答が男性を上回る。一方、「アパート、マンション、下宿」で男性の回答が女性を上回る。

表 2-6 通学形態 (全体・性別)

	全体	性別	
		男	女
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095
自宅	63.2%	58.3%	<b>66.3%</b>
アパート、マンション、下宿	30.6%	<b>35.8%</b>	27.3%
学生寮	5.4%	5.3%	5.4%
親戚知人の家	0.8%	0.4%	1.0%
その他	0.1%	0.1%	0.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

#### ・第一志望の有無

進学した大学が第一志望だったのか、「大学」および「学部 (学科)」でそれぞれ尋ねてみた。全体の結果が、表 2-7 である。

「大学」が第一志望である(「はい」)は 8 割である。「学部 (学科)」が第一志望である

は8割となっている。ということは、「大学」で4割、「学部(学科)」で2割が、いわゆる不本意な形での入学をしたことになる。

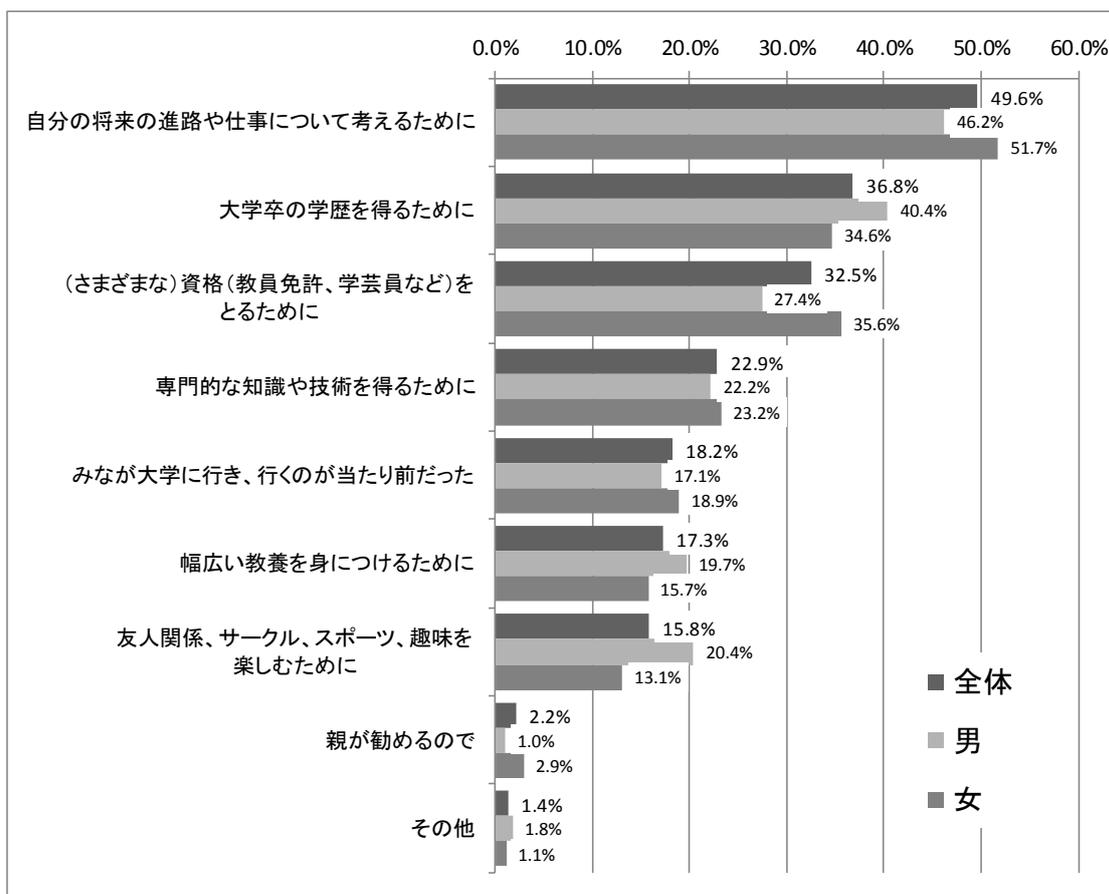
性別では、表2-7のように、男女による回答の差はみられない。

表2-7 大学/学部(学科)の第一志望(全体・性別)

		全体	性別	
			男	女
参考N(%は有効回答で集計)		1771	674	1095
Q8.第一志望の大学	はい	59.0%	60.8%	58.0%
	いいえ	41.0%	39.2%	42.0%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%
Q9.第一志望の学部(学科)	はい	82.9%	81.0%	84.0%
	いいえ	17.1%	19.0%	16.0%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%

・大学に入学した理由

図2-3 大学に入学した理由(全体・性別)2つまで選択



高校進学後、なぜ大学進学を志したのか。その理由について、11項目を用意し、2つまで回答してもらった。全体の結果が、図2-3である。

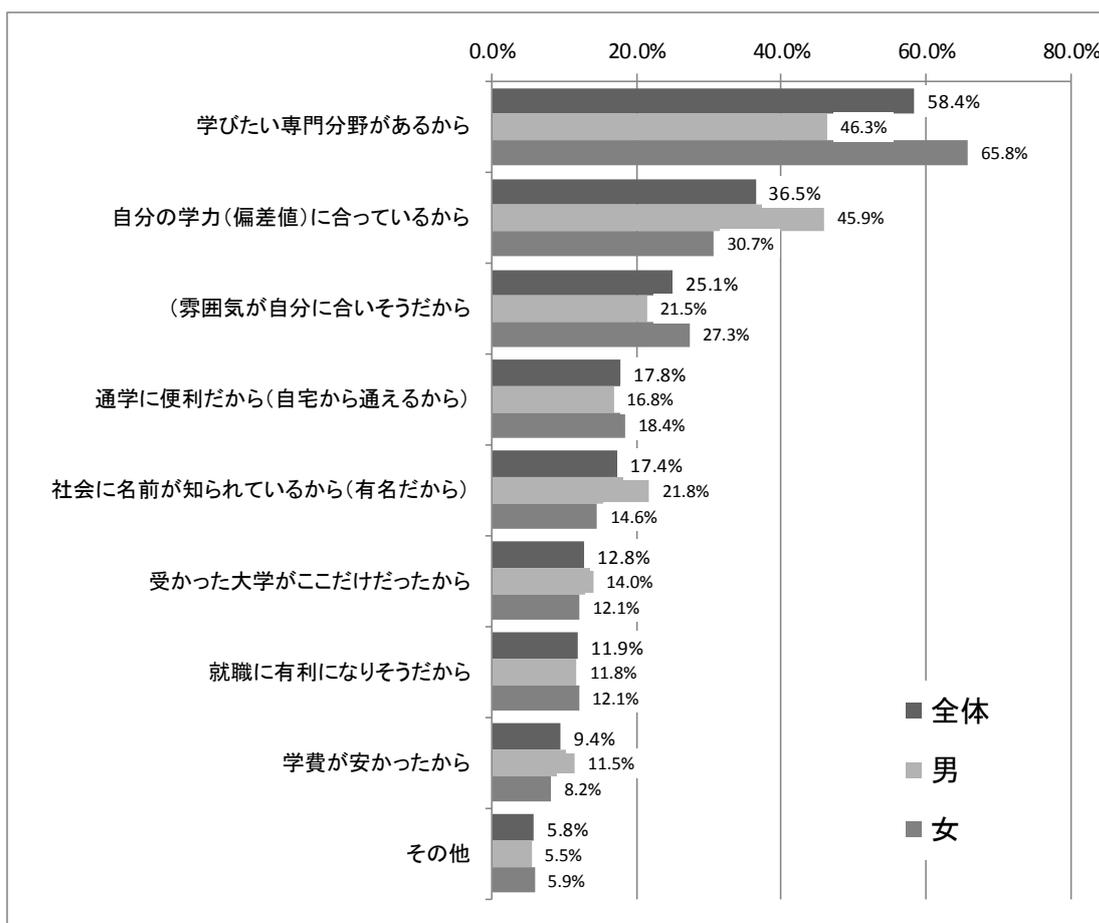
回答割合が多い順にみると、「自分の将来の進路や仕事について考えるために」、「大学卒の学歴を得るために」、「(さまざまな)資格(教員免許、学芸員など)をとるために」が上位となっている。次いで、「専門的な知識や技術を得るために」、「みなが大学に行き、行くのが当たり前だった」、「幅広い教養を身につけるために」、「友人関係、サークル、スポーツ、趣味を楽しむために」と続く。「親が勧めるので」、「その他」は少ない。

性別では、図2-3のように、「自分の将来の進路や仕事について考えるために」、「(さまざまな)資格(教員免許、学芸員など)をとるために」で、女性の回答が男性の回答を上回る。一方、「大学卒の学歴を得るために」、「幅広い教養を身につけるために」、「友人関係、サークル、スポーツ、趣味を楽しむために」は男性の回答が女性を上回る。

女性は自分の将来や資格を見通して大学に行くことを考え、男性は学歴、教養、楽しみを得る場所として大学に行くことを考えている。

・今の大学を選んで入学した理由

図2-4 今の大学を選んで入学した理由(全体・性別)2つまで選択



今の大学に進学した理由について、9項目を用意し、2つまで回答してもらった。全体

の結果が、図 2-4 である。

回答割合が多い順にみると、「学びたい専門分野があるから」がおよそ半数を占める。次いで、「自分の学力（偏差値）に合っているから」、「(雰囲気)が自分に合いそうだから」が上位となる。以下、「通学に便利だから（自宅から通えるから）」、「社会に名前が知られているから（有名だから）」、「受かった大学がここだけだったから」、「就職に有利になりそうだから」、「学費が安かったから」、「その他」の順となっている。

性別では、図 2-4 のように、「学びたい専門分野があるから」、「(雰囲気)が自分に合いそうだから」で女性の回答が男性の回答を上回る。一方、「自分の学力（偏差値）に合っているから」、「社会に名前が知られているから（有名だから）」では男性の回答が女性を上回る。

#### ・部・サークル活動加入の有無

現在、部もしくはサークルに参加しているかについて尋ねてみた。全体の結果が、表 2-8 である。

「加入中」が 74.2%を占める。「以前は参加していたが、やめた」が 11.3%で、この回答を合わせれば、85%の回答者は、一度でも参加経験をもっている。「最初から入っていない」は 14.5%である。加入団体については、「文科系の部、サークル」、「運動系のサークル（同好会）」、「社会活動関係の部、ボランティア団体等」、「運動系の部（体育会）」の順となっている。

性別では、表 2-8 のように、「加入中」の男性の回答が女性の回答を上回る。「最初から加入していない」は女性の回答が多い。

学年別では、表 2-8 のように、「加入中」の1年生の回答が多い。一方、「以前は参加していたがやめた」に4年生の回答が多い。大学生活を経る中で、部・サークル活動以外の活動に興味を持ったのか、もしくは部・サークル活動への興味が失せたのか、団体を離れていく。「最初から入っていない」は本調査回答者では、3年生に最も多かった。

表 2-8 部・サークル活動加入の有無（全体・性別・学年別）

加入内訳の合計は「加入中」の%

Q15.部やサークル(同好会)

	全体	性別		学年別				
		男	女	1年	2年	3年	4年	
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174	
<b>加入中</b>	<b>74.2%</b>	<b>78.4%</b>	<b>71.6%</b>	<b>84.6%</b>	<b>73.6%</b>	<b>61.1%</b>	<b>66.5%</b>	
内訳	運動系の部(体育会)	13.3%	20.4%	9.0%	12.3%	15.2%	11.7%	12.7%
	運動系のサークル(同好会)	20.0%	20.3%	19.9%	27.5%	17.5%	14.8%	14.5%
	文科系の部、サークル	26.3%	27.2%	25.7%	28.6%	26.6%	22.2%	26.6%
	社会活動関係の部、ボランティア団体等	13.6%	10.0%	15.9%	15.6%	13.4%	10.8%	12.1%
	その他	0.9%	0.4%	1.1%	0.5%	0.9%	1.5%	0.6%
<b>以前は参加していたが、やめた</b>	<b>11.3%</b>	<b>10.1%</b>	<b>11.9%</b>	<b>5.8%</b>	<b>12.1%</b>	<b>14.2%</b>	<b>20.8%</b>	
<b>最初から入っていない</b>	<b>14.5%</b>	<b>11.5%</b>	<b>16.4%</b>	<b>9.6%</b>	<b>14.3%</b>	<b>24.7%</b>	<b>12.7%</b>	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

・アルバイト状況

アルバイト生活について、尋ねてみた。全体の結果が、表 2-9 である。

「学期中に定期的に、長期休暇中にも」おこなっている回答が約半数である。続いて、「学期中に定期的に」が 23.8%、「学期中に不定期に、長期休暇中にも」が 11.3%となっている。「まったくしていない」が 8.8%であり、何らかのアルバイト経験者は 9 割となっている。

経験者の主な職種については、「飲食店などでの調理や接客など」が 45.2%と最も多い。次いで、「家庭教師・塾講師」が 21.7%、「コンビニ、スーパーなどでのレジや販売など」が 19.6%と上位の回答となる。少数であるが、「事務的な仕事、受付など」、「運搬、梱包、清掃等の労働」、「その他」の経験者もいる。

性別では、表 2-9 のように、全体の傾向と比較して男女によるアルバイト生活の差異はみられない。しかし、従事する職種については差異がみられる。「家庭教師、塾講師」は男性の回答が多く、「飲食店などでの調理や接客など」女性の回答が多い。

表 2-9 アルバイト状況と主な職種 (全体・性別)

Q21.アルバイト

		全体	性別	
			男	女
参考N(%は有効回答で集計)		1771	674	1095
アルバイト	まったくしていない	8.8%	10.7%	7.6%
	長期休暇期間のみ	3.1%	3.7%	2.6%
	学期中に不定期に	6.3%	6.5%	6.2%
	学期中に定期的に	23.8%	26.3%	22.3%
	学期中に定期的に、長期休暇中にも	46.7%	43.1%	49.0%
	学期中に不定期に、長期休暇中にも	11.3%	9.6%	12.2%
	その他	0.1%	0.0%	0.2%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%
※該当者のみ S Q ・ 主 な 職 種	家庭教師・塾講師	21.7%	<b>26.4%</b>	18.9%
	コンビニ、スーパーなどでのレジや販売など	19.6%	19.1%	19.8%
	飲食店などでの調理や接客など	45.2%	38.4%	<b>49.3%</b>
	事務的な仕事、受付など	5.2%	4.5%	5.6%
	運搬、梱包、清掃等の労働	4.0%	7.1%	2.2%
	その他	4.3%	4.5%	4.2%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%

2-3 授業

本節では、彼らの大学での授業の関わり方についてみていきたい。

### ・授業への出席率

授業への出席状況について尋ねてみた。全体の結果が、表 2-10 である。

本調査項目から「90%以上」の κατηγοリーを新規に用意してみた。その結果、「90%以上」出席するという回答が 66.7%となった。次いで、「89-80%」が 19.7%、「79-60%」が 11.0%となっている。「60%未満」の出席はほぼいないといっている。2013 年においても大学生は「真面目に」授業に出ている。むしろ、「ほぼ休まずに」授業に出ているといっているだろう。

性別では、表 2-10 のように、「90%以上」で女性の回答が男性の回答を上回る。一方、「79-60%」で男性の回答が女性を上回る。男女どちらも、真面目かといえば、女性がほぼ休まずに授業に出る傾向にある。

学年別では、表 2-10 のように、「90%以上」で1年生の回答が多い。「89-80%」では2年生の回答が多い。「79-60%」では4年生の回答が多くなっている。学年が上がるにつれて、若干、真面目ではなくなってくる。とはいえ、4年生であっても「90%以上」の出席者が 56.6%と半数を超えている。

表 2-10 授業への出席率 (全体・性別・学年別)

	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
90%以上	66.7%	61.1%	<b>70.1%</b>	<b>73.0%</b>	64.5%	65.0%	56.6%
89-80%	19.7%	19.8%	19.6%	17.0%	<b>21.8%</b>	19.5%	20.8%
79-60%	11.0%	<b>15.0%</b>	8.6%	8.7%	11.2%	12.1%	<b>16.8%</b>
59-40%	1.9%	3.0%	1.2%	0.7%	2.0%	2.8%	3.5%
39%以下	0.7%	1.2%	0.5%	0.7%	0.4%	0.6%	2.3%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

### ・授業について

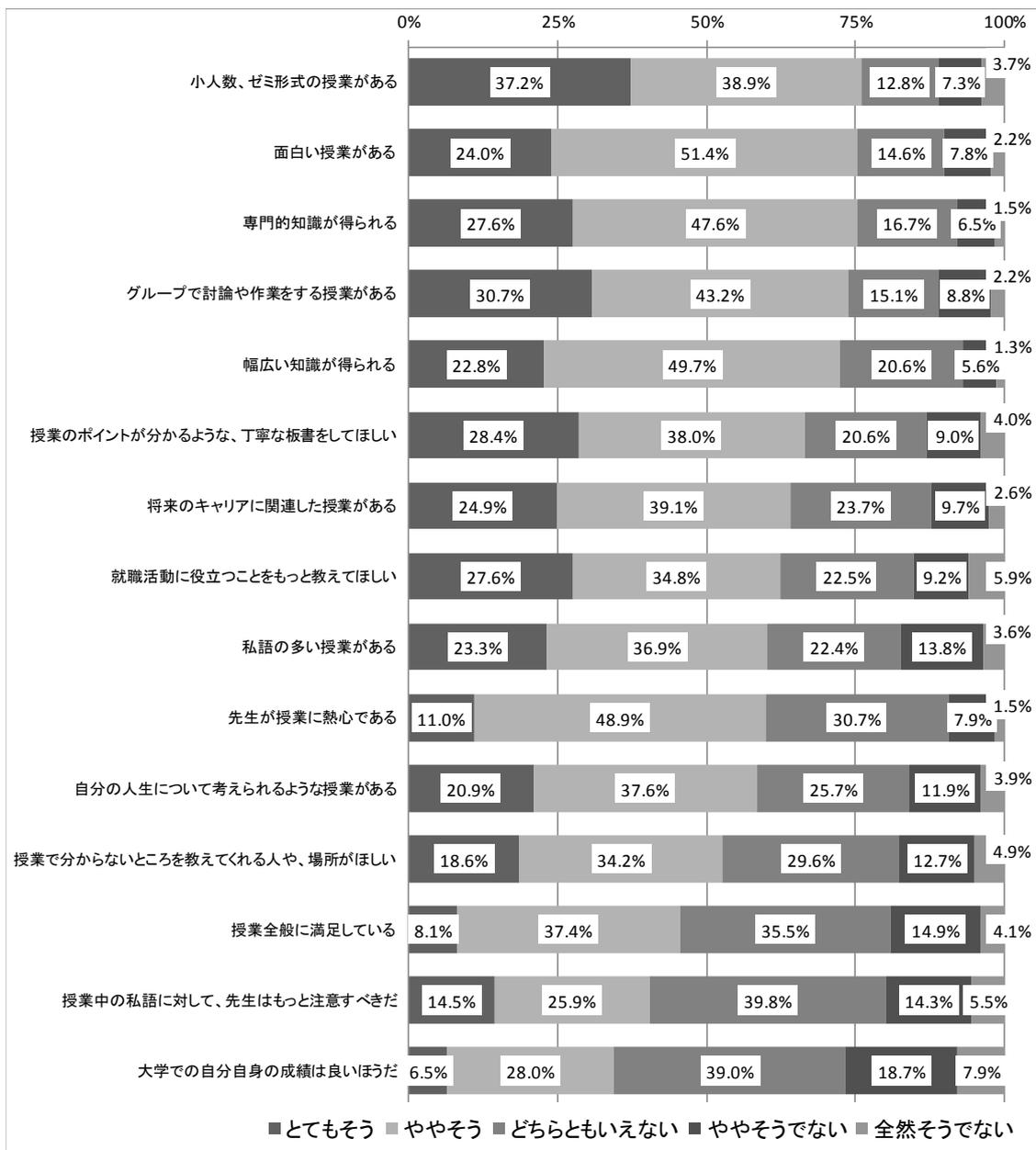
どういった授業があるのか、授業や成績について自分はどう思っているのかについて、本調査では 15 項目で尋ねてみた。全体の結果が、表 2-5 である。

「とてもそう」+「ややそう」の回答割合が多い順にみると、「小人数、ゼミ形式の授業がある」、「面白い授業がある」、「専門的知識が得られる」、「グループで討論や作業をする授業がある」、「幅広い知識が得られる」となる。これらは 70%を超える。続いて、「授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい」、「将来のキャリアに関連した授業がある」、「就職活動に役立つことをもっと教えてほしい」、「私語の多い授業がある」、「先生が授業に熱心である」、「自分の人生について考えられるような授業がある」、「授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい」で半数を超える。

「授業全般に満足している」、「授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ」、「大学での自分自身の成績は良いほうだ」の項目では半数を下回る。

このように、自分の成績は高くなく、そして授業へ満足していないものの、大学の授業から得るものがあると感じ、さらにわかりやすい授業になるための要望を抱いていることがわかる。

図 2-5 授業について (全体)



性別では、表 2-11 のように、「面白い授業がある」、「専門的知識が得られる」、「幅広い知識が得られる」、「授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい」、「将来のキャリアに関連した授業がある」、「就職活動に役立つことをもっと教えてほしい」、「自分の人生について考えられるような授業がある」、「授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい」、「大学での自分自身の成績は良いほうだ」の項目で、女性の回答が男性の回答を上回る。

学年別では、表 2-11 のように、「授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい」、「自分の人生について考えられるような授業がある」に 1 年生の回答が多い。「専門的知識が得られる」、「授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい」に

2年生の回答が多い。「グループで討論や作業をする授業がある」、「将来のキャリアに関連した授業がある」、「就職活動に役立つことをもっと教えてほしい」、「私語の多い授業がある」に3年生の回答が多い。「小人数、ゼミ形式の授業がある」、「面白い授業がある」、「幅広い知識が得られる」、「先生が授業に熱心である」、「授業全般に満足している」、「授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ」、「大学での自分自身の成績は良いほうだ」に4年生の回答が多い。学年によって、授業に対して感じることに差異がみられている。

表 2-11 授業について (全体・性別・学年別)

Q14(大学の授業について)	「とてもそう」+「ややそう」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
小人数、ゼミ形式の授業がある	76.1%	74.7%	77.0%	71.9%	70.1%	88.9%	<b>89.7%</b>
面白い授業がある	75.4%	72.8%	<b>77.2%</b>	76.8%	74.9%	72.8%	<b>77.0%</b>
専門的知識が得られる	75.3%	70.6%	<b>78.2%</b>	73.4%	<b>77.9%</b>	74.7%	73.0%
グループで討論や作業をする授業がある	73.9%	73.8%	73.9%	74.8%	71.2%	<b>76.5%</b>	75.9%
幅広い知識が得られる	72.5%	69.3%	<b>74.5%</b>	72.0%	73.2%	70.4%	<b>74.1%</b>
授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい	66.5%	62.5%	<b>68.9%</b>	<b>69.0%</b>	68.5%	65.4%	51.7%
将来のキャリアに関連した授業がある	64.0%	58.3%	<b>67.6%</b>	66.8%	61.3%	<b>69.4%</b>	56.1%
就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	62.3%	54.2%	<b>67.4%</b>	63.0%	63.7%	<b>65.1%</b>	48.9%
私語の多い授業がある	60.2%	61.5%	59.5%	55.7%	59.8%	<b>66.7%</b>	63.8%
先生が授業に熱心である	59.9%	57.7%	61.4%	63.0%	54.9%	60.8%	<b>68.4%</b>
自分の人生について考えられるような授業がある	58.5%	52.8%	<b>62.0%</b>	<b>63.7%</b>	55.3%	58.5%	54.0%
授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	52.8%	48.8%	<b>55.2%</b>	55.2%	<b>54.2%</b>	49.7%	44.8%
授業全般に満足している	45.5%	45.5%	45.6%	45.1%	42.4%	47.8%	<b>54.3%</b>
授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	40.4%	42.4%	39.2%	37.2%	41.6%	41.2%	<b>44.8%</b>
大学での自分自身の成績は良いほうだ	34.5%	30.6%	<b>36.9%</b>	30.2%	34.4%	36.7%	<b>43.7%</b>

#### 2-4 学生生活

本節では、彼らの学生生活をいくつかの質問を通じて概観していきたい。

##### ・大学生活の比重

大学生活の比重について、8項目を用意した。全体の結果が、図 2-6 である。

「大部分」+「かなり」の回答割合が多い順にみると、「友人との交友」、「学業、勉強」で半数を超えている。「アルバイト」、「趣味」が約半数で、「サークル、部活動」と続く。「異性（恋人）との交際」、「就職活動」は多いとはいえない。「ダブルスクール」については、ほとんどいない。

性別では、表 2-12 のように、「友人との交友」、「学業、勉強」では女性の回答が男性の回答を上回る。一方、「趣味」、「サークル、部活動」は男性の回答が女性を上回る。

学年別では、表 2-12 のように、「サークル、部活動」で1年生の回答が多い。「学業、勉強」で2年生の回答が多い。「就職活動」で3年生および4年生の回答が多い。「友人との交友」、「アルバイト」、「趣味」、「異性（恋人）との交際」で4年生の回答が多い。学年によって、生活比重に違いがみられている。

図 2-6 大学生生活の比重 (全体)

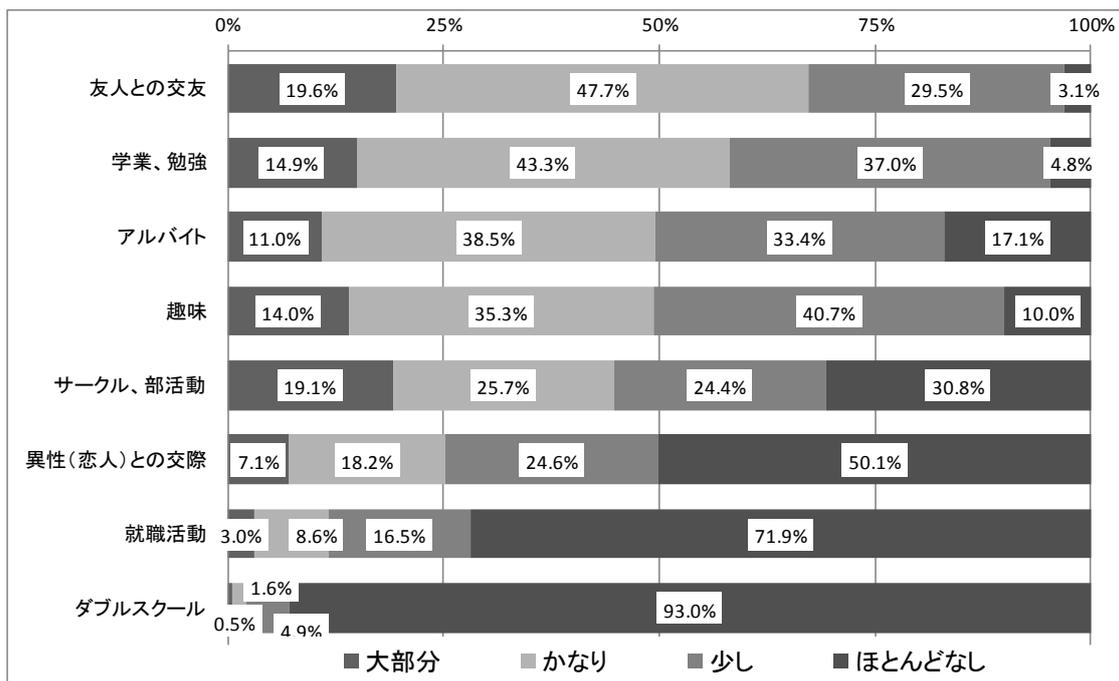


表 2-12 大学生生活の比重 (全体・性別・学年別)

Q12(現在の生活比重)	「大部分」+「かなり」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
友人との交友	67.3%	64.6%	<b>69.1%</b>	70.3%	64.1%	65.4%	<b>74.0%</b>
学業、勉強	58.1%	54.4%	<b>60.4%</b>	55.2%	<b>62.4%</b>	54.9%	54.9%
アルバイト	49.5%	47.4%	50.9%	44.6%	48.0%	56.2%	<b>60.3%</b>
趣味	49.3%	<b>55.3%</b>	45.6%	46.3%	48.8%	49.4%	<b>60.7%</b>
サークル、部活動	44.8%	<b>53.4%</b>	39.6%	<b>53.2%</b>	42.9%	39.8%	34.3%
異性(恋人)との交際	25.3%	24.4%	25.8%	22.9%	26.4%	24.7%	<b>30.2%</b>
就職活動	11.7%	13.2%	10.8%	5.1%	4.2%	<b>29.1%</b>	28.7%
ダブルスクール	2.1%	3.4%	1.4%	1.8%	2.1%	2.8%	2.4%

・友人はどこに多いのか

彼らの友人が、大学に多いのか、それとも大学以外に多いのか尋ねてみた。全体の結果が、表 2-13 である。

「今の大学の人が多い」が 34.7%、「今の大学以外の人が多い」が 33.8 とほぼ同じ割合となっている。「どちらとも言えない」が 31.4%である。

性別では、表 2-13 のように、男女による差異はみられない。

学年別では、表 2-13 のように、「今の大学以外の人が多い」で 1 年生の回答が多い。「どちらとも言えない」で 2 年生の回答が多い。「今の大学の人が多い」で 4 年生の回答が多い。学年が上がるごとに、「今の大学の人が多い」の回答割合も多くなっている。

表 2-13 友人はどこに多いのか (全体・性別・学年別)

Q16.あなたの友達は、今の大学の人が多いですか	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
今の大学の人が多い	34.7%	36.5%	33.7%	29.8%	33.8%	40.7%	<b>43.7%</b>
今の大学以外の人が多い	33.8%	34.1%	33.5%	<b>37.6%</b>	33.2%	31.2%	27.6%
どちらとも言えない	31.4%	29.4%	32.7%	32.6%	<b>32.9%</b>	28.1%	28.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

・大学の友人とすること

友人と何をしているのか。4項目を用意した。全体の結果が、図表 2-7 である。

「よくする」+「まあする」の回答割合が多い順にみると、「お昼ご飯を一緒に食べる」(88.1%)、「ライン、ツイッター、フェイスブックなど、インターネットでやり取りをする」(87.3%)、「学外でも遊んだり食事をしたりする」(77.7%)、「悩みを相談する」(65.2%)となる。すべての項目とも回答割合が高い。

性別では、表 2-14 のように、いずれも女性の回答が男性の回答を上回る。

学年別では、表 2-14 のように、「お昼ご飯を一緒に食べる」、「ライン、ツイッター、フェイスブックなど、インターネットでやり取りをする」で1年生の回答が多い。「学外でも遊んだり食事をしたりする」、「悩みを相談する」で4年生の回答が多い。

図 2-7 大学の友人とすること (全体)

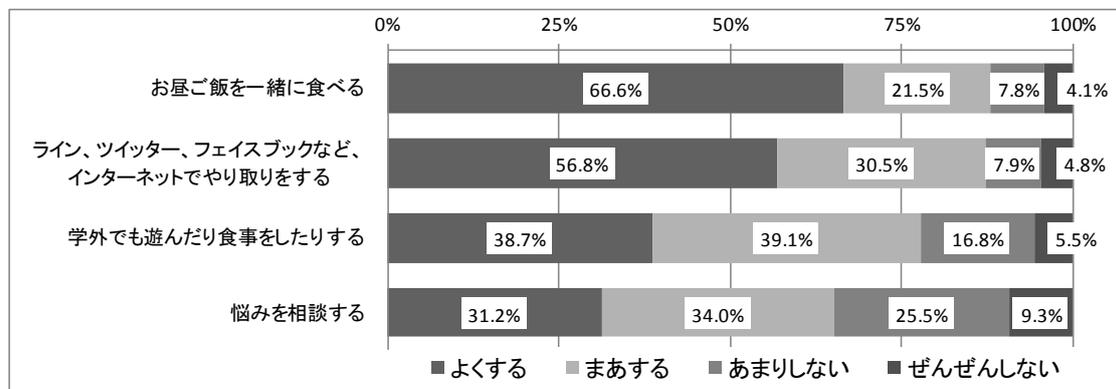


表 2-14 大学の友人とすること (全体・性別・学年別)

Q17(友だちとの付き合い)	「よくする」+「まあする」の%						
	全体	性別		学年別			
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
お昼ご飯を一緒に食べる	88.1%	81.0%	<b>92.6%</b>	<b>91.7%</b>	87.8%	85.2%	82.8%
ライン、ツイッター、フェイスブックなど、インターネットでやり取りをする	87.3%	80.8%	<b>91.5%</b>	<b>90.6%</b>	86.1%	86.7%	82.8%
学外でも遊んだり食事をしたりする	77.7%	72.4%	<b>81.2%</b>	76.7%	77.7%	76.9%	<b>82.2%</b>
悩みを相談する	65.2%	50.7%	<b>74.2%</b>	63.2%	64.6%	67.6%	<b>69.5%</b>

・大学施設・設備への満足度

大学施設および周辺環境の満足について、8項目を用意した。全体の結果が、図表 2-8 である。

「とても満足」+「やや満足」の回答割合が多い順にみると、「図書館」、「校舎、教室」、「コンピュータールーム」が6割以上となる。「購買部(売店など)」が約半数で、「大学の周辺の環境」、「食堂」と続く。「部やサークル活動の場、広場」、「キャリアセンター、就職課」は3割ほどの満足である。

図 2-8 大学施設・設備への満足度 (全体)

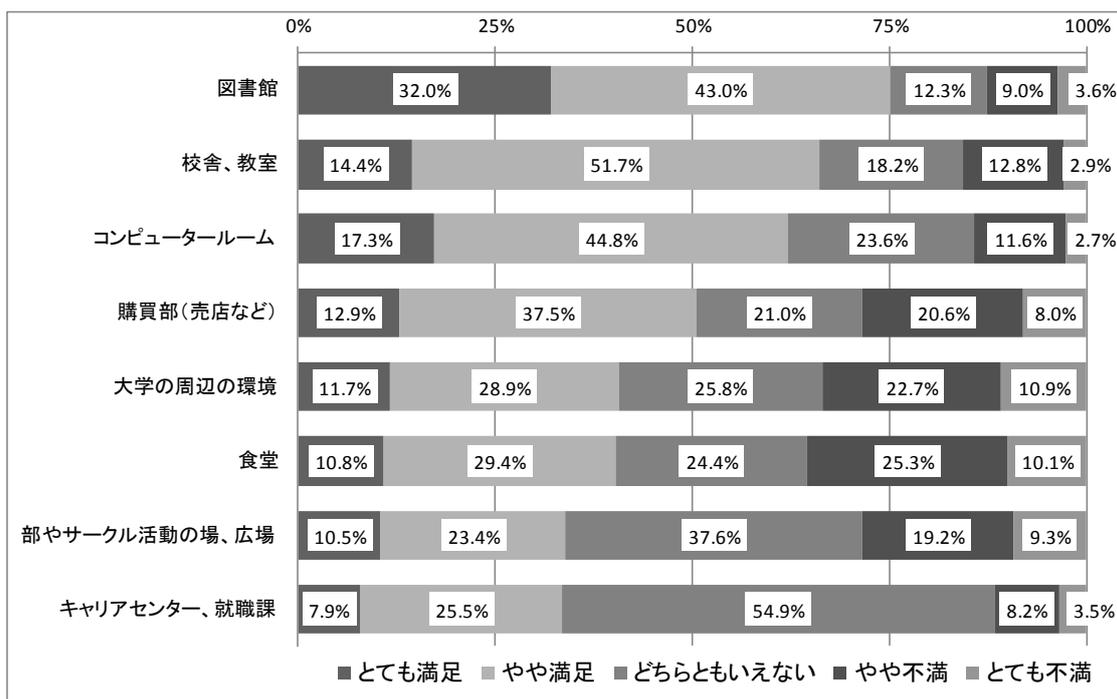


表 2-15 大学施設・設備への満足度 (全体・性別・学年別)

Q18(施設・設備)	「とても満足」+「やや満足」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
図書館	75.1%	74.6%	75.4%	<b>77.6%</b>	75.1%	69.3%	76.4%
校舎、教室	66.1%	65.6%	66.5%	71.9%	57.1%	69.1%	<b>76.4%</b>
コンピュータールーム	62.1%	60.6%	63.1%	<b>68.9%</b>	56.3%	60.8%	64.9%
購買部(売店など)	50.5%	52.1%	49.5%	<b>60.6%</b>	43.9%	41.2%	58.0%
大学の周辺の環境	40.6%	41.8%	39.8%	<b>49.1%</b>	35.7%	33.6%	43.1%
食堂	40.2%	38.7%	41.2%	<b>48.2%</b>	35.2%	36.1%	41.0%
部やサークル活動の場、広場	33.9%	37.4%	31.9%	<b>45.2%</b>	30.2%	25.8%	27.0%
キャリアセンター、就職課	33.4%	30.0%	<b>35.6%</b>	36.3%	23.8%	41.8%	<b>46.6%</b>

性別では、表 2-15 のように、「キャリアセンター、就職課」で女性の回答が男性の回答

を上回る。それ以外の項目では男女による差異はみられない。

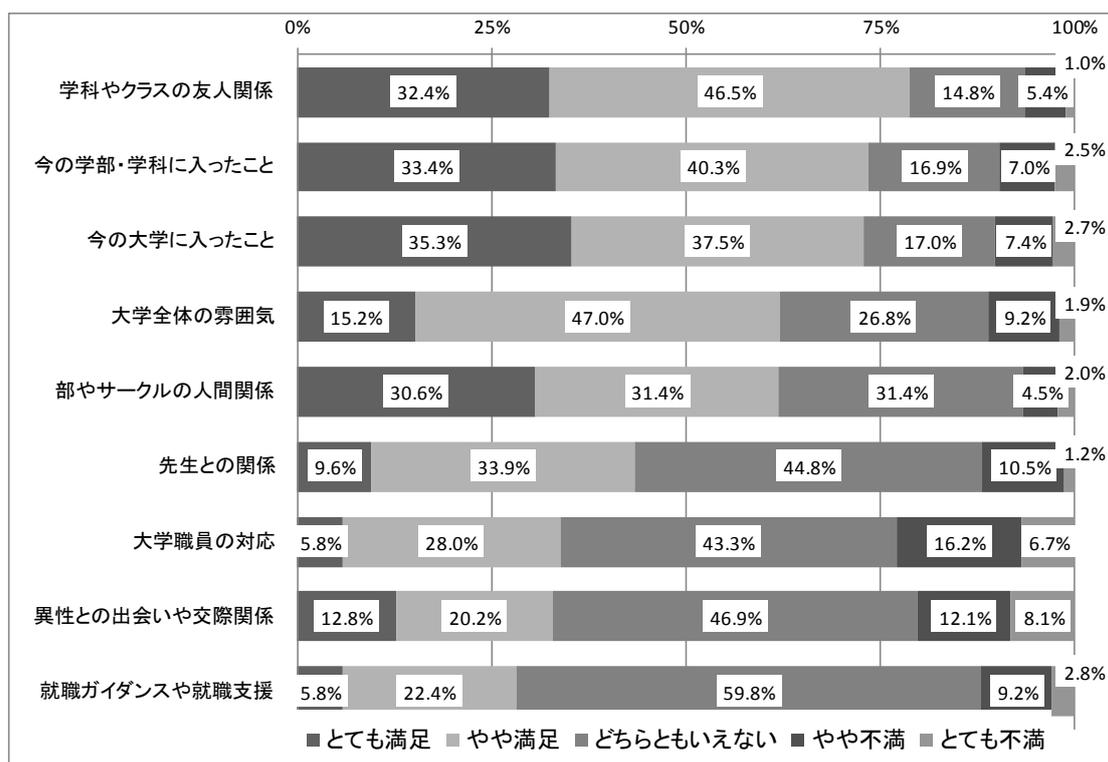
学年別では、表 2-15 のように、「図書館」、「コンピュータールーム」、「購買部（売店など）」、「大学の周辺の環境」、「食堂」、「部やサークル活動の場、広場」で 1 年生の回答が多い。「校舎、教室」、「キャリアセンター、就職課」で 4 年生の回答が多い。

・人間関係満足度

大学内を中心とした人間関係および進学したことの満足について、9 項目を用意した。全体の結果が、図 2-9 である。

「とても満足」+「やや満足」の回答割合が多い順にみると、「学科やクラスの友人関係」、「今の学部・学科に入ったこと」、「今の大学に入ったこと」が 7 割を超えている。以下、「大学全体の雰囲気」、「部やサークルの人間関係」と 6 割の回答である。「先生との関係」が半数を下回り、「大学職員の対応」、「異性との出会いや交際関係」、「就職ガイダンスや就職支援」では 3 割程度の満足となっている。

図 2-9 人間関係満足度（全体）



性別では、表 2-16 のように、「学科やクラスの友人関係」、「大学全体の雰囲気」、「先生との関係」、「就職ガイダンスや就職支援」で女性の回答が男性の回答を上回る。一方、「部やサークルの人間関係」で男性の回答が女性よりも多い。

学年別では、表 2-16 のように、「部やサークルの人間関係」、「大学職員の対応」で 1 年生の回答が多い。「就職ガイダンスや就職支援」で 3 年生および 4 年生の回答が多い。「学科やクラスの友人関係」、「今の学部・学科に入ったこと」、「今の大学に入ったこと」、「大

学全体の雰囲気」、「先生との関係」、「異性との出会いや交際関係」で4年生の回答が多い。

表 2-16 人間関係満足度 (全体・性別・学年別)

Q19(満足度)	「とても満足」+「やや満足」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
学科やクラスの友人関係	78.9%	74.3%	<b>81.9%</b>	80.0%	78.4%	75.2%	<b>84.5%</b>
今の学部・学科に入ったこと	73.6%	71.0%	75.4%	74.2%	70.8%	75.5%	<b>79.3%</b>
今の大学に入ったこと	72.9%	71.2%	74.0%	75.4%	69.5%	72.8%	<b>77.0%</b>
大学全体の雰囲気	62.1%	56.5%	<b>65.6%</b>	66.1%	57.7%	61.9%	<b>66.7%</b>
部やサークルの人間関係	62.0%	<b>66.1%</b>	59.6%	<b>68.7%</b>	58.9%	54.8%	64.2%
先生との関係	43.5%	39.8%	<b>45.8%</b>	36.6%	37.4%	52.9%	<b>71.3%</b>
大学職員の対応	33.8%	32.2%	34.8%	<b>38.0%</b>	29.5%	34.8%	35.8%
異性との出会いや交際関係	33.0%	35.7%	31.3%	31.3%	32.7%	31.2%	<b>41.4%</b>
就職ガイダンスや就職支援	28.2%	24.9%	<b>30.3%</b>	23.1%	19.1%	<b>47.4%</b>	44.3%

・生活時間

主な活動に1日の間で費やしている時間について、4項目を用意した。全体の結果が、図 2-10 である。

「2時間以上」の回答割合が多い順にみると、「スマートフォン・携帯電話を使う」、「アルバイトをする」で半数以上を占めている。一方で、「本を読む(読書)」、「授業の予習・復習をする」は「ほとんどしない」が多い。ごく一部であるが、「3時間以上」費やす学生がいる。

図 2-10 生活時間 (全体)

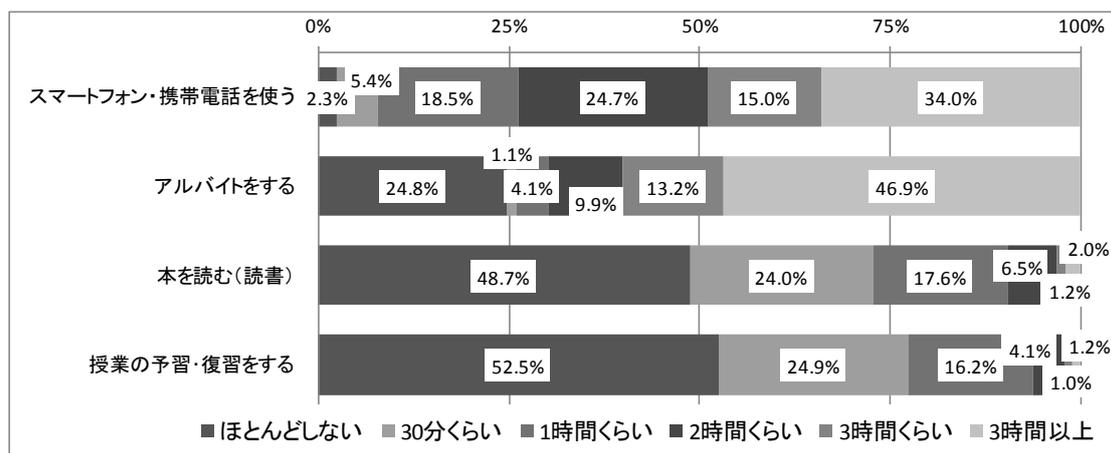


表 2-17 は、4項目それぞれの全体・性別・学年別の回答割合をみたものである。

「授業の予習・復習をする」では、男女による差異はみられない。学年別では、「30分くらい」、「1時間くらい」で1年生の回答が多い。「ほとんどしない」で4年生の回答が多い。

「本を読む(読書)」では、「1時間くらい」で男性の回答が女性の回答を上回る。「ほと

んどしない」に女性の回答が男性を上回る。学年別では、「30分くらい」「1時間くらい」で、4年生の回答が多い。

「スマートフォン・携帯電話を使う」では、「1時間くらい」「2時間くらい」で男性の回答が女性の回答を上回る。「3時間以上」では、女性の回答が男性を上回る。学年による差異はほとんどみられない。

「アルバイトをする」では、「ほとんどしない」で男性の回答が女性の回答を上回る。一方、「3時間以上」で女性の回答が男性を上回る。学年別では、「ほとんどしない」で1年生の回答が多い。「3時間以上」で4年生の回答が多い。

表 2-17 生活時間 (全体・性別・学年別)

Q20(平日時間)

		全体	性別		学年別			
			男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)		1771	674	1095	577	687	324	174
授業の予習・復習をする	ほとんどしない	52.5%	52.9%	52.1%	43.7%	50.7%	65.3%	<b>65.5%</b>
	30分くらい	24.9%	24.1%	25.5%	<b>29.6%</b>	25.0%	20.4%	18.4%
	1時間くらい	16.2%	15.8%	16.5%	<b>20.5%</b>	18.0%	9.6%	7.5%
	2時間くらい	4.1%	4.0%	4.2%	4.9%	3.8%	2.2%	6.3%
	3時間くらい	1.0%	1.6%	0.6%	0.9%	0.9%	1.2%	1.7%
	3時間以上	1.2%	1.5%	1.0%	0.5%	1.6%	1.2%	0.6%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
本を読む(読書)	ほとんどしない	48.7%	42.2%	<b>52.7%</b>	<b>51.4%</b>	<b>51.6%</b>	46.9%	33.5%
	30分くらい	24.0%	23.0%	24.6%	24.3%	21.8%	24.5%	<b>31.2%</b>
	1時間くらい	17.6%	<b>21.5%</b>	15.2%	14.6%	17.1%	18.9%	<b>26.6%</b>
	2時間くらい	6.5%	9.1%	4.9%	6.4%	6.1%	6.8%	5.8%
	3時間くらい	1.2%	2.1%	0.6%	1.4%	1.5%	0.3%	0.6%
	3時間以上	2.0%	2.1%	2.0%	1.9%	1.9%	2.5%	2.3%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
スマートフォン・携帯電話を使う	ほとんどしない	2.3%	4.5%	0.9%	2.1%	2.8%	2.5%	1.2%
	30分くらい	5.4%	7.9%	3.9%	5.7%	6.0%	3.4%	5.8%
	1時間くらい	18.5%	<b>22.3%</b>	16.2%	18.4%	19.7%	15.8%	19.7%
	2時間くらい	24.7%	<b>28.4%</b>	22.4%	24.3%	23.5%	25.1%	28.9%
	3時間くらい	15.0%	11.6%	17.1%	15.6%	14.9%	14.6%	14.5%
	3時間以上	34.0%	25.3%	<b>39.5%</b>	34.0%	33.2%	38.7%	30.1%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
アルバイトをする	ほとんどしない	24.8%	<b>27.8%</b>	22.9%	<b>32.6%</b>	23.1%	18.6%	17.8%
	30分くらい	1.1%	2.2%	0.5%	1.0%	1.0%	1.5%	1.1%
	1時間くらい	4.1%	6.2%	2.8%	4.0%	4.7%	3.4%	2.3%
	2時間くらい	9.9%	10.8%	9.3%	8.5%	11.0%	10.5%	9.8%
	3時間くらい	13.2%	11.9%	13.9%	15.3%	11.1%	13.3%	14.4%
	3時間以上	46.9%	41.0%	<b>50.5%</b>	38.6%	49.1%	52.6%	<b>54.6%</b>
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 2-5 意識と行動

最後に、彼らの日常の意識と行動をみてみよう。

## ・価値観の変化

大学に入ってから価値観（感じ方や考え方）が変わったかどうか尋ねてみた。全体の結果が、表 2-18 である。

「かなり変わった」(28.5%)、「すこし変わった」(49.5%) でおよそ 8 割を占める。かなりというわけではないが、価値観が変わった大学生が多数派である。「ほとんど変わらない」(18.6%)、「ぜんぜん変わらない」(3.4%) は 2 割ほどである。

性別では、表 2-18 のように、「かなり変わった」で男性の回答が女性の回答を上回る。「すこし変わった」は女性の回答が男性を上回る。

学年別では、表 2-18 のように、「すこし変わった」で 1 年生の回答が多い。「かなり変わった」で 4 年生の回答が多い。

表 2-18 価値観の変化（全体・性別・学年別）

Q25.感じ方や考え方(価値観)が変わりましたか							
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
かなり変わった	28.5%	<b>32.4%</b>	26.2%	23.3%	27.0%	31.9%	<b>43.1%</b>
すこし変わった	49.5%	43.5%	<b>53.1%</b>	50.4%	<b>50.6%</b>	48.8%	44.8%
ほとんど変わらない	18.6%	18.5%	18.8%	21.4%	19.5%	16.9%	10.3%
ぜんぜん変わらない	3.4%	5.7%	1.9%	4.9%	2.9%	2.5%	1.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## ・大学観

どちらの考え方にあてはまるのか、二者択一の質問を 5 項目用意した。全体および性別・学年別の結果が、表 2-19 である。

A では、「大学は学問よりさまざまな体験をする場である」が 54.5%で、「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」の 45.6%よりも多い。性別では男女による差異はみられない。学年別では、「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」で 2 年生の回答が多い。「大学は学問よりさまざまな体験をする場である」で 3 年生の回答が多い。

B では、「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」が 68.3%で、「単位が楽に取れる科目を選択したい」の 31.7%を大きく上回る。性別では、「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」で女性の回答が男性の回答を上回る。「単位が楽に取れる科目を選択したい」で男性の回答が女性を上回る。学年別では、「単位が楽に取れる科目を選択したい」で 3 年生の回答が多い。「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」で 4 年生の回答が多い。

C では、「出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ」が 54.2%で、「大学での授業も出席を厳しくとるべきだ」の 45.8%よりも多い。性別では、「大学での授業も出席を厳しくとるべきだ」で女性の回答が男性を上回る。「出席が少なくても、

試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ」で男性の回答が女性を上回る。学年別では、「大学での授業も出席を厳しくとるべきだ」で1年生の回答が多い。「出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ」で4年生の回答が多い。

Dでは、「大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい」が54.6%で、「大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識や技術を教えるべきだ」の45.4%よりも多い。性別では、「大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識や技術を教えるべきだ」で女性の回答が男性を上回る。「大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい」で男性の回答が女性を上回る。学年による差異はみられない。

Eでは、「学生の自主性にまかせたほうがよい」が82.6%で、「大学の先生は指導したほうがよい」の17.4%を大幅に上回る。性別による男女の差異はみられない。学年別では、「学生の自主性にまかせたほうがよい」で3年生の回答が多い。

表 2-19 大学観 A～E (全体・性別・学年別)

Q26大学観		全体	性別		学年別			
			男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)		1771	674	1095	577	687	324	174
A	大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ	45.6%	47.2%	44.8%	45.9%	<b>48.1%</b>	40.8%	45.0%
	大学は学問よりさまざまな体験をする場である	54.4%	52.8%	55.2%	54.1%	51.9%	<b>59.2%</b>	55.0%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
B	単位が楽に取れる科目を選択したい	31.7%	<b>38.8%</b>	27.3%	31.0%	30.5%	<b>36.6%</b>	29.8%
	単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい	68.3%	61.2%	<b>72.7%</b>	69.0%	69.5%	63.4%	<b>70.2%</b>
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
C	大学での授業も出席を厳しくとるべきだ	45.8%	38.4%	<b>50.4%</b>	<b>50.4%</b>	44.1%	42.9%	41.8%
	出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ	54.2%	<b>61.6%</b>	49.6%	49.6%	55.9%	57.1%	<b>58.2%</b>
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
D	大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識や技術を教えるべきだ	45.4%	39.3%	<b>49.2%</b>	43.3%	47.0%	46.1%	45.3%
	大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい	54.6%	<b>60.7%</b>	50.8%	56.7%	53.0%	53.9%	54.7%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
E	大学の先生は指導したほうがよい	17.4%	16.2%	18.2%	18.3%	15.9%	18.8%	<b>18.7%</b>
	学生の自主性にまかせたほうがよい	82.6%	83.8%	81.8%	81.7%	<b>84.1%</b>	81.3%	81.3%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

・ 普段していること

授業以外で、普段どのようなことをしているかについて、8項目を用意した。全体の結果が、図 2-11 である。

「とてもそう」+「ややそう」の回答割合が多い順にみると、「休日や長期休みに旅行を

する」、「映画を観に行く」、「カラオケに行く」で半数を超えている。以下、「ファッションについての情報をチェックしている」、「料理をよくする」、「スポーツなどで体を鍛えている」と続く。「新聞をよく読む」、「占いをチェックしている」については、2割を下回る。

図 2-11 普段していること (全体)

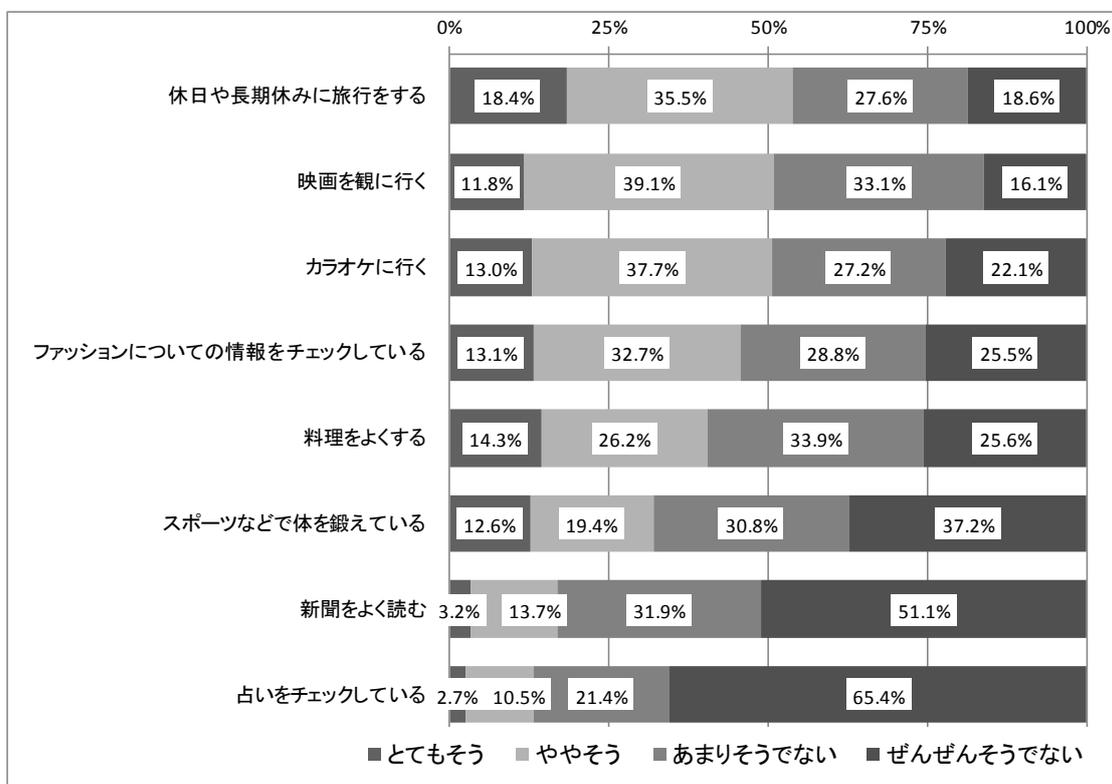


表 2-20 普段していること (全体・性別・学年別)

Q28(普段していること)	「とてもそう」+「ややそう」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
休日や長期休みに旅行をする	53.9%	43.3%	<b>60.4%</b>	48.9%	54.9%	55.9%	<b>62.1%</b>
映画を観に行く	50.8%	40.4%	<b>57.4%</b>	49.2%	49.3%	53.3%	<b>56.3%</b>
カラオケに行く	50.7%	46.1%	<b>53.6%</b>	<b>52.5%</b>	50.0%	51.2%	47.7%
ファッションについての情報をチェックしている	45.8%	27.5%	<b>57.0%</b>	47.9%	44.3%	41.7%	<b>51.1%</b>
料理をよくする	40.5%	32.6%	<b>45.4%</b>	43.8%	35.7%	40.4%	<b>48.3%</b>
スポーツなどで体を鍛えている	32.0%	<b>48.4%</b>	21.9%	33.7%	30.1%	28.7%	<b>38.5%</b>
新聞をよく読む	16.9%	<b>22.0%</b>	13.9%	16.3%	13.7%	19.1%	<b>27.0%</b>
占いをチェックしている	13.2%	6.5%	<b>17.3%</b>	14.6%	11.8%	13.3%	12.1%

性別では、表 2-20 のように、「休日や長期休みに旅行をする」、「映画を観に行く」、「カラオケに行く」、「ファッションについての情報をチェックしている」、「料理をよくする」、「占いをチェックしている」で女性の回答が男性を上回る。一方、「スポーツなどで体を鍛えている」、「新聞をよく読む」で男性の回答が女性を上回る。

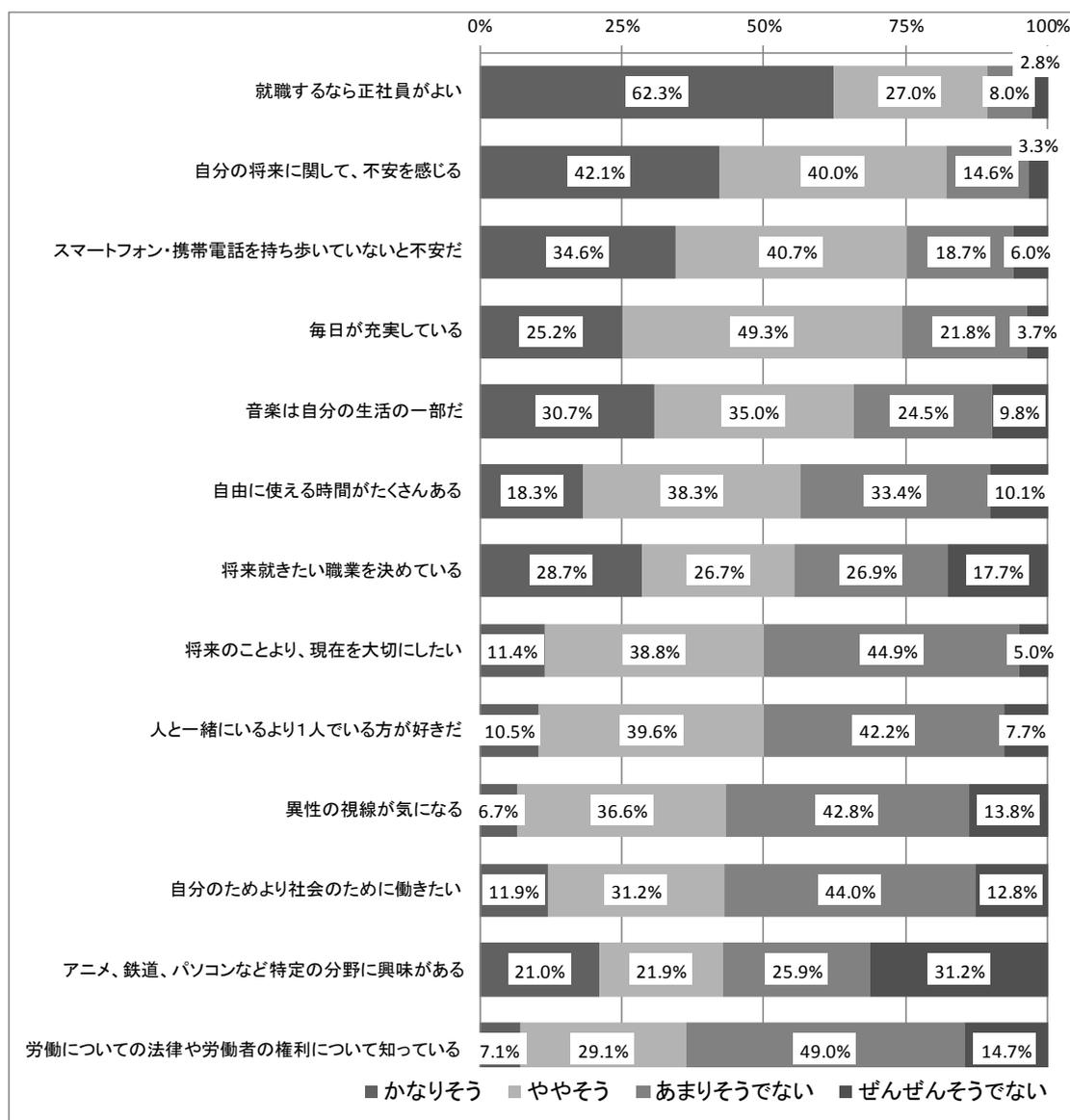
学年別では、表 2-20 のように、「カラオケに行く」で 1 年生の回答が多い。「休日や長

期休みに旅行をする」、「映画を観に行く」、「ファッションについての情報をチェックしている」、「料理をよくする」、「スポーツなどで体を鍛えている」、「新聞をよく読む」で4年生の回答が多い。

・性格や考え方

自分の性格や、こちらが用意した問いかけへの考え方について、13項目で尋ねてみた。全体の結果が、図2-12である。

図2-12 性格や考え方 (全体)



「かなりそう」+「ややそう」の回答割合が多い順にみると、「就職するなら正社員がよい」が9割近くを占める。続いて、「自分の将来に関して、不安を感じる」、「スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていると不安だ」、「毎日が充実している」が7割を超えてい

る。毎日は充実しているものの、将来への不安も感じている。「自分の将来に関して、不安を感じる」、「スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていると不安だ」、「毎日が充実している」、「音楽は自分の生活の一部だ」、「自由に使える時間がたくさんある」、「将来就きたい職業を決めている」、「将来のことより、現在を大切にしたい」、「人と一緒にいるより1人の方が好きだ」が半数を超えている。「異性の視線が気になる」、「自分のためより社会のために働きたい」、「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」、「労働についての法律や労働者の権利について知っている」が3~4割となっている。

性別では、表2-21のように、「自分の将来に関して、不安を感じる」、「スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていると不安だ」、「毎日が充実している」、「音楽は自分の生活の一部だ」で女性の回答が男性の回答を上回る。一方、「自由に使える時間がたくさんある」、「人と一緒にいるより1人の方が好きだ」、「異性の視線が気になる」、「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」で男性の回答が女性を上回る。

学年別では、表2-21のように、「自分の将来に関して、不安を感じる」、「将来のことより、現在を大切にしたい」、「異性の視線が気になる」、「自分のためより社会のために働きたい」で1年生の回答が多い。「音楽は自分の生活の一部だ」、「人と一緒にいるより1人の方が好きだ」で3年生の回答が多い。「就職するなら正社員がよい」、「毎日が充実している」、「自由に使える時間がたくさんある」、「将来就きたい職業を決めている」、「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」、「労働についての法律や労働者の権利について知っている」で4年生の回答が多い。4年生は卒業を控え、進路について考えている。

表2-21 性格や考え方 (全体・性別・学年別)

Q27(性格や考え方)	「かなりそう」+「ややそう」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
就職するなら正社員がよい	89.3%	87.4%	90.5%	87.3%	90.2%	89.2%	<b>92.0%</b>
自分の将来に関して、不安を感じる	82.1%	76.4%	<b>85.6%</b>	<b>82.0%</b>	82.8%	85.8%	73.6%
スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていると不安だ	75.2%	68.2%	<b>79.5%</b>	75.4%	74.4%	77.2%	74.1%
毎日が充実している	74.4%	69.9%	<b>77.3%</b>	77.5%	72.1%	71.1%	<b>79.3%</b>
音楽は自分の生活の一部だ	65.7%	56.1%	<b>71.5%</b>	67.7%	61.9%	<b>70.6%</b>	63.8%
自由に使える時間がたくさんある	56.5%	<b>60.8%</b>	53.8%	56.9%	53.7%	55.2%	<b>67.1%</b>
将来就きたい職業を決めている	55.4%	58.3%	53.6%	53.0%	50.1%	61.9%	<b>71.8%</b>
将来のことより、現在を大切にしたい	50.1%	50.4%	50.0%	<b>52.6%</b>	49.8%	46.0%	51.1%
人と一緒にいるより1人の方が好きだ	50.1%	<b>53.3%</b>	48.1%	49.0%	49.7%	<b>56.3%</b>	44.3%
異性の視線が気になる	43.4%	<b>52.1%</b>	38.1%	<b>45.5%</b>	42.8%	41.8%	40.2%
自分のためより社会のために働きたい	43.2%	42.1%	43.8%	<b>49.4%</b>	38.6%	38.6%	46.6%
アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある	42.8%	<b>51.2%</b>	37.7%	43.8%	42.0%	42.0%	<b>46.0%</b>
労働についての法律や労働者の権利について知っている	36.2%	38.8%	34.7%	38.8%	31.6%	34.7%	<b>47.1%</b>

#### ・日頃の行動

社会性を意図した日頃の行動について、4項目を用意した。全体の結果が、図2-13である。

「かなりそう」+「ややそう」の回答割合が多い順にみると、「ゴミやカンを決められた場所に捨てている」(93.3%)、「お年寄りや体の不自由な人に席を譲る」(81.7%)で8割

を超える。また、「選挙で投票に行く（選挙権のない人はあると仮定して）」も7割となっている。本調査回答者の社会性は高いといえよう。一方、「ボランティア活動をしている」は27.7%と3割を下回る。

性別では、表2-22のように、「ゴミやカンを決められた場所に捨てている」、「ボランティア活動をしている」で女性の回答が男性の回答を上回る。

学年別では、表2-22のように、「選挙で投票に行く（選挙権のない人はあると仮定して）」で1年生の回答が多い。「ボランティア活動をしている」で3年生の回答が多い。「ゴミやカンを決められた場所に捨てている」、「お年寄りや体の不自由な人に席を譲る」で4年生の回答が多い。

図2-13 日頃の行動（全体）

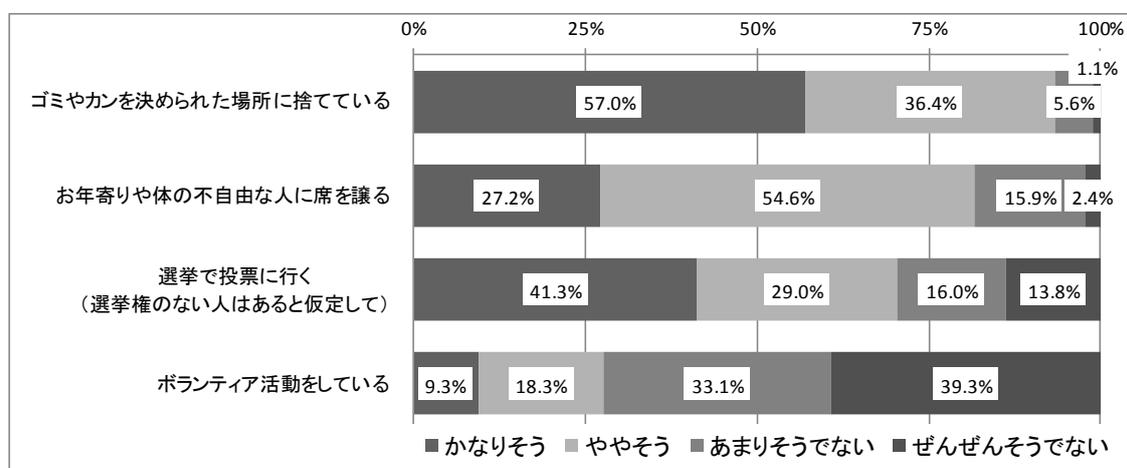


表2-22 日頃の行動（全体・性別・学年別）

Q29(日頃の行動)	「かなりそう」+「ややそう」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
ゴミやカンを決められた場所に捨てている	93.3%	88.7%	<b>96.2%</b>	91.5%	93.6%	93.8%	<b>97.1%</b>
お年寄りや体の不自由な人に席を譲る	81.7%	79.5%	83.1%	83.9%	78.0%	80.4%	<b>90.8%</b>
選挙で投票に行く(選挙権のない人はあると仮定して)	70.3%	68.6%	71.3%	<b>74.8%</b>	69.4%	64.3%	70.1%
ボランティア活動をしている	27.7%	22.3%	<b>31.0%</b>	23.6%	23.8%	<b>37.6%</b>	36.8%

・ジェンダーや社会意識

ジェンダーに関する項目を1つ、社会意識に関する項目を4つ用意した。全体の結果が、図2-14である。

「とてもそう思う」+「ややそう思う」の回答割合が多い順にみると、「今後の日本は、経済や国の発展よりも、社会的に恵まれないものへの福祉に力をいれるべきだ」(60.7%)、「原子力発電は廃止した方がよいと思う」(50.7%)、「第2次世界大戦で日本がアジアで行ったことにもっと反省をすべきだ」(46.8%)、「基地や環境などの問題を決めるとき、住民より国が最終的な決定をすべきだ」(25.6%)、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」(22.7%)となる。注目すべきは、原子力発電の廃止への賛否、第2次世界大戦での日本

のアジアでの行為への反省への賛否の割合が均衡している。昨今の政治動向、世論の影響を反映しているのではないだろうか。

性別では、表 2-23 のように、「今後の日本は、経済や国の発展よりも、社会的に恵まれないものへの福祉に力をいれるべきだ」、「原子力発電は廃止した方がよいと思う」、「第2次世界大戦で日本がアジアで行ったことにもっと反省をすべきだ」、で女性の回答が男性の回答を上回る。一方、「基地や環境などの問題を決めるとき、住民より国が最終的な決定をすべきだ」、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」で男性の回答が女性を上回る。

学年別では、表 2-23 のように、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」を除く4項目で1年生の回答が多い。

図 2-14 ジェンダーや社会意識について（全体）

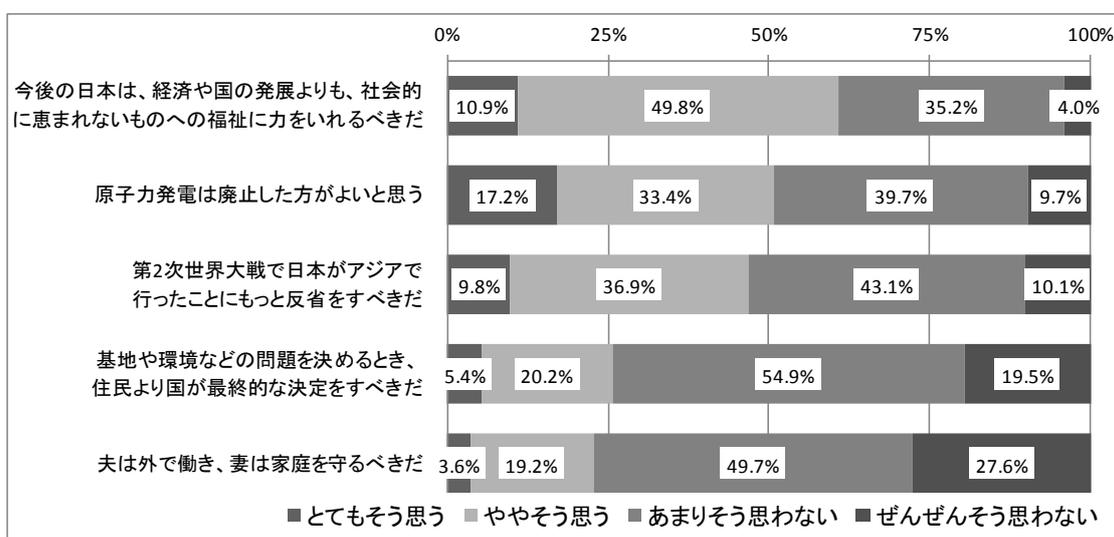


表 2-23 ジェンダーや社会意識について（全体・性別・学年別）

Q30(ジェンダー・社会意識)	「とてもそう思う」+「ややそう思う」の%						
	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
参考N(%は有効回答で集計)	1771	674	1095	577	687	324	174
今後の日本は、経済や国の発展よりも、社会的に恵まれないものへの福祉に力をいれるべきだ	60.7%	51.9%	<b>66.2%</b>	<b>63.8%</b>	59.7%	60.7%	54.0%
原子力発電は廃止した方がよいと思う	50.7%	41.5%	<b>56.2%</b>	<b>51.8%</b>	50.2%	49.7%	48.9%
第2次世界大戦で日本がアジアで行ったことにもっと反省をすべきだ	46.8%	41.5%	<b>50.0%</b>	<b>51.6%</b>	44.7%	45.9%	42.0%
基地や環境などの問題を決めるとき、住民より国が最終的な決定をすべきだ	25.6%	<b>36.8%</b>	18.8%	<b>28.4%</b>	23.6%	26.9%	22.4%
夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ	22.7%	<b>29.9%</b>	18.4%	25.1%	21.5%	20.4%	24.1%

・将来志向（ライフコース展望）

自分が今後望む人生設計を将来志向という形にして、さらに結婚相手に望む生き方と合わせて尋ねてみた。全体および性別の結果が、表 2-24 である。

自分の将来志向について、「仕事に就き一生働き続ける（キャリア志向）」、「自分の好き

なことに打ち込む(趣味志向)」に男性の回答が女性の回答を上回る。「結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る(家族志向)」に女性の回答が男性を上回る。「結婚相手の意向や事情に合わせる(相手志向)」、「社会活動やボランティア活動に打ち込む(社会志向)」、「その他」では性別による差異はみられない。

結婚相手の生き方では、「結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る(家族志向)」、「自分の好きなことに打ち込む(趣味志向)」、「結婚相手の意向や事情に合わせる(相手志向)」に男性の回答が女性の回答を上回る。「仕事に就き一生働き続ける(キャリア志向)」に女性の回答が男性を上回る。「社会活動やボランティア活動に打ち込む(社会志向)」、「その他」では性別による差異はみられない。

このように、男性はキャリア・趣味中心の生き方を希望し、結婚相手(の女性)には家族・趣味・相手の意向に従うことを希望している。一方、女性は家族を中心にした生き方を希望し、結婚相手(の男性)にキャリア中心の生き方を希望している。男女双方とも性別役割分業の枠組みに準じた将来設計を考えていることがわかる。

表 2-24 将来志向(上段:自分自身、下段:結婚相手)(全体・性別)

Q31.自分の将来志向/結婚相手の生き方		全体	性別	
参考N(%は有効回答で集計)			男	女
自分の将来志向	仕事に就き一生働き続ける(キャリア志向)	27.0%	<b>39.6%</b>	19.3%
	結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る(家族志向)	31.8%	15.9%	<b>41.4%</b>
	自分の好きなことに打ち込む(趣味志向)	20.9%	<b>25.2%</b>	18.3%
	社会活動やボランティア活動に打ち込む(社会志向)	2.4%	2.6%	2.2%
	結婚相手の意向や事情に合わせる(相手志向)	15.6%	14.4%	16.4%
	その他	2.4%	2.3%	2.4%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%
結婚相手の生き方	仕事に就き一生働き続ける(キャリア志向)	36.9%	8.1%	<b>54.3%</b>
	結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る(家族志向)	25.1%	<b>44.1%</b>	13.8%
	自分の好きなことに打ち込む(趣味志向)	13.8%	<b>20.2%</b>	9.9%
	社会活動やボランティア活動に打ち込む(社会志向)	1.7%	1.9%	1.6%
	結婚相手の意向や事情に合わせる(相手志向)	20.1%	<b>24.0%</b>	17.9%
	その他	0.0%	1.7%	2.6%
	合計	100.0%	100.0%	100.0%

### 3 おわりに

2013年の1771名の大学生の全体の回答を概観してみた。2節の結果をまとめてみる。

「2-1 子ども時代～高校時代」より、彼らは家族との関係も良好で、部活動や受験勉強を経験した生活を送っていることがわかる。

「2-2 属性」より、彼らは目的を持って進学し、課外活動(部・サークル、アルバイト)を両立させながら、大学生活を送っていることがわかる。

「2-3 授業」より、かなり真面目に出席し、満足はしていないながらも、多くのことを

得ようとする彼らの意識と態度をうかがい知ることができる。

「2-4 学生生活」より、学内生活を取りわけ友人関係に比重を置いて、満足している。スマホやアルバイトに時間を費やし、学業への比重はあるものの必ずしも学習時間や読書時間が多くはない。

「2-5 意識と行動」より、大学に入り価値観も変わりつつ、学外での自分の趣味活動も大切にしていることがわかる。就職をはじめ将来への不安を感じつつも、充実した毎日を送っている。社会性は高く、福祉への意識や古典的なジェンダー規範に対して反対する意識も高い。しかしながら、将来志向としては性別役割分業を支持する結果となっている。

全体的に、性別での回答比較をすると、女性に授業への取組、友人関係に関する意識と行動に関する回答が、男性を上回っている。総じて、真面目であるといえる。

全体的に、学年別での回答比較をすると、1年生に授業への取組、施設満足、社会意識などで回答割合が多い。しかし、学年が上がるごとで、大学生生活満足や人間関係、日ごろの行動などで回答割合が多くなっている。それは4年生の回答にあらわれている。総じて、学年が上がるごとに多くの社会経験を積み、視野が広がる。

ただし、本節でのまとめは集計結果を概観してのものである。もちろん、性別や学年では説明できないことは山ほどある。多変量解析をおこなうことによって、新たに明らかになる結果もある。

本章は、無作為抽出ではない本調査データの回答傾向を理解するために、回答結果からあらわれてくるものを記述したにすぎない。したがって、先行業績や各種理論を踏まえた詳細なデータ分析については、次章以降に譲りたい。

## 第3章

## 「大学の学校化」と大学生の「生徒化」

岩田 弘三 (武蔵野大学)

## 1 はじめに

最近の大学生は、「勉強志向」が高まっているという意味で、「まじめ化」してきている、との指摘は数多くなされている。たとえば、全国大学生生活協同組合連合会『学生の消費生活に関する実態調査』では、学生たちが大学生活のなかで、どのような活動に重点をおいているのかを、1982年以降、継続的に調査してきた。その調査結果をもとにすれば、「勉強」重視派の比率は95年から急増をみせている。さらに、このような「勉強志向」は、就職状況が一時的に好転した、2005・06年あたりから07年までは減少する。しかし、リーマン・ショックを契機とする世界同時不況が押し寄せる、08年以降には、ふたたび増加に転じている。以上の事実から、学生の「勉強志向」は、就職（雇用）情勢といった経済的要因の影響を、大きく受けている。つまり、就職状況が悪化すれば、高い大学成績や資格をそろえることによって、少しでも就職活動を有利に運ぼうとする、学生たちの意識と関連性をもつ点は明らかである。しかし、2005・06年から07年にかけての一時的な好況期においても、「勉強」重視派の比率は、1992年以前の状態にまでは後退していない<sup>1</sup>。だとすれば、90年代中頃に始まる「勉強志向」の浸透は、「平成の大不況」の影響のみによる一時的な趨勢とはみなせない。

たとえば、近年の学生文化の動向について、武内清は、以下のように指摘する。とくにここ10数年間にどの大学でも、授業出席率はたしかに高まっている。その反面、「高校と同じように、授業では出席がとられ、教師の指示にしたがって将来に役立つ内容が教えられるべき、と感じる」、「大学教師に従順な大学生が増えている」、という<sup>2</sup>。このような事実をもとに、近年の「まじめ・勉強文化」の背景には、「大学の『学校化』」と歩調を合わせる形で、「大学生の『生徒化』」が進展している可能性があるのではないかと、この指摘を行った<sup>3</sup>。しかし、その指摘はあくまで可能性の示唆にとどまっていた。そこで、今回の調査データをもとに、その裏づけがとれるのかどうかについての分析を行うことが、本論の第1の目的である。

ここでいう「大学の『学校化』」とは、その善悪は別にして、大学の「初中等『学校化』」・「専門『学校化』」のことである。それゆえ、「学校化社会」といった用語に代表されるような、学校的価値観の社会への浸透を表す言葉としての「学校化」<sup>4</sup>とは、異なる意味で用いていることを、あらかじめ断っておきたい。

「大学の『学校化』」の説明に話をもどすと、たとえば伊藤茂樹は、学生の「生徒化」をもたらした社会的背景の一つとして、以下の2つの要因をあげている<sup>5</sup>。(1)高等教育のユニバーサル化・サービス化と、(2)1990年代の社会・経済的状况である。伊藤の言葉を借りて具体的にいえば、(1)は、「入学時の懇切丁寧なガイダンスやオリエンテーションから始まり、クラス担任による公私にわたる指導、研修旅行、カウンセリング、各種資格の

取得のための指導、就職指導など、学生の現在と未来にわたる生活の様々な側面に関してきめ細かくケアすることがよりよい教育サービスの提供であるとされる。『生徒指導』『生活指導』のごとく、学業のみならず学生の生活全般に大学は介入し、指導するようになっている。これは、「少子化時代に生き残りをかける大学にとって、学生を確保するために不可欠の手段でもある」、とする。(2)については、「少しでも将来を確実にするために、資格の取得など、目に見える形での自分の能力や努力、個性を表示するものへの志向性が強まり、これは『生徒化』につながる(ただしこの志向性を強めるのは不況や就職難のみではない)」、と指摘している<sup>6</sup>。伊藤は、大学のサービス化が、「学生の生徒化」をもたらす要因とみなしている。しかし、これら2つの現象は、ニワトリとタマゴの関係にある。だとしても、図3-1に示したように、相互に影響を及ぼし合っていることだけは確かである。

それはさておき、(1)のような現象が、大学の「初中等『学校化』」である。1990年代以降の大学改革論議のなかで、大学における成績・出席評価の厳格化などが求められるようになった。これらも、大学の「初中等『学校化』」に含めてよいと考えられる。また(2)に対応する形での、大学による資格関連科目の大幅な取り込みが、大学の「専門『学校化』」である。この流れは、学生のあいだに、語学、コンピュータ教育志向が高まり、それに対応する形で、大学の語学学校・コンピュータ専門学校化とも呼べる事態が進んでいった、90年代以降から継続する動向といえる。

つぎに、大学生の「生徒化」とは、つぎのような現象を指す。大学生が「実態としても」、感覚的にも「中・高校生と変わらない『生徒』になっているのではないか」という問題関心のもとに、大学生の「生徒化」に最初に焦点を当てたのは、伊藤茂樹である<sup>7</sup>。その論文のなかで、伊藤は、「生徒化」の構成要素として、以下の3つをあげる。

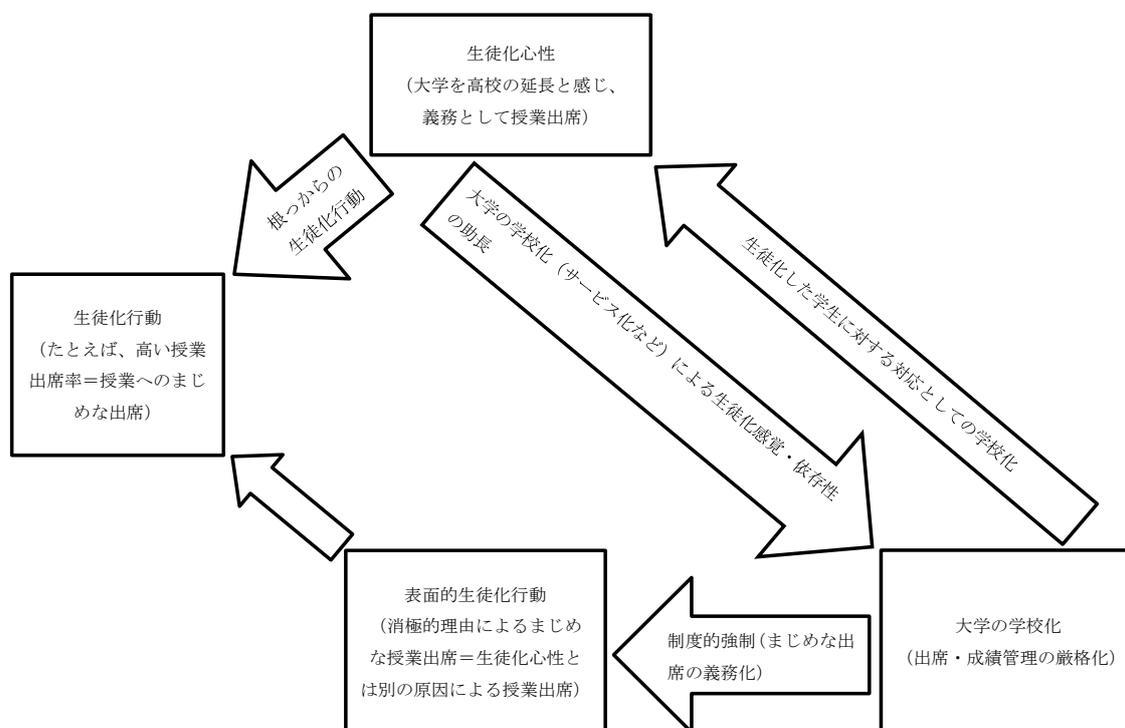


図3-1 大学の学校化と大学生の生徒化の関係

(1)「未熟性」:「自分は成熟へ向かう段階の途上にある未熟者であり、学ぶべきことがまだ多く残っていると認識する」。(2)「他律性」・「依存性」:「学ぶべきことは学校が用意し、教えてくれる(自分で見つけ、身につけるものではない)と認識する」。(3)「一面性」:「自分を専ら上記のような存在(=「生徒」)として位置づけ、行動するため、他の価値が希薄になる。そして、「生徒化」の現象形態として、以下の4点を指摘する。①「大学や学部、学科、或いはそこで形成される友人集団への所属がアイデンティティとなり、自律・成熟した一人の個人としての自己イメージが希薄である」。(2)「長期的な展望を持たず、資格などの形で可視化・数値化される段階的な「仮目的」の連続的達成が目標となる」。(3)「大学が与える教育サービスに対して受動的に充足し、他のものを積極的・具体的に求めない」。(4)「生活の大部分が大学内(大学での人間関係なども含む)において展開する」<sup>8</sup>。

とくに(2)との関係で、伊藤は、「生徒化」現象の現れの一つとして、「大学や授業へのコミットメントは、深くはないが、量的には大きい」、つまり、『生徒役割』を形式的、受動的に遂行する一貫として、すなわち一種の義務としての授業出席率は高い、と指摘している<sup>9</sup>。これは、先述した武内清の指摘とも一致している。その一方で、読書時間は着実に減少をつづけている<sup>10</sup>。

つまり、「指示待ち世代」という呼称が示すように、高校時代の延長として、受け身の姿勢で、授業にはまじめに出席するものの、読書などをとおして能動的に学習することは少なくなっているといえる。だとすれば、近年になって、かつての「勉強文化」への回帰がみられるというより、正確に言えば、「生徒」的な学生による「勉強志向」が広まっている可能性がある。そこで、学生の「生徒化」と「勉強志向」の関係を明らかにすることが、本論の基本的な目的である。

とくに、先に指摘したように、学生のあいだに「勉強志向」が急速に高まっていくのは、1995年からである。それに対し、伊藤の研究のもとになった調査が行われたのは、96年12月～97年1月である。この点を勘案すれば、学生の「生徒化」と「勉強志向」の関係を明らかにするためには、「勉強志向」がより高まっている、最近のデータを用いた分析が必要である点はいうまでもない。

ところで、伊藤は、先述したような問題関心を前提として、学生の行動面における「実態」と、「感覚」つまり意識を複合し、生徒化の判定指標としている。しかし、たとえば、「面倒みのよい大学」などといったうたい文句に代表されるように、学生支援重視の一貫として、「大学のサービス化」が近年、大幅に拡大していることは、事実であると思われる。このような「大学のサービス化」の拡大により、図3-1に示したように、「生徒化」心性をそれほど有していないにもかかわらず、そのサービスの便利さ・快適さゆえに、「生徒」的行動をとる学生も存在する、と推測される。同様に、授業にまじめに出席するのは、大学における成績・出席評価の厳格化などといった制度的縛りがあるからにすぎない学生も、存在するはずである。だとすれば、大学の「初中等『学校化』」による、学生の行動面における「生徒化」と、心性としての「生徒化」は、分離して考察する必要がある。

そこで、「生徒化」心性を有する学生をまず抽出し、それら学生がいかなる属性・行動特性をもつのかを分析することが、本論の主要な目的である。

## 2. 分析に用いる指標

今回の分析で用いるデータは、2013年に13大学を対象として行った調査である。最初に、本論の分析で用いる指標について説明しておこう。

### (1) 「生徒化」傾向と「まじめ志向」

今回の調査では、以下の5つの側面について、大学・学生生活のあり方に関する意見、つまり大学観を聞いている。

- ①大学時代の位置づけ：「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」と考えるか、「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」と考えるか。
- ②楽な授業志向：「単位が楽に取れる科目を選択したいか」、「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」か。
- ③出席管理への要望：「大学での授業も出席を厳しくとるべきだ」と考えるか、「出席が少なくとも、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ」と考えるか。
- ④役に立つ授業志向：「大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識や技術を教えるべきだ」と考えるか、「大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい」と考えるか。
- ⑤教員の指導 vs 学生の自主性：「学生の生活や学習について、大学の先生は指導したほうがよい」か、「学生の生活や学習について、学生の自主性にまかせたほうがよい」か。

以上の①～⑤間の相関係数を示したものが、表 3-1 である。さらに、表 3-2 は、表 3-1 の相関係数の数値をもとに、因子分析を行った結果を示したものである。

第1因子は、2つの構成要素からなる。一つが、①「大学時代の位置づけ」と、②「楽な授業志向」である。②の因子得点には、マイナスがついている。よって、第1因子は、次のような2つの学生群を分ける軸となる。第1のグループは、①については「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」と考え、②については「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」と考える学生群である。第2のグループは、①については、「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」と考え、②については、「単位が楽に取れる科目を選択したい」と考える学生群である。

第2因子は、③「出席管理への要望」、④「役に立つ授業志向」、⑤「学生の自主性より教員による管理重視」、の3つの項目からなる。③と⑤は、大学の「初中等『学校化』」感覚といった意味で、まさしく大学生の「生徒化」傾向を表す指標になる。これに対し、④は資格志向につながる意識とみなせば、大学の「専門『学校化』」感覚だといえる。そして、これら2つの感覚が別因子として表れるのではなく、ともに同一因子を構成する要素となっている。このことは、大学の「初中等『学校化』」感覚をもつ学生は、大学の「専門『学校化』」感覚も、合わせてもつ傾向のあることを示している。つまり、それら2つの感覚をあわせた意味での、「大学の学校化」感覚をもつことこそが、「生徒化」傾向の特徴になる。

表 3-1 大学観の相関係数

	大学時代の 位置づけ	楽な授業 志向	出席管理へ の要望	役に立つ 授業志向
楽な授業志向	-.179**			
出席管理への要望	.076**	-.035		
役に立つ授業志向	.008	.088**	.076**	
学生の自主性より教員による管理重視	-.006	.072**	.075**	.121**

\*\* 1%水準で有意 (両側)。

\* 5%水準で有意 (両側)。

表 3-2 大学観の因子分析の結果

	因子	
	まじめ志向	生徒化傾向
大学時代の位置づけ	.737	.092
楽な授業志向	-.715	.242
出席管理への要望	.382	.522
役に立つ授業志向	-.093	.667
学生の自主性より教員による管理重視	-.091	.647

因子抽出法: 主成分分析。

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法。

以上の結果を踏まえて、本論では、第1因子を構成する2変数、第2因子を構成する3変数をそれぞれ足し込んで合成変数を作成し、前者を「まじめ志向」、後者を「生徒化傾向」と名付けることにした<sup>11)</sup>。

## (2) 授業評価

今回の調査では、表 3-3 に示した 15 の内容について、自分の在籍する大学の授業に関する印象・感想を聞いている。さらに、表 3-3 では、参考のために、それら 15 項目と授業出席率の相関係数も示しておいた。

「私語の多い授業がある」と、「授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ」といった変数のあいだには、やや高い相関が観察される。私語の多い授業が少なければ、教員へそれに対する注意を求める必要はない。だから、これは当然の結果といえる。また、相関係数の大きさだけを基準とすれば、ほとんど相関がないことにはなるものの、有意差に着目すれば、「私語の多い授業がある」と「先生が授業に熱心である」とのあいだには、有意な負の相関関係がみられる。つまり、授業に情熱を燃やさない教員が多くなれば、授業中の私語も増えることが示唆される。教員に対して同情的な見方をすれば、私語に悩まされることが多くなると、教育への情熱も冷却されるとの見方もできる。

表 3-3 授業評価の相関関係

	先生が授業に熱心である	面白い授業がある	幅広い知識が得られる	専門的知識が得られる	将来のキャリアに関連した授業がある	自分の人生について考えられるような授業がある	小人数、ゼミ形式の授業がある	グループで討論や作業をする授業がある	私語の多い授業がある	授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい	就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	授業全般に満足している	大学での自分自身の成績は良いほうだ
面白い授業がある	.456**														
幅広い知識が得られる	.465**	.531**													
専門的知識が得られる	.379**	.433**	.556**												
将来のキャリアに関連した授業がある	.257**	.333**	.353**	.469**											
自分の人生について考えられるような授業がある	.318**	.391**	.378**	.346**	.518**										
小人数、ゼミ形式の授業がある	.165**	.179**	.188**	.159**	.152**	.197**									
グループで討論や作業をする授業がある	.181**	.216**	.210**	.215**	.233**	.271**	.541**								
私語の多い授業がある	-.080**	-.004	.017	-.014	.042	.048*	.097**	.131**							
授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	.074**	.090**	.084**	.086**	.073**	.066**	.074**	.081**	.388**						
授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい	-.111**	-.059*	-.049*	-.025	.020	.009	.009	.016	.176**	.236**					
就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	.028	-.080**	-.038	-.004	.052*	.026	.025	.047*	.184**	.134**	.388**				
授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	-.026	.013	.005	.048*	.094**	.091**	-.011	.044	.162**	.188**	.384**	.439**			
授業全般に満足している	.485**	.436**	.457**	.380**	.260**	.316**	.171**	.172**	-.118**	.016	-.188**	-.142**	-.160**		
大学での自分自身の成績は良いほうだ	.188**	.184**	.154**	.133**	.105**	.106**	.127**	.117**	.010	.091**	-.063**	-.003	-.008	.310**	
授業への出席率	.176**	.156**	.162**	.148**	.109**	.070**	-.013	-.009	-.048*	.065**	.021	.021	.050*	.187**	.347**

(1) \*\* 1%水準で有意 (両側)。

\* 5%水準で有意 (両側)。

(2) 調査票では、授業出席率の選択肢は、「1 90%以上」、「2 89~80%」、「3 79~60%」、「4 59~40%」、「5 39%以下」となっているが、それぞれの範囲の中央値を用いて算出。

表 3-4 は、表 3-3 の相関係数の数値をもとに、因子分析を行った結果を示したものである。表 3-4 から分かるように、授業に対する評価については、4つの因子が抽出された。

第3因子は、「小人数、ゼミ形式の授業がある」、「グループで討論や作業をする授業がある」といった、「双方向型授業」の有無に関する因子となっている<sup>12</sup>。

表 3-4 授業評価の因子分析の結果

	因子			
	授業に対する 肯定的評価	授業に対する 「生徒」的要望	双方向型 授業	私語の状況
先生が授業に熱心である	.667	-.120	-.146	.142
面白い授業がある	.720	-.055	-.128	.105
幅広い知識が得られる	.748	-.039	-.188	.044
専門的知識が得られる	.705	.034	-.236	-.077
将来のキャリアに関連した授業がある	.614	.167	-.157	-.287
自分の人生について考えられるような授業がある	.642	.140	-.068	-.258
小人数、ゼミ形式の授業がある	.401	.153	.711	-.219
グループで討論や作業をする授業がある	.464	.206	.650	-.266
私語の多い授業がある	.012	.545	.274	.400
授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	.143	.520	.086	.592
授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい	-.097	.691	-.168	-.051
就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	-.055	.678	-.188	-.170
授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	.010	.695	-.272	-.131
授業全般に満足している	.673	-.288	-.052	.218
大学での自分自身の成績は良いほうだ	.329	-.046	.138	.471

因子抽出法: 主成分分析。

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法。

第1因子は、「授業全般に満足している」といった、授業に対する総合評価を中心にして、「先生が授業に熱心である」、「面白い授業がある」、「幅広い知識が得られる」、「専門的知識が得られる」、「将来のキャリアに関連した授業がある」、「自分の人生について考えられるような授業がある」といった、授業内容に対する個別評価が加わった、7つの項目からなる因子である。ここでは、「授業に対する肯定的評価」と名付けることにした。さらに、以上7つの項目に比べて因子得点、すなわち関係性は多少低くなるものの、「大学での自分自身の成績は良いほうだ」といった項目、および「双方向型授業」を示す第3因子の2つの構成項目も、第1因子の構成要素となっている。この結果は、大学成績のよい学生ほど、さらに「双方向型授業」が多くなるほど、授業満足度が高くなることを示している<sup>13</sup>。

第4因子は、「私語の状況」と名付けることのできる因子である。具体的にいえば、「私語の多い授業がある」といった事実認識と、「授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ」といった要望・評価、の2つの項目からなっている。表3-3のところでも先述した理由により、これら2つの項目が同じ因子を構成するのは、当然の結果といえる。

さらに、因子得点、すなわち関係性は多少低いものの、「大学での自分自身の成績は良いほうだ」といった項目も、第4因子の構成要素となっている。つまり、大学成績のよい学生ほど、授業中の私語に敏感であり、それに対する教員の統制を望んでいることが示唆される。

ここで、とくに注目したいのは、第2因子である。この因子を構成するのは、(1)「授業

のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい」、(2)「授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい」、(3)「就職活動に役立つことをもっと教えてほしい」<sup>14</sup>、といった3つの項目である。(1)・(2)は、積極的に勉学に取り組むのではなく、高校時代の延長で、受け身の姿勢をもとに大学の授業に臨むといった、大学の「初中等『学校化』」感覚にもとづく要望である。さらに、(3)は、大学の「専門『学校化』」感覚にもとづく要望とみなせる。そして、それらが一体化するように結びついている。この意味で、授業への要望についても、表3-2と一致した結果が出ている。そこでこの因子を、「授業に対する『生徒』的要望」と名づけることにした<sup>15</sup>。

以上の結果を踏まえて、本論では、これら4つの因子ごとに、表の濃い網かけの項目だけを取り出して合成変数を作成し、それらをもとに分析を進めていくことにした<sup>16</sup>。

### (3) 学生生活の重点

今回の調査では、現在の生活の中で、表に示した8つの活動について、どの程度の比重を占めているかを聞いている。それら8つの活動重視度について、相関関係をみたものが、表3-5である。

「アルバイト」、「異性(恋人)との交際(恋愛)」、「サークル・部活動」志向についてはいずれも、「学業、勉強」志向とのあいだに負の相関が観察される。つまり、「アルバイト」、「異性(恋人)との交際(恋愛)」、「サークル、部活動」、といった「課題活動」に励むほど、「勉学」志向が弱くなるといった具合に、敵対関係がみられる。それは、つぎの事実によって補強される。表3-5には、各活動と「授業への出席率」との相関係数も合わせて表示しておいた。それをみれば、「課題活動」志向が強いほど、授業出席率が悪くなる傾向がみられるからである。

表3-6は、表3-5の相関係数の数値をもとに、因子分析を行った結果を示したものである。

表3-5 学生生活の重点の相関関係

	学業、勉強	ダブルスクール	サークル、部活動	アルバイト	趣味	友人との交友	異性(恋人)との交際	就職活動
ダブルスクール	.034							
サークル、部活動	-.136**	.035						
アルバイト	-.079**	.042	-.069**					
趣味	-.035	.044	-.030	.015				
友人との交友	-.020	.021	.180**	.104**	.225**			
異性(恋人)との交際	-.040	.077**	.090**	.122**	-.007	.145**		
就職活動	.102**	.202**	-.001	.062**	.110**	.120**	.124**	
授業への出席率	.262**	-.056*	-.052*	-.086**	-.043	.005	-.070**	-.042

\*\* 1%水準で有意(両側)。

\* 5%水準で有意(両側)。

表 3-6 学生生活の重点の因子分析の結果

	因子			
	勉学・就職 志向	友人との交友・趣味 志向	サークル・部活動 志向	アルバイト・恋愛 志向
学業、勉強	.421	-.043	-.432	-.381
ダブルスクール	.687	-.071	.084	.049
サークル、部活動	.047	.047	.862	-.121
アルバイト	-.020	.077	-.225	.834
趣味	-.004	.837	-.144	-.074
友人との交友	.109	.686	.299	.169
異性（恋人）との交際	.342	-.042	.303	.517
就職活動	.712	.215	-.064	.058

因子抽出法: 主成分分析。

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法。

第1に、「ダブルスクール」のみならず「就職活動」が、「学業、勉強」と同じ第1因子として抽出されている。この点は、つぎのことを示唆している。つまり、1992年以降の長期にわたる就職状況逼迫の時代のなかで、就職、とくに正社員としての就職に対する危機意識が大きくなった。そして、それへの心理的圧力が、強迫観念化したとも呼べる状態にまで高まった。この結果、少しでも就職を有利に運ぶために、「学業、勉強」を重視する傾向が強まった可能性が考えられる。すなわち、就職活動の一貫としての「学業、勉強」重視傾向である。なお、「就職活動」を新たな質問項目として加えたのは、2013年調査からである。だから、そのような傾向が、以前から存在したのか、近年に顕著な動向なのかは分からない。

さらに、学年別にみた場合、学生生活における「就職活動」の比重をみれば、無回答を除く、「大部分」+「かなり」の合計で、1年生5.1%、2年生4.2%、3年生29.1%、4年生28.7%となる。つまり、当然のことながら、1～2年生に比べ3～4年生で、「就職活動」重視派の比率が格段に高くなっている。ただし、そのような学生の比率は、3年生と比較して4年生では幾分減少する。4年生のなかでも内定を獲得した学生は、就職活動に比重をおく必要のなくなることが、その比率の低下する原因になっていると考えられる。なお、標準偏差をみると、1年生・2年生はともに0.02、3年生0.05、4年生0.07となっており、4年生では3年生より幾分高くなっている。つまり、就職活動を継続する必要のない内定獲得学生と、そうでない学生の二極分化が起こっていることが示唆される。しかし、この点に関していえば、今回の調査では、就職内定の有無に関する質問がないので、正確な解釈はできない<sup>17</sup>。

第2に、「趣味」と「友人との交友」とが結びつく形で、同じ因子（第2因子）を構成している。「アルバイト」と「恋愛」についても同様である（第4因子）。2003年調査までは、これら4つの活動は、いずれも独立した因子として抽出されており、10年前までにはみられなかった傾向である<sup>18</sup>。

第2因子についていえば、「友人との交友」が、「趣味」を同じくする仲間の特化している可能性が示唆される。また、第4因子についてみれば、「アルバイト」と「恋愛」とはいずれも、基本的にはキャンパス外が活動の中心となる課外活動、といった共通点をもつ。

この「アルバイト」と「恋愛」からなる第4因子に加えて、「サークル・部活動」の第3因子も、因子得点は多少低くなるものの、「学業、勉強」がマイナスの関連をもっていることも分かる。表3-5でも指摘したように、「アルバイト」、「恋愛」、「サークル・部活動」といった「遊び(課外活動)文化」を重視する学生ほど、「勉強文化」志向が弱くなる。つまり、それらが敵対的活動になっていることが、ここからも明確に再確認できる。

なお、先述したように、「就職活動」については、1～2年生で重視している学生がきわめて少ない。この点を勘案して、これを除いた7変数による因子分析も行ってみた。しかし、基本的な因子構造に変化はみられなかった。

以上の結果を踏まえて、本論では、次のような形の合成変数を作成し、それらをもとに分析を進めていくことにした<sup>19</sup>。

- (1) 「勉強志向」 = (「学業、勉強」 + 「ダブルスクール」) ÷ 2。
- (2) 「就職活動志向」(3～4年生に限定) = 「就職活動」。
- (3) 「友人との交友・趣味志向」 = (「趣味」 + 「友人との交友」) ÷ 2。
- (4) 「サークル・部活動志向」 = 「サークル、部活動」。
- (5) 「アルバイト・恋愛志向」 = (「アルバイト」 + 「異性(恋人)との交際」) ÷ 2。

#### (4) 知的家庭環境(文化資本)

今回の調査では、家庭環境に関する質問項目として、子どものころ(小学生時代)に家族との関係で、以下の(1)～(5)のようなことが、よくあったかどうかを尋ねている。(1)「家族に本を読んでもらうこと」。(2)「家族に勉強を見てもらうこと」。(3)「家族に美術館や博物館へ連れて行ってもらうこと」。(4)「家でクラシック音楽を聞いたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったりすること」。(5)「家族と社会のしくみや時事問題などについて話すこと」。以上の(1)～(5)を足し込んだ合成変数を作成し、それを「知的家庭環境(文化資本)」と呼ぶことにした。

### 3. 「生徒化」傾向と学年進行、授業評価

それでは、今回の「生徒化」指標の妥当性を確認するためにも、基本事項として、「生徒化」傾向と学年進行、授業評価の関係を確認しておこう。

まず、図3-2は、学年進行による「生徒化」傾向の変化を示したものである。学年が上がるにつれ、平均値についてみれば、大勢としては「生徒化」傾向は減少している。高校から離れ大学生活が長くなるほど、「生徒化」傾向からの脱却が進行していくはずなので、当然の結果とみなせる。ただし、標準偏差の増加を考慮すれば、学年が上昇しても、「生徒化」傾向からなかなか抜け出せない学生の一群が存在することになり、学年進行とともに、「生徒化」傾向の高い学生と低い学生に分化していく様相が確認できる。だとしても、平均値・標準偏差とも、それらの差が最大になる、1年生と4年生を比較しても有意差は認められなかった。この意味では、今回の「生徒化」傾向の指標には、問題が残る可能性がある点だけは、指摘しておかねばならない。

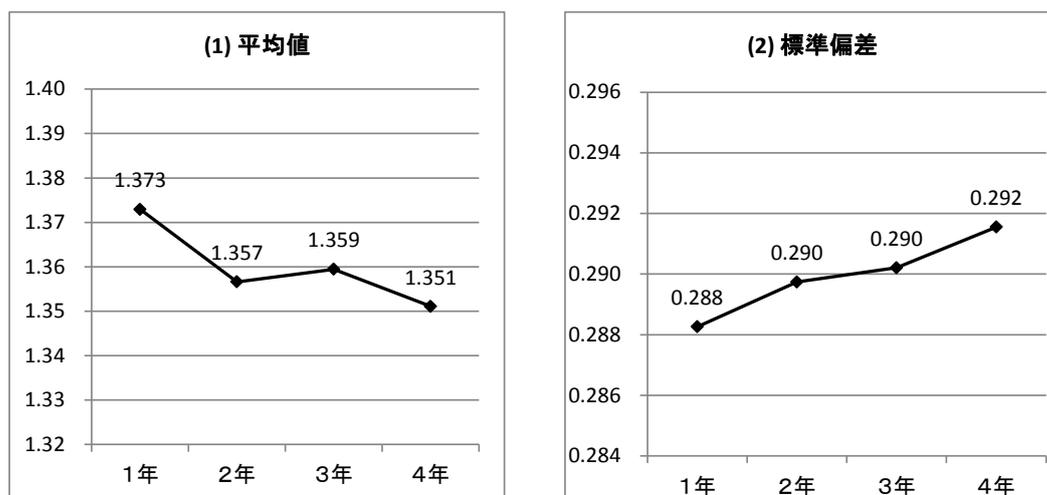


図 3-2 生徒化傾向の学年進行

つぎに、表 3-7 は、「生徒化」傾向と授業評価の相関係数をみたものである。心性として「生徒化」傾向をもつ学生ほど、行動面では「授業に対する『生徒』的要望」が強くなることが確認できる。また、「生徒化」している学生が多い大学ほど、教員に注意して欲しくなるほど、私語のうるさい授業がたくさんあることも示唆される。

なお、表 3-7 には、「まじめ志向」と授業評価の相関係数も、あわせて示しておいた。「まじめ志向」の強い学生ほど、(a)「授業に対する肯定的評価」が高まり、(b)「授業に対する『生徒』的要望」は弱まることも分かる。ただし、(b)については、相関係数の大きさから判断すれば、「生徒化」傾向の約半分ほどの関係性しかもたない。

表 3-7 まじめ志向・生徒化傾向と授業評価

	授業に対する肯定的評価	授業に対する「生徒」的要望	双方向型授業	私語の状況
生徒化傾向	-.028	.270**	.039	.124**
まじめ志向	.238**	-.148**	.010	.006

\*\* 1%水準で有意 (両側)。

\* 5%水準で有意 (両側)。

#### 4. 「生徒化」傾向と、大学生活における重点、生活時間

それでは、「生徒化」傾向が強い学生は、大学生活のなかで、どのような活動に重きをおいているのだろうか。表 3-8 は、「生徒化」傾向と、大学生活における重点、および授業出席率との関係を見たものである。

なお、学生全体では「生徒化」傾向の中央値は、1点～2点の2段階評価で、1.3 に位置した。つまり、学生全体としては、「生徒化」傾向はそれほど強くないといえる。それはさておき、ここでは、その中央値を基準にして、それ以下のケースと、それより大きいケ

ースでサンプルを二分し、それぞれ「生徒化傾向」低位群と高位群とに分類することにした。サンプル数は、低位群 1,208 人、高位群 526 人となる。

表 3-8 から分かるように、「生徒化」傾向の強い学生ほど、5%の有意水準で、「勉強志向」が高くなる傾向がみられる。さらに、1%の有意水準で、「授業出席率」も高い傾向がみられる。のみならず、平日における1日あたりの生活時間についてみれば、表 3-9 に示したように、「生徒化」傾向の強い学生ほど、「授業の予習・復習時間」は、1%の有意水準で長い。つまり、授業に関連した大学外学習時間も長い。しかし、「読書時間」は1%の有意水準で明らかに短い。

表 3-8 生徒化傾向と学生生活の重点・授業出席率

	平均値			標準偏差		
	生徒化高		生徒化低	生徒化高		生徒化低
勉強志向	1.92	>	1.87	0.44		0.44
友人との交友・趣味志向	2.68		2.69	0.66	>	0.62
アルバイト・恋愛志向	2.11		2.13	0.72		0.69
サークル・部活動志向	2.24	<	2.37	1.10		1.11
就職活動志向(3・4年生)	2.07		1.94	0.92		0.97
授業出席率(%)	92.0	>>	87.5	6.71	<<	12.75

(1) 二重不等号は、1%水準で有意。  
一重不等号は、5%水準で有意。

(2) 調査票では、授業出席率の選択肢は、「1 90%以上」、「2 89~80%」、「3 79~60%」、「4 59~40%」、「5 39%以下」、となっているが、それぞれの範囲の中央値を用いて算出。

表 3-9 生徒化傾向と平日における1日あたりの生活時間

(単位：時間)

	平均値			標準偏差		
	生徒化高		生徒化低	生徒化高		生徒化低
授業の予習・復習時間	0.51	>>	0.42	0.74		0.66
読書時間	0.46	<<	0.58	0.73	<<	0.82
スマートフォン・携帯電話使用時間	2.58		2.49	1.28		1.28
アルバイト時間	2.54		2.49	1.70		1.67

(1) 二重不等号は、1%水準で有意。  
一重不等号は、5%水準で有意。

(2) 各生活時間を「3時間以上」行っているとの回答については、「4時間」の数値を与えて計算。

冒頭で述べたように、1995年以降、学生のあいだで「勉強」重視傾向が顕著に強まって

いた。こうしてみると、この現象の一つの要因として、主体的な「勉強志向」というよりは、受け身の姿勢をもとに「出席管理」、「学生の自主性より教員による管理重視」などを求める「生徒化」した、「まじめ・勉強文化」が進行していることが示唆される。しかも、表 3-2・表 3-4 から明らかなように、「生徒化」傾向と、「社会に出た時に役立つ知識や技術」を大学教育に求める姿勢は、強く関連していた。だとすれば、とくに就職を中心として「役に立つ」内容こそを重視した「勉強志向」である可能性が高い、といえる。

表 3-8 に戻れば、「勉強志向」とは逆に、「生徒化」傾向の強い学生ほど、5%の有意水準で、「サークル・部活動志向」が低い傾向もみられる。サークル・部活動へのコミットは、自主性を高め、受け身の「生徒化」傾向を低める効果をもつ可能性のあることが示唆される<sup>20</sup>。

また、標準偏差に着目すると、「友人との交友・趣味志向」については、「生徒化」傾向高位群の方が、低位群に比べて、5%の有意水準で、バラツキが大きい傾向がみられる。つまり、「生徒化」傾向の高い学生グループでは、「友人との交友・趣味」に重点をおく学生群と、それほど重きをおかない学生群に、二極分化している傾向の強いことが示唆される。

同様に、「授業出席率」に関しては、「生徒化」傾向低位群の方が、高位群に比べて、1%の有意水準で、バラツキの大きい傾向がみられる。つまり、「生徒化」傾向の低い学生グループのなかにも、授業にきわめてまじめに出席している学生の一群が存している、といえる。

さらに、表 3-9 についていえば、「アルバイト時間」、「スマートフォン・携帯電話使用時間」に有意な差は認められなかった。そして、標準偏差をみる限り、「生徒化」傾向の低い学生のなかにも、「読書時間」がきわめて少ない学生の一群が存在していることも確かである。

## 5. 「授業に対する『生徒』的要望」と大学生生活における重点

ここで、「授業に対する『生徒』的要望」と、大学生生活における重点との関係も、表 3-10 で確認しておこう。

なお、学生全体では「授業に対する『生徒』的要望」度の中央値は、1点～5点の5段階評価で、3.7 に位置した。つまり、学生全体としては、「授業に対する『生徒』的要望」が多分に優勢を占めていることになる。それはさておき、ここでも、その中央値を基準にして、それ以下のケースと、それより大きいケースでサンプルを二分し、それぞれ「授業に対する『生徒』的要望」低位群と高位群とに分類することにした。サンプル数は、低位群 978 人、高位群 787 人となる。

「授業に対する『生徒』的要望」度が高い学生ほど、「アルバイト・恋愛志向」および「友人との交友・趣味志向」の強いことが確かめられる。なお、後者には5%の有意差しか認められなかったのに対し、前者には1%の有意差が検出された。つまり、前者で、以上の傾向がより強いことも分かる。

表 3-10 授業に対する『生徒』的要望と学生生活の重点

	平均値		標準偏差	
	授業に対する『生徒』的要望高	授業に対する『生徒』的要望低	授業に対する『生徒』的要望高	授業に対する『生徒』的要望低
勉強志向	1.88	1.89	0.44	0.44
友人との交友・趣味志向	2.73	2.65	0.65	0.62
アルバイト・恋愛志向	2.20	2.07	0.71	0.68
サークル・部活動志向	2.28	2.37	1.09	1.11
就職活動志向(3・4年生)	2.09	1.90	0.96	0.94

二重不等号は、1%水準で有意。

一重不等号は、5%水準で有意。

ただし、「勉強志向」については、「授業に対する『生徒』的要望」度による有意な差は認められなかった。「サークル・部活動志向」に関しても同様である。さらに、授業出席率との関係もみてみたが、これについても有意な差は検出されなかった。

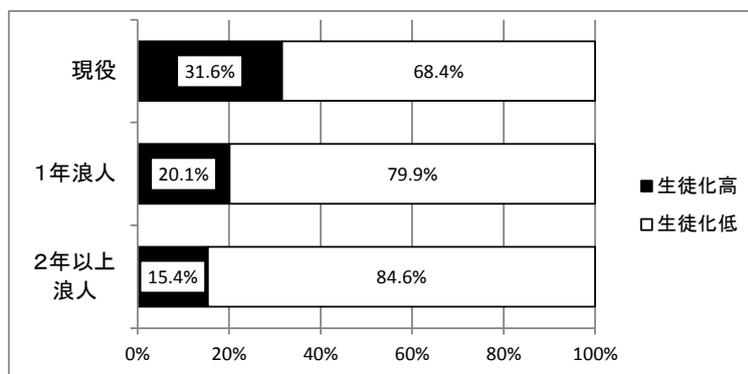
## 6. 「生徒化」学生の属性

それでは、どのような属性をもった学生ほど、「生徒化」しているのだろうか。

第1に、性別でみれば、「生徒化」傾向は、男子学生 1.31、女子学生 1.39 となり、女子学生の方が、1%の有意水準で高い傾向が確認された。

第2に、図 3-3 から明らかなように、浪人年数が長いほど、「生徒化」傾向が低くなっている。

第3に、図 3-4 で、入学方法との関連をみれば、「推薦入試」、「AO 入試」、「一般入試（センター試験を含む）」、「帰国子女入試」入学者の順に、「生徒化」傾向が強い。自主性が重視される外国教育経験者で、「生徒化」度が低くなるのは、ある意味で当然の結果として、「一般入試（センター試験を含む）」に比べて、「推薦入試」・「AO 入試」入学者で、「生徒化」傾向が強い点は示唆的である。



$\chi^2 < 0.01$

図 3-3 現役・浪人別にみた生徒化志向

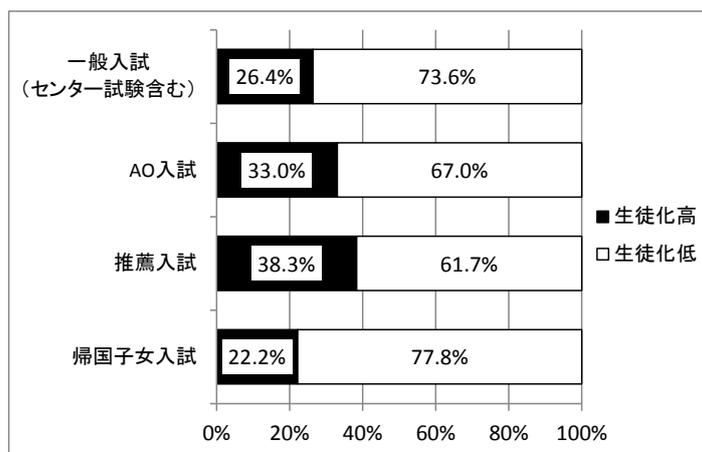
 $\chi^2 < 0.01$ 

図 3-4 入学方法と生徒化志向

第4に、大学進学理由との関連についても確認しておこう。大学に進学した理由については、「その他」を除いて、(1)「大学卒の学歴を得るために」、(2)「(さまざまな)資格(教員免許、学芸員など)をとるために」、(3)「友人関係、サークル、スポーツ、趣味を楽しむために」、(4)「自分の将来の進路や仕事について考えるために」、(5)「専門的な知識や技術を得るために」、(6)「幅広い教養を身につけるために」、(7)「みなが大学に行き、行くのが当たり前だった」、(8)「親が勧めるので」、の8つの選択肢から2つを選択する形式で質問している。

これら8つの選択肢についてそれぞれ、それを進学理由として選んだ学生と、選ばなかった学生に2分して、「生徒化」傾向の平均値を比較してみた。その結果、5%未満の有意差が認められた進学理由は、「(さまざまな)資格(教員免許、学芸員など)をとるために」のみであった。この進学理由を選んだ学生と、選ばなかった学生の、「生徒化」傾向の平均値は、それぞれ1.41と1.33となり、資格取得を目的として大学に進学してきた学生の方が、「生徒化」傾向が1%の有意水準で強い。また、標準偏差についても1%の有意水準で差が認められ、前者が0.290、後者が0.285となった。つまり、資格取得を目的として大学に進学してきた学生は、そうでない学生に比べて相対的に、「生徒化」傾向の強い学生と、弱い学生に二極分化している傾向のあることが分かる。

第5に、今回の調査では、(1)「自宅」、(2)「アパート、マンション、下宿」、(3)「学生寮、学生会館」、(4)「親戚、知人の家」、(5)「その他」といった選択肢で、居住形態を聞いている。また、出身高校について、(1)「国公立大学や難関大学への入学者が多い学校」、(2)「普通の大学への入学者が多い学校」、(3)「短大・専修・専門学校への入学者が多い学校」、(4)「就職する人が多い学校」、といった選択肢を用い、高校ランクを尋ねている。これら2つの属性、および「知的家庭環境(文化資本)」別に、「生徒化」傾向の度合いを確認してみた。しかし、そこにはすべて、有意な差はみられなかった。

## 7. 「まじめ志向」学生の特徴

先に表 3-2 に示したように、学生の大学観については、「生徒化傾向」を表す因子の他に、「まじめ志向」の因子が抽出された。そこで最後に、「まじめ志向」が強い学生の特徴についてもみておこう。

学生全体では「まじめ志向」の中央値は、1点～2点の2段階評価で、1.5に位置した。つまり、学生全体としては、「まじめ志向」が強い学生とそうでない学生がちょうど半々存在することになる。ここでも、その中央値を基準にして、それ以下のケースと、それより大きいケースでサンプルを二分し、それぞれ「まじめ志向」低位群と高位群に分類することにした。サンプル数は、低位群 1,119 人、高位群 612 人となる。

まず、大学生活における重点、および授業出席率との関係を、表 3-11 で確かめておこう。

「まじめ志向」の高い学生ほど、当然のごとく「勉強志向」が強く、「授業出席率」も高い。これに対し、「まじめ志向」の低い学生ほど、「友人との交友・趣味志向」、「アルバイト・恋愛志向」、「サークル・部活動志向」が強い。以上については、いずれも 1%水準で有意差が検出された。こうしてみると、勉強重視の「まじめ志向」派と、それ以外の「遊び（課外活動）」重視派に、学生がはっきり色分けされていることは明らかである。

ただし、「まじめ志向」低位群は、高位群に比べて、「勉強志向」、「授業出席率」は、1%の有意水準で、明らかに標準偏差が大きい。このことは、「まじめ志向」の低い学生グループが、以下の2つの集団に二極分化していることを示している。第1が、課外活動にのめり込み、勉強・授業へのコミットが明らかに弱い集団である。第2が、課外活動に重点を置きながらも、おそらく「楽な」授業を中心にしてとはいえ、勉強もそこそこに行っている集団である。あるいは、大学の「学校化」が進展するなかで、いやおうなく勉強を重視せざるをえない状況を反映した結果である可能性も存在する。

表 3-11 まじめ志向と学生生活の重点・授業出席率

	平均値		標準偏差			
	まじめ志向 高		まじめ志向 低	まじめ志向 高	まじめ志向 低	
勉強志向	2.04	>>	1.80	0.41	<<	0.44
友人との交友・趣味志向	2.60	<<	2.73	0.63		0.64
アルバイト・恋愛志向	2.00	<<	2.19	0.70		0.69
サークル・部活動志向	2.16	<<	2.43	1.07	<	1.11
就職活動志向(3・4年生)	1.86		2.03	0.93		0.96
授業出席率(%)	91.3	>>	87.6	8.90	<<	12.43

(1) 二重不等号は、1%水準で有意。  
一重不等号は、5%水準で有意。

(2) 調査票では、授業出席率の選択肢は、「1 90%以上」、「2 89~80%」、「3 79~60%」、「4 59~40%」、「5 39%以下」、となっているが、それぞれの範囲の中央値を用いて算出。

つぎに、平日における1日あたりの生活時間との関係を、表 3-12 で確認しておこう。「ま

「まじめ志向」の高い学生は、それが低い学生に比べて、「授業の予習・復習時間」のみならず、「読書時間」も長い。そして、「アルバイト時間」、「スマートフォン・携帯電話使用時間」は短い。以上にはいずれも1%水準での有意差が確認できる。ただし、どの生活時間についても、「まじめ志向」高位群の方が、低位群に比べて、標準偏差が有意に大きい。つまり、「まじめ志向」の強い学生のなかにも、「授業の予習・復習時間」や「読書時間」が非常に少なく、「アルバイト時間」や「スマートフォン・携帯電話使用時間」が、きわめて長い学生の一群が存在していることが示唆される。

それでは、「まじめ志向」が強い学生は、どのような属性をもっているのだろうか。

第1に、性別でみれば、「まじめ志向」度には、平均値・標準偏差ともに、5%水準の有意差が確認できた。その平均値は、男子学生 1.54、女子学生 1.59 となり、女子学生の方が高い傾向が確認された。ただし、標準偏差はそれぞれ 0.390、0.356 となり、男子学生の方が高い。つまり、男子学生のなかにも、「まじめ志向」のきわめて強い学生の一群が存在していることが示唆される。

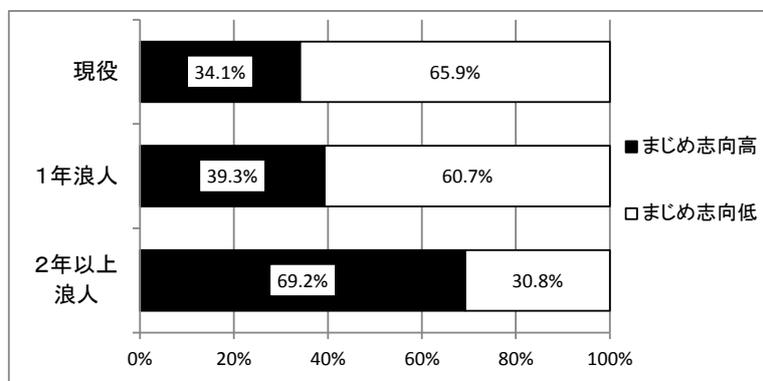
第2に、図 3-5 から分かるように、浪人年数が長いほど、「まじめ志向」をもつ学生の比率は多くなっている。

表 3-12 まじめ志向と平日における1日あたりの生活時間

(単位：時間)

	平均値			標準偏差		
	まじめ志向高		まじめ志向低	まじめ志向高		まじめ志向低
授業の予習・復習時間	0.73	>>	0.29	0.88	>>	0.50
読書時間	0.74	>>	0.44	0.92	>>	0.71
スマートフォン・携帯電話使用時間	2.21	<<	2.69	1.33	>>	1.22
アルバイト時間	2.24	<<	2.66	1.70	>	1.65

- (1) 二重不等号は、1%水準で有意。  
一重不等号は、5%水準で有意。
- (2) 各生活時間を「3時間以上」行っているとの回答については、「4時間」の数値を与えて計算。



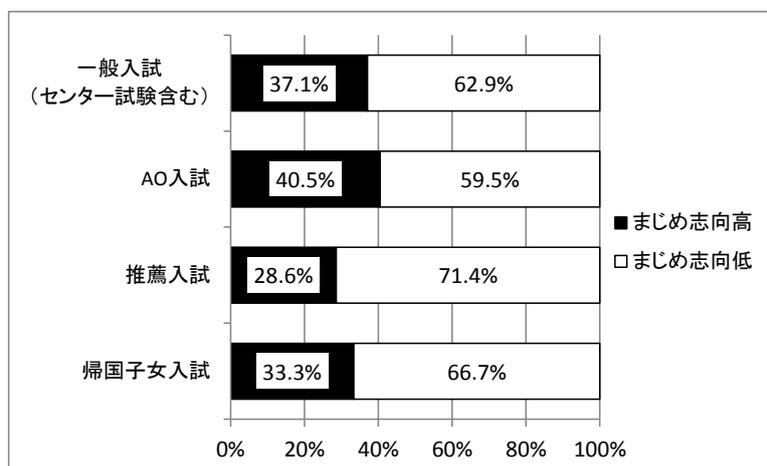
$\chi^2 < 0.01$

図 3-5 現役・浪人別にみたまじめ志向

第3に、図3-6に示したように、入学方法で見れば、「AO入試」、「一般入試（センター試験を含む）」、「帰国子女入試」、「推薦入試」入学者の順に、「まじめ志向」をもつ学生の比率は多くなっている。「AO入試」の本質的な目的は、学力は別として、大学に進学してからの学習意欲の高い学生を入学させることにあるとすれば、その選抜方法が機能しているともみなせる。

第4に、「まじめ志向」高位群と低位群について、「知的家庭環境（文化資本）」得点を算出すれば、1～4点の4段階評価の、平均値ではそれぞれ2.53と2.33、標準偏差では0.638と0.706となり、いずれも1%水準で有意差が確認された。つまり、「まじめ志向」高位群の方が、「知的家庭環境（文化資本）」が豊かな状況のもとで育ってきた学生が多い。ただし、「まじめ志向」低位群のなかにも、「知的家庭環境（文化資本）」が豊かな状況のもとで育ってきた学生の一群が存在していることが示唆される。

第5に、居住形態および出身高校ランクと、「まじめ志向」とのあいだには、有意な差は認められなかった。



$\chi^2 < 0.01$

図3-6 入学方法とまじめ志向

## 8. まとめ

一昔前までの日本の大学は、高校時代までとは異なり、学生の自主性を重んじ、学生の生活や学習について、教員が手取り足取り指導することは、まれであった。しかし、とくに1990年代以降、18歳人口減にともなう各大学の志願者確保戦略の一貫として、高校時代までの『生徒指導』『生活指導』のごとく、「学生の現在と未来にわたる生活の様々な側面に関してきめ細かくケアする」ような、「大学のサービス化」傾向が強まっていった。また、教育に重きをおく、90年代以降の一連の大学改革によって、一昔前までの大学とは異なり、出席・成績管理を強めて行った。その良し悪しの評価は別として、このような傾向を、本論では、大学の「初中等『学校化』」と呼ぶことにした。

そして、そのような大学の「初中等『学校化』」に対応する、学生の意識を「大学生の生徒化」と名付けることにした。それでは、これらの「生徒化」した学生、つまり大学の「初中等『学校化』」感覚をもつ学生は、どのような特徴をもっているのだろうか。以下に

列記しておこう。

(1) 「社会に出た時に役立つ知識や技術」を求める傾向を、資格志向につながる意識とみなして、これを大学の「専門『学校化』」感覚と呼べば、大学の「初中等『学校化』」感覚をもつ学生は、大学の「専門『学校化』」感覚も、合わせてもつ傾向がみられた。つまり、それら2つの感覚をあわせた意味での、「大学の学校化」感覚をもつことこそが、「生徒化」学生の特徴になる。

(2) 学年が上がるにつれ、つまり高校から離れ大学生活が長くなるほど、「生徒化」傾向から脱却していく学生は多くなる。ただし、「生徒化」傾向からなかなか抜け出せない学生の一群も存在しており、「生徒化」傾向の高い学生と低い学生に、二極分化していく様相も確認できる。

(3) 心性として「生徒化」傾向をもつ学生ほど、「授業に対する『生徒』的要望」が強くなる。また、「生徒化」している学生が多い大学ほど、教員に注意して欲しくなるほど、私語のうるさい授業がたくさんある。

(4) 「生徒化」傾向の高い学生ほど、「勉強志向」が強い。そして、「授業の予習・復習時間」は長く、「授業出席率」も高い。しかし、「読書時間」は短い。

いくつかの調査で明らかにされているように、1995年以降、学生のあいだで「勉強」重視傾向が顕著に強まっている。こうしてみると、この現象の一つの要因として、主体的な「勉強志向」というよりは、受け身の姿勢をもとに「出席管理」、「学生の自主性より教員による管理重視」などを求める「生徒化」した、「まじめ・勉強文化」が進行していることが示唆される。しかも、「生徒化」傾向と、「社会に出た時に役立つ知識や技術」を、大学教育に求める姿勢は強く関連していた。この点も勘案すれば、とくに就職を中心として「役に立つ」内容こそを重視した「勉強志向」である可能性が高いといえる。

(5) 「勉強志向」とは逆に、「生徒化」傾向の高い学生ほど、「サークル・部活動志向」が低い。サークル・部活動へのコミットは、自主性を高め、受け身の「生徒化」傾向を低める効果をもつ可能性のあることが示唆される。一方、「生徒化」傾向の高低によって、「アルバイト・恋愛志向」の強さ、および「アルバイト時間」の長さに差は認められなかった。この点からは、アルバイトや恋愛へのコミットは、「生徒化」傾向の低減に寄与しないことが示唆される。

(6) 「友人との交友・趣味志向」については、「生徒化」傾向高位群の方が、低位群に比べて、標準偏差が大きい。つまり、「生徒化」傾向の高い学生グループでは、「友人との交友・趣味」に重点をおく学生群と、それほど重きをおかない学生群とに、二極分化している傾向の強いことが示唆される。

(7) 行動面における「生徒化」傾向の表れとみなせる、「授業に対する『生徒』的要望」度についてみれば、その度合いが高い学生ほど、「アルバイト・恋愛志向」および「友人との交友・趣味志向」が強かった。ただし、「生徒化」傾向の強弱によって、「勉強志向」および授業出席率や、「サークル・部活動志向」に関しては、差は認められなかった。この点は、「生徒化」現象については、意識面と行動面を分離して分析する必要があることを示唆している。

(8) 「生徒化」傾向が強い学生の属性についてみれば、以下のような特徴が観察された。

①性別で見れば、女子学生の方が男子学生より、「生徒化」傾向は強い。

- ②浪人年数が長いほど、「生徒化」傾向が低い。
- ③入学方法別にみると、「推薦入試」、「AO入試」、「一般入試（センター試験を含む）」、「帰国子女入試」入学者の順に、「生徒化」傾向が強い。自主性が重視される外国教育経験者で、「生徒化」度が低くなるのは、ある意味で当然の結果として、「一般入試（センター試験を含む）」に比べて、「推薦入試」・「AO入試」入学者で、「生徒化」傾向が強い点は示唆的である。
- ④大学進学理由との関連で見れば、資格取得を目的として大学に進学してきた学生の方が、「生徒化」傾向が強かった。それ以外の大学進学理由については、有意差は認められなかった。ここでも、「生徒化」意識が「資格志向」と強く結びついていることが確認できる。ただし、標準偏差をもとにすれば、資格取得を目的として大学に進学してきた学生は、そうでない学生に比べて相対的に、「生徒化」傾向の強い学生と、弱い学生に二極分化している傾向がみられる。
- ⑤ (a)「自宅」、「アパート、マンション、下宿」、「学生寮、学生会館」、などの居住形態、(b)高校ランク、(c)「知的家庭環境（文化資本）」といった属性と、「生徒化」傾向の度合いには、有意な差はみられなかった。

(9) 大学観をもとにした因子分析の結果、「生徒化」意識に関わる因子の他に、「まじめ志向」を表す因子が抽出された。「まじめ志向」とは、つぎのような意識が強いことである。

(a)「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」というよりは、「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」と考える。のみならず、(b)「単位が楽に取れる科目を選択したい」というよりは、「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」という意識をもっていることである。

「まじめ志向」の強い学生についても、その特徴を調べてみた。この結果、以下の点が明らかになった。

(10)「まじめ志向」の高い学生ほど、当然のごとく「勉強志向」が強く、「授業出席率」も高い。そして、「授業の予習・復習時間」のみならず、「読書時間」も長い。これに対し、「まじめ志向」の低い学生ほど、「友人との交友・趣味志向」、「アルバイト・恋愛志向」、「サークル・部活動志向」が強い。そして、「アルバイト時間」、「スマートフォン・携帯電話使用時間」は長い。こうしてみると、勉強重視の「まじめ志向」派と、それ以外の「遊び（課外活動）」重視派に、学生がはっきり色分けされていることは明らかである。

ただし、「まじめ志向」低位群は、高位群に比べて、「勉強志向」、「授業出席率」についての標準偏差は、明らかに大きい。このことは、「まじめ志向」の低い学生グループが、以下の2つの集団に二極分化していることを示している。第1が、課外活動にのめり込み、勉強・授業へのコミットが明らかに弱い集団である。第2が、課外活動に重点を置きながらも、おそらく「楽な」授業を中心にしてとはいえ、勉強もそこそこに行っている集団である。あるいは、大学の「学校化」が進展するなかで、いやおうなく勉強を重視せざるをえない状況を反映した結果である可能性も存在する。

また、生活時間についていえば、どの活動に関しても、「まじめ志向」高位群の方が、低位群に比べて、標準偏差が大きい。つまり、「まじめ志向」の強い学生のなかにも、「授業の予習・復習時間」や「読書時間」が非常に少なかったり、「アルバイト時間」や「スマ

ートフォン・携帯電話使用時間」が、きわめて長い学生の一群が存在していることが示唆される。

(11)「まじめ志向」の強い学生ほど、(a)「授業に対する肯定的評価」が高まり、(b)「授業に対する『生徒』的要望」は弱まる。ただし、(b)については、相関係数の大きさから判断すれば、「生徒化」傾向の約半分ほどの関係性しかもたない。

(12)「まじめ志向」が強い学生の属性については、以下のような特徴がみられた。

- ①性別では、男子学生のなかにも「まじめ志向」がかなり強い学生の一群が存在するものの、全体としてみれば、女子学生の方が男子学生より、「まじめ志向」が強い。
- ②浪人年数が長いほど、「まじめ志向」をもつ学生の比率は多い。
- ③入学方法については、「AO 入試」、「一般入試（センター試験を含む）」、「帰国子女入試」、「推薦入試」入学者の順に、「まじめ志向」の学生の比率は多くなっている。「AO 入試」の本質的な目的は、学力は別として、大学に進学してからの学習意欲の高い学生を入学させることにあるとすれば、その選抜方法が機能しているともみなせる。
- ④「まじめ志向」の高い学生の方が、「知的家庭環境（文化資本）」が豊かな状況のもとで育ってきた学生が多い。ただし、標準偏差をもとにすれば、「まじめ志向」の低い学生のなかにも、「知的家庭環境（文化資本）」が豊かな状況のもとで育ってきた学生の一群が、存在していることが示唆される。
- ⑤居住形態および出身高校ランクと、「まじめ志向」とのあいだには、有意な差は認められなかった。

#### <註>

- 1 比較的最近のデータまで提示したものとしては、以下の①の文献参照。  
①岩田弘三「大学生生活費とキャンパス文化の推移」、『バブル崩壊後の学生の姿容と現代学生像—「学生生活実態調査をはじめとした調査分析」報告書—』、全国大学生生活協同組合連合会、2012年、PP. 77-79。
- 2 引用は①の文献から。同様の指摘は、②の論文でもなされている。  
①武内清『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社、2014年、PP.53-54。  
②武内清「現代青少年の安定志向」、『教育と医学』2010年1月号、P.54。
- 3 これについては、以下の①の文献参照。  
なお、②の文献をもとにすれば、竹内洋も同様の問題関心をもっていることが分かる。「いまの大学生は、高校生とみるとわかりやすい。授業にほぼ皆出席。先生、先生と寄ってくる。わかりやすい授業をもとめたがる」(P.257)。「少子化と定員割れの急増とそれへの恐怖から、お客様（学生さま）大学になっているところもある。…過保護状態である」(PP.232-233)。「いまや半数以上が大学に進学する時代」となったため、「高校と大学のアーティキュレーション（接合）が大切とされ、初年次教育などがさかんになった」。そのような動向を含めて、「大学の顧客サービス業化」とでも呼べるような状況が進行した。つまり、大学は、「学生というお客様へのサービス産業になった。…これだけ大学教育が手取り足取りでは、企業などに就職して“人材”となりうるだろうか。『指示待ち社員』どころか、『お客様社員』では困らないだろうか」(PP.247-248)。そのように指摘しているからである。  
①岩田弘三「キャンパス文化の変容」、稲垣恭子<編>『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社、2011年。  
②竹内洋『大衆の幻像』中央公論社、2014年。
- 4 代表的なものとして、以下の2つの文献をあげておく。  
なお、②の文献のなかで、上野は、「学校化」の現れとして、「出席を取ってくれ、教科書を決めてくれ、と要求する学生が現れはじめた」ことなどを問題視しているので (PP.15-18)、一部の問題関心は共有されていることになるといえる。  
①イヴァン・イリッチ（東洋・小澤周三<訳>）『脱学校の社会』東京創元社、1977年。

- ②上野千鶴子『サヨナラ、学校化社会』太郎次郎社、2002年。
- 5 以下で述べるように、これら2つの要因が「大学の『学校化』」をもたらし、それが「生徒化」に寄与しているとすれば、それ以外の第3-3の「生徒化」促進要因として、『学生文化』と『生徒文化』のボーダレス化現象も考えられる。つまり、「最近では、デートやアルバイトのみならず、飲酒や喫煙、女子生徒の化粧などは、高校のみならず中学校でさえ日常的な風景と化してしまった。つまり、『大学生文化』が、高校までの『生徒文化』に大々的に浸潤を始めた結果、かつての高校『裏文化』が、何の後ろめたさも伴わない、「表文化」に浮上した。言い換えれば、それらは、大学に入るまでの禁欲的試練に打ち勝ち、『大人』の入り口に達した学生だけが晴れて謳歌できる特権ではなく、単なる高校生活の延長線上に、位置づけられる行為にすぎなくなった」ことである。この点については、以下の①の文献参照。
- ①前掲、岩田、2011年、PP.43-44。
- 6 伊藤茂樹「大学生は『生徒』なのか—大衆教育社会における高等教育の対象—」、『駒沢大学教育学研究論集』第15号、1999年、PP.103-106。
- 7 これについては、以下の①の文献参照。また、「生徒化」に関連する研究については、②の文献による優れたレビューがあり、そこでは、批判的な検討もなされているので、そちらに譲ることとする。
- ①前掲、伊藤、1999年、P.85。
- ②新立慶「大学生の『生徒化』論における批判的考察」、『教育論叢』第53号、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻、2010年。
- 8 前掲、伊藤、1999年、P.85 および P.92。
- 9 同論文、P.87。
- 10 前掲、岩田、2011年、PP.33-34。
- 11 なお、今回の分析では、調査票の選択肢の得点とは異なり、得点が高いほどそれらの傾向が強くなるように、変換している。
- 12 なお、この第3因子に属する2つの項目と、「私語の多い授業がある」については、他の項目が意識・評価に関する項目であるのに対し、事実認識に関する項目となっている。それゆえ、それらを一律に扱って因子分析にかけることが適切であるかどうか、という問題がある点だけ付記しておくたい。
- 13 この点については、自己評価ではなく、実際の成績をもとにした分析でも確認されている。詳しくは、以下の①の文献参照。
- ①岩田弘三・北條英勝・黒河内利臣「武蔵野大学全学基礎教育課程に関する授業評価についての分析」、『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第2号、2012年。
- 14 学年別にみた場合、「就職活動に役立つことをもっと教えてほしい」という要望をもつ学生の比率は、無回答を除けば、「とてもそう思う」+「ややそう思う」の合計で、1年生62.4%、2年生55.0%、3年生55.6%、4年生52.3%となる。つまり、1年生でとくに高いことが目を引く。また、調査時期が11~12月であるにもかかわらず、4年生でも半数以上の学生が、就職活動向けの知識に対する要望をもっていることになる。後に詳述するように、学生生活において「就職活動」の比重が、まだ「大部分」+「かなり」占めていると答えた4年生の比率は、3年生とほぼ同水準となっている。つまり、この時期まで就職活動を引きずっている学生が、まだ多数いるためと考えられる。ただし、就職活動向けの知識への要望をもっている学生の比率は、4年生では3年生より幾分低くなっている。4年生のなかでも就職が決定した学生にとっては、就職活動向けの知識の必要性が減少することが、原因になっていると考えられる。その点は次のことから裏づけられる。この質問項目に対する回答の標準偏差をみると、1年生・2年生はともに0.04、3年生0.06、4年生0.09と、4年生でとくに高くなっている。つまり、就職活動向けの知識への要望が切実な就職未定学生と、そうでない学生の二極分化が起きていることが示唆されるからである。ただし、今回の調査では、就職内定の有無に関する質問がないので、正確な解釈はできない。
- 15 さらに、因子得点すなわち関係性は多少低いものの、第4因子つまり「私語の状況」を構成する主要要素も、第2因子の関連要素になっている。ただし、それらを含めて以上の項目は「私語の多い授業がある」を除けば、いずれも要望に関する項目になっており、注12で指摘した点と同様の問題をもつことには、注意が必要である。
- 16 なお、ここでも、調査票の選択肢の得点とは異なり、得点が高いほどそれらの傾向が強くなるように、変換している。
- 17 調査時期は多くの大学で基本的には11~12月だったことを勘案すれば、今回の調査サンプルの3年生の「就職活動」重視率は、異常に低い印象を受ける。大学別にみた場合、多少の例外を除いて、偏差値が比較的高い大学で、3年生の「就職活動」重視率はきわめて低い傾向がみられた。この点を勘案すると、偏差値が比較的高い大学の3年生の場合、この時期すでに内定を確保してしまっており、「就職活動」を重視する必要がなくなった学生が、多数存在する可能性がある。
- 18 ①岩田弘三「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」、『大学教育研究』第7号、神戸大学・

---

大学教育研究センター、1999年。

②岩田弘三「第1志望以外入学者の学生生活・大学満足度の学年変化」、『武蔵野大学現代社会学部紀要』第7号、2006年。

<sup>19</sup> なお、ここでも、調査票の選択肢の得点とは異なり、得点が高いほどそれらの傾向が強くなるように、変換している。

<sup>20</sup> 伊藤茂樹は、以下の①の論文で、サークルで中心的・指導的役割を果たしている学生ほど、「生徒化」度の低くなる傾向がみられることを根拠に、同様の指摘をしている。ただし、伊藤の調査結果では、生徒化度が高くなっても、低くなっても、サークル加入率およびサークルへの期待をもつ学生の比率は、減少していく傾向がみられる。これに対し、今回の調査では、生徒化度が低くなるほど、「サークル、部活動」重視度のみならず、数値は割愛するものの、その加入率についても、明らかに上昇する傾向が確認された。

①前掲、伊藤、1999年、PP.96-97。

## 第4章

## 4 時点における学生の「生徒化」と大学の「学校化」の検討

—1997年・2003年・2007年・2013年データの比較から—

浜島幸司 (同志社大学)

## 1 はじめに

本章では、4 時点 (1997 年・2003 年・2007 年・2013 年) の調査データを用いて、学生の「生徒化」と大学の「学校化」について検討する。第 3 章にて、2013 年データを用いた学生の「生徒化」と大学の「学校化」の分析が、岩田弘三によってなされている。本章では、岩田による学生の「生徒化」および大学の「学校化」の分析枠組みに準拠し、本研究会が蓄積している過去 3 時点分のデータを合わせ、1997 年以降、双方の傾向がどのように変化してきているのかを確認する<sup>(1)</sup>。

分析データは、4 時点とも回答のあった大学サンプルに限定する。表 4-1 のとおり、A 大学 (国立)、C 大学 (国立)、D 大学 (国立)、F 大学 (私立)、G 大学 (私立)、J 大学 (私立)、L 大学 (私立) の 7 つとなる。創立年数の古い「伝統総合」大学が 3 校含まれていることもあり、全体的に入学難易度が高い部類に入る学生サンプルだということに留意したい。

表 4-1 分析で使用する 7 大学サンプル (4 時点)

調査年	調査大学							合計
	A大学	C大学	D大学	F大学	G大学	J大学	L大学	
1997年	84	87	147	202	201	114	119	954
2003年	114	117	99	399	433	111	131	1404
2007年	84	169	67	337	442	70	146	1315
2013年	127	187	114	174	219	96	149	1066
合計	409	560	427	1112	1295	391	545	4739

※A・F・G→「伝統総合」大学／C・D・J・L→非「伝統総合」大学

本章では、学生の「生徒化」を「行動面」から捉える。また、大学の「学校化」を学生の「心性面」が映し出されたものと捉えることにする。つまり、学生の「行動面」の「生徒化」と、「心性面」の「生徒化」の 2 つの側面を検討する<sup>(2)</sup>。

データ分析の流れとしては、まず、「行動面」の「生徒化」について、第 2 節では「授業出席率」の回答を用いて検討する。続いて、第 3 節では、授業に関連する項目の回答を用いて検討する。また、第 4 節では、学内施設、環境、人間関係、大学生活満足度といった項目を用いて検討する。

続いて、「心性面」の「生徒化」について、第 5 節で、大学に関する 2 つの意見のうちどちらの考えが近いかを尋ねた 4 項目 (いわゆる、大学観) を分析する。

第 2 節から 5 節までは主に 4 時点の全体および大学別の回答の比較をみていくが、第 6 節では、「行動面」および「心性面」での「生徒化」への時点による影響の効果を確認すべく、いくつかの独立変数を投入したロジスティック回帰分析をおこなう。

最後に第7節で、本分析による知見をもとにしたまとめと考察をおこなう。

## 2 「行動面」の「生徒化」：授業出席率から

図 4-1 授業出席 「80%以上出席」% (7大学全体)

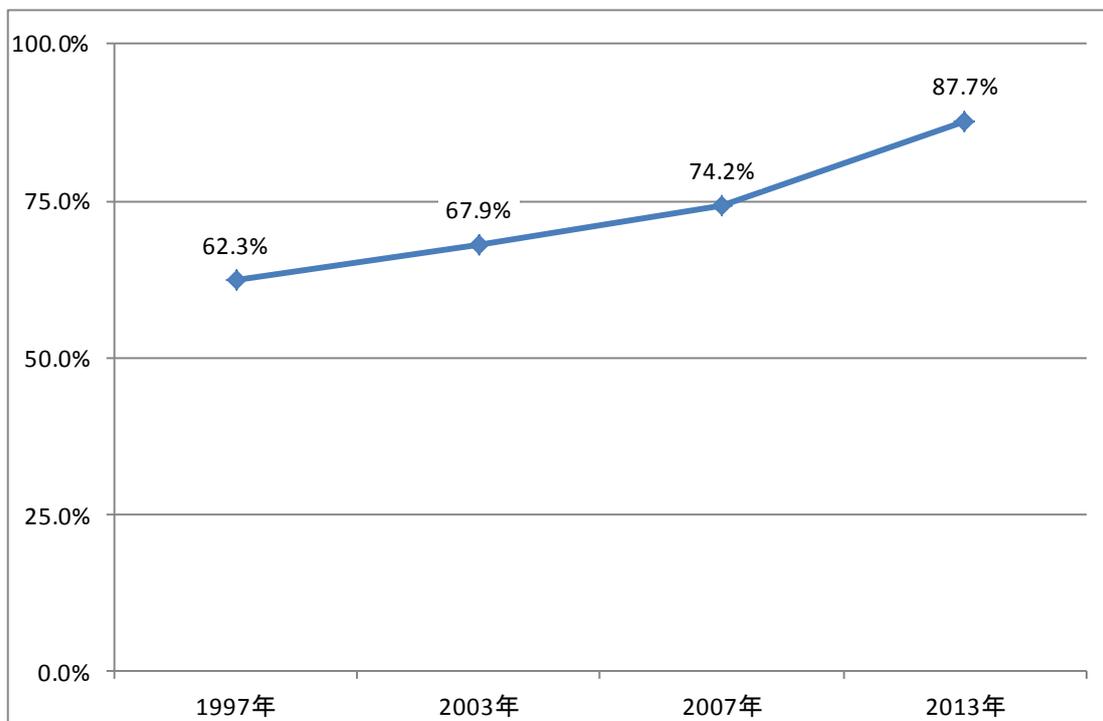
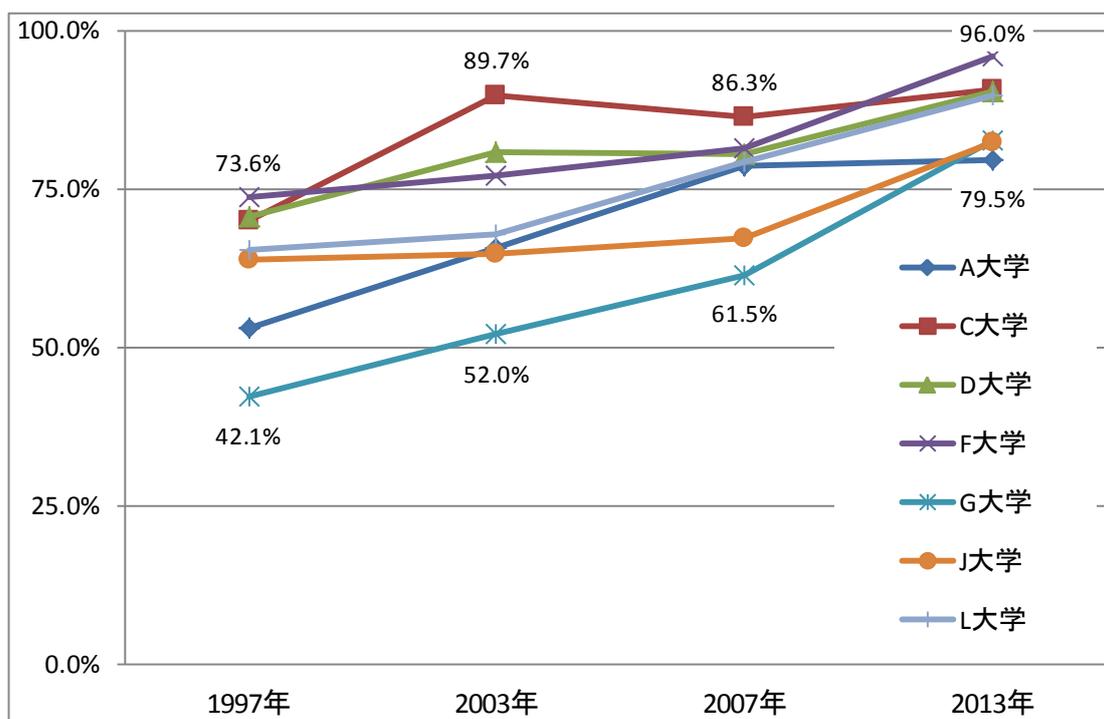


図 4-2 授業出席 「80%以上出席」% (大学別)



授業に「80%以上出席している」<sup>(3)</sup> 回答割合の時点間比較を全体でみたものが、図 4-1 である。同じく、大学別にみたものが図 4-2 である。

全体をみると、1997年：62.3%→2003年：67.9%→2007年：74.2%→2013年：87.7%と増加していることがわかる。今や大多数が、履修登録している授業に出席するのが当たり前となっている。大学別にみると、7つの大学とも、1997年と比べ2013年での回答割合が増加していることがわかる。G大学では1997年では42.1%だったものが、2013年では8割を超えるに至っている。また、F大学の2013年では96.0%が「80%以上」出席している。大学内での分化はあるものの、全体的に授業に出席する回答が年々増えている<sup>(4)</sup>。

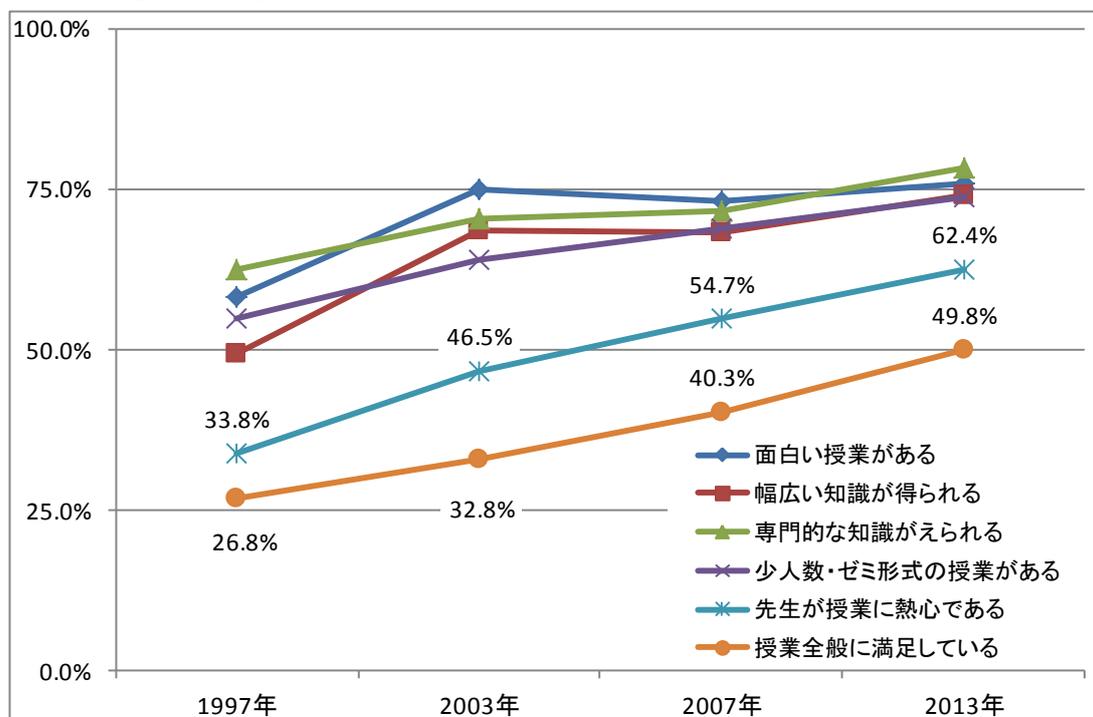
### 3 「行動面」の「生徒化」：「授業に関する項目から

授業についての意見がどのように変化しているのかも合わせてみていきたい。

図 4-3 が、関連する 6 項目の時点間比較を、全体でみたものである。6 項目とも、1997年と比べ2013年での回答割合が増加していることがわかる。「そう」と回答する割合が多い項目としては、「専門的な知識がえられる」、「面白い授業がある」、「幅広い知識が得られる」、「少人数・ゼミ形式の授業がある」である。だが、4 時点の間で大きく増加した項目として、「先生が授業熱心である（1997年：33.8%→2003年：46.5%→2007年：54.7%→2013年：62.4%）」、「授業全般に満足している（1997年：26.8%→2003年：32.8%→2007年：40.3%→2013年：49.8%）」がある。

図 4-3 授業についての意見（7 大学全体）

「そう(とても+やや)」%

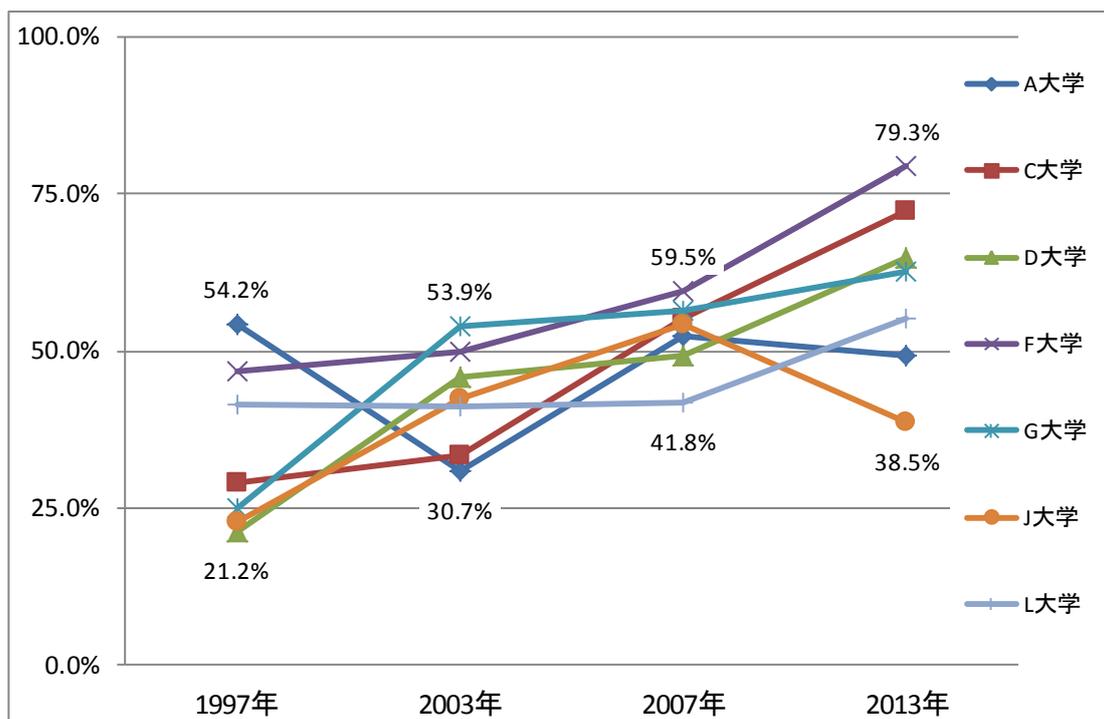


大きく増加した項目、「先生が授業熱心である」の 4 時点の変化を大学別にみたものが

図 4-4 である。増加傾向にある大学もあれば、増減を伴う大学も存在している。また、同じ調査年であっても回答の内部差(大学差)も大きい。2013 年では、最も高い F 大学 (79.3%) と最も低い J 大学 (38.5%) で 39.8 ポイントもの差がある。2003 年、2007 年で縮まりつつあった内部差が、2013 年では拡大していることがわかる。

図 4-4 教員が授業熱心である (大学別)

「そう(とても+やや)」%



#### 4 「行動面」の「生徒化」：施設・環境・人間関係・大学生生活満足度から

大学内の施設、環境という側面からでは、どのような変化がみられるのだろうか。図 4-5 は、学内施設および周辺環境に関する 6 項目の満足回答割合を全体でみたものである。

項目によって差異があることが確認できるものの、どの時点においても「図書館」(1997 年：54.7%→2003 年：71.6%→2007 年：71.3%→2013 年：74.4%) の満足度が最も高い。次いで、「校舎、教室 (1997 年：35.3%→2003 年：47.0%→2007 年：57.8%→2013 年：67.4%)」である。時点を追うごとに増加していることが分かる。一方、「大学周辺の環境」は 2003 年以降、横ばいもしくは微減している。2013 年において、それまで満足回答が低かった「部、サークル活動の場所」への満足が大幅に増加している。「購買部」、「食堂」への満足が下がる中で、学内での課外活動への施設満足が大きくなっていることがわかる。

年々増加した項目である「校舎、教室」の 4 時点の変化を大学別にみたものが図 4-6 である。1997 年時点で、そもそも満足が多い大学と、低い大学とに分かれていた。とりわけ、C 大学は 1997 年、2003 年、2007 年において不満が大多数を占めていたが、2013 年では満足が大多数へと変化した<sup>5)</sup>。同じく、D 大学でも 2013 年で満足が増え、2013 年での大学差は縮小していることがわかる。

図4-5 大学施設、周辺環境満足度 (7大学全体)

「満足(とても+やや)」%

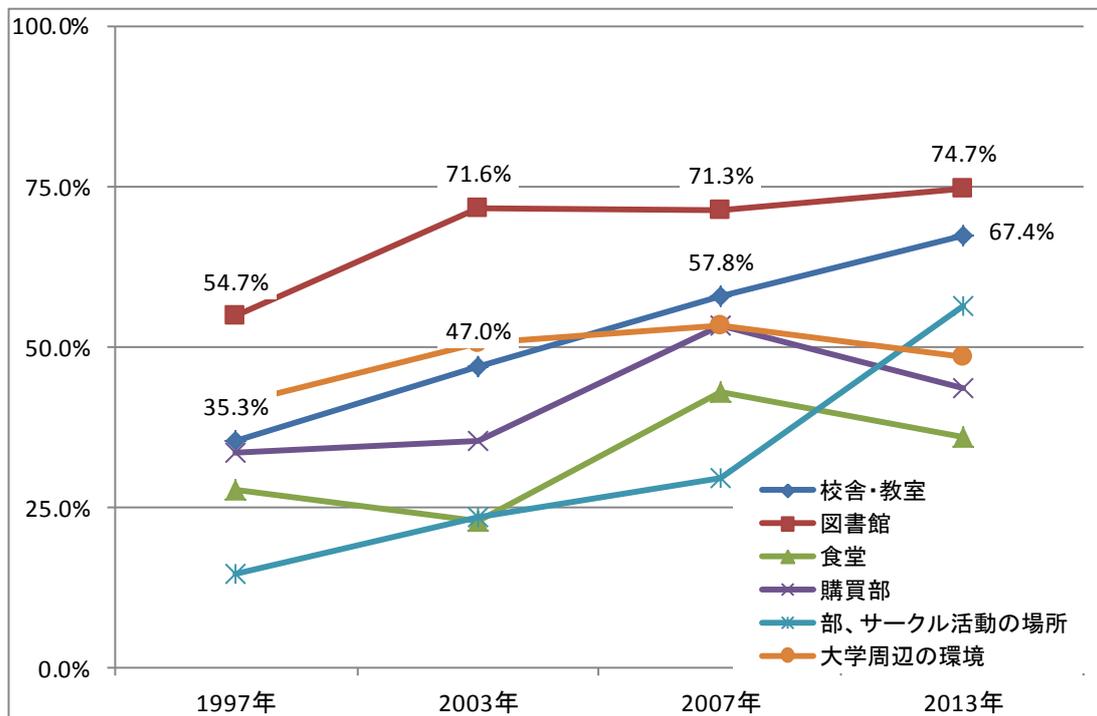
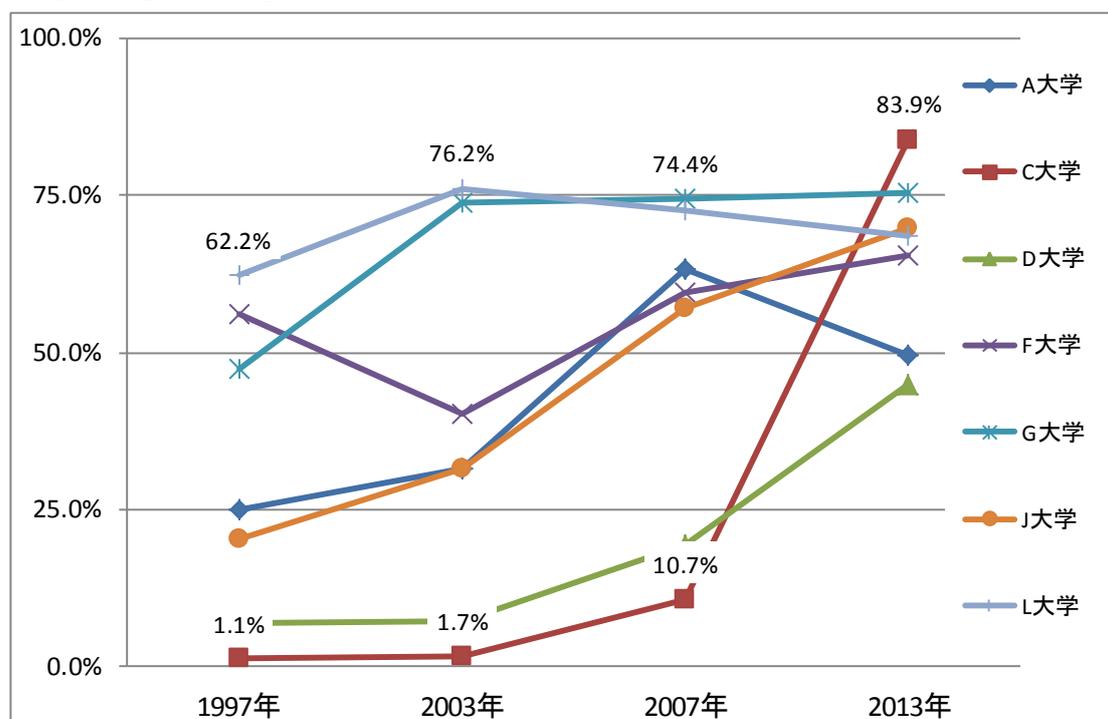


図4-6 校舎、教室について (大学別)

「満足(とても+やや)」%



学内での人間関係、大学生生活への満足度の側面からもデータをみてみよう。

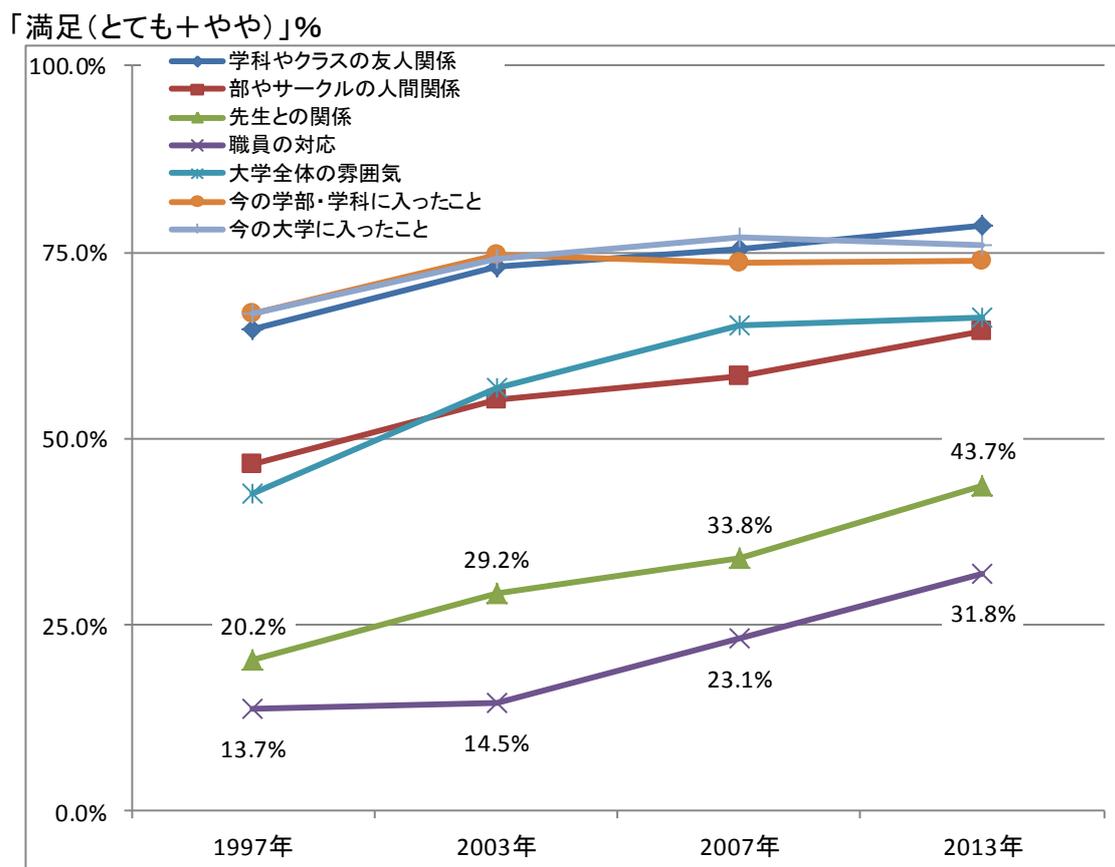
図4-7は、人間関係および学生生活に関する7項目の満足回答割合を全体でみたものである。1997年より2013年に至るまで、7項目とも増加しているが、項目により増加傾向が異なっている。3つのパターンがみられる。

まず、微増している項目（「学科やクラスの友人関係」、「今の大学に入ったこと」、「今の学部・学科に入ったこと」）である。これらは、1997年より満足の回答割合が7割近くと高い。

次に、増加している項目（「部やサークルの人間関係」、「学科やクラスの間関係」）である。これらは、1997年では半数を若干下回る満足の回答割合であったが、2013年では7割近くになっている。

最後に、大幅に増加している項目（「先生との関係（1997年：20.2%→2003年：29.2%→2007年：33.8%→2013年：43.7%）」、「職員の対応（1997年：13.7%→2003年：14.5%→2007年：23.1%→2013年：31.8%）」）である。これらは1997年では、2割ほどの満足の回答割合であった。元々、満足度が低かった項目が増加することになり、項目ごとの差が縮む結果となっている。

図4-7 人間関係、大学生生活満足度（7大学全体）



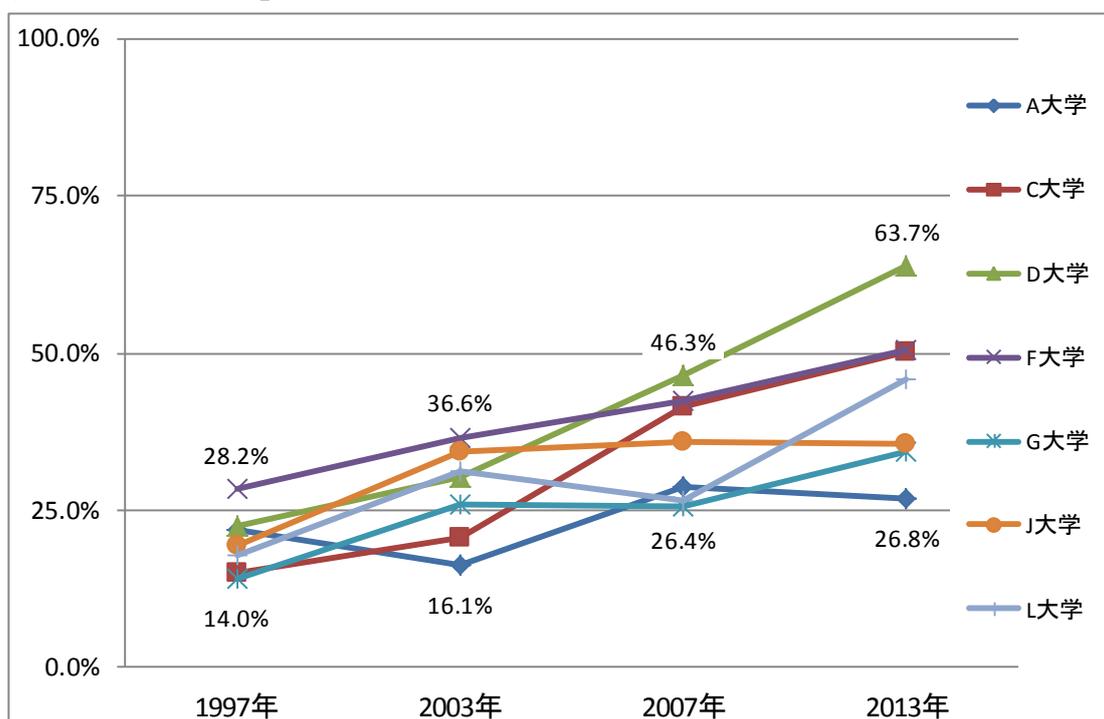
大きく増加した項目、「先生との関係」の4時点の満足回答の変化を大学別にみたものが図4-8である。

1997年では大学差は14.2ポイントと大きくはなかったが、年々、満足の最大値が増加しており、大学差は拡大してきている。2013年では、D大学の満足が63.7%と最大に対し、最小はA大学の26.8%である(大学差は36.9ポイント)。

D大学のように年々増加している大学もあれば、A大学のように下降したり、横ばいだったりする大学もある。全体的には増加傾向であっても、大学差があることにも注意しておきたい。

図4-8 先生との関係(大学別)

「満足(とても+やや)」%



以上、データから「行動面」による「生徒化」をみた。大学差は存在するものの、1997年以降2013年に至るまで、①学生の授業出席は増加、②先生は授業熱心だと感じる回答が増加、③校舎、教室への満足が増加、④先生との関係が増加している。

授業、施設、教員をはじめとする他者との人間関係を肯定的に受け止めている様子は、大学での生活を高校までの生活と同様に過ごしている行動特性が高まっているといえるのではないだろうか。

## 5 「心性面」の「生徒化」：大学観項目から

学生の「心性面」(大学の「学校化」)については、1997年より各回で尋ねている、大学観に関する4項目から検討してみたい。使用する大学観の4項目は、それぞれ2つの文面を用意し、回答者がどちらに近いかを選択してもらうことにしている。

図4-9は、4項目で生徒の心性を表明している選択肢を示したもので、4時点の全体の回答である。

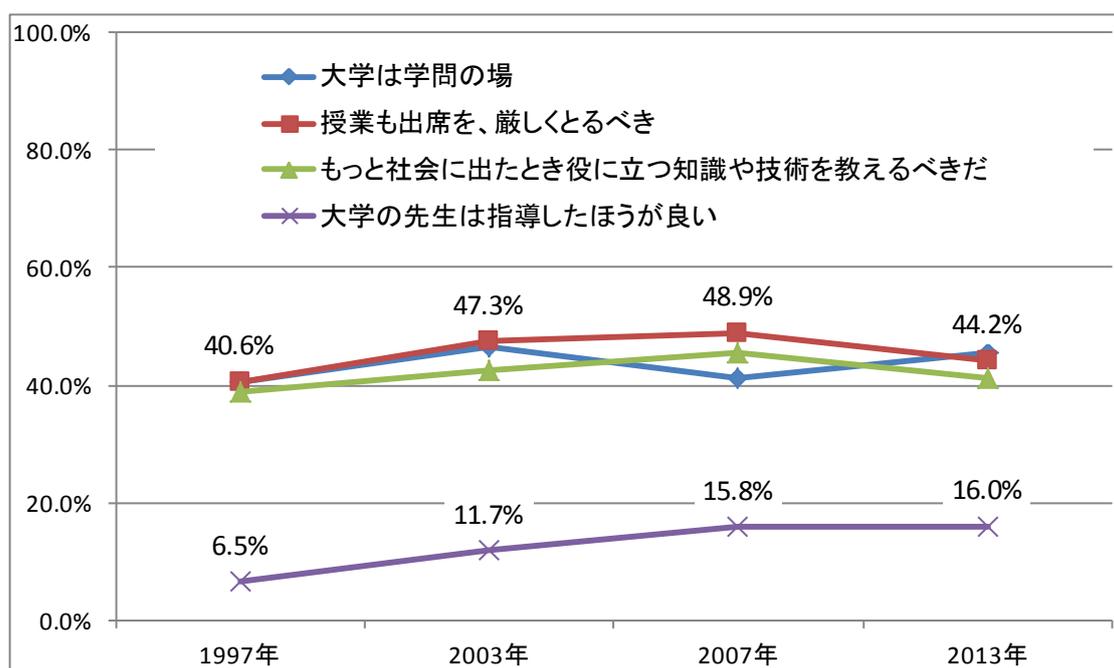
「大学での授業も出席を厳しくとるべきだ」(もう一つの選択肢は、「出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ」と、「大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識や技術を教えるべきだ」(もう一つの選択肢は、「大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい」)の2項目については、2007年まで緩やかに増加した後、2013年で低下する傾向にある。

「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」(もう一つの選択肢は、「大学は学問よりさまざまな体験をする場である」)については、2003年、2013年に増加している。

これら3項目は、全体的に半数を超えることはないものの4割以上の回答がある。つまり、1997年以降から、4割の学生は生徒的な心性を持っているということになる。

最後に、「大学の先生は指導したほうがよい」(もう一つの選択肢は、「学生の自主性にまかせたほうがよい」)は、1997年：6.5%→2003年：11.7%→15.8%→16.0%と、緩やかな増加傾向にある(9.5ポイント)。大多数の学生が、「学生の自主性」を回答しているものの、1997年では1割に満たなかった「先生の指導」意識が、2013年では2割に迫ろうとしている。時点を経て、「心性面」の「生徒化」が緩やかに進んでいると受け止めることができるだろう。

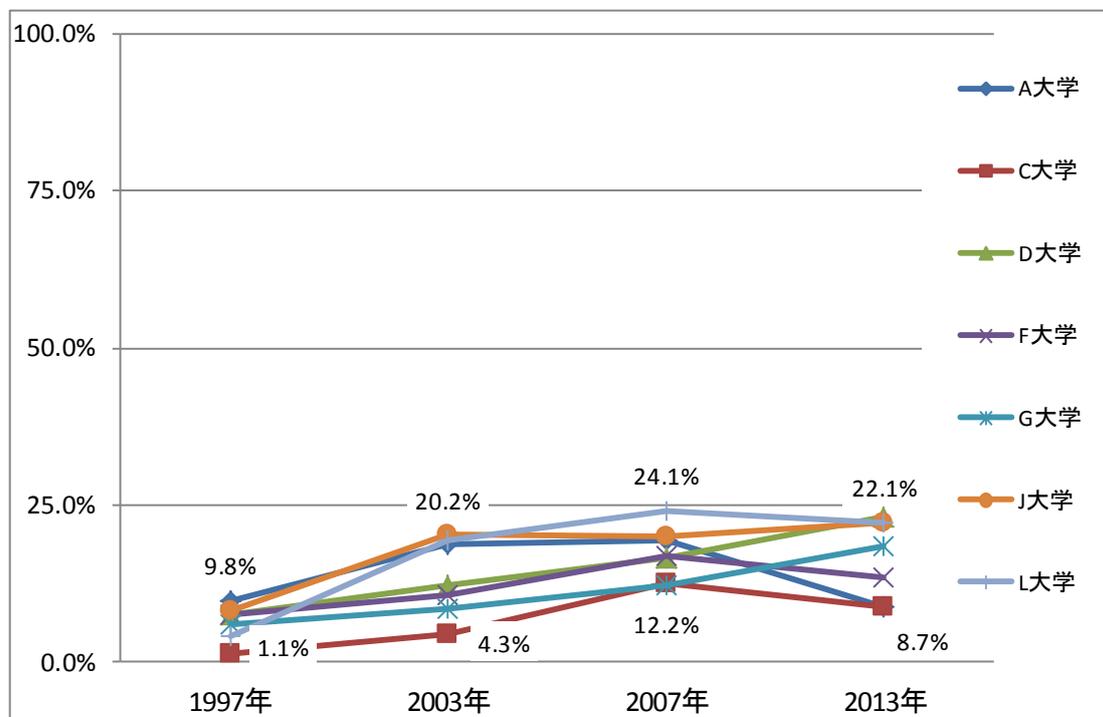
図4-9 大学観4項目(7大学全体)



この「大学の先生は指導したほうがよい」について、大学別の結果をみたものが、図4-10である。大学によって「先生の指導」を求める回答に差異があることがわかる。1997年はA大学の9.8%が最大であり、以下、2003年はJ大学の20.2%、2007年はL大学の24.1%、2013年はJ大学の22.1%である。2003年以降、「先生の指導」を求める回答が、大学別では2割を超えている。一方、C大学が4つの時点ともに「学生の自主性」(「先生の指導」

とは別の選択肢)を回答している(1997年:1.1%→2003年:4.3%→2007年:12.2%→2013年:8.7%)。大学内の差が最も大きかったのは、2003年の15.9ポイントであった。

図4-10 大学の先生は指導したほうが良い(大学別)



## 6 「行動面」／「心性面」の「生徒化」の規定要因

このように「行動面」と「心理面」において学生の「生徒化」傾向を確認してきた。とりわけ「行動面」において、この16年間で増加していることがわかった。それでは、この「行動面」と「心理面」の「生徒化」は、どのくらい時点の影響を受けているのか。いくつかの独立変数を投入して、時点の効果および各独立変数の効果を確認する。

そこで、「行動面」と「心理面」を代表とする項目を従属変数とし、「生徒化」の影響を含むものと思われる、時点、大学タイプ、性別、学年、入学状況、入試形態、学業比重意識を投入したロジスティック回帰分析をおこなうことにする<sup>6)</sup>。具体的な分析変数は下記のようになる。

【従属変数】 「行動面」の生徒化：「出席率80%以上」=1 (「79%以下」=0)  
「心性面」の生徒化：「大学の先生は指導したほうがよい」=1  
(「学生の自主性にまかせたほうがよい」=0)

【独立変数】 調査時点：「1997年」を比較参照として、2003年、2007年、2013年をそれぞれカテゴリー化(=1)した  
大学タイプ：「非伝統総合大学」=1 (「伝統総合大学」=0)  
性別：「女性」=1 (「男性」=0)  
学年：「1-2年生」=1 (「3-4年生」=0)

入学状況：「現役」=1 (「浪人経験あり」=0)

入試：「推薦他」=1 (「一般入試」=0)

学業比重意識：「高い」=1 (「低い」=0)

分析の結果が、表 4-2 である。「行動面」、「心性面」に対する、投入した独立変数の効果を数値として確認することができる。

表 4-2 「行動面」／「心性面」の「生徒化」の規定要因  
(ロジスティック回帰分析)

生徒化 従属変数(左記項目=1)		全体(7大学)			
		行動面		心性面	
		出席率80%以上		大学の先生は指導したほうが良い	
		B	Exp(B)	B	Exp(B)
定数		-1.189 **	.304	-2.605 **	.074
独立変数	調査年(参照:1997年)				
	2003年	.222 *	1.248	.723 **	2.060
	2007年	.622 **	1.863	1.058 **	2.881
	2013年	1.574 **	4.825	1.049 **	2.855
	大学(非伝統総合=1)※	.528 **	1.695	.231 *	1.260
	性別(女性=1)	.662 **	1.938	-.197 *	.822
	学年(1-2年=1)	.676 **	1.965	-.145	.865
	入学(現役=1)	-.159	.853	-.173	.841
	入試(推薦他=1)	.313 **	1.368	.221 *	1.248
	学業比重(高い=1)	1.324 **	3.758	.127	1.135
モデルカイ二乗		778.620 **		81.224 **	
-2 対数尤度		4673.820		3434.968	
Cox-Snell R2 乗		.154		.017	
Nagelkerke R2 乗		.223		.033	
N		4671		4627	

※ 伝統総合大学=A、F、G 非伝統総合大学=C、D、J、L

\* p<0.05 \*\* p<0.01

独立変数の効果を見る際に、投入モデルの適合について確認しておこう。双方とも有意な差があるものの、「行動面」のほうが高く、「心性面」は高いとはいえない。つまり、今回のモデルにおける「心性面」の説明力は低い。このことを確認したうえで、それぞれ独立変数の効果をみていこう。

まず、「行動面」(「出席率 80%以上」)の規定要因として、調査時点が(1997年と比べて)2003年、2007年、2013年であること、学業比重が高いこと、学年が1-2年生である、性別が女性である、大学タイプが非伝統総合大学であること、入試が推薦他の経験者であること、がある。これらが5%未満の有意な確率を示した項目である。

次に、「心性面」(「大学の先生は指導したほうがよい」)の規定要因として、調査時点が(1997年と比べて)2003年、2007年、2013年であること、大学タイプが非伝統総合大

学であること、性別が男性である、入試が推薦他の経験者であること、がある。これらが5%未満の有意な確率を示した項目である。

「行動面」および「心性面」の「生徒化」は、1997年調査と比べて、その後の3時点(2003年、2007年、2013年)では、複数の変数を投入しても、独立した有意な効果をもっていることがわかる。つまり、1997年よりもその後では、「行動面」および「心性面」での「生徒化」が増えていることが確認できた。もちろん、時点のみの効果だけではない、大学タイプ(非伝統総合大学)、性別(女性)、入試(推薦他の形態)の効果もある。彼らが、高校までの生活習慣を大学進学後もそのまま移行しているとするれば、「行動面」と「心性面」の「生徒化」が同時に維持されることは想像に難くない<sup>(7)</sup>。

## 7 まとめ

本研究会が実施してきた4時点7大学の学生調査データを使用して、「行動面」と「心性面」の「生徒化」について検討してきた。

結果をまとめれば、①「行動面」および「心性面」の生徒化は、1997年以降、2013年にかけて進展してきた、②時点の効果に加え、学生の諸属性も「行動面」および「心性面」の生徒化に影響を与えている、となる。2013年の「生徒化」(本報告書岩田論文参照)に至るまでには、経年にわたる学生の意識の変化、それと関連する大学側の変化があることをうかがい知れる結果となった。

大学生が授業中心の生活を送り、履修した授業は休まずに出席する。大学を「学校」と認識し、「行動面」にあらわれる。大学では教員や職員が、多くのマニュアルを用意し、学生からの問いかけに懇切丁寧に対応する。「行動面」だけでなく、「心性面」を「生徒」として対応するようになる。そうなれば、先生(大人)に指導してほしいと「心性面」が「生徒化」した学生が増える。「行動面」と「心性面」は同時並行で進んでいるといえる。もちろん、大学が「学校化」したことに端を発し、結果的に学生を「生徒」として扱ってきたという推測も成り立つ<sup>(8)</sup>。

かつては印象論にすぎなかった大学生の「生徒化」について、徐々にではあれ、実証データの蓄積は進みつつある。本稿もその一つになれば幸いである。しかし、課題も多い。更なる「生徒化」および「学校化」を代表する項目の開発が待たれる。他にも、明確な分析枠組みの提供も必要である。研究面だけでなく、運営や政策面へも関わる必要性も感じている。大学生の「生徒化」、大学の「学校化」から、どのような提言ができるのか。これは大学の将来ビジョンと関わってくるが、調査データを活かす貴重な機会となる。

### <注>

(1) すでに、筆者である浜島は「学校化」と大学生の「生徒化」について、いくつか報告している。

- ・「学校化社会」に関するレビューと考察

張江直洋・浜島幸司，2006「大衆教育社会と〈自己実現の物語〉」『稚内北星学園大学紀要』6, pp.75-93.

- ・「行動面」の生徒化に関する別調査データからの報告

浜島幸司，2014「大学生の大学滞在時間－4時点(1996年・2001年・2006年・2011年)の

比較から」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』4, pp.99-113.

・本研究会データを使用した、過去の時点別分析報告

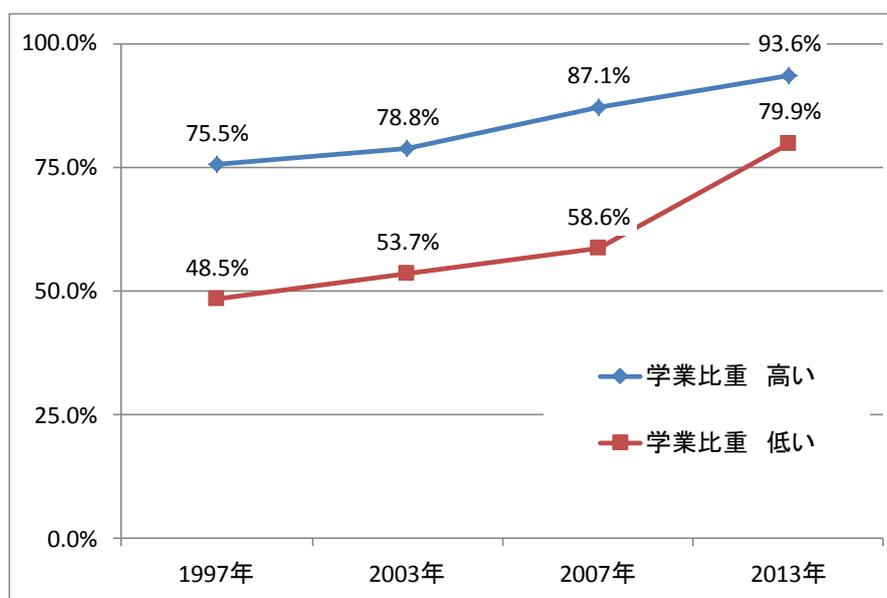
浜島幸司, 2005「大学生は「生徒」である。それが、なにか?—1997年・2003年調査データより—」『上智大学社会学論集』29, pp.191-208.

武内清・浜島幸司, 2008「大学生は「子ども社会学」の研究対象になりうるか」『子ども社会研究』日本子ども社会学会 14, pp.151-159.

浜島幸司, 2009「学生の時系列変化—3時点(1997年・2003年・2007年)の変化—」『キャンパスライフと大学の教育力—14大学・学生調査の分析—』文部科学研究補助金中間報告書(課題番号:19330187), pp.5-11.

- (2) この概念図式については、本報告書所収の岩田論文『大学の学校化』と大学生の『生徒化』の「図3-1 大学の学校化と大学生の生徒化の関係」に明確に示されている。
- (3) 2013年調査より、「90%以上」というカテゴリを作成しており、「80-89%」のカテゴリと合わせた値にして算出した。
- (4) 学業比重項目別にみたところ、図4-11のように、学業比重が高い学生ほど、授業に出席率が高いことがわかる。2013年になると、2007年までにあった内部差が縮小している。

図4-11 授業出席 「80%以上出席」% (学業比重別)



- (5) 2011年にある学部棟の改修が完了したとの記載が該当学部のHPにあった。改修によって、学習環境が以前と大きく変わった様子がうかがえる。
- (6) 独立変数として、「所属学部(学科)」による影響も考えられる。しかし、4時点の各調査時点で所属学部の回答カテゴリを大きく変更していることもあり、今回は分析から外している。
- (7) 「行動面」は授業出席率、「心性面」先生の指導という単独項目を検討したものにはすぎない、今回は紙面の都合で他の項目からの検討はできなかったが、今後も別角度からの行動面・心理面を示す項目の使用、多角的な分析、考察が必要であることはいままでもない。
- (8) 大学の「学校化」が生じた根拠、代理変数を見つけることは本データでは提示できていないので、「学校化」「生徒化」の前後関係については、本稿では問うことができない。

## 第5章

## 「生徒化」した学生の授業への期待

黒河内利臣（武蔵野大学非常勤講師）

## はじめに

大学生が「生徒化」しているといわれる。特に、大学のシステムに「従順」な学生の存在が指摘されるようになった。しかし、大学は慣例的に学生の自主性を重視するシステムになっており、「生徒化」した学生が増加すると、従来の学生像を前提にしたシステムとは齟齬をきたす可能性がある。本稿では、そのような「生徒化」しているといわれる学生像を「新しい学生像」として提示し、それに対する授業のありかたを考察する手がかりとしたい。

## 1 問題意識と分析方法

## 1-1 問題意識

周知のように、日本でも大学進学率が50%前後の時代となり<sup>1</sup>、従来は進学してこなかった層が大学進学を果たしている。図5-1は文部科学省の『学校基本調査』をもとに、大学の在籍者数と大学進学率の推移を男女別に示したものである。これによると、1990年代以降の進学率は男女ともに上昇傾向で、在籍者数も男女全体で1990年代は増加傾向、2000年代以降はほぼ横ばいで推移していることがわかる。

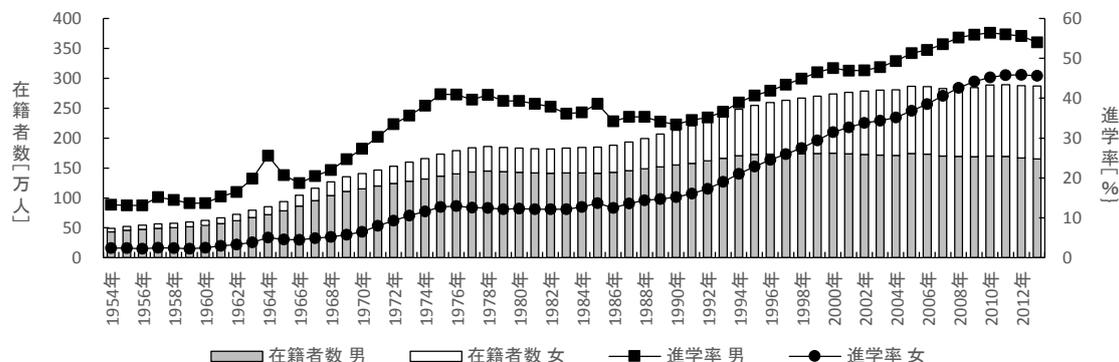


図5-1. 大学在籍者数と大学進学率の推移（文部科学省『学校基本調査』をもとに作成）

この進学率が上昇し続けている年代に、大学生の意識や気質、行動様式などを再検討したものがみられる。たとえば、伊藤（1999）は学生の変化を「生徒化」としてとらえており、従来の学生像ではとらえきれない現在の学生像をとらえることで、大学での教育を再検討する必要があるとしている。

そして、岩田（2003）は「勉強文化」の持ち直しと「遊び文化」の後退を指摘している。そこでは、大規模調査で示された生活時間や生活費などをもとに、教育重視を打ち出す大学の増加にともない、学生たちが勉強中心の生活への転換を余儀なくされたとしている。この「勉強文化」はその後、「教養主義の要素を削ぎ落とした、新たな『まじめ勉強文化』」（岩田 2011、p.53）、つまり学生が実用主義的な教育内容を志向するようになったという。

また、武内他（2005）は12大学の学生を対象にした大規模調査をもとに、学生の関心が遊びから勉強や資格取得にシフトしており、「大学生の生徒化」というキーワードとともに、「大人に従順な学生が多くなってきている」（p.295）とも指摘する。さらに、全国大学生生活協同組合連合会（2012）による報告では大規模かつ経年での調査結果をもとに、特に「大学の『学校化』、学生の『生徒化』は、時代の趨勢である」（p.111）としている。ここでの課題として、授業ではきめ細かい教育指導が必要であると同時に、学生の自主性も尊重するような学習指導も残しておくべきという。

それに対して、新立（2010）はそのような「生徒化」論を、特に中等教育段階での「生徒」の定義との比較で整理し、大学生の「生徒化」言説に否定的なニュアンスがあることを示したうえで、「従来の学生像」を前提にすることに疑問を提示している。沖（2011）も「学校化・生徒化された学生に対する学習支援のみならず学生支援全般に対する期待もまた変容し、より包括的な変化対応モデルの導入が必要」（p.45）としている。

これらの議論を整理すると、生徒化＝従順化した学生という共通点がみられる。近年の大学が標榜する教育重視や就職活動を視野に入れた「成績重視」のため、学生が勉強中心の生活にシフトせざるをえなくなったという、受動的な意識をもつ学生像である。それと同時に、学生が勉強や資格取得を重視する傾向からは、大学の教育システムに対して従順であることが示されている。しかし一方では、学生の「生徒化」に否定的な意味があることを疑問視する考えかたもある。それに対しては、「生徒化」を前提にし、その上に大学のシステムを再構築する、具体的には大学教員が従来以上に教育指導に力を入れ、きめ細かい指導をおこなう一方で、学生の自主的な活動を尊重する必要性も指摘されている。

さらに、岩田（2015）は学生生活の重点項目が従来の勉強から勉強以外のものに変化し、生徒化＝従順な学生像からの変化があるとする。もちろん、従来の大学生をめぐる言説でも「勉強しない大学生」の存在は指摘されているし、自主性がないことと学業以外を重視することは等価ではないものの、自主的学習態度が減退している可能性を指摘しているものと思われる。

これらのことから、学生の自主性を前提とする従来の大学のシステムをもとに、それとは異なる「新しい学生像」に対応したシステムを取り入れつつ、学生の大学生生活の成功につなげる支援策を考察する必要がある。なるほど、中等教育段階と比較しても大学での学習や課外活動などの様々なシステムが慣例的に学生の自主性を前提にしていることから、学生が高い学習成果を示せないだけでなく、学生生活を十全に営めない可能性がある。さらには、学生の自主性の減退は「自分が何者であるか」を理解するという青年期の発達課題に照らしても望ましいことではない。しかし、受動的であれ、学生がいくらかの「勉強文化」をみせていることは、教員の立場からは肯定的にとらえることもできる。教員の工夫次第では、指摘されているような従順さゆえに学生の自主性を育み、学習成果を高めることができる可能性もある。その点では、学生の自主性を育みつつ、学生の特性に合うような授業のシステムにすることが現実的とも思われる。

そうであるならば、学生の特性を分析するだけでなく、学生の授業に対する評価や意見も加味しながら、「生徒化」したといわれる今の学生像をベースに、与えられたシステムの中で自主的に学び、生活するような学生へと成長させる機会を提供することも可能になる。

それでは、学生の授業に対する評価や意見にはどのようなものがあるのか。たとえば、

黒河内（2013）では全学教養科目の授業評価の自由記述を用いた分析の結果、リメディアル的な授業に対しては否定的な傾向が示されており、新しい知識や技能を学ぶ意欲があるとみることができる。そのうえで、学生の授業に対する評価を高めるためのポイントとして、学生の学習意欲と学習成果を担保できるような環境を整えるための教員の工夫と、学んだ内容を活用できるような機会の必要性が指摘されている。また別の報告では、学生には学習効果が上がるような授業の形式への期待と、教員の研究志向や授業への熱意の低さに対する疑問があることも示されている（黒河内 2010a）。

このうち、前者は個別の私立大学の授業評価をもとにした分析であることから、地域や大学ランクなど様々な点で異なるその他の大学にも一般化しうる結果でないことは否定できない。しかし、大学の授業評価の中でも自由記述を用いた分析は大学が通常は公開しないような情報をもとにしており、授業評価や一般的な調査に示された数量的な傾向よりも、それだけで学生の「生の声」を具現化しているものと思われる。その点では、後者の分析は数量的な調査で教員側の問題点が学生の立場から指摘されており、前者の個別的な結果のデメリットを補っているともいえる。

また、前者の問題は「学生が自分で学習意欲を高めるべき」とする教員側の反論もありえるが、後者が指摘するように、そもそも授業への熱意が教員から感じられなければ、学生が学習意欲を高めることができないのもやむをえない。これは、授業環境を整えるという意味では上述のような教員への評価ということもできるが、そのような形式的な部分の工夫も含め、学生の意識をふまえた授業のありかたを検討する必要もある。

## 1-2 分析の視点

このような、学生の「生の声」を本稿の問題関心にそくして活用するポイントとして、学生の学習意欲と学習成果を担保できるような教員の工夫とはどのようなものかということがある。これは、学生が授業に何を望んでいるのかだけでなく、学生の特性を明らかにしたうえで考察することが可能になる。

そこで、2013年に全国の15大学の大学生（有効サンプル数2789名）に対しておこなった質問紙調査（代表：武内清）<sup>2</sup>の結果をもとに、学生の自主性や授業への期待、学生の特性をもとに分析と考察をおこなう。自主性については様々な観点でとらえることができるが、本稿では限定的に大学の学習活動のなかで教員からの指導を期待するか、あるいは自主性にまかせてほしいと考えているかを指標としたい。具体的には、「大学について、いろいろな意見がありますが、あなたはどちらの意見に賛成ですか」（Q26）とたずねた質問のうち、「学生の生活や学習について、大学の先生は指導したほうがよい」（以下、この回答をした学生を「指導期待群」と表記する）か「学生の生活や学習について、学生の自主性にまかせたほうがよい」（以下、この回答をした学生を「自主的活動群」と表記する）かのどちらかに回答されたものを用いる。さらにこの質問は2013年以前にも1997年、2003年、2007年の調査でおこなわれており（以下、それぞれの調査年を用いて「2013年調査」などと表記する）、時系列での比較が可能である。学生が教員とかかわる主要な場面として教室での授業があり、そこで「指導期待群」と「自主的活動群」の二群にわけると、両群それぞれが授業に何を期待しているかだけでなく、「新しい学生像」の実態を明らかにすることができると思われる。

このような「新しい学生像」を明らかにするときの視点として、性別による分析が考え

られる。実際、図5-1では女子の進学率の上昇が男子よりも顕著にみられるだけでなく、在籍者数でも2000年代以降で男子学生が微減、女子学生が微増傾向にある。従来は大学に進学しなかった女子学生が増加していることと、生徒化の特徴である「自主性の減退」との関連性がみられる可能性がある。それでは「指導期待群」は増加しているのか、特に男子学生よりも女子学生のほうに増加しているのか。

図5-2によると、1997年から2013年にかけて「指導期待群」は増加傾向にある。図には含めていないが、男女全体でも「指導期待群」は増加傾向にある（1997年6.4%、2003年12.8%、2007年15.8%、2013年17.4%）。特に、男子は2007年から2013年にかけてわずかに減少したものの、女子は一貫して増加傾向にある。さらに、「指導期待群」の割合を男女間で比較すると、2007年までは男子の方が女子よりも統計的に有意に多いが、2013年では男子（16.2%）よりも女子（18.2%）のほうが多くなり、かつ統計的有意差がみられなくなっている<sup>3</sup>。つまり、2007年以前は「指導期待群」は男子学生のほうが多く統計的有意差もみられたが、2013年には男女間の差異がみられなくなっている。

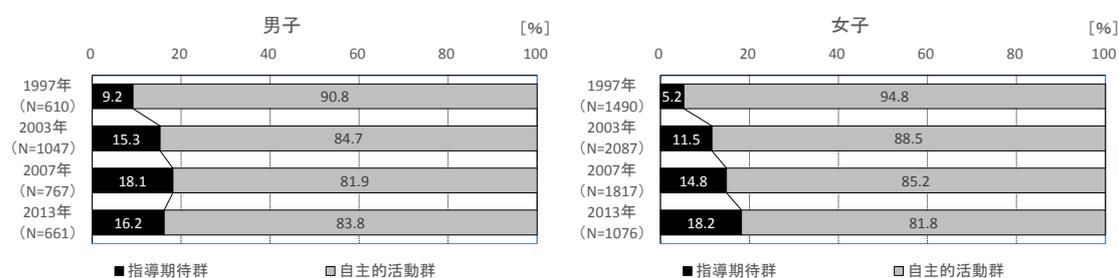


図5-2. 指導を期待するか、自主性を重視するか

このように、この調査結果をもとにする限りでは、性別と自主性の減退とは明確な関連性がみられないことから、本稿で「生徒化」という指標をもとに最新の「新しい学生像」を明らかにするにあたっては、性別の差異を考慮せずに分析をおこなう。また、性別以外にも入学方法（一般入試か、推薦入試かなどの入試形態）、現役か浪人か、大学の設置者（国公立か私立か）などの変数を用いることが考えられる。しかし、本稿では全体的な「新しい学生像」を総体的にとらえることを目的とし、単純化した分析にとどめたい<sup>4</sup>。

ただし、男女全体を「指導期待群」と「自主的活動群」とにわけること、授業に期待するものや学生の特性については差異がみられることは推察される。上述のように「指導期待群」は増加傾向にあり、今後も増加すると推察されることから、「新しい学生像」をもとに今後の授業のありかたを検討するには、両群がどのように異なる意識をもっているのかを示す必要がある。

これらの問題意識のもと、本稿での具体的な検討課題は、「新しい学生像」をもとにした授業スタイルを考察することである。具体的には次の4点となる。①「指導期待群」や「自主的活動群」はそれぞれ、授業に何を期待するようになってきているのか。②「新しい学生像」とはどのような学生像か。③自主性を育みつつ、受動的な態度の学生が期待する授業とはどのようなものか。④教員側にどのような工夫が必要なのか。この4点とする。

## 2 分析結果

### 2-1 学生の授業に対する意識と期待

それでは、両群の授業に対する考えかたについてみてみよう。まず、4回の調査で共通する項目について時系列での比較をおこなう（図5-3）。

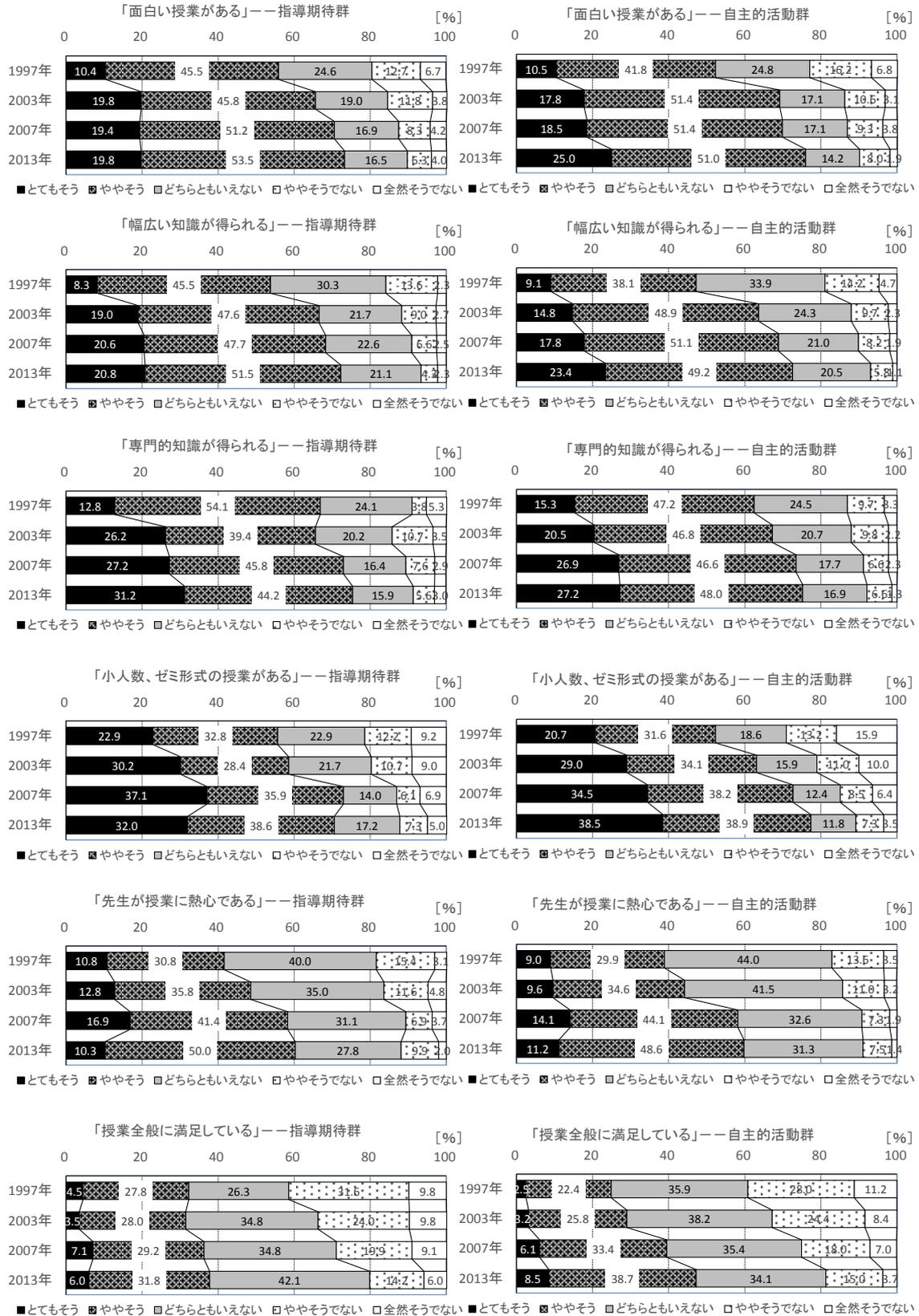


図5-3. 授業への意識と期待（時系列比較が可能な項目のみ、各年の調査結果をもとに作成）

学生の授業に対する意識と期待を時系列で比較すると、「とてもそう」と「ややそう」の肯定的な評価の合算でみれば、全体的には授業に対して肯定的な評価をしていることがわかる。さらに、時系列でも、その肯定的評価の割合は高まる傾向にあり、「指導期待群」の増加とともに大学の授業全般にはおおむね満足していることがわかる。

ただし、「指導期待群」と「自主的活動群」とで異なる傾向がみられる項目もある。たとえば、「授業全般に満足している」の肯定的評価については、「自主的活動群」は高まり続けているのに対し、「指導期待群」はそれほど高まっておらず、2013年では「指導期待群」（「とてもそう」＋「ややそう」37.8%）と「自主的活動群」（同47.2%）とで約10ポイントの開きがみられる。「指導期待群」にとっては一部の授業に不満があるものと思われる。

このことは、「とてもそう」という積極的高評価をしている割合で裏づけることができる。「幅広い知識が得られる」については「自主的活動群」（2013年「とてもそう」23.4%）のほうが「指導期待群」（同20.8%）よりも高評価をしている。また、「小人数、ゼミ形式の授業がある」では「自主的活動群」（同38.5%）のほうが「指導期待群」（同32.0%）よりも多い。また、その他の項目でも「指導期待群」よりも「自主的活動群」のほうが高い割合を示す傾向にある。一般的に、小人数やゼミ形式の授業では担当教員の指導が学生に届きやすい一方で学生の積極的な学習活動（発言、グループワーク、発表の準備など）が期待されること、幅広い知識を得るためには必修科目以外にも自主的に様々な科目を受講する必要があることなどが、これらの結果にあらわれたと推察される。

それでは、このような授業への態度は学生の授業に対する希望として現れるのか。2013年の調査では「～してほしいと思うか」というような質問項目が加えられた。そのほかの加えられた項目とともに、「指導期待群」と「自主的活動群」にわけてみてみよう（表5-1）。

表5-1. 授業への意識と期待（2013年調査追加項目のみ）

		とても そう	やや そう	どちらとも いえない	やや そうでない	全然 そうでない	合計	N(人)	統計的 有意差
グループワークあり	指導期待群	26.4	42.2	20.1	9.2	2.0	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	31.6	43.4	14.0	8.8	2.2	100.0	1429	
私語多い授業あり	指導期待群	26.6	38.5	22.9	10.3	1.7	100.0	301	n.s.
	自主的活動群	22.8	36.6	22.0	14.6	4.1	100.0	1432	
授業中の私語を先生は注意すべき	指導期待群	23.8	26.1	36.0	11.6	2.6	100.0	303	***
	自主的活動群	12.6	25.9	40.4	14.9	6.2	100.0	1432	
丁寧な板書してほしい	指導期待群	37.6	40.3	16.2	5.0	1.0	100.0	303	***
	自主的活動群	26.4	37.7	21.5	9.8	4.7	100.0	1434	
就職活動に役立つことを期待	指導期待群	35.9	37.5	17.6	6.6	2.3	100.0	301	***
	自主的活動群	25.8	34.1	23.4	9.9	6.7	100.0	1433	
分からないところを教えてほしい	指導期待群	25.7	42.6	22.8	7.6	1.3	100.0	303	***
	自主的活動群	16.7	32.4	31.4	14.0	5.6	100.0	1433	
人生を考えられるような授業あり	指導期待群	24.8	33.0	26.4	10.6	5.3	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	20.2	38.5	25.6	12.0	3.7	100.0	1431	

単位：%

\*p&lt;0.05、\*\*p&lt;0.01、\*\*\*p&lt;0.001

まず、上述の「自主的活動群」のほうが「小人数の授業やゼミ」を評価しているように、「グループワーク」についても、統計的有意差はないものの「指導期待群」よりも肯定的評価をしている。そのほかにも「自主的活動群」のほうが指導等を期待していないことが

わかるものとして、「私語は注意すべき」、「丁寧な板書をしてほしい」、「就職活動に役立つことを教えてほしい」、「わからないところを教えてほしい」など、授業の形式的なことや内容などについて放任主義的な授業を期待している傾向がみられる。

これらのことから、今も多数派ではある「自主的活動群」の学生にとって、近年の「きめ細かい指導」を標榜するような大学教育の方針は「合わない」と感じるケースが今後はさらに多くなることが推察される。つまり、本来的には「自主的であるべき」とされる大学において、教員のきめ細かい指導が窮屈に感じられる可能性がある。その反対に、自主性が期待される少人数教育がさらに導入されることになれば、今後も増加が予想される「指導期待群」のほうが「大学の授業は合わない」と感じることになる。そこで初年次教育の一環で大学生生活の過ごし方や学習方法を指導することが有用となるのだが、その一方では「自主的活動群」にとってはそのような指導すらも窮屈に感じる可能性もある。

それでは、自主的活動を取り入れたきめ細かい指導とはどのようなものか。ひとつには上述のような少人数の講義やグループワークが考えられるが、大規模な大学や学部、講義形式にならざるをえない科目によってはその導入が困難な場合も考えられる。したがって、学生の授業への期待内容だけでなく、どのような特性の学生が「今の大学生」の主流なのかを把握することは、授業運営のヒントになると思われる。

## 2-2 学生の意識や行動特性

さて、それぞれの項目で示された傾向を、最新の調査結果（表 5-2）と、時系列で比較できる項目は限定されるが、これまでの推移（図 5-4）とあわせて確認しよう<sup>5</sup>。

結論としては、全体的に「自主的活動群」と「指導期待群」との間に、明確な差異は認められなかった。ただし、「異性の視線が気になる」と「自分の将来に不安を感じる」は「指導期待群」と「自主的活動群」との間に統計的有意差が確認され、いずれも「指導期待群」のほうが「自主的活動群」よりも高い割合を示した。この2項目を中心にみていこう。

### 2-2-1 人間関係

前者の「異性の視線が気になる」では、「指導期待群」（52.5%：「とてもそう」7.6%＋「ややそう」44.9%）のほうが「自主的活動群」（41.8%：同 6.6%＋35.2%）よりも多く、「指導期待群」にとっては異性の視線が何らかの「制限」となっていることがうかがえる。このほかにも、統計的有意差はないものの「スマートフォンがないと不安」も「指導期待群」（80.2%、以下「かなりそう」＋「ややそう」の合計値で示す）のほうが「自主的活動群」（74.1%）よりも多い。この割合は、2007年から増加している（2007年 65.6%→2013年 75.3%）。その一方では、「1人でいるほうが好きだ」については「指導期待群」（51.5%）も「自主的活動群」（50.0%）も半数程度にとどまっており、これは時系列で比較してもほぼ増減がみられない。

これらの人間関係にかんする項目でみると、スマートフォンや携帯電話がメールや通話、SNS などをつうじて友人などとの連絡手段になっており、学生の人間関係にとり重要度が高いことがわかる。ただし、一部の学生にとっては人間関係を煩わしく感じる場合もある。特に「指導期待群」のほうに異性の視線に気にする傾向がみられたことから、「指導期待群」が自主的に活動できない要因のひとつに人間関係があると思われる。

表 5-2. 学生の意識や行動特性（2013年調査）

		かなり そう	やや そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない	合計	N(人)	統計的 有意差
スマートフォンないと不安	指導期待群	34.7	45.5	15.8	4.0	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	34.5	39.6	19.4	6.6	100.0	1,436	
特定の分野に興味がある	指導期待群	22.8	20.9	23.8	32.5	100.0	302	n.s.
	自主的活動群	20.9	21.7	26.4	31.0	100.0	1,435	
1人である方が好きだ	指導期待群	11.9	39.6	40.9	7.6	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	10.3	39.7	42.3	7.7	100.0	1,433	
異性の視線が気になる	指導期待群	7.6	44.9	34.0	13.5	100.0	303	***
	自主的活動群	6.6	35.2	44.4	13.9	100.0	1,434	
音楽は生活の一部	指導期待群	29.7	39.9	19.5	10.9	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	31.2	33.8	25.2	9.8	100.0	1,434	
自由時間がたくさんある	指導期待群	18.2	37.6	32.0	12.2	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	18.5	38.3	33.5	9.8	100.0	1,434	
将来より現在を大切にしたい	指導期待群	13.9	38.9	41.3	5.9	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	10.9	38.2	46.1	4.8	100.0	1,435	
毎日が充実している	指導期待群	26.1	43.9	25.7	4.3	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	25.0	50.2	21.1	3.7	100.0	1,434	
就きたい職業を決めている	指導期待群	26.7	30.7	24.8	17.8	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	28.9	25.8	27.2	18.0	100.0	1,432	
就職するなら正社員がよい	指導期待群	64.2	25.8	8.3	1.7	100.0	302	n.s.
	自主的活動群	62.1	26.9	7.9	3.1	100.0	1,434	
労働の法律や権利知っている	指導期待群	6.3	32.3	46.9	14.5	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	7.2	28.5	49.3	15.0	100.0	1,435	
自分より社会のために働きたい	指導期待群	14.5	29.4	44.6	11.6	100.0	303	n.s.
	自主的活動群	11.4	31.4	44.0	13.2	100.0	1,436	
自分の将来に不安を感じる	指導期待群	49.2	36.3	12.9	1.7	100.0	303	*
	自主的活動群	41.2	40.5	14.8	3.6	100.0	1,436	

単位：%

\*p&lt;0.05、\*\*p&lt;0.01、\*\*\*p&lt;0.001

## 2-2-2 自分の将来

後者の「自分の将来に不安を感じる」については、両群ともに80%以上と高い割合で「不安である」としているものの（指導期待群 85.5%、自主的活動群 81.7%）、「かなりそう」の割合をみると「指導期待群」（49.2%）のほうが「自主的活動群」（41.2%）より将来への不安をより強く感じていることがわかる。そして、時系列では両群ともに「かなりそう」の割合が増加傾向にある。しかし、「ややそう」も含めると「指導期待群」については減少傾向にあり、「自主的活動群」はほぼ横ばいで推移している。

このような、将来に関する項目に限定してみると、「就職するなら正社員がよい」と思う学生は両群ともに90%程度いる（指導 90.0%、自主 89.0%、以下併記する場合はこのように省略して表記する）。ただし、「就きたい職業を決めている」とする学生は5~6割程度（指導 57.4%、自主 54.7%）と決して具体像があるわけではない。しかし、「将来より現在を大切にしたい」と思う学生は半数程度おり（指導 52.8%、自主 49.1%）、将来のことを考えていないということでもない。これを時系列でみると、2004年（44.5%）から2007年（55.0%）にかけて増加したものの、2013年（50.2%）にかけては減少しており、一貫した傾向はみられない。また、「自分より社会のために働きたい」とする割合は両群ともに40%強で（指導 43.9%、自主 42.8%）、時系列では2007年から2013年にかけて増加してはいるものの、将来像として社会貢献を描く傾向は決して強くない。

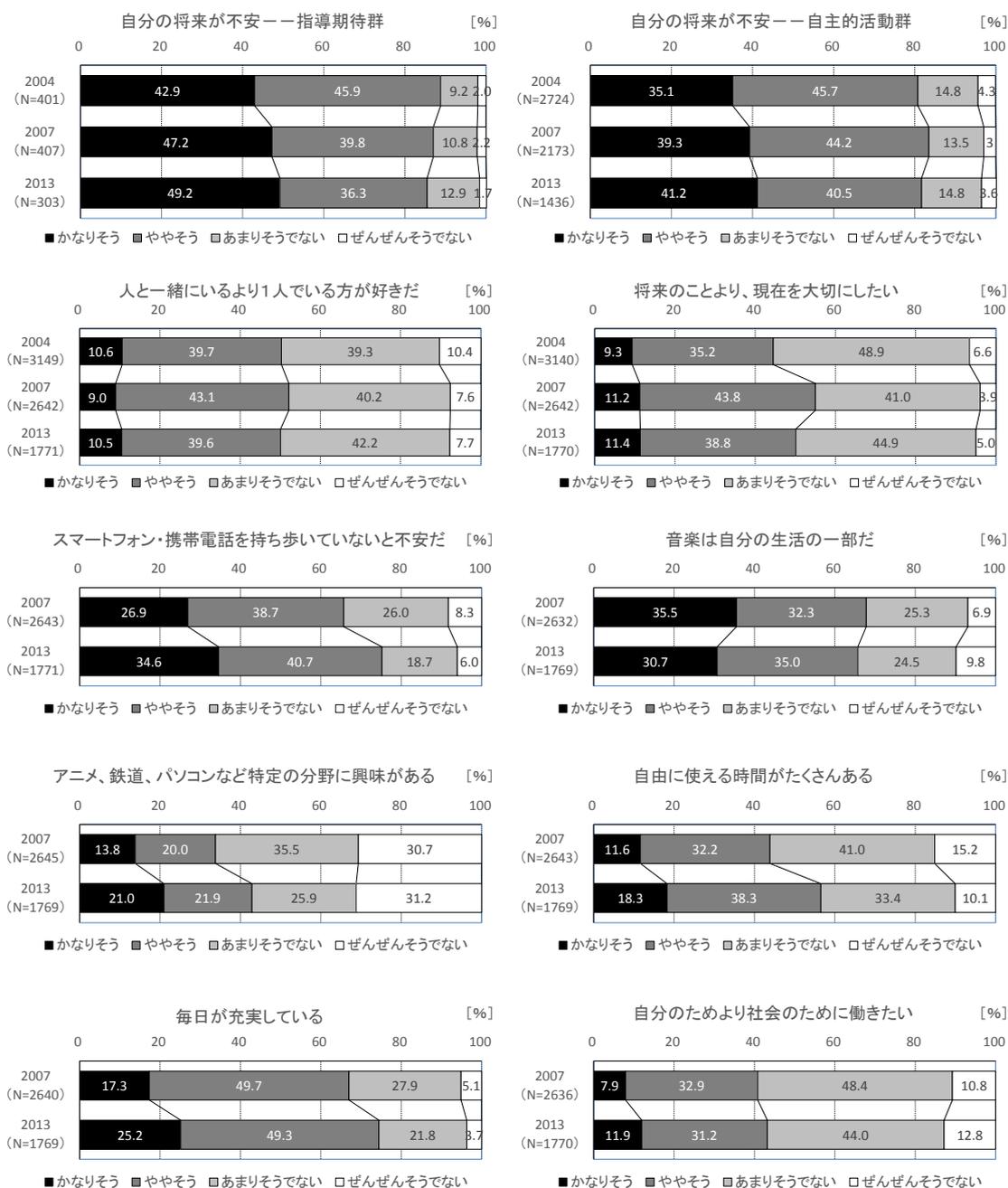


図 5-4. 学生の意識や行動特性（時系列比較が可能な項目のみ、各年の調査結果をもとに作成）

そして、現在の生活がどのようなものかについては、「自由時間がたくさんある」（指導 55.8%、自主 56.8%）とする学生は両群ともに半数強で、これは 2007 年（43.8%→2013 年 56.6%）と比較しても増加している。また、「毎日が充実している」学生は増加しており（2007 年 67.0%→2013 年 74.5%）、統計的有意差はみられないものの 2013 年では「自主的活動群」のほうが多い傾向にある（指導 70.0%、自主 75.2%）。一方、就職活動をするうえでも、将来仕事をするうえでも関連してくる知識のひとつとして「労働の法律や権利知っている」ことがあるが、「知っている」とする割合は 4 割弱にとどまっており（指

導 38.6%、自主 35.7%)、この点の学習不足の傾向がみられる。

このような学生の将来にかんする項目にみられる傾向は学年によっても変わるものと思われるが、こと「自主性」という観点でみると、両群ともにほぼ共通の傾向がみられることから、学生は全体的に将来を具体的に描いているわけではないことがわかる。ただし、「自主的活動群」のほうが、わずかながらでも将来への不安が少ないことがわかる。「指導期待群」も「自主的活動群」も同じように自由な時間があるものの、「自主的活動群」は将来を大切に日々充実した生活をしている一方で、「指導期待群」は現在志向で日々充実した生活をしていることがうかがえる。

将来への不安を強く感じている学生が増加しているとはいえ、「将来よりも現在を大切にしたい」と考える学生は半数程度にとどまっており、程度の差はあれ、将来のことを具体的に描けてはいないものの、気にかけているとはいええる。ただし、社会に自分の知識や技能を還元したいかといえ、その割合は決して高くはない。また、日常生活の充実度については「自由に使える時間がたくさんある」という学生や「毎日が充実している」という学生が増加している。これらのことから、数年前と比較しても学生は現実の日常生活に充実感を持ちつつ、大学の授業をつうじて自分の知識や技能を向上させ社会に還元するというよりは、その学んだことを自分の将来のために活用しようとしていることがうかがえる。

### 2-2-3 自分の趣味・嗜好

そのほかの項目についてもみておこう。自分の趣味についての項目である。

「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」（指導 43.7%、自主 42.6%）については半数以下にとどまり、「音楽は生活の一部」（指導 69.6%、自主 65.0%）であるとする学生は多数派である。自主性との関連では、両項目ともに「指導期待群」と「自主的活動群」との間に統計的有意差はないものの、「指導期待群」のほうが趣味に打ち込む傾向にある。前者の場合、そのような趣味をもつ人は否定的なイメージをもたれがちであることから周囲の対人関係にも影響を及ぼす可能性はあるが、時系列での比較をみると 2007 年から 2013 年にかけて増加している（2007 年 33.8%→2013 年 42.9%）。それに対して、音楽は趣味として広く認知されるものである。音楽というひとつの趣味が日常生活にも欠かせないものであるとする学生は微減の傾向がみられたものの（同 67.8%→65.7%）、依然として多くの学生に共通する趣味である。

このように、数年前までは自分にこだわりのある趣味は周囲に公言しづらい雰囲気があったが、近年はその雰囲気も変わってきているものと思われる。それと同時に、より多くの友人との共通の趣味に打ち込むこともできる傾向もみられることから、学生たちがさまざまな属性の友人との人間関係を構築できるようになっていることが推察される。

### 2-3 学生の意識や行動特性のまとめ

さて、上記の傾向をまとめると、以下ようになる。

「指導期待群」も「自主的活動群」も明確な差異は認められなかったが、近年の大学生は対人関係がなんらかの自主性を制限するものになっており、そのひとつに異性の存在がある。その制限は、「自主的活動群」のほうが感じていない傾向もみられた。また、多くの学生が将来の具体像を描けているわけではないものの、将来への不安は「自主的活動群」

のほうが低い。それは日常生活の充実度にもあらわれており、両群ともに充実した日々を過ごせてはいるものの、「自主的活動群」のほうが現在よりも将来のことを考えている傾向がみられた。

### 3 分析結果のまとめと考察

#### 3-1 分析結果のまとめと「新しい学生像」

これまでに示した学生の授業への期待や、学生の意識の傾向をふまえて、どのような授業支援が期待されるか考察しよう。

まず、これまでに示された知見をまとめておく。

(1) 授業に対して全体的には肯定的な評価をしていた。その肯定的評価の割合は高まる傾向にあり、大学の授業全般にはおおむね満足していることがわかる。

(2) 特に「指導期待群」の学生には「自主的活動群」の学生よりも、「授業中の私語を先生は注意すべき」、「丁寧な板書をしてほしい」、「分からないところを教えてほしい」と考え、「就職活動に役立つことを期待」する傾向がみられた。

(3) ただし、今も多数派ではある「自主的活動群」にとっては、近年の大学教育で標榜されるようなきめ細かい指導への抵抗感が高まる可能性がある。

(4) 人間関係にかんする項目でみると、スマートフォンや携帯電話が学生の人間関係を築く上での重要度を高めているが、特に「指導期待群」のほうに対人関係のうち「異性の視線」を気にする傾向がみられたことから、「指導期待群」が自主的に活動できない要因のひとつに人間関係があると推察される。

(5) 将来への不安を強く感じている学生は、「指導期待群」よりも「自主的活動群」のほうがわずかに少ない。また、時系列では「指導期待群」は減少傾向、「自主的活動群」はほぼ横ばいで推移している。

(6) 「将来よりも現在を大切にしたい」と考える学生は半数程度にとどまっている。そして、「自由に使える時間がたくさんある」とする学生や、「毎日が充実している」という学生が増加している。

このように、全体的には、学生の意識については「指導期待群」と「自主的活動群」との差異はみられなかった。ただし、授業に期待することについては差異がみられる場合もある。

そして、「新しい学生像」をまとめると、次のようになる。

① 授業に比較的満足してはいるものの、授業環境も含めた授業の進め方や指導内容には不満もある。

② 人間関係をわずらわしいと感じる場合もあり、周囲の視線が何らかの制約になる場合もあるが、日々の生活は比較的充実している。

③ 自分の将来について不安は感じるものの、自主的に何らかの活動をすることで、その不安を軽減させることもできている。

これらの結果は大学1年生に限定した分析結果ではないものの、近年多くの大学でおこなわれているような初年次教育の定義のうち、「(1)学問的・知的能力の発達、(2)人間関係の確立とその維持、(中略) (4)キャリアと人生設計の決定（後略）」(川嶋 2006、p.3)について学生の期待がみられた。「(1)学問的・知的能力の発達」については主に授業を通じておこなわれるとすれば、これらはいずれも学生からの期待として分析結果で示されてお

り、初年次教育で解決しうるものであることがわかる。これらの事柄は初年次教育のみならず、学生の大学生活を成功させるためにも欠かせない要素である。

以下では、この3つの定義をヒントに、学生の自主性を育みつつきめ細かい指導をおこなうには、どのような授業支援や教員の工夫が必要かを考察しよう。

### 3-2 授業の環境を整えること

授業についての学生の期待は三点にわかれた。

まず、授業環境を整えることへの期待がみられた。「授業中の私語は注意する」ことは、授業環境を整えるという点では教員の責務であり、学生の学習意欲にも影響を与えることから学生の自主性のあらわれとみてよい。その場合は、教員の注意喚起だけでなく、私語がなくなるような教員の工夫も必要である。また、「丁寧な板書をしてほしい」については、教員個々の進め方もさまざまであることから、現実的には全教員に板書を強制化することも難しい。その場合は、板書にかわるレジュメの用意が必須になる。

授業外の対応にも期待がみられた。「わからないところを教えてほしい」という期待に対しては、授業内で学生の発言を促すことで授業中に学生の疑問を解消できるような工夫も考えられる。それとは別に、近年は各大学が授業支援のツールをインターネット上に構築している場合も多く、そのツールを利用して学生からの質問を受けたり、ディスカッションを取り入れたりすることも考えられる。

さらに授業内容への期待もある。「就職活動に役立つこと」については、大学教育ではそもそも難しいことを伝える必要はある。たとえば初年次教育の一環として、大学とはどのような教育をする場所なのかを説明することが考えられる。

それでは、そのような授業支援にあたり、どのように自主性を育むことが考えられるのか。たとえば、大学の授業では慣例的に「丁寧な板書」が教員の義務ではないものの、上述のような授業支援のツールを利用して、授業が円滑に進むよう事前にレジュメ等の教材を配布しておき、学生には自分でダウンロード、必要に応じてプリントアウトさせるなどの準備を求めることが考えられる。また、レジュメ等をデータで配布することから、タブレット端末を持ち込んでの受講を許可することも検討してよい。もちろん、自宅にパソコンやプリンタなどの機器がない学生もいることは推察されるが、そのような場合はたとえば学内のコンピュータ教室等を利用して準備することが必要となるため、学生が自分で授業を受講する準備をおこなうことになる。また、学生の質問に対しても、上述のような授業中の質疑応答だけでなく、各教員に課されているオフィスアワーを活用したり、大学によっては職員やTAなどが常駐して学生の質問に対応したり、学習のアドバイスをおこなう部署もあるので、それらのシステムを活用するよう促すことも考えられる。もちろん、学生が自分で考える機会を奪うことにもなりかねないので、質問への対応のしかたにも留意が必要である。

これらに共通するのは、何らかの形式で教員と学生間の双方向のコミュニケーションが可能であることと、インターネット上に授業支援のツールが用意されていることの必要性である。これらのシステムについては、学生の自主性が前提となるため「指導期待群」にとって障壁となる可能性もあるが、「教えてほしい」という欲求に対して身近な部分から行動の機会を担保することも必要と思われる。特に、インターネットを活用した支援については学生にとり親和性も高いことから、教員がそのようなシステムを活用することも期待

される。

### 3-3 学生の人間関係を調整する

また一方では、上述のように、学生同士の人間関係が自主的な活動の阻害要因となりえるという結果がみられた。特に、「異性」の存在が影響する場合もある。ただし、趣味については、以前よりもその趣味の内容が障害になりにくい傾向がみられた。

学生の自主的な活動にあたり人間関係が阻害要因となるならば、授業の場で人間関係が円滑になるような工夫をすることが考えられる。グループワークはそのきっかけになる。実際に、学部横断型クラス編成やそれが取り入れられた科目でおこなわれたグループワークについては、学生が「友人が増えたこと」だけでなく、「自分の意見を言うこと」、「他の人の意見を聞くこと」に有用感を示している（黒河内 2013）。また、授業以外の場として、上述の沖（2011）が言うようなピア・サポートや大学運営への学生参加を正課教育とつなげることも考えられる。このうち、ピア・サポートは学生 SA として授業運営に参加する機会や、大学運営としてオープンキャンパスや年度当初のガイダンスに学生アルバイトを採用する機会もあり、学生の自主性を育むきっかけになる。

このように、授業内外で学生の交友関係を拡大するような機会をつくることで、特に同性や異性などの性別を意識せずに活動できるようになるだけでなく、さまざまな新しい活動や見聞をえる機会にもなるとも考えられる。

### 3-4 キャリアデザイン

キャリアや人生設計については、近年に義務化されたキャリア教育に含まれる。キャリア教育は広義にも狭義にもさまざまな概念でとらえることができるが、ここではひとまず、学生の卒業後の主に職業生活に資することを想定しておこう。

日本経済団体連合会（2013）の調査では、学生を採用する企業から学生にはコミュニケーション能力を身につけることが期待されている<sup>6</sup>。コミュニケーション能力のうち授業などの場で育めることとして、「話す力」や「聞く力」がある。「話す力」、さらに限定的に「自分の伝えたい内容を端的にまとめて話す力」については、通常の講義では難しい場合もあるが、その場合でも授業中に発言を求めることもできる。グループワークでの発表をおこなう場合にも、上述のように学生がその効果を実感している。その前提には、教員からの発問や課題の意図をくみ取る理解力や、そもそも講義の内容を真面目に聴くことも含めた「聞く力」が必要となる。また、たとえばグループワークを円滑に進める場合には、発言することや聞くことだけでなく、メンバー間の意見の調整をおこなうことも必要であるし、そのための自主性も期待される。これらのコミュニケーションを授業で強制することによりその能力を高めることができるだけでなく、卒業後にも期待されるような能力を身につける機会とすることも可能である。このほか、授業で直接、間接を問わず学ぶことや身につけられることには、就職後のどのような場面で活用しうるかを説明する方法も考えられる。

また、上述のように「人生を考えられるような授業がある」については半数以上が肯定的評価をしていることも加味すれば、半数程度の学生にとって大学の授業は「将来のことを考えるきっかけにはなるかもしれない」という期待感があるものと思われる。就職や職業活動のなかで活用できる知識や技能だけでなく、授業のなかでキャリア形成につながる

ような話題を入れるだけでも、学生の期待に沿うこともできる。

### 3-5 まとめと今後の課題

これらの考察をまとめると、何らかの形で教員と学生、あるいは学生同士のコミュニケーションを可能にする機会が必要であることがわかる。それはもちろん、課外活動だけでなく正課の授業内でも取り入れられることで、学生の授業への満足度が高まる可能性がある。その中で、卒業後に必要な知識や技能に習熟することは将来への不安を軽減することにもなりうるし、人間関係も円滑になることでより自主的に活動できるようにもなる。

一方では、上述のような工夫をおこなうにしても、その方法を考えるにあたり、本稿ではいくつかの限界もある。

まず、上述のようなコミュニケーションを取り入れた双方向型の授業をおこなうための具体的な工夫については言及できなかった。大人数の授業ではグループワークをおこなうづらい場合や、科目の性質上そもそも向かない場合もあり、個々の科目の性質や方針による差異があることから具体策を示すことができなかった。そのためには、個々の教員が担当する授業の内容や形式などをもとに詳細な分析をする必要があり、本稿が依拠するデータには限界がある。

もうひとつには、卒業後に必要とされるような技能を身につけることで学生の不安をやわらげることもできるが、長期的なスパンでの人生への不安をやわらげるには、その不安の内容を詳細に知る必要もあり、定量的、定性的なデータが必要となる。特に、大学の授業でキャリアデザインをいかに図るかを議論するには本稿では限界がある。

### <注>

- 1 文部科学省『学校基本調査』によると、2013年の過年度高卒者を含む大学進学率は49.9%。
- 2 2013年調査のその他の概要については武内他（2014）に譲る。また、1997年、2003年、2007年にも同様の大規模調査をおこなっており、一部の大学には継続して調査をおこなっている。
- 3 この質問について男女間での差異の有無についてカイ二乗検定をおこなった結果、統計的有意差を判定するための有意確率（p値）が1997年0.1%、2003年0.3%、2007年3.5%、2013年28.0%と推移しており、統計的有意差がなくなる傾向がみられた。
- 4 岩田（2015）では入学方法（入試形態）や現役・浪人別など、詳細な分析により「まじめ志向」をもつ学生の割合が異なることが示されている。その一方で、学生が在籍する大学の設置者別による差異が縮小する過程も示されている（黒河内 2010b、伊藤 2013）。これらの分析に齟齬がみられる理由として、後二者の分析では日本学生支援機構（文部科学省）の『学生生活調査』での生活費などの指標をもとにしている一方で、岩田の分析では学生の意識や生活様式などさまざまな変数をもとに「生徒化」の傾向を示していることが考えられる。なお、集計表は割愛するが、2013年調査の結果をもとに「指導期待か、自主性重視か」をたずねた質問（Q26E）を従属変数とし、独立変数に属性（「大学」、「学部・学科」、「性別」、「学年」、「現役か、浪人か」、「入学方法」、「第一志望の大学か」、「第一志望の学部（学科）か」）としてカイ二乗検定をおこなったところ、「大学」別では1%水準で統計的有意差が確認されたものの、その他の属性には統計的有意差が確認されなかった。この点でも岩田の分析と

の齟齬がみられるが、本稿の分析では「自主性」に用いている指標を1項目に単純化しているためである。

- 5 「自分の将来に不安を感じる」については「指導期待群」と「自主的活動群」とに分割するが、その他の項目については両群の分割をしないため、集計対象数には「指導期待か、自主性重視か」をたずねた質問（Q26E）に無回答だった分が上乘せされる。また、図 5-4 で示す推移は、2013 年は統計的有意差がみられた「自分の将来に不安を感じる」についてのみ「指導期待群」と「自主的活動群」とにわけて示し、ほかの項目については両群に分割せずに推移をみることにする。
- 6 この調査では、企業が学生の採用選考にあたって特に重視した点として、「コミュニケーション能力」（2013 年調査で 86.6%）がもっとも多く回答された。詳細は割愛するが、経年比較でも「コミュニケーション能力」は毎年、最多の回答がえられている。

#### <参考文献・資料一覧>

- 新立慶, 2010, 「大学生の『生徒化』論における批判的考察」『教育論叢』53, pp.67-75
- 伊藤彰浩, 2013, 「大学大衆化への過程——戦後日本における量的拡大と学生層の変容」濱中淳子（代表）『大衆化する大学——学生の多様化をどうみるか』岩波書店, pp.17-45
- 伊藤茂樹, 1999, 「大学生は『生徒』なのか——大衆教育社会における高等教育の対象——」『駒沢大学教育学研究論集』第 15 号, pp.85-111
- 岩田弘三, 2003, 「勉強文化と遊び文化の盛衰」武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版部, pp.184-203
- , 2011, 「キャンパス文化の変容」稲垣恭子編『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社, pp.26-53
- , 2015, 「「大学の学校化」と大学生の「生徒化」」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第 5 号（刊行予定）
- 川嶋太津夫, 2006, 「初年次教育の意味と意義」濱名篤・川嶋太津夫編著『初年次教育——歴史・理論・実践と世界の動向』丸善株式会社, pp.1-12
- 黒河内利臣, 2010a, 「学生の視点にもとづく大学教育改革の方向性—1998 年卒業生調査と 2007 年学生調査の自由記述から—」武内清編『大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察—』2007～2009 年度文部科学省研究補助金報告書, pp.36-48
- , 2010b, 「設置者別にみた学生生活費の推移—文部科学省学生生活調査 1968～2006 年—」『私学高等教育データブック』日本私立大学協会附置私学高等教育研究所, pp.43-59
- , 2013, 「授業評価に示された共通教養科目についての有用感」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第 3 号, pp.43-65
- 文部科学省『学校基本調査』

日本経済団体連合会，2013，「新卒採用（2013年4月入社対象）に関するアンケート調査結果」

沖清豪，2011，「学校化された高等教育機関における学生支援の「再」構築」独立行政法人日本学生支援機構編『大学と学生』第91号、pp.41-48

武内清・浜島幸司・大島真夫，2005，「現代大学生の素顔——『12大学・学生調査』から」武内清編『大学とキャンパスライフ』上智大学出版、pp.293-315

武内清・浜島幸司・岩田弘三・大野道夫・谷田川ルミ・山口晶子，2014，「大学の「学校化」と大学生の「生徒化」に関する分析——2013年15大学調査をもとに——」第66回日本教育社会学会要旨収録

全国大学生生活協同組合連合会，2012，『バブル崩壊後の学生の変容と現代学生像』

## 第6章

## 大学生の趣味とキャンパスライフ

## —オタク趣味に着目して—

山口 晶子 (聖徳大学非常勤講師)

## 1 はじめに

本章では、大学生の趣味活動とりわけオタク的な趣味に着目し、趣味の活動とキャンパスライフとの関連についての分析を行う。

大学生の趣味については、学業・勉強との比較、あるいは対抗軸である「遊び」の一つとしての研究蓄積があるが、趣味に特化した研究はあまり多くはない。例えば、吉光(2005)による大学生の趣味と友人関係の関連についての分析や、塩見(2011)による大学生の「鉄道研究会」における趣味と研究に関する分析などが挙げられるが、いまだ事例数が多いとは言えないだろう。そこで本研究では、大学生の趣味活動を分析の軸とし、趣味の活動とキャンパスライフとの関連を実証的に明らかにしていくことを目的としている。

本研究が多様な趣味の中でも「オタク」的な趣味を分析の中心に選んでいるのは、大学生の趣味活動として、オタク的な趣味がかつてほど珍しいものではなくなっている可能性があること、またオタク研究としても「オタク的な趣味をもつ大学生」がこれまで研究対象としてあまり取り上げられてきていない点などが理由として挙げられる(1)。こうしたことから、本研究において調査データによる実証的な知見が明らかになれば、キャンパスライフ研究だけでなく、「オタク研究」「ファン研究」としても位置づけていくことが可能になると考えている。

前回の大学生調査の際にも筆者はオタク趣味を指標とした分析を行い、オタク的な趣味にコミットしている学生の方が、「大学外」での活動への広がりをもっている可能性が示されていた(山口 2010)。こうした可能性も視野に入れつつ、本章ではキャンパスライフの中でも主として「勉強」と「友人関係」の2点を中心とした分析を進めていく。これは本研究が、女子学生を対象に行ったインタビュー調査による質的分析(山口 2015)との相互関連も視野に入れていることから、その分析における視点や得られた知見などを取り入れているためである。

従って、以降では趣味活動の1つとして「オタク」的な趣味に関する項目を分析の中心軸とした上で、キャンパスライフの中でも「勉強」「友人関係」の2点との関連を見ていくこととする。

## 2 分析方法

Q27-2「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」を使用する。本項目の内訳は、図6-1に示したとおりである。趣味の活動がこうしたいわゆる「オタク」的なものだけであるとは限らないのだが、先に述べた問題関心と趣味活動の中の1つとして取り上げるという立場から、本項目を使用することとした。

図 6-1 「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」(全体)

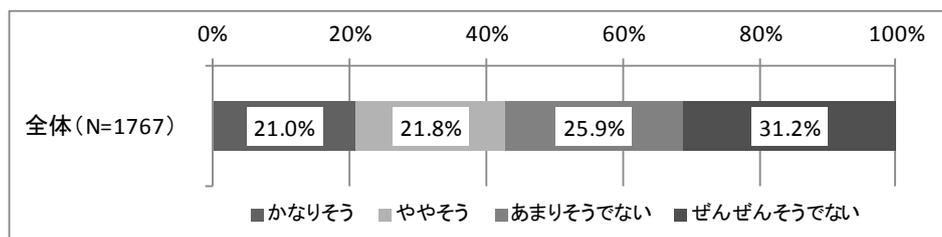
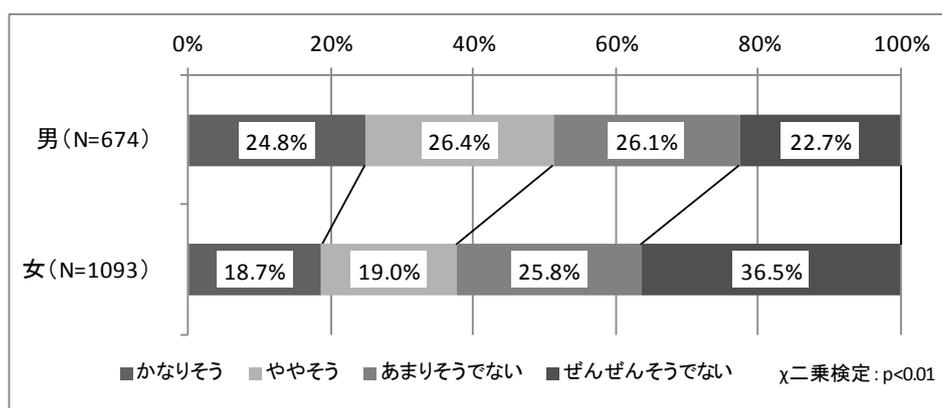


図 6-2 「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」×性別



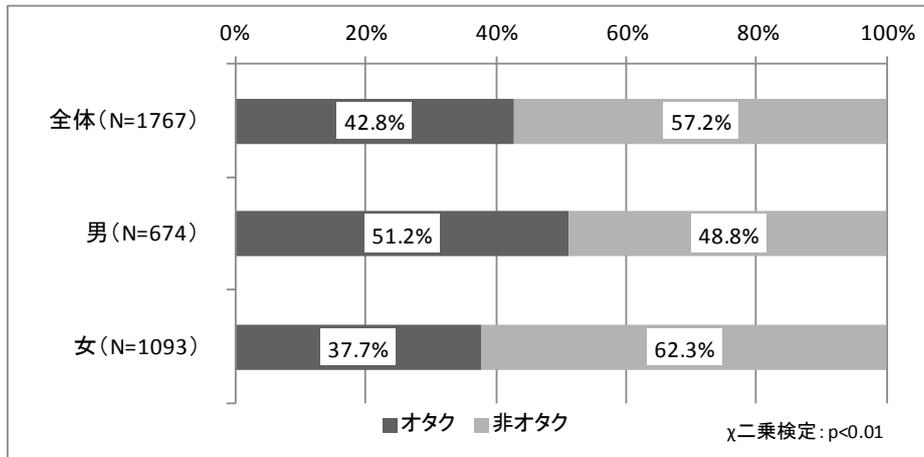
男女別に見てみると、男女間で有意な差がみられた (図 6-2)。特に、男子学生において「かなりそう」「ややそう」が女子学生よりも高くなっており、男子学生のほうが「オタク」趣味をもつ学生の割合が高いと言える。

そのほかの属性項目においては、学年別では有意な差は見られず、「かなりそう」と「ややそう」の合計はおおよそ 4~5 割の間におさまっていた。趣味にはある程度お金がかかることから、通学別 (自宅・自宅外) も確認してみたが、有意な差は見られなかった。筆者が行ったインタビュー調査では、自宅外通学をしている学生から「お金がかかる」という理由で趣味の活動が思うようにできていないというようなことが聞かれたが、本調査ではそうした傾向は見られなかった。

続いて、趣味活動とキャンパスライフについての分析を行っていく。分析にあたっては、先ほどの Q27-2 「アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある」の回答のうち、「かなりそう」+「ややそう」を「オタク」群、「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」を「非オタク」群とし、これを「趣味指標」とした上で、キャンパスライフにおける勉強、友人関係の 2 点を中心に分析を行うこととする。

趣味指標における割合は、全体では「オタク」群が 42.8%、「非オタク」群が 57.2%と「非オタク」群の方が約 14 ポイント高い。性別では男女間に有意な差がみられ、男子学生では「オタク」群が 5 割以上を占めるのに対し、女子学生では 4 割弱となっている (図 6-3)。

図 6-3 趣味指標×性別



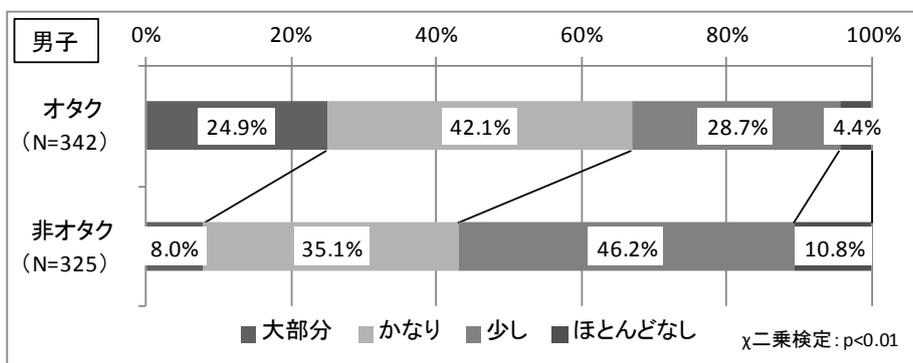
### 3 オタク趣味とキャンパスライフの分析

それでは、この趣味指標を用いて、キャンパスライフの分析を行っていく。ここでは特に、「オタク」群のキャンパスライフに着目する形でデータを確認していきたい。また、趣味指標においては性別による有意な差が見られたことから、男女別に分析を行っていく。

まずは、生活全体を確認するべく、「生活比重」に関する項目を見てみよう。「学業、勉強」「ダブルスクール」「サークル、部活動」「アルバイト」「趣味」「友人との交友」「異性（恋人）との交際」「就職活動」の8項目のうち、男女とも有意な差が見られたのは「趣味」「異性（恋人）との交際」の2項目で（図6-4、図6-5）、「アルバイト」において男子のみ有意な差が見られた。

趣味比重は、男女ともオタク群の方が極めて高く、「大部分」+「かなり」が6〜7割を占めている。「異性（恋人）との交際」は、男女とも非オタク群の方が高く、「大部分」+「かなり」の割合では、8〜10ポイント高くなっている。

図 6-4 趣味比重



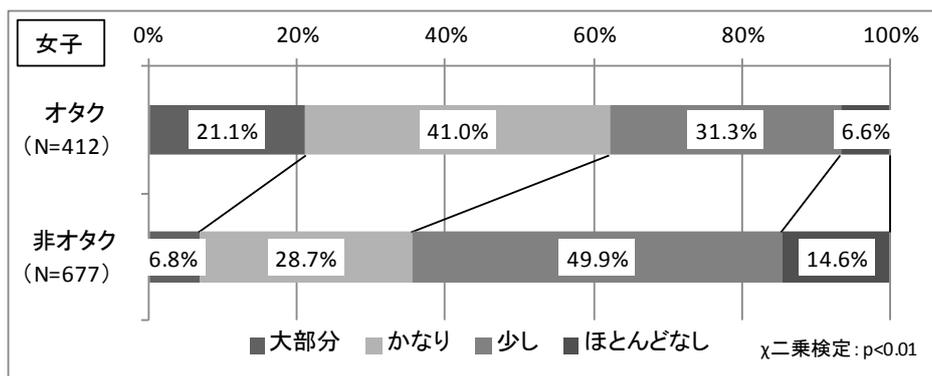
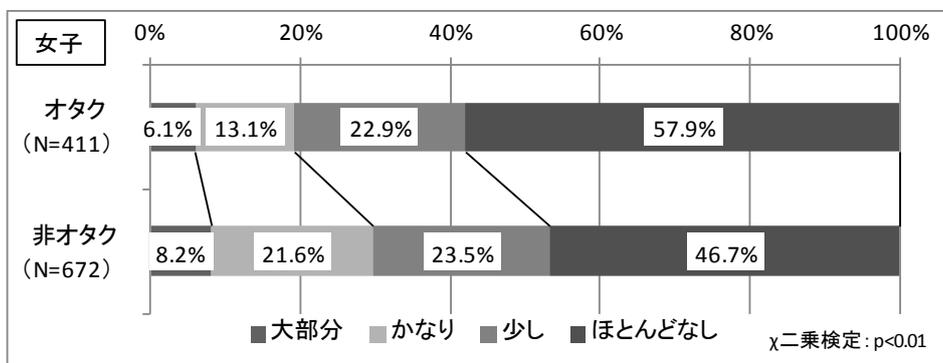
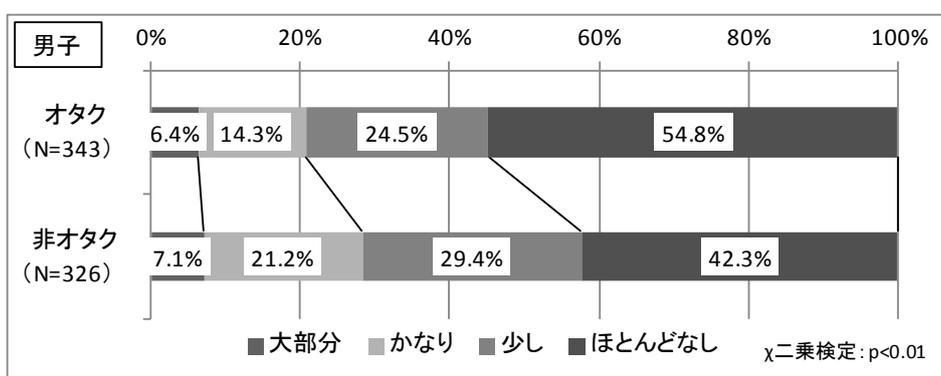


図 6-5 異性 (恋人) との交際比重

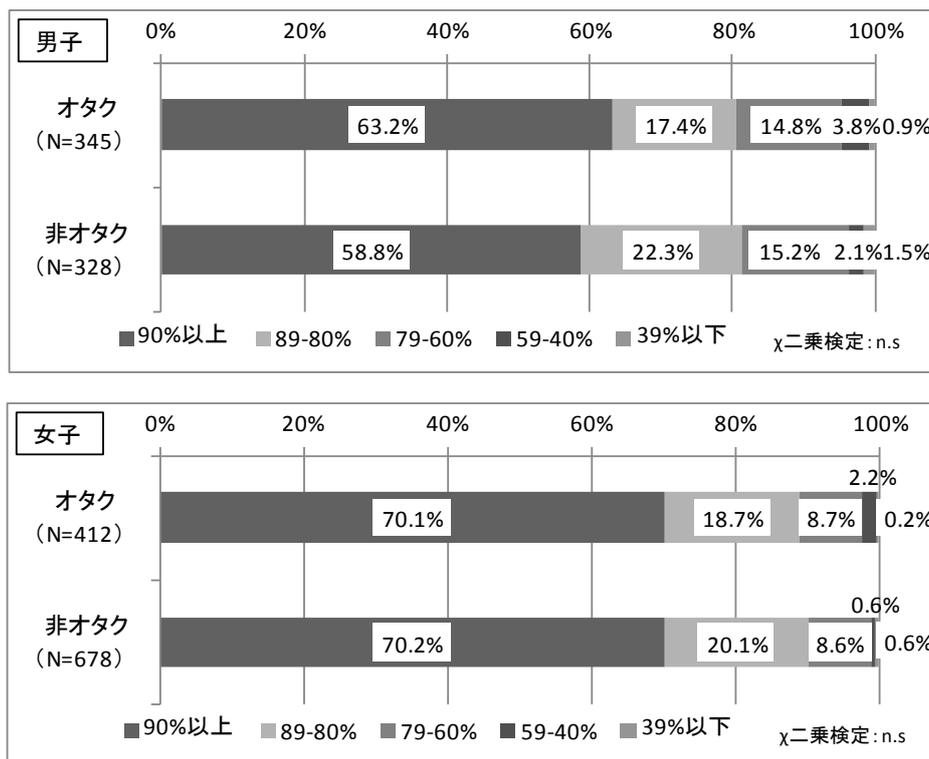


以上のように、オタク群と非オタク群では「趣味」「異性 (恋人) との交際」の比重において有意な差が見られていることから、キャンパスライフの分析においては、勉強だけでなく友人関係、交友 (交際) 関係にも着目する必要があると考えられよう。

### 3-1 勉強

続いて、勉強に関する項目との関連を見ていこう。これまでの研究では、趣味活動に代表されるような「遊び」的な活動は、「勉学、学業」とは対抗軸的に位置づけられてきた。果たして昨今においても同様の傾向は見られるのだろうか。

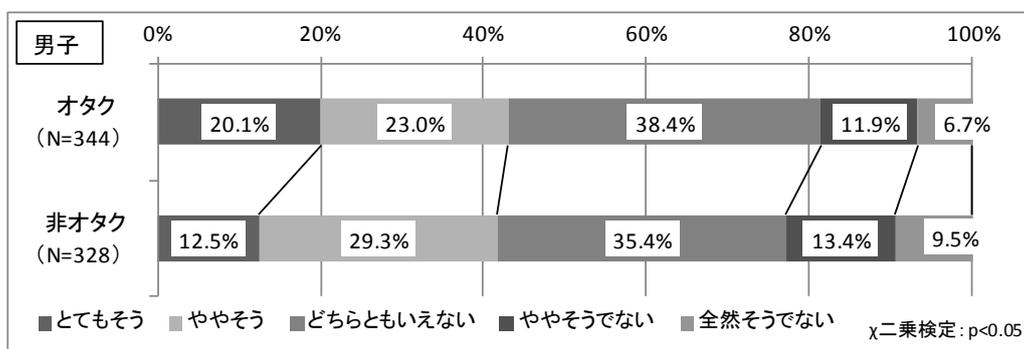
図 6-6 出席率

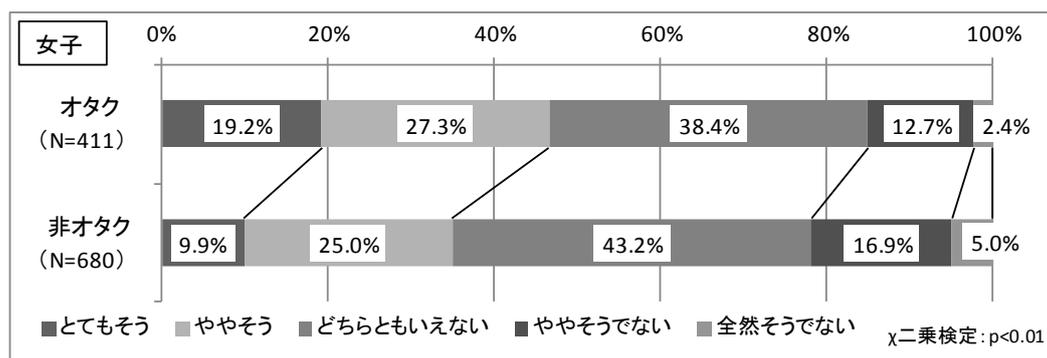


まずは、「授業への出席率」を見てみよう (図 6-6)。男女とも、オタク群、非オタク群による有意な差は見られず、出席率が 80%以上である割合には大きな差は見られていない。オタク的な趣味活動をしていても、そのことが授業への出席率には大きく影響していないものと思われる。

続いて、「今の大学の授業について、どのように感じていますか (Q14)」を見てみよう。

図 6-7 授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ

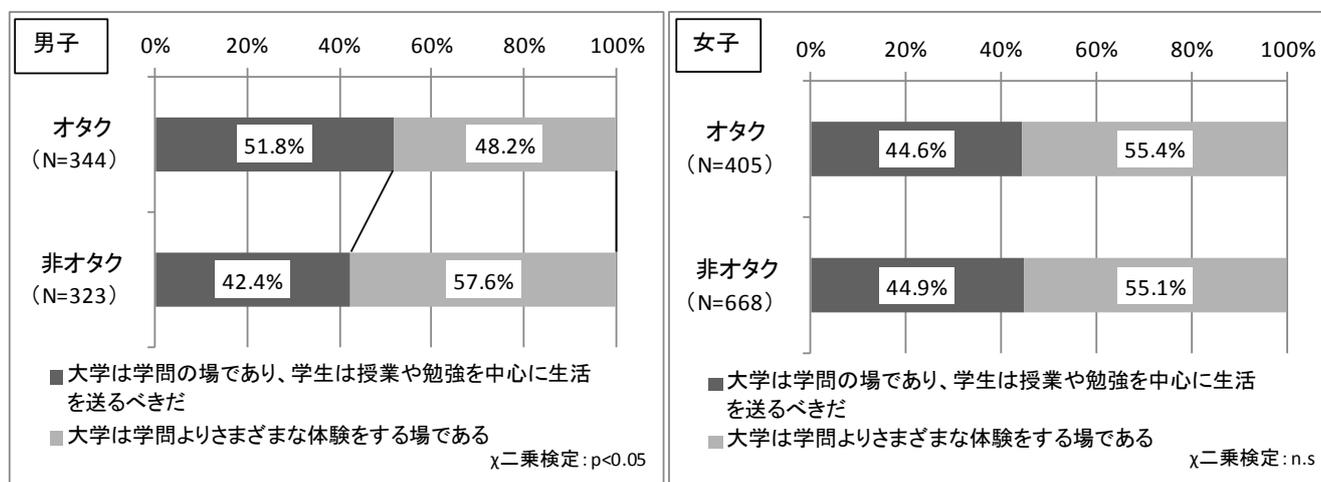




授業について感じていることとして、「授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ (Q14-10)」で男女とも有意な差が見られ (図 6-7)、「私語の多い授業がある (Q14-9)」において女子のみ有意な差が見られた。どちらもオタク群の方が非オタク群と比べて「とてもそう」+「ややそう」の割合が高くなっている。本調査においては「生徒化」に関する項目として位置づけられていることから、男女ともオタク群の方が、「授業中の私語に対して先生が注意するべきだ」という生徒化傾向にあると考えられる。

最後に「大学観 (大学についての意見、Q26)」を見てみよう (図 6-8)。大学観 A において男子のみ有意な差が見られ、「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」においてオタク群が非オタク群より高い傾向が見られている。

図 6-8 大学観 A



勉強面では、オタク的趣味活動による勉強へのネガティブな影響は見られず、男女ともどちらかと言えば大学での授業や勉強に対して肯定的、生徒的な傾向があると考えられる。

### 3-2 友人関係

続いて、友人関係について見てみよう。友人関係について聞いている「あなたの友だちは今の大学の人が多いですか、今の大学以外の大学の人が多いですか (Q15)」では、オタク群、非オタク群による有意な差は見られなかった。しかし、大学での友だちとの付き合い

いについての項目 (Q17) においては有意な差が見られている。

「お昼ご飯を一緒に食べる」(図 6-9) では男女とも有意差が見られ、非オタク群と比べるとオタク群は「よくする」の割合が低くなっている。特に男子において差が大きい。「学外でも遊んだり食事をしたりする」(図 6-10) でも同様に男女とも有意な差が見られ、オタク群の方が低い傾向が見られている。「悩みを相談する」(図 6-11)、「インターネットでやり取りをする」(図 6-12) では女子にのみ有意な差が見られ、オタク群の方が低くなっている。

図 6-9 お昼ご飯を一緒に食べる

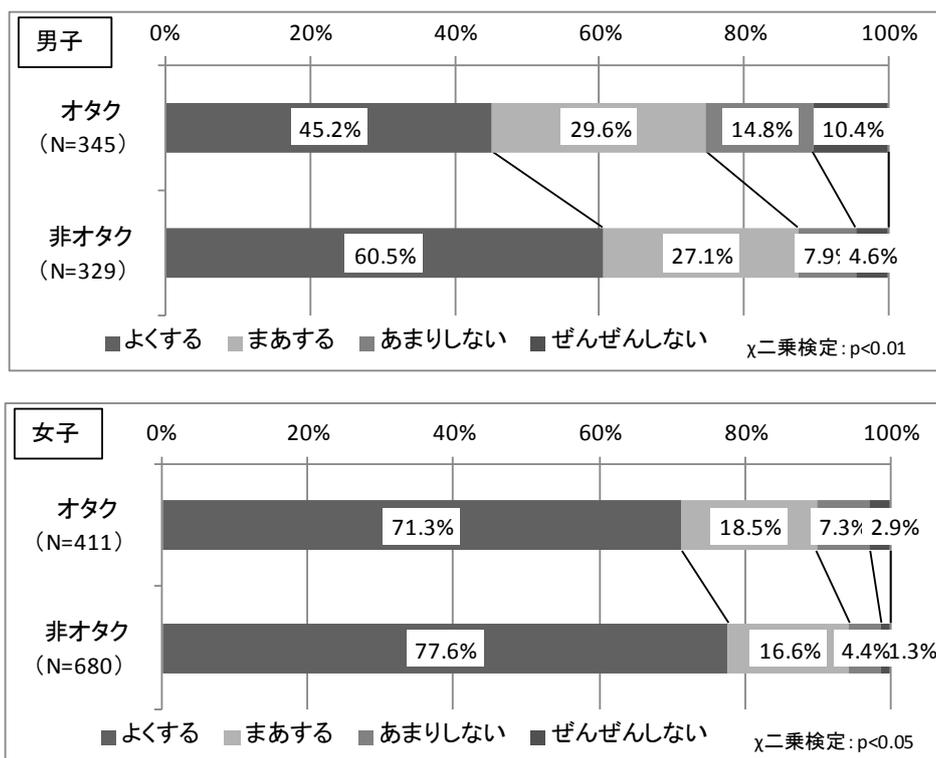
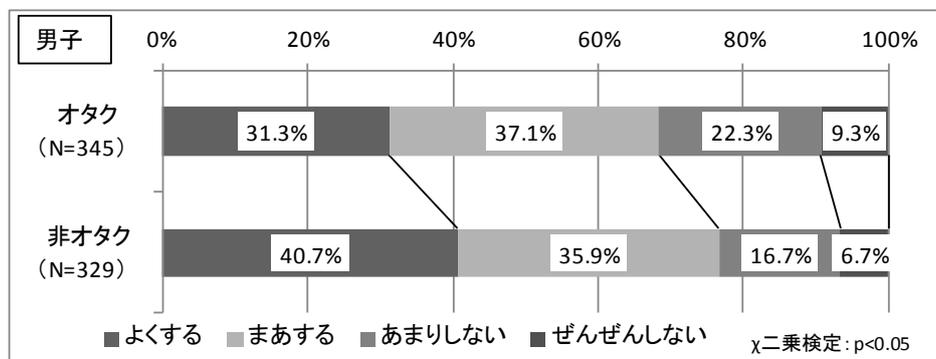


図 6-10 学外でも遊んだり食事をしたりする



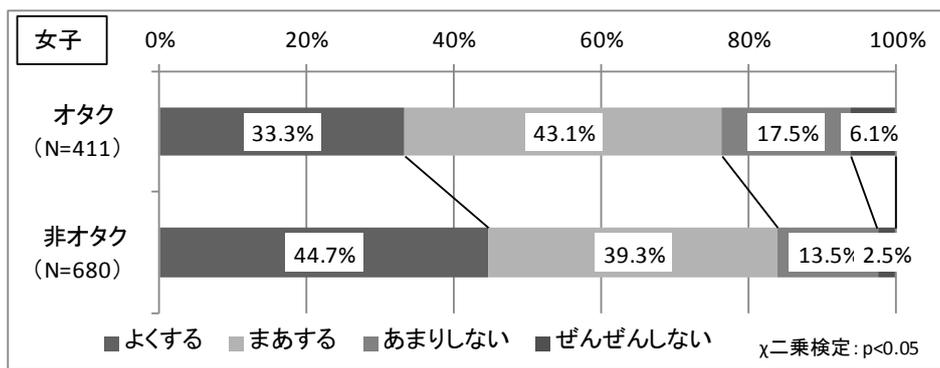


図 6-11 悩みを相談する

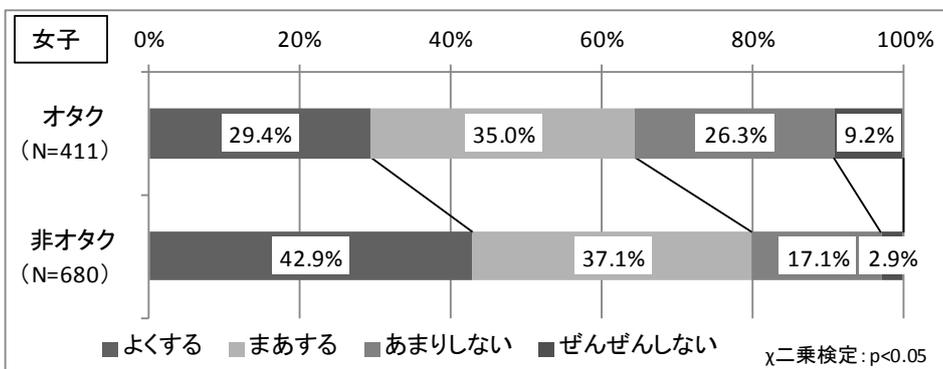
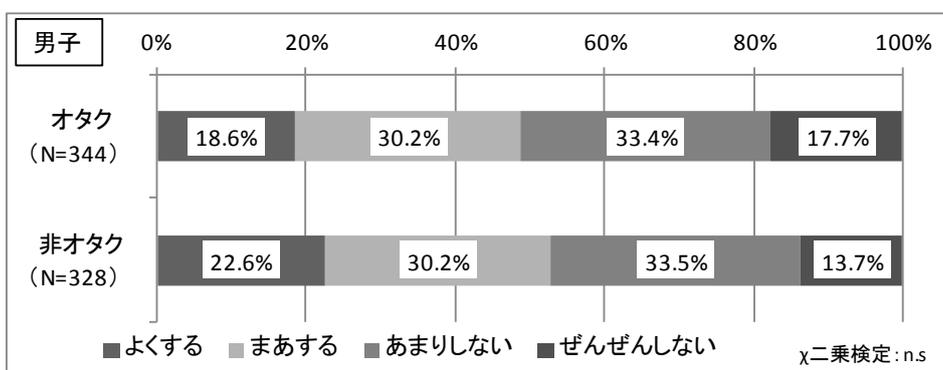
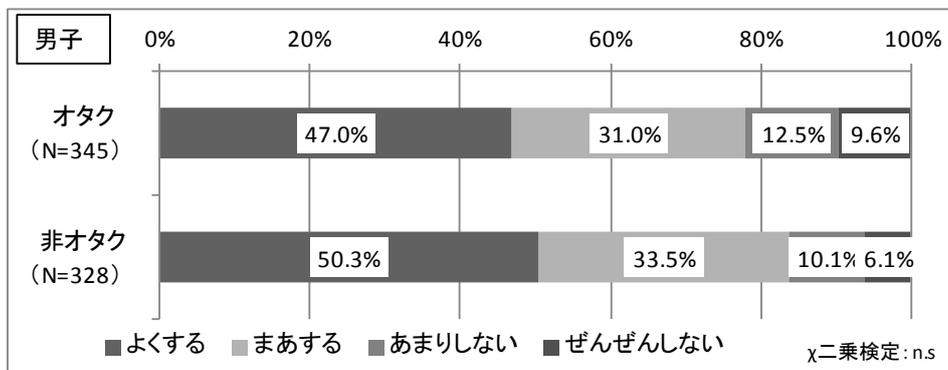
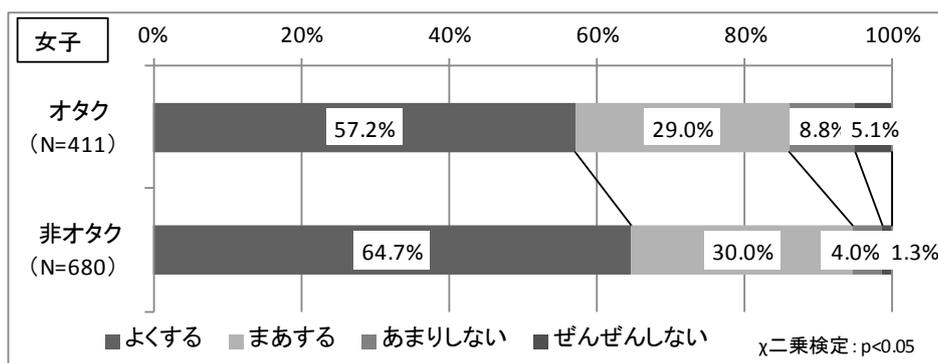


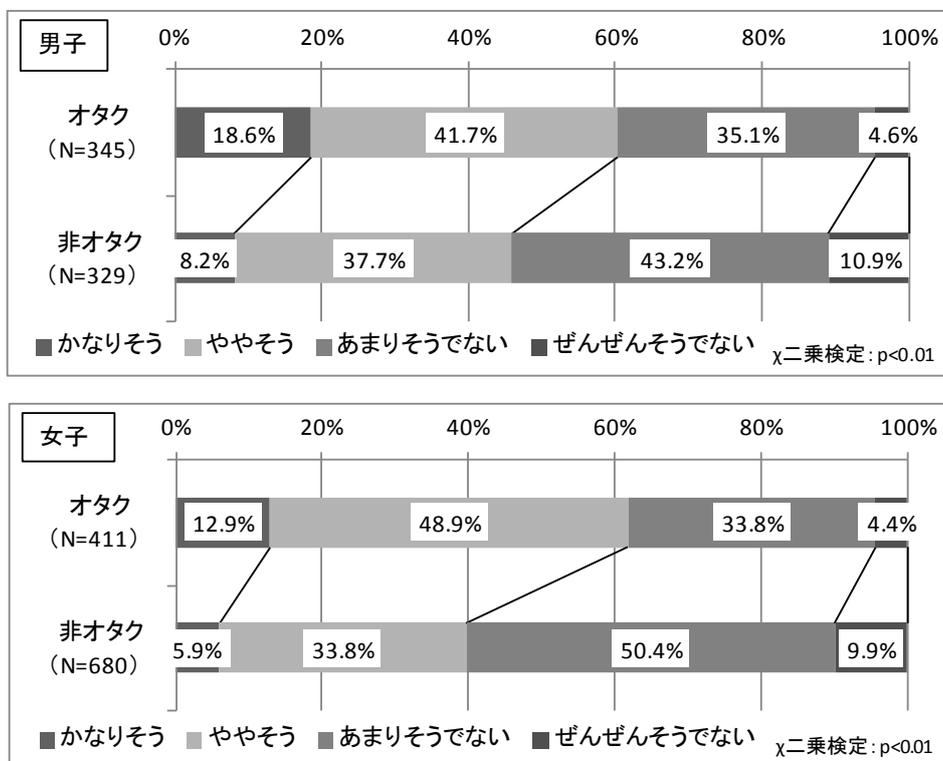
図 6-12 インターネットでやり取りをする





こうしたことから、オタク群の学生は、非オタク群の学生と比べると大学内の友人との関わりがあまり活発ではない可能性が考えられる。そこで、自分自身の性格や考えを聞いた項目の一つである「人と一緒にいるより1人の方が好きだ (Q27-3)」を確認してみると (図 6-13)、オタク群の方が「かなりそう」+「ややそう」の割合がかなり高くなっており、一人である時間を好む傾向が見られた。オタク群のほうがこうした考え方をもち割合が高いということが、大学内での友人との付き合い方にも表れているものと思われる。オタク群の学生の友人関係、交友関係は非オタク群の学生と比べると少々孤立している可能性があるのかもしれない。

図 6-13 人と一緒にいるより1人の方が好きだ



### 3-3 その他の項目

そのほか、普段していること (Q28)、自分自身の性格や考え方 (Q27) のうち有意差が

あったものを簡単に取り上げてみたい。普段していることにおいては(表6-1)、男女とも「スポーツなどで体を鍛えている」「ファッションについての情報をチェックしている」において、オタク群が非オタク群よりも「とてもそう」+「ややそう」の割合が低いが、「カラオケに行く」ではオタク群の方が高い割合を示している。女子のみ「休日や長期休みに旅行をする」で有意差が見られ、オタク群の方が低い傾向が見られた。

表 6-1 普段していること

		男						χ <sup>2</sup> 二乗検定	女						χ <sup>2</sup> 二乗検定
		とてもそう	ややそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない	計	N		とてもそう	ややそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない	計	N	
スポーツなどで体を鍛えている	オタク	14.8%	24.1%	29.3%	31.9%	100.0%	345	**	6.3%	12.9%	29.1%	51.7%	100.0%	412	*
	非オタク	27.4%	31.0%	28.3%	13.4%	100.0%	329		8.2%	15.3%	33.7%	42.8%	100.0%	680	
新聞をよく読む	オタク	5.5%	19.7%	29.0%	45.8%	100.0%	345	n.s.	2.9%	11.4%	33.7%	51.9%	100.0%	412	n.s.
	非オタク	4.3%	14.3%	35.6%	45.9%	100.0%	329		1.6%	11.9%	30.6%	55.9%	100.0%	680	
占いをチェックしている	オタク	2.3%	4.9%	14.0%	78.8%	100.0%	344	n.s.	3.4%	14.8%	24.8%	56.9%	100.0%	411	n.s.
	非オタク	1.8%	4.0%	17.9%	76.3%	100.0%	329		2.8%	14.0%	24.7%	58.6%	100.0%	681	
ファッションについての情報をチェックしている	オタク	8.1%	14.5%	29.9%	47.5%	100.0%	345	**	13.6%	36.9%	26.9%	22.6%	100.0%	412	**
	非オタク	6.7%	25.9%	33.5%	33.8%	100.0%	328		18.4%	42.6%	27.0%	12.0%	100.0%	681	
カラオケに行く	オタク	12.8%	38.3%	25.5%	23.5%	100.0%	345	*	21.1%	39.3%	20.1%	19.4%	100.0%	412	**
	非オタク	8.5%	32.3%	32.9%	26.2%	100.0%	328		10.4%	39.1%	29.2%	21.3%	100.0%	681	
映画を観に行く	オタク	10.4%	28.1%	34.8%	26.7%	100.0%	345	n.s.	12.4%	42.7%	32.4%	12.4%	100.0%	410	n.s.
	非オタク	10.9%	31.3%	38.0%	19.8%	100.0%	329		12.5%	46.3%	30.2%	11.0%	100.0%	681	
料理をよくする	オタク	13.6%	20.3%	31.0%	35.1%	100.0%	345	n.s.	17.0%	25.5%	35.9%	21.6%	100.0%	412	n.s.
	非オタク	9.1%	22.2%	33.4%	35.3%	100.0%	329		15.6%	31.6%	34.2%	18.6%	100.0%	681	
休日や長期休みに旅行をする	オタク	14.5%	26.1%	32.2%	27.2%	100.0%	345	n.s.	18.0%	34.0%	27.2%	20.9%	100.0%	412	**
	非オタク	17.3%	28.9%	30.7%	23.1%	100.0%	329		21.3%	44.1%	24.1%	10.6%	100.0%	681	

χ<sup>2</sup>二乗検定: \*\*p<.001 \*p<.005

表 6-2 自分自身の性格や考え方

		男						χ <sup>2</sup> 二乗検定	女						χ <sup>2</sup> 二乗検定
		かなりそう	ややそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない	計	N		かなりそう	ややそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない	計	N	
スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていないと不安だ	オタク	31.6%	37.1%	22.3%	9.0%	100.0%	345	n.s.	39.3%	41.7%	14.8%	4.1%	100.0%	412	n.s.
	非オタク	25.8%	41.9%	23.1%	9.1%	100.0%	329		37.6%	41.3%	17.2%	4.0%	100.0%	681	
異性の視線が気になる	オタク	11.0%	41.4%	33.3%	14.2%	100.0%	345	n.s.	5.4%	35.0%	44.8%	14.8%	100.0%	411	n.s.
	非オタク	9.4%	42.2%	37.4%	10.9%	100.0%	329		4.1%	32.6%	49.0%	14.3%	100.0%	680	
音楽は自分の生活の一部だ	オタク	29.9%	30.7%	28.1%	11.3%	100.0%	345	*	41.8%	36.3%	16.1%	5.8%	100.0%	411	**
	非オタク	24.3%	27.1%	29.2%	19.5%	100.0%	329		27.6%	39.9%	25.6%	6.9%	100.0%	680	
自由に使える時間がたくさんある	オタク	22.9%	42.3%	25.8%	9.0%	100.0%	345	n.s.	18.4%	39.3%	31.3%	10.9%	100.0%	412	n.s.
	非オタク	18.9%	37.2%	33.5%	10.4%	100.0%	328		15.6%	36.0%	38.5%	9.9%	100.0%	680	
将来のことより、現在を大切にしたい	オタク	15.1%	35.9%	44.3%	4.6%	100.0%	345	n.s.	10.2%	42.1%	42.6%	5.1%	100.0%	411	n.s.
	非オタク	13.7%	36.2%	42.9%	7.3%	100.0%	329		9.1%	39.5%	47.4%	4.0%	100.0%	681	
毎日が充実している	オタク	23.2%	47.8%	22.9%	6.1%	100.0%	345	n.s.	23.3%	47.3%	24.8%	4.6%	100.0%	412	**
	非オタク	23.1%	45.6%	26.7%	4.6%	100.0%	329		28.4%	53.0%	16.9%	1.6%	100.0%	679	
将来つきたい職業を決めている	オタク	30.9%	28.0%	24.2%	16.9%	100.0%	343	n.s.	26.7%	24.5%	25.7%	23.1%	100.0%	412	n.s.
	非オタク	31.0%	26.7%	29.5%	12.8%	100.0%	329		27.7%	27.4%	27.8%	17.1%	100.0%	679	
就職するなら正社員がよい	オタク	60.9%	25.5%	8.1%	5.5%	100.0%	345	n.s.	61.8%	28.5%	7.3%	2.4%	100.0%	411	n.s.
	非オタク	66.3%	22.2%	8.5%	3.0%	100.0%	329		61.4%	29.2%	8.0%	1.5%	100.0%	679	
労働についての法律や労働者の権利について知っている	オタク	11.6%	32.0%	43.0%	13.4%	100.0%	344	n.s.	6.3%	33.0%	48.5%	12.1%	100.0%	412	n.s.
	非オタク	8.8%	24.9%	48.3%	17.9%	100.0%	329		4.4%	27.5%	52.7%	15.4%	100.0%	681	
自分のためより社会のために働きたい	オタク	9.9%	29.0%	42.3%	18.8%	100.0%	345	*	10.7%	26.9%	47.3%	15.0%	100.0%	412	**
	非オタク	17.9%	27.7%	41.0%	13.4%	100.0%	329		10.7%	36.8%	44.4%	8.1%	100.0%	680	
自分の将来に関して、不安を感じる	オタク	40.6%	39.1%	15.9%	4.3%	100.0%	345	n.s.	51.7%	37.6%	9.5%	1.2%	100.0%	412	**
	非オタク	35.3%	37.7%	18.8%	8.2%	100.0%	329		40.4%	42.9%	15.0%	1.8%	100.0%	681	

χ<sup>2</sup>二乗検定: \*\*p<.001 \*p<.005

自分自身の性格や考え方では(表6-2)、「音楽は生活の一部だ」「自分のためより社会のために働きたい」において男女とも有意差が見られた。「音楽は生活の一部だ」では、「かなりそう」+「ややそう」の割合においてオタク群の方がやや高い傾向が見られるが、「自分のためより社会のために働きたい」ではオタク群の方が低い傾向が見られている。女子のみ「毎日が充実している」においてオタク群が低く、「自分の将来に関して不安を感じる」においてオタク群が高いという有意な差が見られた。

#### 4 まとめと考察

これまで、オタク的な趣味に関する項目を趣味指標とした上で、「勉強」「友人関係」を中心にキャンパスライフとの関連を見てきた。明らかになった知見を整理し、まとめたい。

勉強については、出席率における趣味指標による有意な差は見られなかったが、生徒化についての項目である「私語への注意」では有意な差が見られ、オタク群の方がやや生徒化傾向が見られた。筆者の行ったインタビュー調査からは、オタク的な趣味の活動と大学での勉強を上手く両立させようと頑張る女子学生の姿も見えてきていることから、こうした結果が大学生の努力によるものである可能性も考えられよう。

次に友人関係については、大学内における友人との付き合い方において趣味指標による有意な差が確認され、男女ともオタク群の方が大学内での友人との付き合いが少ない傾向が見られた。これにはいくつか考えられることがあるが、1つにはオタク群の学生には「1人であることを好む」傾向が見られていたことが挙げられるだろう。また、大学内での関わりがあまり多くなくとも、大学外での関わりによって関係性を補完している可能性も考えられる。SNSなどを介した様々な関係性が、彼らのまわりには存在しているのかもしれない。しかしながら、以前筆者の授業を受けているオタク趣味をもつ学生の一人が「オタク趣味がまわりに理解されず、大学内でその話ができないことが寂しい」というようなことを話していたことがあった。オタク趣味であるが故になかなか理解されず、大学内での関係性が上手く構築できていないという可能性も考えられる。

その他の項目として、普段していることにおいて、スポーツやファッションなど活動的な項目においてオタク群は低い傾向が見られているほか、「社会のために働きたい」という意識が低いなど、どちらかと言うと少し消極的ともとれるようなオタク群の特徴が見えつつあった。

以上のような知見から、学生支援という点での考察を試みるとすれば、趣味の活動に積極的な学生の、学内での友人関係や人間関係に目を向けることの必要性であると考えられる。大学内での関係性におけるある種の孤立のような状態は、授業への欠席やその後の退学へも繋がる可能性がある。学生本人が1人を好むなど、ドライな考え方をもっているだけでも考えられるが、目を向けていく必要はあるものと思われる。

今後は、オタク的な趣味に限らず、例えば音楽やスポーツなど他の趣味でも同様の傾向が見られるのかどうか、さらなる分析が求められるだろう。

#### 〈注〉

- (1) オタク的な趣味に関する先行研究の検討は、「大学生の趣味とキャンパスライフーオタク趣味に関する女子学生へのインタビュー調査からー」（武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis Vol.5）にて行っている。

#### 〈参考文献〉

- 塩見翔（2011）「現代の大学生における〈趣味〉と〈研究〉 『鉄道研究会』での調査を中心に」日本教育社会学会『日本教育社会学会第63回大会発表要旨集録』pp.386-387

- 山口晶子 (2010) 「大学生の趣味活動とキャンパスライフ—オタク文化の分析から—」武内清 (研究代表) 『大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察—』(平成 19~21 年度文部科学省研究補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果・最終報告書), 第 3 章, pp.27-35
- (2015) 「大学生の趣味とキャンパスライフ—オタク趣味に関する女子学生へのインタビュー調査から—」武蔵野大学教養教育リサーチセンター編 『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』 Vol.5, pp.119-135
- 吉光正絵 (2005) 「大学生の趣味と友人行動」県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要編集委員会編 『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』 第 6 号, pp.315-326

## 第7章

## 大学生の携帯電話・スマートフォン利用とキャンパスライフ

山口 晶子（聖徳大学非常勤講師）

## 1 はじめに

本章では、大学生の携帯電話・スマートフォン利用に着目し、その平日の利用時間とキャンパスライフとの関連について分析を行う。

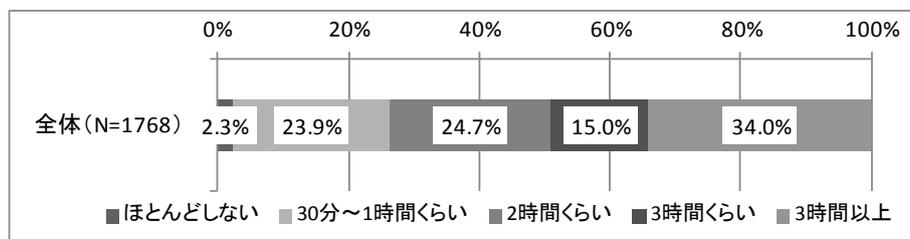
内閣府が行った平成25年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」によれば、高校生の96.4%が「自分専用の携帯電話（PHS・スマートフォンを含む）」を持っているとされている。こうした結果から、大学生もほとんどが携帯電話やスマートフォンを所有しているであろうことが容易に想像できる。政府が行った大学生の所有率に関する報告は見当たらないが、企業が行ったものとしては例えば、株式会社リクルートキャリアの研究機関「就職みらい研究所」が2012年11月に大学1年生～4年生を対象に行った調査があるが(1)、その報告によれば「携帯電話・スマートフォン（自分専用のもの）」を所有している割合は98.2%であるとされている。

このように、大学生にとって携帯電話やスマートフォンを持ち利用することはもはや日常化しており、彼らのキャンパスライフのあらゆるところで大きく関わっていると考えられる。こうしたことから、本章では、携帯電話・スマートフォンの利用時間とキャンパスライフとの関連について、分析を行うこととした。

## 2 分析方法

分析に使う項目は、Q20「あなたは、ふだんの日（平日）、次のことをどのくらいしていますか」のうち、Q20-3「スマートフォン・携帯電話を使う」である。選択肢は、「ほとんどしない」「30分くらい」「1時間くらい」「2時間くらい」「3時間くらい」「3時間以上」の6件であるが、ここでは「30分くらい」と「1時間くらい」をまとめ「30分～1時間」とし、「ほとんどしない」「30分～1時間」「2時間」「3時間」「3時間以上」の5段階としている。全体の回答傾向は、図7-1のようになっている。

図7-1 「スマートフォン・携帯電話を使う」（全体）

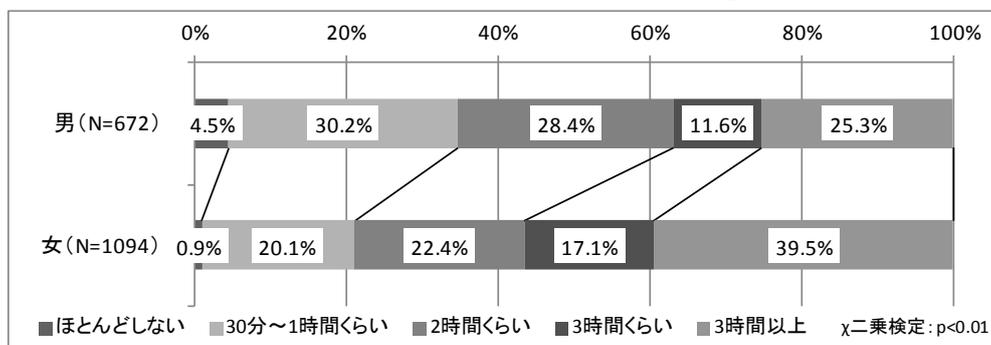


「ほとんどしない」が2.3%とかなり低いが、大半の大学生が平日に30分以上は携帯電話やスマートフォンを使用していることがうかがえる。特に「3時間以上」の回答が34.0%

と最も高い。

男女別では有意差が見られた(図7-2)。男子学生よりも女子学生の方が、「3時間」「3時間以上」の割合が高くなっており、女子学生の方が携帯電話やスマートフォンを使う時間が長い傾向が見られている。学年別では、有意差は見られなかった。

図7-2 「スマートフォン・携帯電話を使う」×性別



以降では、キャンパスライフとの関連を見ていく。改めて男女別の内訳を確認した上で(表7-1)、分析を進めていこう。

表7-1 「スマートフォン・携帯電話を使う時間」男女別(度数・%)

		ほとんどしない	30分~1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	3時間以上	計
男	N	30	203	191	78	78	672
	%	4.5%	30.2%	28.4%	11.6%	25.3%	100.0%
女	N	10	220	245	187	432	1094
	%	0.9%	20.1%	22.4%	17.1%	39.5%	100.0%

### 3 携帯電話・スマートフォン利用とキャンパスライフの分析

まずは、生活比重(Q12)を見てみよう。ここでは、「大部分」+「かなり」の割合のみ示している。男女とも有意な差が見られたのは、「学業、勉強」「友人との交友」「異性(恋人)との交際」の3項目であった。「アルバイト」は男子のみ有意な差が見られ、利用時間が多いほど比重が高い傾向がみられた。学業、勉強(図7-3)では、利用時間が多いほど比重が低くなっていく傾向が見られ、友人との交友(図7-4)、異性との交際(図7-5)は利用時間が多いほど比重が高くなっていく傾向が見られている。

このように、携帯電話・スマートフォンの利用時間は、キャンパスライフにおける勉強、交友関係・人間関係などの比重と関連しているものと考えられる。そこで次に、勉強に関する項目との関連を見ていくことにしよう。

図 7-3 「学業、勉強」 比重 (大部分+かなり)

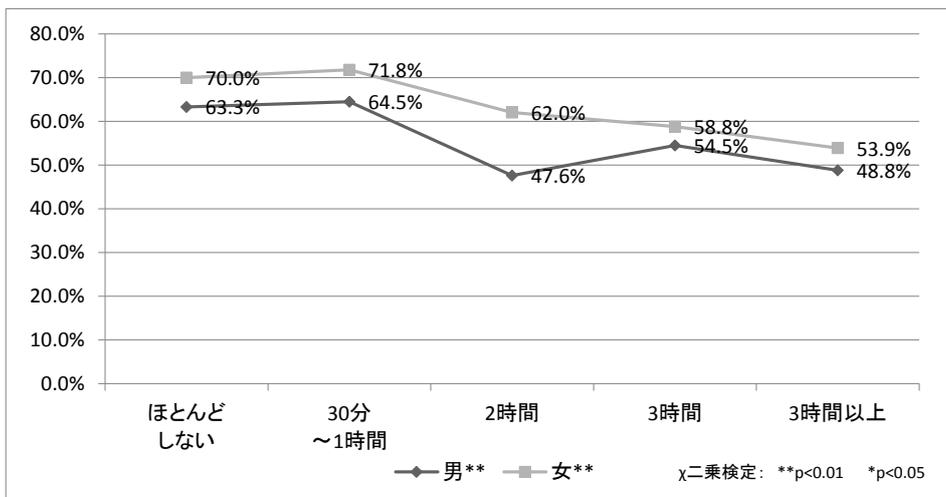


図 7-4 「友人との交友」 比重 (大部分+かなり)

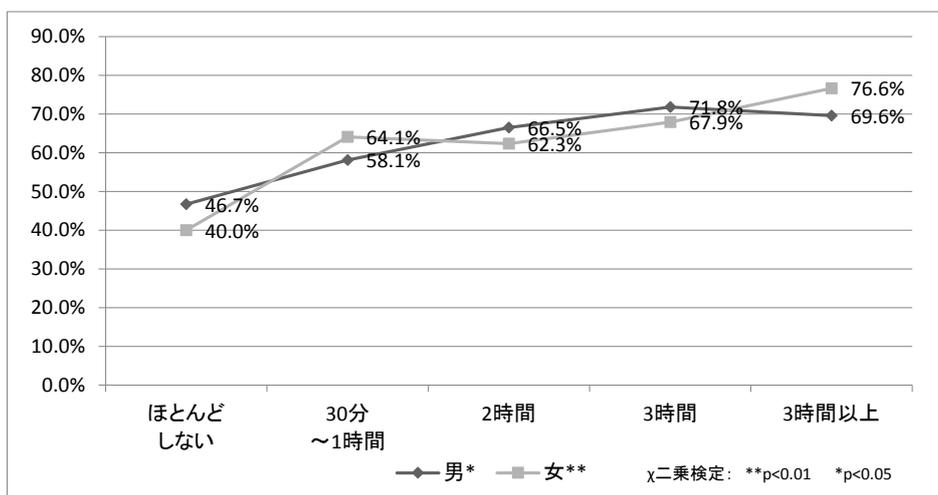
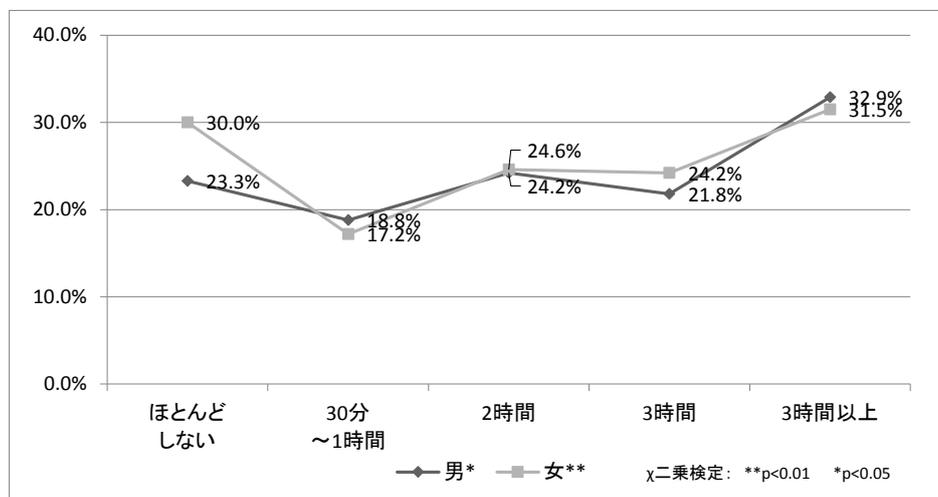


図 7-5 「異性との交際」 比重 (大部分+かなり)

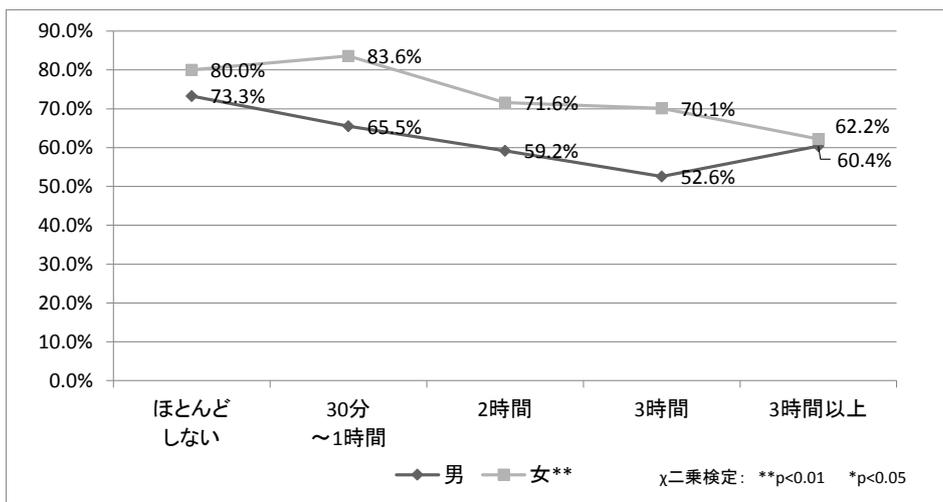


3-1 勉強

生活比重においては、携帯電話やスマートフォンの利用時間が多いほど、学業、勉強の比重が低くなる傾向がみられたが、ここでは「出席率 (Q13)」と「大学の授業について感じていること (Q14)」「大学観 (Q26)」の3項目からさらに分析をしていきたい。

まず出席率 (図 7-6) では、女子にのみ有意な差が見られ、「90%以上」の回答を見てみると「ほとんどしない」では 80.0%であったところから徐々に下がっていき、「3 時間以上」では 62.2%となっている。男子では有意な差は見られなかった。

図 7-6 「出席率」(90%以上)



続いて、「大学の授業について感じていること」を見てみよう。

図 7-7 「丁寧な板書をしてほしい」(とてもそう+ややそう)

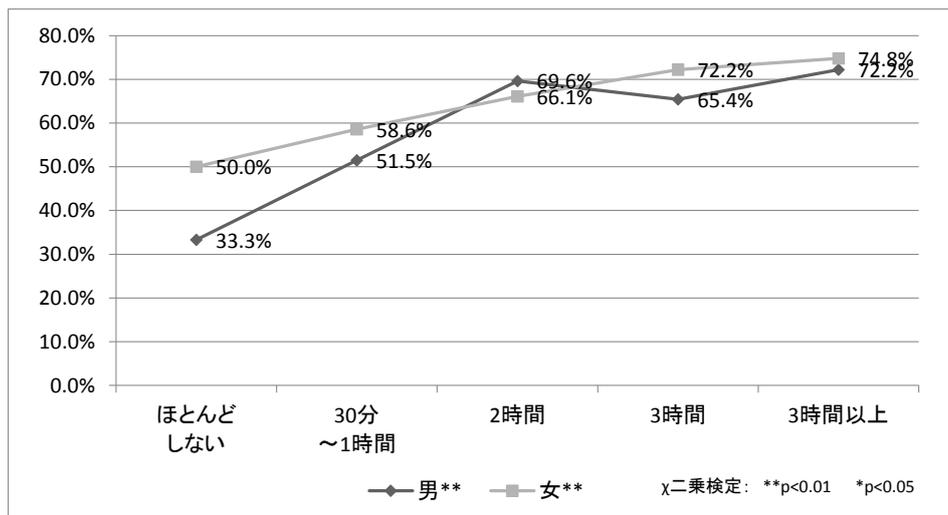
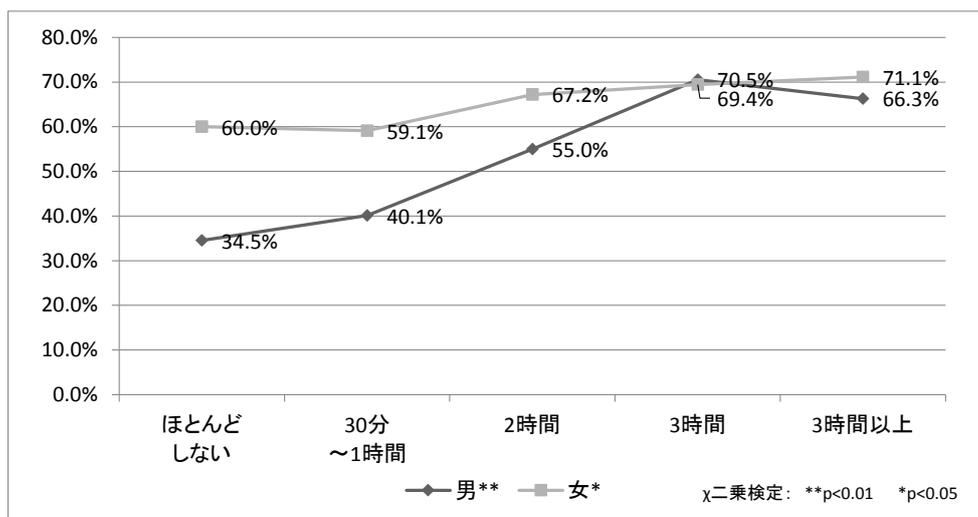


図 7-8 「就職活動に役立つことを教えて欲しい」(とてもそう+ややそう)



「授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい (Q14-11)」(図 7-7)、「就職活動に役立つことをもっと教えて欲しい (Q14-12)」(図 7-8) の 2 項目で男女ともに有意な差が見られ、利用時間が多いほど「とてもそう」+「ややそう」の割合が高くなる傾向が見られた。本項目は、「生徒化」を測る位置づけの項目でもあることから、携帯電話やスマートフォンの利用時間が多いほど、生徒化傾向にあると見ることもできよう。

最後に「大学観」について見てみよう。大学に関するどちらの意見に賛成であるかを聞いた項目である。有意差が見られたのは、次の 2 項目であった。

図 7-9 「大学観 A」

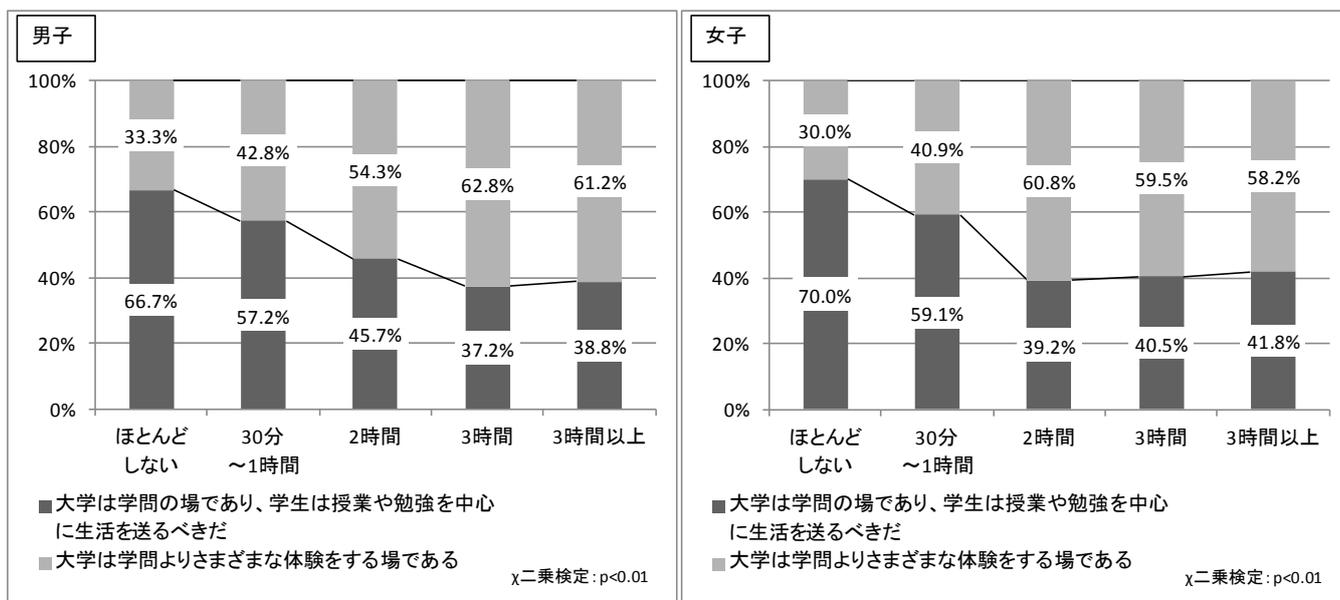
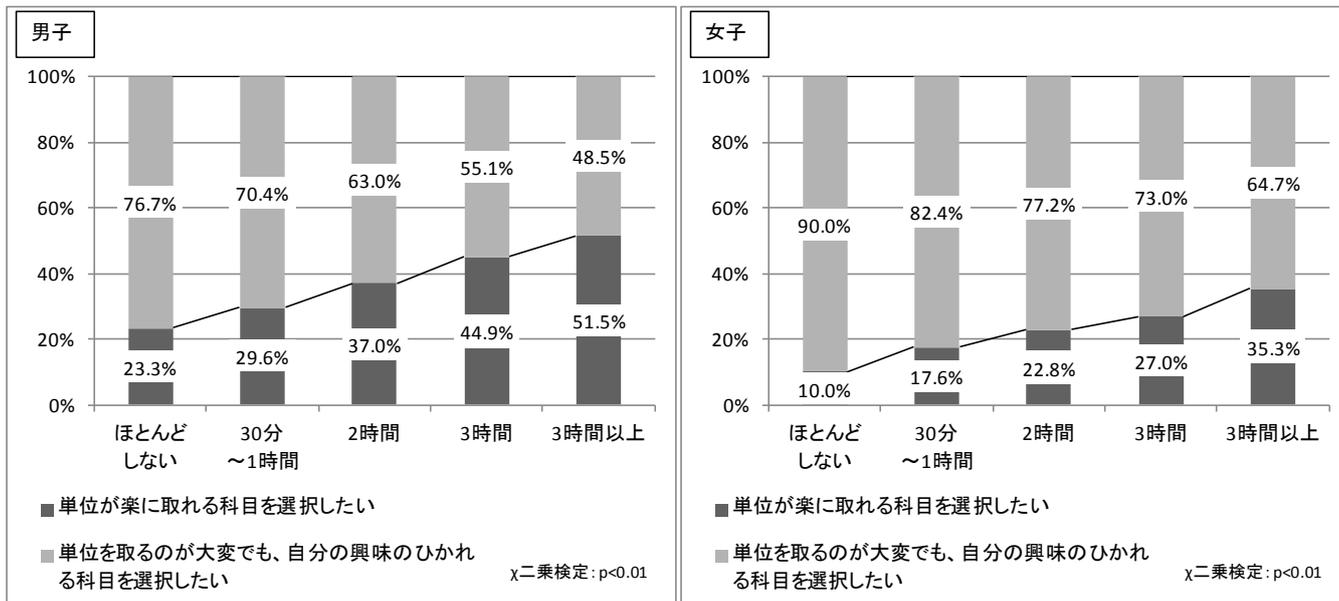


図 7-10 「大学観 B」



大学観 A (図 7-9) では、男女とも利用時間が多くなるほど「大学はさまざまな体験をする場である」の割合が増える傾向が、大学観 B (図 7-10) では「単位が楽に取れる科目を選択したい」の割合が増える傾向が見られた。携帯電話やスマートフォンの利用時間が長い大学生の方が、勉強だけにとらわれないような大学生活を意識しているのかもしれない。

### 3-2 友人関係

次に友人関係を見てみよう。「あなたの友達は、今の大学の人が多いですか。今の大学以外の人が多いですか (Q16)」においては、男女とも携帯電話・スマートフォンの利用時間による有意な差は見られなかった。そこで、「大学での友だちとの付き合い (Q17)」を確認してみると、4項目どれにおいても有意な差が見られた。

図 7-11 「お昼ご飯を一緒に食べる」(よくする+まあする)

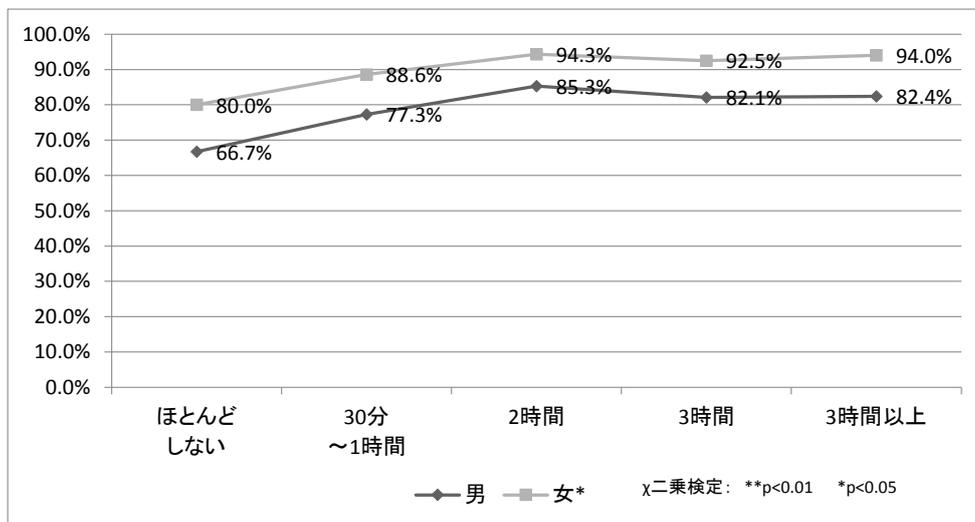


図 7-12 「学外でも遊んだり食事をしたりする」(よくする+まあする)

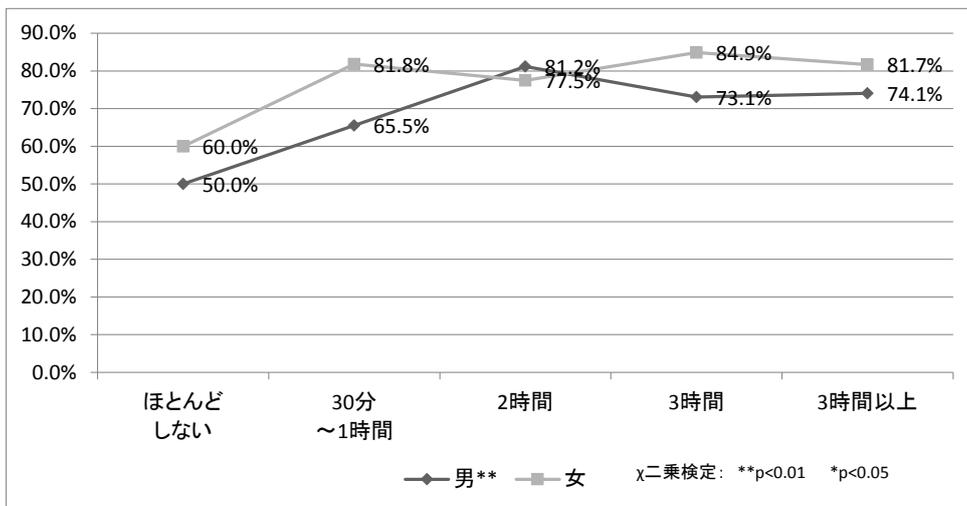


図 7-13 「悩みを相談する」(よくする+まあする)

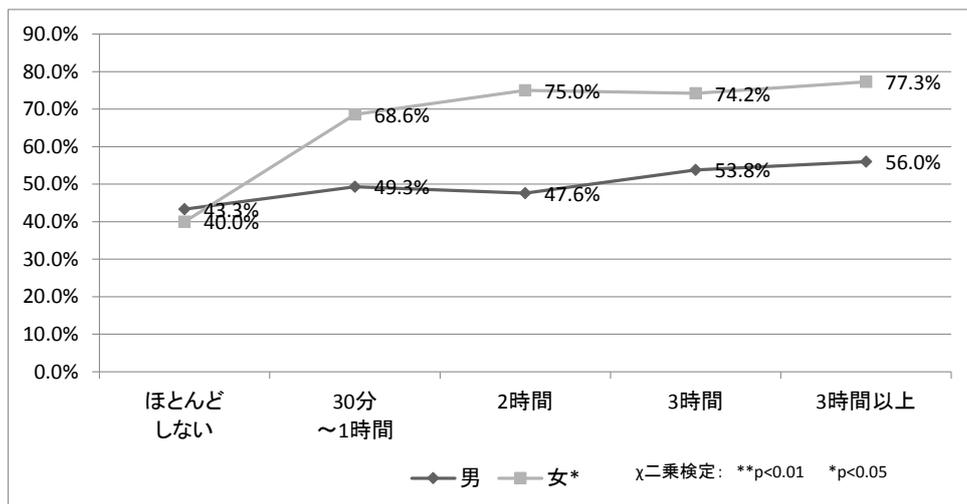
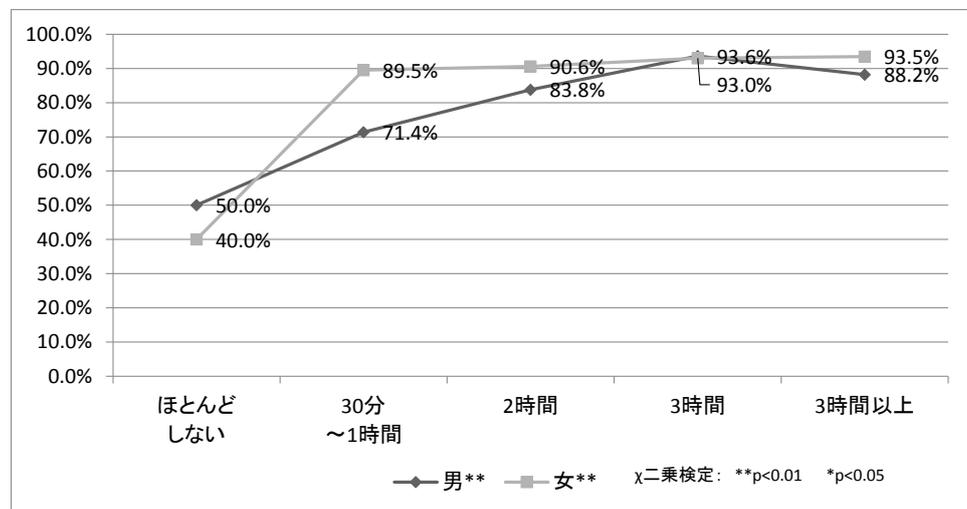


図 7-14 「インターネットでやり取りをする」(よくする+まあする)



「お昼ご飯を一緒に食べる」(図 7-11)は、女子にのみ有意な差が見られ、利用時間が多いほど、「よくする」+「まあする」の割合も微増する傾向が見られた。「学外でも遊んだり食事をしたりする」(図 7-12)は男子にのみ有意差が見られ、こちらも利用時間「2 時間」までは増加、その後は微減するという傾向が見られている。「悩みを相談する」(図 7-13)は女子にのみ有意な差が見られ、利用時間が多いほど割合も増える傾向が見られた。「インターネットでやり取りをする」(図 7-14)のみ男女とも有意差が見られ、男子は増加傾向、女子は、「30～1 時間」で 90%近くまで上がった後はほぼ横ばいという傾向が見られた。男女で項目に違いはあるが、携帯電話やスマートフォンの利用時間と大学内の友人との付き合い方との間には関連があると見ることができよう。

### 3-3 普段していること、性格や考え方

最後に「普段していること (Q28)」と、「自分自身の性格や考え方 (Q27)」から日常生活の様子などを見てみることにしよう。「普段していること」では、「新聞をよく読む (Q28-2)」「ファッションについての情報をチェックしている (Q28-4)」「カラオケに行く (Q28-5)」で男女ともに有意差がみられ、「スポーツなどで体を鍛えている (Q28-1)」のみ男子で有意差が見られた。

「新聞をよく読む」(図 7-15)では、利用時間が長いほど「とてもそう+ややそう」の割合が減る傾向が見られた。インターネットの普及により、新聞が読まれなくなってきていることは既に言われていることであるが、さらにスマートフォンの普及によりその傾向は強まりつつあると考えられている。本調査の結果も、こうした傾向を示すものと思われる。

「ファッションについての情報をチェックしている」(図 7-16)、「カラオケに行く」(図 7-17)では、利用時間が長いほど割合が増える傾向が見られている。インターネットで洋服を買うことができることや、ファッション誌も独自の Web サイトを設置し情報発信を行っていることから、こうした情報をチェックする際に利用している可能性が考えられる。

「カラオケに行く」では、待ち合わせの際に利用していることが考えられるが、最近ではスマートフォンのアプリがカラオケのリモコンになることや、カラオケの様子を SNS にアップする等、カラオケに行ってから利用している可能性も考えられるだろう。

図 7-15 「新聞をよく読む」(とてもそう+ややそう)

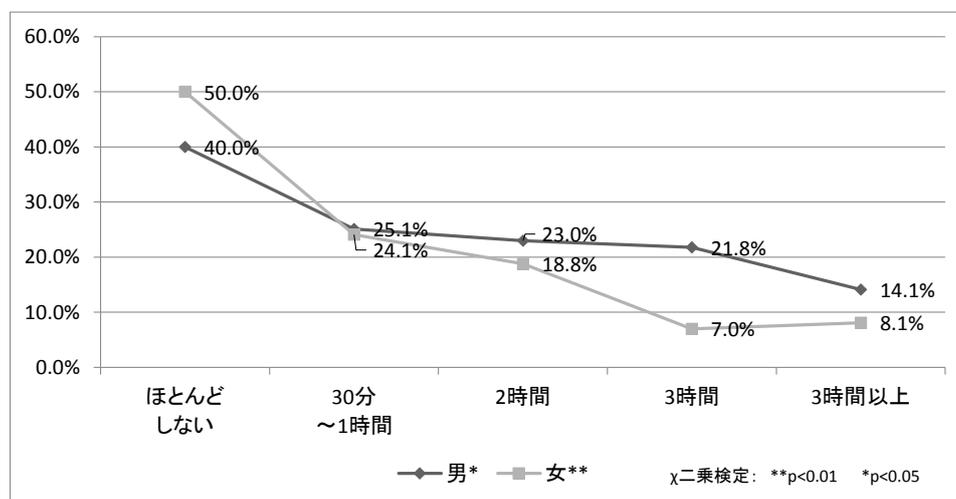


図 7-16 「ファッションの情報をチェックしている」(とてもそう+ややそう)

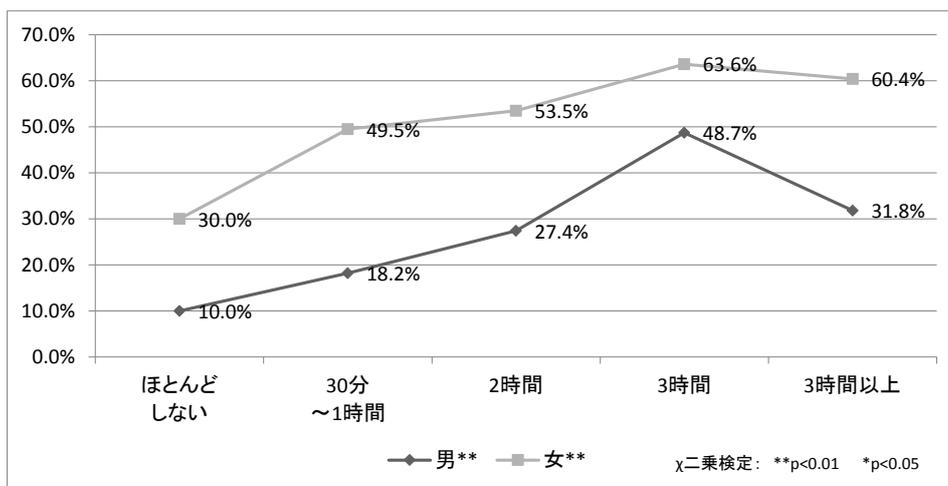


図 7-17 「カラオケに行く」(とてもそう+ややそう)

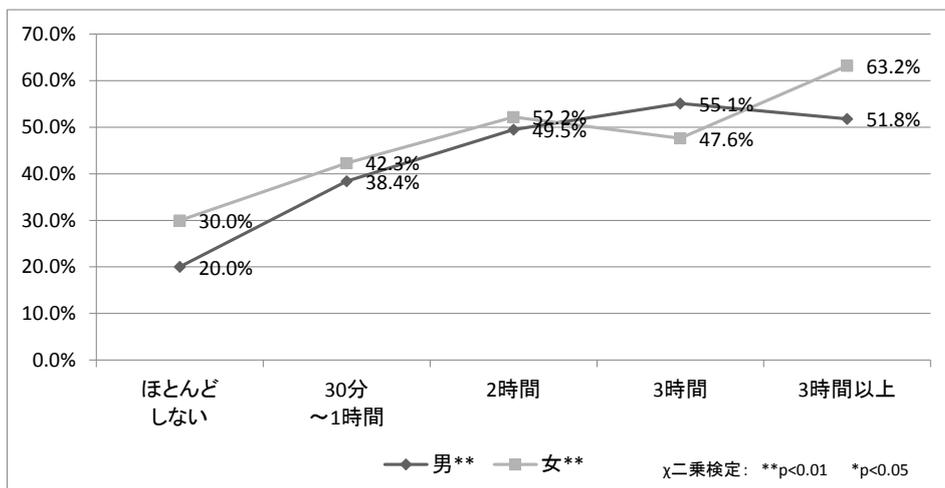
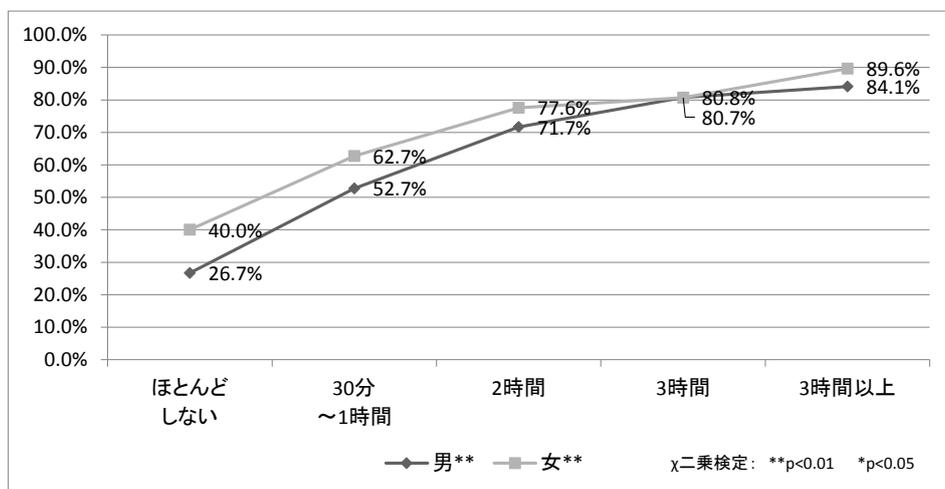


図 7-18 「スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていないと不安」(かなりそう+ややそう)



最後に「自分自身の性格や考え方」では、「スマートフォン・携帯電話を持ち歩いている」と不安だ (Q27-1) (図 7-18) のみ男女ともに有意な差が見られ、利用時間が多いほど割合が増加する傾向が見られている。以前より、携帯電話やスマートフォンへの依存傾向が社会問題としても指摘されてきてはいるが、利用時間が多い方が依存的な学生の割合が増えるという傾向が、本調査でも示されていると言える。むしろ、普段から長時間利用しているからこそ、持ち歩いているときに不安を感じるということなのかもしれない。

#### 4 まとめと考察

これまで、大学生の携帯電話・スマートフォン利用に着目し、その平日の利用時間とキャンパスライフとの関連を見てきた。明らかになった知見を整理し、まとめとしたい。

勉強面については、携帯電話やスマートフォンの利用時間が多くなると、「90%以上の出席率」の割合が減少するという関連や、大学での授業に対する生徒化傾向、大学観における勉強のみにとらわれない傾向などが見られた。こうした結果からは、携帯電話やスマートフォンが大学での勉強にあまり良い影響を与えていないのではないかと考えてしまいそうになるが、本調査における結果だけでそのように判断するのは難しいと思われる。授業中における携帯電話やスマートフォンの利用は、授業の妨げになるということから非難されることも多いが、効果的に利用することで双方向的で活発な授業を行っているという事例もある。大学生の実態を踏まえた対応が必要と思われる。

友人関係においては、利用時間が多くなると「友人との交友」の比重や、「大学内の友人との付き合い」の割合が増えるなど、交友関係との関連が見られた。携帯電話やスマートフォンを積極的に利用している方が、交友関係や学内の友人との付き合いを重視する傾向が見られたことから、コミュニケーション手段としてかなり頻繁に利用されている実態が見えてくるだろう。

そのほか、「ファッションの情報をチェックしている」「カラオケに行く」といった項目で、利用時間が多くなると割合が増加する傾向が見られ、「新聞を読む」では逆に減少する傾向が見られた。先に述べたコミュニケーション手段としての利用の他に、情報収集ツールとしても携帯電話やスマートフォンが定着している様子がうかがえる。そのくらい大学生の日常生活に欠かせないものであるからこそ、「持ち歩いている」と不安になる」という傾向も見られるものと思われる。

以上のように、大学生の携帯電話やスマートフォン利用は、大学生のキャンパスライフにおける勉強面や友人関係などと関連していることが明らかとなった。携帯電話やスマートフォンの利用は、大学生にとっては日常的なもの、当たり前なものとなっていることが改めて確認できるだろう。既に大学では、学内における様々なサービスを携帯電話やスマートフォンで行えるよう取り組みを進めているが、学生支援においてもまた、勉強面や交友関係との関連という視点から、大学生の利用実態を今後も注視していく必要があるものと思われる。

〈注〉

- (1) 株式会社リクルートキャリアの研究機関・就職みらい研究所による「大学生の生活実態～大学生価値意識調査より～」(2013年4月30日)の報告から。調査期間：2012年11月28日～11月30日、調査

方法：インターネット調査、調査対象：株式会社マクロミルのモニター会員のうち、2012年11月時点の大学1年生～4年生、回収数は学年・男女比が均等（各学年・男女515人）となるよう設定、有効回答数：4,120人。

〈参考資料〉

株式会社リクルートキャリアの研究機関・就職みらい研究所「大学生の生活実態～大学生価値意識調査より～」2013年4月30日

[http://www.recruitcareer.co.jp/news/2013/04/30/20130430\\_1.pdf](http://www.recruitcareer.co.jp/news/2013/04/30/20130430_1.pdf)

(アクセス日：2015年1月6日)

内閣府「平成25年度 青少年のインターネット利用環境実態調査」平成26(2014)年3月

<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h25/net-jittai/html/index.html>

(アクセス日：2015年1月6日)

## 第8章

**現代大学生のキャリアとジェンダー****－ 女子学生と男子学生の意識の関係性の分析 －**

谷田川 ルミ (芝浦工業大学)

**1. はじめに**

就職氷河期と言われた 1990 年代の後半以降、初等・中等教育における「キャリア教育」の導入に続き、大学においても「キャリア支援」が行われるようになり、その勢いはますます加速している。「キャリア」とは、職業を含む人生全体のことを指しており、大学における「キャリア支援」とは、学生の人生全体を見通したうえでの職業選択を可能にするための知識やスキルの習得と進路選択に対する支援を意味するものである。大学生の場合、卒業後には社会に出る者が大多数を占めるため、どうしても「人生全体」を見通した指導というよりは、「就職」に特化した支援になりがちである。しかし、職業や就職先の選択にあたっては、結婚、出産、育児、親の介護といった数多くのライフイベントとのかかわりを視野に入れることが重要である。

こうしたライフイベントとキャリアの関係を考える際、必要不可欠なのがジェンダーの視点である。これまでの長い歴史の中で、ライフイベントとキャリアの兼ね合いで問題になってきたのは、主に女性の就業継続や家庭内での家事・育児等の役割分担についてであった。しかし、近年になるにつれて女性の社会進出も進み、パートナーとの役割分担という考え方も以前に比べると浸透し、同時に女性の生き方も多様化してきている。こうしたことから、キャリアの問題は女性の問題とみなされがちなのであるが、女性が多様な人生の選択肢を得たということは、男性にとってもパートナーの人生選択によって、仕事、家事や育児、介護など、人生の選択肢が増えるということでもある。それ故に、これからの時代を生きる大学生のキャリアを考えるにあたっては、男女双方のジェンダー意識とライフコース選択の関係を実証的に分析し、より現実に即した有効なキャリア支援策の構築に寄与する研究成果を蓄積することが重要である。

そこで、本研究では、1997年、2003年、2007年、2013年の16年間4時点にわたって行った大学生調査のデータを用いて、女子学生と男子学生の将来のキャリア展望の変化を追うこととする。今回は特に2013年の15大学に対して行った調査データを用いて、女子／男子学生のライフコース展望についての詳細な分析を行う。こうして、男女双方のライフコース選択のメカニズムを実証的に明らかにすることによって、より現実に即した有効なキャリア支援策の構築のための基礎的な知見としたい。

**2. 先行研究からの知見と本研究の分析課題**

これまで、大学生を含む若年世代のライフコース展望についての先行研究からは、以下の知見が析出されている。

まず、ライフコース展望の規定要因としては、女子学生のライフコース展望の分化の要因として、母親の就業、本人の学校歴などの影響(中西 1998)、入試方法(吉原 1998、濱嶋 2002)、大学入学難易度との関連(谷田川 2007)、性別役割分業に対する意識との関

連 (谷田川 2007、元治・片瀬 2008 など) や「女性性 (女らしさへのこだわり)」との関連 (谷田川 2007) などが明らかにされている。

また、こうした若年世代のライフコース展望の経年変化といった視点からは、若年女性の「保守化」傾向の指摘 (松田 2005、元治・片瀬 2008 など) が指摘されている。とりわけ、2000年代後半になるにつれて、女子学生の家庭志向が仕事志向よりも強まっており、保守化傾向が認められる (谷田川 2010) こと、伝統的なジェンダー観を持っている女子学生は以前の時代とは異なり「ラク」で「自由」な生き方を望んでいる (谷田川 2009) などが明らかとなっている。

これらの研究成果を概観すると、大学生を含む若年世代のライフコース展望については、主に女子学生や女性が主に対象となっており、男性の意識という視点が欠けている。本調査においても、これまでの質問紙には男子学生に対しては「パートナーの生き方」しか聞いておらず、男子学生の意識との平行な分析は未着手であった。2013年調査では男子学生にも自分自身のライフコース展望を聞いているため、本稿においては男女の双方の意識の関係を明らかにする。また、若年女性の「保守化」傾向といった指摘についても、一時的なものだったのかどうか、男子学生の意識変化とともに 2013年データで改めて確認する。

上記の検討から、本稿においては、①1997年～2013年における大学生のライフコース展望はどのように変化しているのか、②男女間のライフコース展望の関係性はどのようになっているのか、③ライフコース展望と性別役割分業意識との関連はどのようになっているのか、の3点を分析課題とする。これらの分析結果を踏まえ、現代の大学生のライフコース展望とジェンダーとの関係性はどうかについて、就職状況といった社会経済的な状況も考慮に入れて考察する。

### 3. 使用データ

分析に使用するデータは、当研究会において、1997年、2003～2004年、2007年、2013年の16年間4時点において行われたものを使用する。そのうち、4時点において調査対象となり、比較可能な一定のサンプルが確保されているのは7大学となっているため、経年比較においてはこの7大学を抽出して分析を行う。サンプルは1997年調査 (954名：男子384名、女子570名)、2003年調査 (1,404名：男子483名、女子920名、性別無回答1名)、2007年調査 (1,315名：男子484名、女子831名)、2013年調査 (1,066名：男子455名、女子609名、性別無回答2名) という構成となっている。調査対象大学の内訳は、国立が3校 (関東近県2校、九州1校)、私立が4校 (関東近県2校、関西1校、九州1校) である (いずれも共学校)。入学難易度は上～低に分布している。(表8-1)

さらに、今回は上記の4時点における学生の意識の経年比較に加え、15大学を対象として行った2013年度調査 (うち14大学を使用 1,771名：男子674名、女子1,095名) を単年度でも使用する (表8-2)。

表 8-1 使用データ (4時点・経年比較)

大学名	A大学				C大学				D大学				F大学				G大学				J大学				L大学				合計											
設置形態	国立				国立				国立				私立																											
地区	東京				関東				九州				東京				関西				東京				九州															
入学難易度	A				B				B				A				A				C				C															
調査年度	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13	97	03	07	13
N	84	114	84	127	87	117	109	187	147	99	87	114	202	399	337	173	201	433	442	219	114	111	70	95	119	131	146	149	954	1404	1315	1064								
男子	59.5	63.2	60.7	73.2	35.6	23.9	26.0	32.1	41.5	26.3	56.7	38.6	25.7	28.6	24.3	30.1	41.8	35.8	38.5	50.2	49.1	29.7	50.0	29.5	42.0	42.0	43.8	45.6	40.3	34.4	36.8	42.8								
女子	40.5	36.8	39.3	26.8	64.4	76.1	74.0	67.9	58.5	73.7	43.3	61.4	74.3	71.2	75.7	69.9	58.2	64.2	61.5	49.8	50.9	70.3	50.0	70.5	58.0	58.0	56.2	54.4	59.7	65.5	63.2	57.2								
1年	0.0	0.0	0.0	0.8	77.0	70.9	50.3	37.4	35.4	85.9	76.1	26.3	12.4	43.4	24.3	39.3	0.0	21.0	38.5	39.7	0.0	20.7	24.3	0.0	10.9	0.0	53.4	57.7	16.5	32.4	36.7	32.1								
2年	77.4	91.2	86.9	93.7	14.9	20.5	4.1	39.6	44.2	4.0	14.9	31.6	54.0	29.1	44.8	31.2	52.2	36.7	37.1	26.5	46.5	57.7	44.3	76.8	68.9	71.0	28.1	13.4	51.6	40.2	36.3	40.8								
3年	17.9	4.4	6.0	3.1	2.3	4.3	35.5	16.0	12.2	7.1	7.5	21.9	24.8	14.5	21.1	15.0	35.3	36.5	16.1	22.8	44.7	17.1	31.4	20.0	10.1	19.8	11.6	15.4	23.0	19.8	19.1	16.6								
4年	3.6	3.5	3.6	1.6	5.7	4.3	8.9	7.0	6.8	0.0	1.5	19.3	7.9	11.8	8.3	13.3	11.4	5.1	7.5	10.5	8.8	4.5	0.0	4.2	8.4	7.6	6.8	12.8	8.1	6.6	6.8	10.0								
その他	1.2	0.9	3.6	0.8	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	3.0	0.0	0.9	1.0	1.3	1.2	1.2	1.0	0.2	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	1.5	0.0	0.7	0.7	0.9	1.0	0.5								

※無回答は除く  
 ※入学難易度は、代々木ゼミナールのHP記載の2013年度大学入試難易度(偏差値)を使用し、A:60以上、B:59~50、C:49以下とした。  
 学科が複数にわたる場合には、各学科の偏差値の中央値をとった。

表 8-2 使用データ (単年度・2013年調査)

大学名	A大学	C大学	D大学	ホ大学	F大学	G大学	H大学	J大学	L大学	W大学	Z大学	イ大学	ロ大学	ニ大学	14大学	
設置形態	国立				私立											全体
地区	東京	関東	九州	関西	東京	関西	東京	九州	東京	関東	関西	関西	東京			
入学難易度	A	B	B	A	A	A	B	C	C	C	B	C	C	B		
サンプル数	127	187	114	42	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	1771	
性別	男	73.2%	32.1%	38.6%	47.6%	30.1%	50.2%	47.9%	29.5%	45.6%	7.8%	—	50.4%	—	50.7%	38.1%
	女	26.8%	67.9%	61.4%	52.4%	69.9%	49.8%	52.1%	70.5%	54.4%	92.2%	100.0%	49.6%	100.0%	49.3%	61.9%
専攻	人文科学系	36.5%	0.0%	0.0%	7.1%	65.9%	0.0%	32.4%	12.6%	38.8%	0.0%	67.1%	0.8%	0.0%	43.3%	21.5%
	社会科学系	4.8%	0.0%	0.0%	71.4%	4.0%	100.0%	44.7%	77.9%	48.3%	0.0%	26.8%	99.2%	0.0%	50.7%	38.6%
	社会福祉系	0.0%	0.0%	46.5%	0.0%	8.1%	0.0%	16.0%	7.4%	9.5%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.8%	
	教員養成系・教育系・子ども系	27.0%	100.0%	51.8%	7.1%	11.6%	0.0%	6.9%	0.0%	0.7%	99.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	28.5%
	その他	31.7%	0.0%	1.8%	14.3%	10.4%	0.0%	0.0%	2.1%	2.7%	0.0%	6.1%	0.0%	0.0%	4.6%	
学年	1年	0.8%	37.4%	26.3%	33.3%	39.3%	39.9%	35.6%	0.0%	57.7%	0.0%	61.8%	24.8%	0.0%	98.5%	32.6%
	2年	93.7%	39.6%	31.6%	33.3%	31.2%	26.6%	42.6%	76.0%	13.4%	98.0%	29.2%	24.8%	0.0%	0.0%	38.8%
	3年	3.1%	16.0%	21.9%	28.6%	15.0%	22.9%	5.3%	19.8%	15.4%	1.0%	9.0%	26.3%	95.2%	1.5%	18.3%
	4年	1.6%	7.0%	19.3%	4.8%	13.3%	10.6%	15.4%	4.2%	12.8%	1.0%	0.0%	24.1%	4.8%	0.0%	9.8%
	その他	0.8%	0.0%	0.9%	0.0%	1.2%	0.0%	1.1%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	

※入学難易度は、代々木ゼミナールのHP記載の2013年度大学入試難易度(偏差値)を使用し、A:60以上、B:59~50、C:49以下とした。  
 学科が複数にわたる場合には、各学科の偏差値の中央値をとった。

#### 4. 分析結果

##### 1) 将来のライフコース展望の4時点変化

ここでは、1997、2003、2007、2013年の4時点のデータを用いて、大学生のライフコース展望の16年間の変化を確認する。1997、2003、2007年の調査票においては、女子学生に対しては自分自身の将来のライフコースを、男子学生に対しては将来のパートナーに望むライフコースを聞いているため、4時点比較においてはこの設問に対する回答の変化となる<sup>(1)(2)</sup>。

まず、女子学生のライフコース展望の16年間の変化を見てみると、1997年以降、「家庭志向」が上昇の一途をたどっており、一方で「仕事志向」は下降を続けている(図8-1)。これまでも指摘されてきた「家庭志向」の上昇と「仕事志向」の下降という傾向は、2003年、2007年に引き続き、2013年調査でもこの傾向が続いていることが確認された。

また、2007年時点で11.8%であった「相手志向」(パートナーの生き方に合わせる)が2013年では17.9%と増加傾向がみられている。一方、「趣味志向」(自分の趣味を中心とした生活)が下降の一途をたどっている。

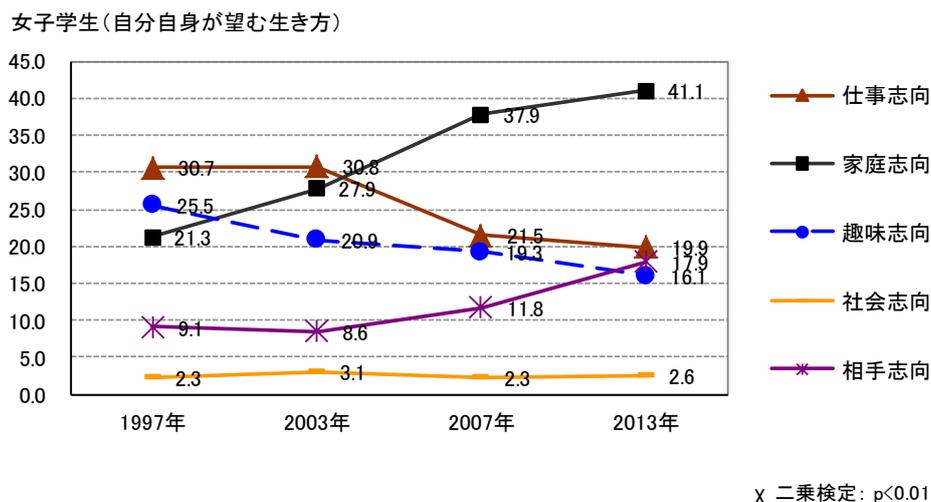


図 8-1 女子学生自身のライフコース展望の経年変化 (1997～2013 年)

次に男子学生がパートナーに望むライフコース展望の 16 年間の変化を見てみると、2003 年以降、パートナーに「家庭志向」を希望する割合がやや増加している (図 8-2)。また、パートナーに「仕事志向」を望む割合もやや低下傾向となっており、2013 年では 1 割以下となっている。経済不況時には男性の共働き志向が増加すると言われているが、大学生においてはそのような傾向はみられない。

しかし、女子学生のライフコース展望が 16 年間で大きな変化があったにもかかわらず、男子学生が望むパートナーのライフコースについては、16 年間で大きな変化はみられていないことは重要な知見であると考えられる。

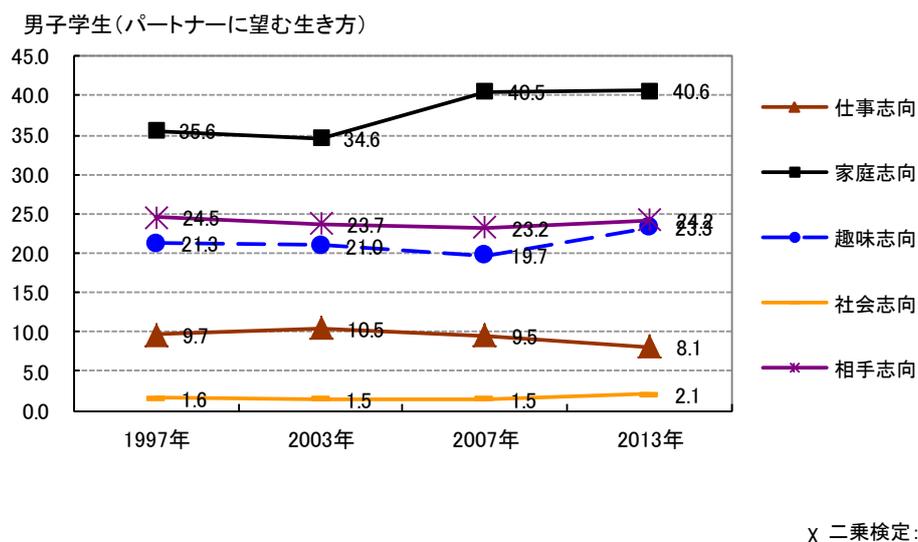


図 8-2 男子学生がパートナーに望むライフコース展望の経年変化 (1997～2013 年)

## 2) ライフコース展望からみる将来のパートナーとの関係性 (2013年データ)

次に、女子学生と男子学生のライフコース展望の関係性を探っていく。2013年調査では、男女ともに、それぞれ自分自身とパートナーに望むライフコースを聞く形式となっているため、ここからは2013年度調査のデータを用いて分析を行うこととする。

### ① ライフコース展望の分布 (男女別)

まず、2013年時点における大学生が将来希望する自分自身のライフコース展望について、男女別にみよ (表8-3)。

女子学生では、家事育児中心の生き方である「家庭志向」が41.4%と最も希望する割合が高くなっている。男子学生では、一生働くことを希望する「仕事志向」が39.6%で最も高くなっている。また、「好きなことをしたい」という「趣味志向」の男子学生も25.2%存在している。

性別で比較すると、「仕事志向」は女子学生よりも男子学生が大幅に上回っており、「趣味志向」も同様の傾向がみられている。一方、「家庭志向」は女子学生のほうが圧倒的に高い傾向がみられる。

表8-3 自分自身が望む将来のライフコース展望 (2013年データ)

	N	女子	男子	合計
一生働き続ける(仕事志向)	470	19.3	39.6	27.0
結婚して家事育児中心(家庭志向)	553	41.4	15.9	31.8
自分の好きなことを(趣味志向)	364	18.3	25.2	20.9
社会活動やボランティア(社会志向)	41	2.2	2.6	2.4
相手の意向に合わせる(相手志向)	272	16.4	14.4	15.6
その他	41	2.4	2.3	2.4
合計	1,741	100.0	100.0	100.0

$\chi^2$  二乗検定:  $p < 0.01$

次に、将来のパートナーに希望するライフコースについてみると、女子学生では相手に仕事中心のライフコースを望んでいる割合が54.3%と最も多い。一方、男子学生はパートナーに「家庭志向」を望んでいる割合が44.1%と最も多くなっている (表8-4)。

性別で比較すると、女子学生の半数以上がパートナーに「仕事志向」を希望しているのに対して、男子学生が「仕事志向」をパートナーに希望する割合は8.1%と1割を切っている。一方、女子学生は将来のパートナーに「家庭志向」を望む割合は13.8%となっているが、男子学生では4割以上がパートナーに「家庭志向」を望んでいる。また、男子学生は女子学生に比べて、パートナーに「相手志向」(結婚相手の生き方に合わせる)を望んでいる割合も高い傾向がみられている。

この結果を見る限り、男女ともに生き方が多様化していると言われている現在においても、「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性別役割に沿ったライフコースを若年世代の男女とも、自分自身でもパートナーに対しても希望しているという傾向がみられることが確認できる。

表 8-4 パートナーに望む将来のライフコース展望 (2013年データ)

	N	女子	男子	合計
一生働き続ける(仕事志向)	622	54.3	8.1	37.0
結婚して家事育児中心(家庭志向)	423	13.8	44.1	25.1
自分の好きなことを(趣味志向)	231	9.9	20.2	13.7
社会活動やボランティア(社会志向)	29	1.6	1.9	1.7
相手の意向に合わせる(相手志向)	339	17.9	24.0	20.2
その他	38	2.6	1.7	2.3
合計	1,682	100.0	100.0	100.0

χ<sup>2</sup> 二乗検定: p<0.01

## ② 自分自身の将来のライフコース展望×パートナーに望むライフコース展望

ここでは、自分自身が希望するライフコース別にパートナーに希望するライフコースについて、男女別に分析を行い、現代の大学生のライフコース展望を男女の関係性という視点から考察する。

まず、女子学生の結果からみてみよう (図 8-3)。

「仕事志向」を希望している女子学生は、パートナーにも「仕事志向」を希望する割合が 69.7% となっており、他のライフコースのカテゴリの中では最も高くなっている。現代の女子学生たちは、自分が働いているからといって、相手に家庭中心の「主夫」的な生き方を求めているのではなく、相手も仕事中心の生活の共働きモデルを希望しているものと考えられる。

「家庭志向」を希望している女子学生は、パートナーにも「家庭志向」を望んでいる割合が 2 割近くとなっており、他のライフコースのカテゴリよりも高くなっている。自分自身も家庭中心の生活を希望しながら、相手にも家庭中心の生活を求めており、例え専業主婦であっても、家事育児は分担してほしいという意識の表れとも解釈できる。

「趣味志向」、「社会志向」、「相手志向」についても、自分自身の希望するライフコースと同じライフコースをパートナーにも希望する傾向がみられており、結婚相手に対しては、同じ価値観のもとで同じ生き方を共にしたいという意識が垣間見られる。

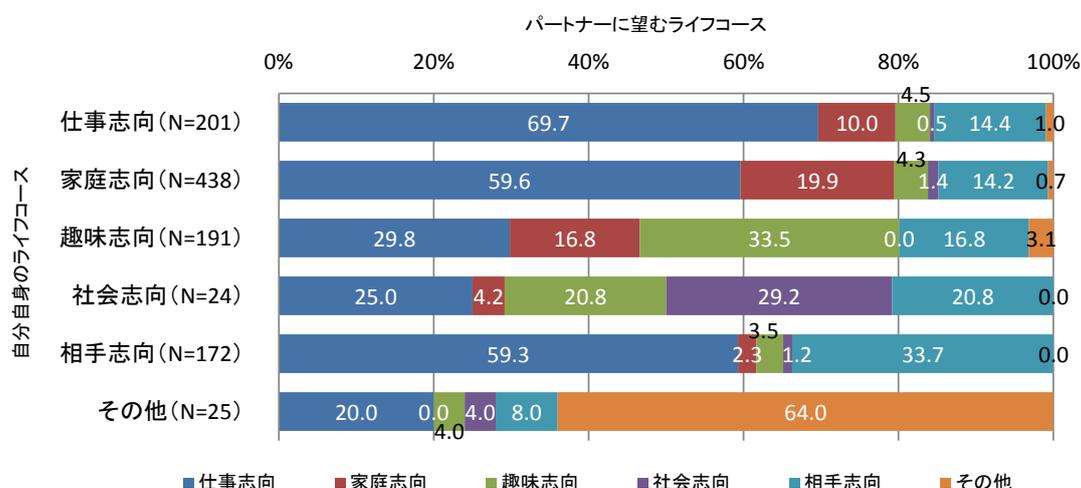


図 8-3 自分自身のライフコース×パートナーに望むライフコース (女子学生)

続いて、男子学生についてみると、共働きモデルを希望している女子学生とは異なり、自分自身が「仕事志向」であるものがパートナーにも「仕事志向」を望んでいる割合は14.1%となっている(図8-4)。他のライフコースのカテゴリと比較すると、相手に「仕事志向」を希望する割合が高い傾向はみられるが、「仕事志向」の男子学生の5割近く葉がパートナーに「家庭志向」を希望している。

「家庭志向」を希望している男子学生については、パートナーに「仕事志向」を希望している割合は5.4%となっており、自身が「専業主夫」的な生き方を希望しているわけではなさそうである。むしろ、相手にも「家庭志向」を希望している割合が63.4%と他のライフコースのカテゴリと比較しても高くなっており、パートナーと共に家庭中心の生き方をしたいと考えているようである。

そのほかのライフコースについても、自分の望むライフコースと同じライフコースをパートナーにも希望している傾向がみられている点については女子学生と同様である。

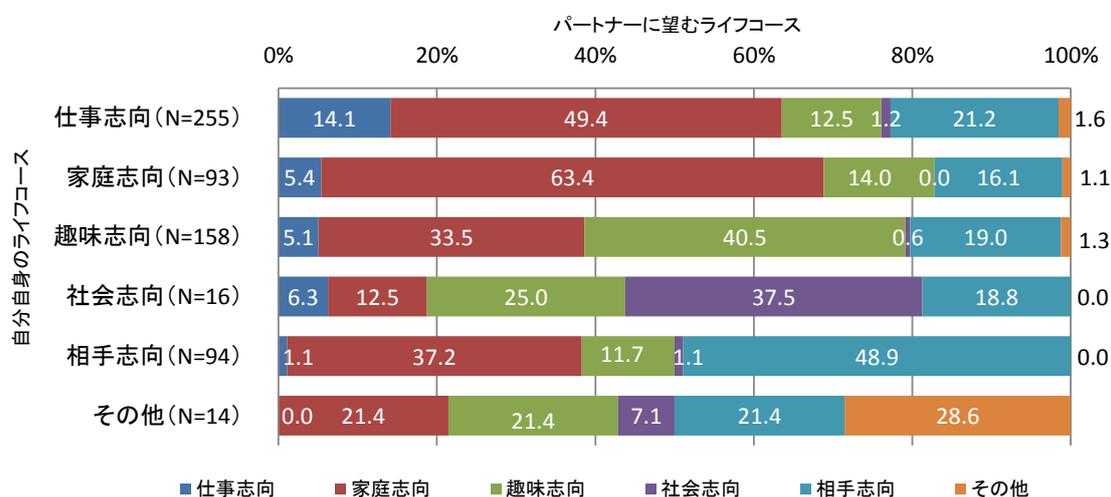


図8-4 自分自身のライフコース×パートナーに望むライフコース (男子学生)

#### 4) 性別役割分業意識との関係

ライフコース展望の分化には性別役割分業意識の影響が先行研究からも明らかにされている。ここでは、2013年時点における大学生の性別役割分業意識とライフコース展望の関係について性別で確認することとする。

##### ① 性別役割分業意識の分布

まずは、性別役割分業意識の分布を性別に概観する(図8-5)。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分業意識に対して、女子学生では81.6%、男子学生では70.1%が「反対」と回答しており、男女とも圧倒的に性別役割分業に「反対」している割合が高く、女子のほうが男子よりも「反対」している割合が10ポイント以上高くなっている。現代の大学生は、旧来からの性別役割分業意識を概ね指示していないという結果となっている。

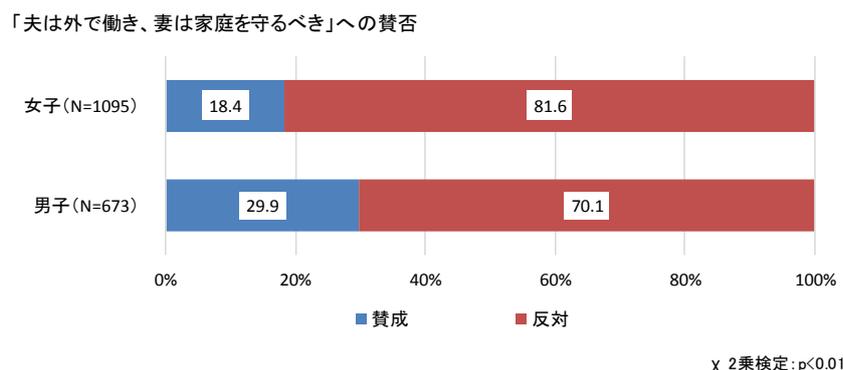


図 8-5 性別役割分業意識の分布 (男女別)

(「賛成」=とてもそう思う+ややそう思う、「反対」=あまり思わない+ぜんぜん思わない)

## ② 性別役割分業意識×自分自身の将来のライフコース展望

続いて、性別役割分業意識への賛否と自分自身の将来のライフコース展望との関係についてみていく (図 8-6)。

まず、男子学生は性別役割分業の賛否による大きな差は見られない。「仕事志向」については、性別役割に「賛成」しているほうが反対しているほうよりもやや多くなっている。

一方で、女子学生には明確な差がみられている。性別役割分業に「賛成」しているものは圧倒的に「家庭志向」が多くなっている。性別役割分業に「反対」しているほうは「賛成」しているほうよりも「仕事志向」を希望する割合が高くなっている。

しかし、よくみると、性別役割分業に反対しながらも「家庭志向」を希望する女子学生が 35.7%と、決して少なくない割合で存在している。この現象は、先行研究でも確認されており、本調査の 2007 年データでもみられたものであるが、「性別役割分業の権利 (= 経済活動の放棄) は受け入れ、義務 (= 家事育児) は放棄する」といった「美味しいところ取り」(多賀 2005、元治・片瀬 2008) の傾向が、2013 年の時点においても継続しているものと考えられる。

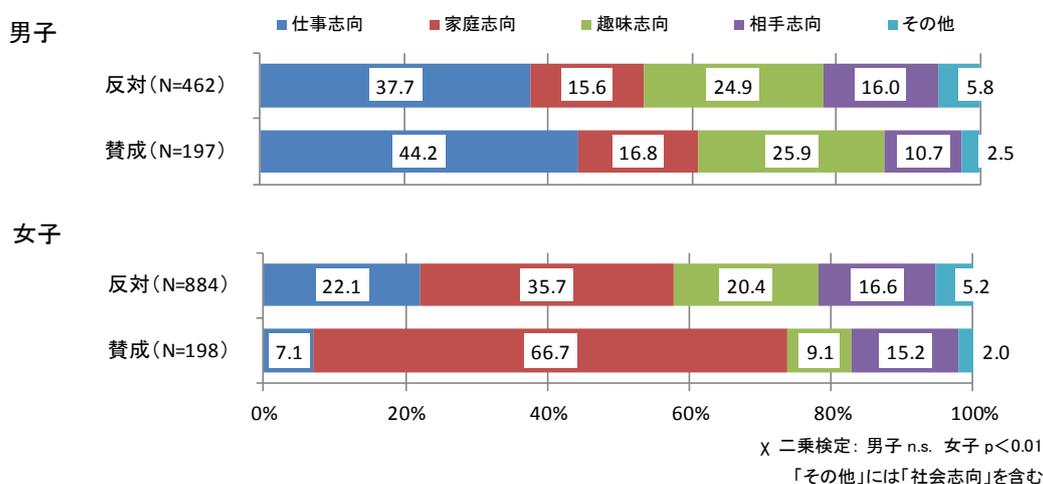


図 8-6 性別役割分業意識×自分自身が希望するライフコース

### ③ 性別役割分業意識×パートナーに望むライフコース展望

それでは、性別役割分業意識とパートナーに望むライフコース展望との関係はどうなっているだろうか。

男子学生では、性別役割分業に「反対」しているもののほうが「賛成」しているものよりも、パートナーに「家庭志向」を希望する割合が圧倒的に低くなっており、家庭以外のライフコースを希望している割合が高いという傾向がみられている。

女子学生においては、性別役割分業に「反対」しているものは「賛成」しているものよりも、パートナーに「仕事志向」を望む割合が低く、それ以外のライフコースを望む割合が高い傾向がみられている。

この結果から、男女とも、性別役割分業意識の賛否によって、将来のパートナーに望むライフコースが異なっていることが確認される。

しかし、ここでも性別役割分業に「反対」でありながら、パートナーに「家庭志向」を希望する男子学生は35.5%ほど存在するという現象がみられており、経済活動の一方的な負担に対しては反対する一方で、家事育児中心のライフコースをパートナーに求めるといった、前述の「いいとこ取り」の意識が、女子学生のみならず、男子学生にも存在する可能性が考えられる。

一方で、女子学生においては、性別役割分業に「反対」しながらもパートナーには「仕事志向」を希望している割合が52.2%となっている。こうした「一生仕事をする」という意識については、性別役割分業意識の賛否にかかわらず、男子学生はパートナーに対して「働かない」ことを希望する反面、女子学生はパートナーが「働かない」ことを希望しないという明確な意識の差がみられている。

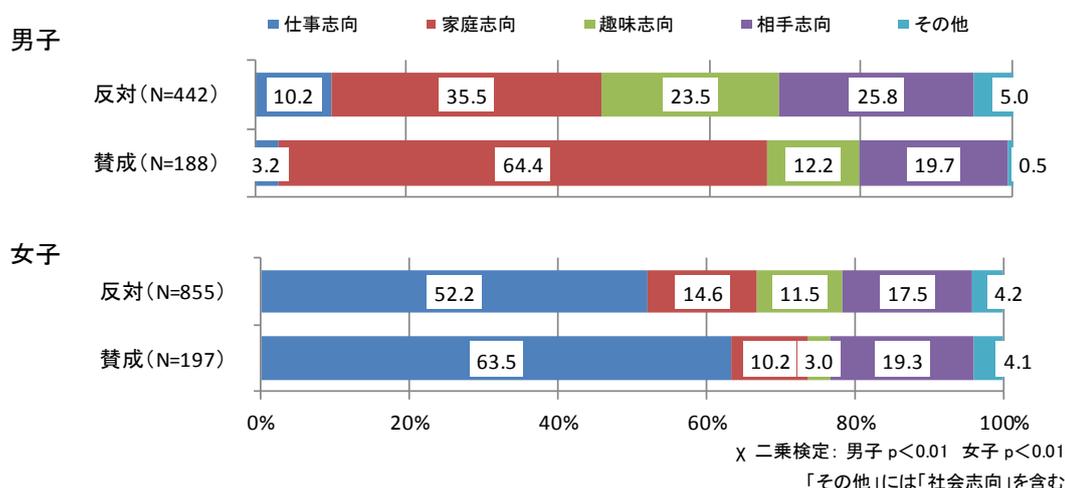


図 8-7 性別役割分業意識×パートナーに望むライフコース

## 5. まとめと考察

本稿では、現代の大学生のライフコース展望について検討してきた。ここで、冒頭で挙げた3つの分析課題に対する知見をまとめる。

一つめの「1997年～2013年における大学生のライフコース展望はどのように変化しているのか」についての特筆すべき知見としては、女子学生の「家庭志向」が、16年間4時

点をとおして高まりつつあることである。大学卒業後の女子学生の就職率は75.8%<sup>(3)</sup>となっており、女子学生の多くが就職する時代である。就職難との関係を指摘する説もあるが、女子学生の「家庭志向」が高まりを見せている調査時点での就職率は決して悪くはない<sup>(4)</sup>。また、2007年、2013年調査の対象となった大学生たちは、初等、中等教育段階でキャリア教育を受けてきた世代でもあり、以前の時代と比べ、幼いうちから「仕事」を意識する機会は多かったのではないかと考えられる。にもかかわらず、女子学生たちが仕事よりも家庭中心のライフコースに魅力を感じるのはなぜなのだろうか。これにはいくつかの仮説が考えられるが、1986年の男女雇用機会均等法施行以降に社会進出を果たした女性たちが、仕事と家庭の両立に苦労している姿を見ながら育ってきていることも無関係ではないだろう<sup>(5)</sup>。就業継続にあたっての家庭内の夫と妻の家事分担のイメージは、現代の女子学生たちにとってどのようなものであるのかも含め、今後も調査を継続していく必要がある。

一方で、男子学生がパートナーに求めるライフコース展望には16年間、目立った変化は見られていない。この16年間の将来展望に対する男女間の意識の変化には、大きな温度差が存在しているものと考えられる。

二つめの「男女間のライフコース展望の関係性はどのようになっているのか」については、パートナーに「仕事志向」を望む女子学生、「家庭志向」を望む男子学生という姿が浮き彫りとなった。女子学生では、自分自身が「仕事志向」であっても、パートナーに「仕事志向」を希望する割合が6割近くとなっており、夫に「専業主夫」ではなく「共働き」を希望している様子がうかがわれている。

三つめの「ライフコース展望と性別役割分業意識との関連はどのようになっているか」については、「夫は外で働き、妻は家庭で家事・育児」といった性別役割分業意識に対して、女子学生の8割、男子学生の7割が「反対」しているという結果となっている。しかし、ライフコース展望との関係性をみても、女子学生は性別役割分業に反対しつつも自分は「家庭志向」を望んでいる割合が35.7%、男子学生で性別役割分業に反対しつつも相手には「家庭志向」を望んでいる割合が35.5%となっており、女子学生においては、性別役割分業の権利(=経済活動の放棄)は受け入れ、義務(=家事育児)は放棄する、男子学生においては、経済活動の一方的な負担に対しては反対する一方で、家事育児中心のライフコースをパートナーに求める、といった「美味しいとこ取り」の傾向もみてとれる。

このように、性別役割分業には否定的な意識を持ちつつも、「家庭志向」のライフコースを希望する女子学生とパートナーに「家庭志向」を望む男子学生といった姿からは、現代社会において専業主婦を養うのは難しいことを考えると、「男女の意識のミスマッチ」というよりは、「希望と現実とのミスマッチ」が将来的に起こることも予想される。

働く女性が当たり前になり、パートナーとの家事分担、育児に積極的な男性を指す「イクメン」というワードが話題になっている現代において、なぜこのような傾向が確認されるのだろうか。女子学生は就職の先の結婚・出産についてはしっかりとイメージしているが、そこに就業継続という展望に「大変さ」のイメージが付きまとい、希望を持つことができなくなっている可能性が考えられる。一方、男子学生にとっては、就職以降のライフイベントはまだ漠然としたイメージしか持たず、就職するところまで、将来展望が止まってしまっているのではないかとということが考えられる。

このような、男女のライフコース展望の関係性の実態から考えると、大学生のキャリア

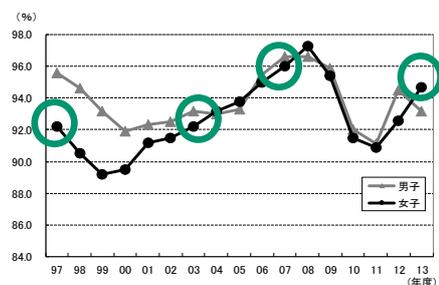
支援の際には男女双方に対して、社会の現実と将来のライフイベント、パートナーとの関係といったライフコース全体をイメージすることができる支援策が必要であるものと思われる。「就職」をキャリア支援、ひいては大学教育のゴールと考えるのではなく、大学生のキャリア展望とジェンダーの関連性を把握し、大学におけるキャリア支援策に取り入れる作業が急務であると考えられる。このようなジェンダーの視点を取り入れたキャリア支援を進めることによって、ジェンダー規範の枠にとらわれない柔軟な人生設計が可能となり、非婚化や少子化といった社会的な問題に対しての突破口となる可能性も出てくるのではないだろうか。

【注】

- (1) ライフコース展望の回答の選択肢は以下のとおりとなっている。  
 「仕事につき一生働き続ける」＝キャリア志向（分析では「仕事志向」）  
 「結婚して家事や子育てを主にした生活を送る」＝家庭志向  
 「自分の趣味や好きなことに打ち込む」＝趣味志向  
 「社会活動やボランティア活動に打ち込む」＝社会志向、  
 「結婚相手の事情や以降に合わせる」＝相手志向、「その他」（書き込み式）
- (2) 1997年から2007年度調査までは、女子学生に対しては自分自身について、男子学生に対しては将来のパートナーについてのライフコース展望を問う形式であった。
- (3) 卒業者に占める就職者の割合。出典は文部科学省ホームページ「平成26年度 学校基本調査（速報）」

([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/houdou/\\_icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350732\\_03.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_icsFiles/afieldfile/2014/08/07/1350732_03.pdf)) 2014年12月20日閲覧。

- (4) 本調査の実施時点と大学生の就職（内定）率（4月時点）の変化については右図のとおりとなっている。女子学生の「家庭志向」が上昇傾向となった2007年、2013年においてはいずれも就職内定率は上昇傾向にあった。



文部科学省・厚生労働省「大学等卒業者の就職状況調査」より

- (5) 各調査時点に調査対象となった大学生の親世代と生育時の社会背景については下表のとおりとなっている。2007年、2013年調査の対象となった大学生の母親世代はちょうど男女雇用機会均等法世代である。

調査年度	97年調査対象者	03年調査対象者	07年調査対象者	13年調査対象者
生年	1975～1979ごろ	1981～1985ごろ	1985～1989ごろ	1991～1995ごろ
年齢 (2014年時点)	34～39才	29～33才	27～31才	19～23才
社会経済状況	バブル景気 (1986～1991年)	小学生～中学生	幼児～小学生	産前～産後
	「失われた10年」 (1992～2002年)	高校生～大学生	中学生～高校生	小・中学生
	景気回復期 (2003～2007年)	20代半ば～30代前後	大学生～20代半ば	高校生～大学生
	マンショック・震災復興 (2008～2013年)	30代前半～30代半ば	20代半ば～30代前半	大学卒業～20代半ば
親の世代 (2013年時点)	60代前半～60代後半くらい	50代後半～60代前半くらい	50代前半～50代後半くらい	40代半ば～50代前半くらい

※1 調査対象者は大学1～4年生が中心であるため、対象者の年齢には4年程度の幅を持たせている

※2 網掛けは調査時点

**【参考文献】**

- ・元治恵子・片瀬一男 2008 「性別役割意識は変わったか -性差・世代差・世代間伝達-
- ・片瀬一男・海野道郎編『失われた時代の高校生の意識』有斐閣、pp.119-142.
- ・武内清 2014 『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社.
- ・中西祐子 1998 『ジェンダー・トラック -青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社.
- ・濱嶋幸司 2002 「女子学生の通過した選抜と将来志向 -高学歴女性の意識文化形成に関する一考察-」『上智大学社会学論集』26号、pp.77-95.
- ・松田茂樹 2005 「性別役割分業意識の変化 -若年女性に見る保守化のきざし」『LifeDesignReport』2009年7月号、pp.16-27.
- ・村田ひろ子 2012 「イマドキ男女の役割分担」NHK放送文化研究所編『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2012』pp.143-163.
- ・谷田川ルミ 2007 「現代の大学生のジェンダー意識」『現代大学生の生活と文化 -学生支援に向けて-』平成16～18年度科研費報告書、pp.58-69.
- ・谷田川ルミ 2009 「伝統的なジェンダー観を支持する女子学生の特性」『上智大学教育学論集』43号、pp.97-110.
- ・谷田川ルミ 2010 「若年女性の家庭志向は高まっているのか -女子学生のライフコース展望における10年間の変化-」『年報社会学論集』第23号、pp.200-211.
- ・吉原恵子 1998 「異なる競争を生み出す入試システム -高校から大学への接続にみるジェンダー分化-」『教育社会学研究』62号、pp.43-67.

## 第Ⅱ部

# 学生文化と学生支援

## 第9章

## 個人化・液状化した社会における「仲間」志向の量的・質的研究

## ——AKB48 と「ONEPIECE」を対象として——

大野道夫 (大正大学)

## 0 はじめに

学生文化を研究するにあたっては、学生に人気がある音楽やマンガなどの文化を研究対象とする文化の社会学の手法が考えられる。本章では特に現代の学生に人気がある文化<sup>カルチャー</sup>として、音楽の分野ではAKB48、マンガの分野ではONEPIECE<sup>ワンピース</sup>を対象とし、前者ではアンケート調査による量的研究、後者ではキャラクターたちをエリクソンの発達論から分析するという質的研究をおこなっていくことにしたい。

## 1 グループアイドルの時代——アンケート調査から分析する AKB48

## 1-1 AKB48 という現象

おにゃん子クラブなどをプロデュースした秋元康が、2005年に秋葉原で誕生させたグループであるAKB48は、最初は観客よりも舞台の上の彼女らの方が人数を多いほどであったが、しだいに社会現象といえるほどの人気をえるようになった。そして2011年には「フライングゲット」で日本レコード大賞を獲得し、12年にも「真夏の Sounds good!」で連続してレコード大賞を獲得したりもした。またテレビ、ラジオのレギュラー番組、CMも多く、さらにはアメリカ、アジアなどへもライブをおこなっている。

そして私のまわりでも、ゼミの学生が握手会に参加したり、また別の大学の運動部の練習ではバックミュージックとして「ヘビーローテーション」を流していたりなど、AKB48は社会現象として学生たちのまわりにあふれている。

ところでAKB48についてはさまざまな週刊誌などでとりあげられているが、社会学の視点から実証的なデータをもちいて分析されているものはあまりみられない。したがって本章では独自のアンケート調査をもとに、学生がAKB48に何を求めているのかについて、実証的に分析していくことにしたい。

## 1-2 アンケート調査からの分析

## 1-2-1 男女ともに、約4分の1がファン

個人的にAKB48について、2010年7月から8月にかけて、3大学の237人へアンケート調査をおこなった。3大学はともに、関東の中堅大学である。個人でおこなったのでサンプルが限られているのはやむをえないところであろうが、他の調査も参考にしつつ、AKB48についての分析をすすめていくことにしたい。

まず「あなたは AKB48 のファンですか」という問いには、「すごくファンである」(5.5%)と「ややファンである」(18.1%)をたして、23.6%がファンであった。それにたいして、「あまりファンでない」は28.7%、「ぜんぜんファンでない」は46.8%であった。

この結果を授業で紹介したところ、「先生、国民的アイドルとしては少ないのでは？」と言った学生もいたが、約4人に1人がファンであるというのは、やはりすごいことである。また特に約20分の1の「すごくファンである」学生は、写真集を買ったり、ライブや握手会に行ったりする者がいる、と考えられる。

また男女差をみると、男女の間で統計学的に意味がある(有意な)差はなかった<sup>(1)</sup>。これは意外な結果かもしれないが、アーキテクト「タレントパワーランキング」(10年8月)をみても、10代では女性のファンが多いが、20代では男女ほぼ同じ数値であり、30代、40代では男性の方がファンが多くなっている。これはやはり、年下や同世代は女性がお姉さんか友だちのようにAKB48を思うのにたいし、年齢が上がるにつれて男性が恋愛の対象やアイドルとしてみていくからではないか、と思われる。したがって大学生でファンに男女差がないのは、実態をあらわした結果と考えられる。

#### 1-2-2 何よりも「がんばって生きている」から応援したい

次にAKB48のイメージを聞くと、「がんばって生きている」(がんばって生きている+ややがんばって生きている)が9割以上(91.6%)と圧倒的に多かった。そしてまたファンであるほど、AKB48は「がんばって生きている」と思っている、という傾向がみられた。このようにほぼ同世代の学生からみてAKB48は、何よりも「がんばって生きている」から応援したい存在、であるようだ。

また「歌やダンスがうまい」(歌やダンスがうまい+やや歌やダンスがうまい)は、約6割(57.8%)であった。これは誰と比較しているかによると考えられ、たとえば日本のPerfume、韓国のKARA、少女時代等と比べれば「歌やダンスがうまい」とは言いがたいかもしれないが、AKB48は人数も多く、むしろダンスなどが多少ずれる場合があるところがカワイイ、とも言える。またAKB48も番組ごとに微妙に振り付けなどを変えたりしており、そのパフォーマンスは決して低くない、と考えられる。

また「性格が良さそう」(性格が良さそう+やや性格が良さそう)は半分弱(45.6%)であった。これは人数がたくさんいるので、「性格が良さそう」に見えるメンバーも見えないメンバーもいるといったところなのだろうか？なおAKBのファンであるほどAKBを「性格が良さそう」と思う、という傾向がみられた。

「身近である」(身近である+やや身近である)は2割強(22.3%)であった。もともとはAKBは、秋葉原の劇場へ行けばライブを観られるアイドルとして、「会いに行けるアイドル」というのがウリであった。しかしミリオンセラーも出して「国民的アイドル」となり、ライブチケットもだんだん手に入れがなくなった調査時点では、さすがに身近なアイドルではなくなっているようである。ただしAKBのファンであるほど「身近である」と思う傾向はあった。またAKBが身近にいたとしたら、「恋人にしたい」よりも、「友だちにしたい」が多く、恋愛対象よりも友人対象、という傾向がみられた。

## 1-2-3 ファンの心理の分析

それでは学生は AKB48 に何を求めているのだろうか？これをさまざまな質問との関係で見られるファンの心理から、分析していくことにしたい。

## ①人とつながりたいというコミュニケーション志向

まずクロス集計を分析してみると、AKB のファンであるほど、人とつながりたいというコミュニケーション志向が強かった。

インターネットの利用については、AKB のファンであるほど、1日平均の携帯電話の使用時間が多い(7時間以上の使用が「すごくファン」(15.4%)>「ややファン」(14.0%)>「あまりファンではない」(4.5%)<「ぜんぜんファンではない」(8.2%) )、そしてメールのやりとりが多い、という傾向がみられた。また AKB のファンは、携帯電話やインターネットが使えなくなったら、「1日で不安になる」者が多かった。またブログや mixi やツイッターで発信する情報は、「その時その時の感情」や「軽い気持ち」ではなく、「本音を話している」者が多かった。

このように AKB のファンの学生たちは、インターネットをひんぱんに、まじめに使う傾向がみられた。

また休日の過ごし方も「外出する」が多く、外向的な傾向がみられた。ただし運動については、「苦手」が多かった。

「子ども時代」をたずねても、「野外での遊び」が多く、具体的には公園、児童館、学校の校舎や校庭、友人の家などでの遊びが多くみられた。また AKB48 のファンは子どものころに遊んだ時間が多く、都会に住んでいた、という傾向がみられた。

このように AKB48 のファンには、子どものころから野外でたくさん遊び、そして今でもインターネットを人より多く、本音で使うという、人とつながりたいというコミュニケーション志向が強かった。ただし「自分の感情を抑えてしまうほうだ」は少なく、「協調性があると思う」も少なく、やや KY (空気が読めない) 傾向もみられるようであった。

## ②明るく、夢を追いたいというアイデンティティ探し志向

次に AKB のファンには、明るく、夢を追っていききたいというアイデンティティ探しの志向が見られた。

まず日常生活において「孤独感を感じることは少なく(孤独感を「常に感じる」が、「すごくファン」(0.0%)<「ややファン」(11.6%)、「あまりファンではない」(11.9%)、「ぜんぜんファンではない」(11.7%) )、そして今の生活について「満足している」が多かった。また自分の性格については、「楽観的だと思う」が多かった。

そして子どものころに「夢があった」者が多く、現在でも「趣味や好きなこと」がある者が多かった。

また就職活動についても、企業には「やりがい」を一番に求め、「希望しない内定先には行かない」、「就職活動に対しての不安は少ない」者が多かった。

このように AKB48 のファンは明るく、楽観的で、また子どものころから夢、やりがいを求めるという、アイデンティティ探しの志向がみられた。

### ③音楽やファッションに関心を持つという若者文化志向

最後に AKB48 のファンには、ファッションや音楽に関心を持つという、若者文化への志向が見られた。

具体的には、「ファッション雑誌をよく買っている」（「毎号買っている」が、「とてもファン」（33.1%）>「ややファン」（18.6%）>「あまりファンではない」（14.7%）>「ぜんぜんファンではない」（9.0%））、そして「ファッションの流行に関心がある」が多く、「好きなアーティストのファッションを参考にする」傾向もみられた。また J-POP、ロック、アイドル系などの音楽を「よく聴く」傾向があった。

このように AKB48 を求めるファンたちは、がんばって生きている AKB に対して、人とつながりたい、一緒に明るく、夢を追いたいという心理をもとに、ファッションや音楽への関心を背景にしつつ、友だちを求めるように AKB を求めている、と考えられる。

このような心理は、コアなファンもいることは否定しないが、もはやオタクの心理ではなく、「国民的アイドル」となった AKB に対する広範な学生の心理ではないか、と考えられる。

## 1-3 現代社会と AKB48 現象

それでは学生との関係における AKB48 現象について、さらに考察していこう。

### 1-3-1 学生側——要求の多様化

まずファンの学生側としては、さまざまな要求が多様化し、一つの大衆から「分衆」化し、「〇〇推し」のように自分だけのアイドルを求める傾向があげられる。

また現代社会は少子高齢化し、身近に姉・妹、娘、そして近所の女の子たちが少なくなってきた。したがって学生たちが女の子のグループにノスタルジー（過去にあったものへの憧れ）を感じるのではないかと考えられる。なおこのような傾向は、学生たちよりやや年上の青年たちに顕著にあらわれる、と考えられる。

### 1-3-2 アイドル側——カリスマが誕生しがたい社会

次にアイドル側を考えてみると、人々の全ての要求をまとめ、満たしていく単独のカリスマが誕生しがたくなっていることがあげられる。たとえば美空ひばりなどは子どものころから芸能界に入って苦勞をし、その歌唱力とともに芸能界で生き抜くカリスマ性を築きあげていった。また昔は写真週刊誌、インターネットなどのメディアも少なく、プライバシーは今ほど明らかにされなかった。

それにたいして現代はプライバシーはすぐに暴かれてカリスマが熟成されがたく、またアイドル側もブログなどで積極的にファンとの交流をはかるようになっている。

このように現代は、神秘的でカリスマ性があるスターは生まれがたく「会いに行けるアイドル」こそが生まれてくるのである。

### 1-3-3 オリコンにみられるアーティストのグループ化

それでは「オリコン（オリジナル・コンフィデンス）」のシングルの売り上げランキン

グから、音楽におけるアーティストのグループ化の変遷を実証的に検証してみることにしよう。

表9-1は、1980年から2010年までの、シングル売り上げベスト20のアーティストの人数の変遷である。表にみられるように、グループでない単独のアーティストは、2005年から5人以下になっている。なおそのような年は1990年代にも少しはあるが、連続した傾向ではない<sup>(2)</sup>。

表9-1 ベスト20のアーティストの人数の変遷

年	1人	2～3人	4～6人	7～9人	10人以上
1980	12	3	2	2	1
1981	16	2	1	0	1
1982	15	3	2	0	0
1983	15	4	0	0	1
1984	12	3	1	4	0
1985	11	1	5	3	0
1986	11	2	5	2	0
1987	14	3	1	2	0
1988	14	0	2	4	0
1989	8	3	7	2	0
1990	7	2	8	3	0
1991	11	7	2	0	0
1992	9	6	2	2	1
1993	5	5	9	1	0
1994	9	5	6	0	0
1995	3	9	8	0	0
1996	7	8	5	0	0
1997	5	8	6	0	1
1998	1	7	11	0	1
1999	8	5	5	2	0
2000	10	3	5	1	1
2001	11	5	2	1	1
2002	10	3	4	2	1
2003	7	7	6	0	0
2004	9	2	8	1	0
2005	3	7	9	0	1
2006	4	4	11	1	0
2007	4	3	9	3	1
2008	2	4	12	2	0
2009	5	4	7	1	3
2010	2	0	11	2	5

なお単独のアーティストとしては、1980年代は中森明菜、松田聖子、90年代は安室奈美恵、そして2000年代は宇多田ヒカル、浜崎あゆみなどがあげられる。

そして10人以上のアーティストは、2009年に3組(全てEXILEで12位の「THE HURRICANE～FIREWORKS～」、14位「THE MONSTER～Someday～」、15位「THE GENERATION～ふたつの唇～」)、そして2010年が5組(全てAKB48で、1位「Beginner」、2位「ヘビーローテーション」、5位「ポニーテールとシュシュ」、8位「チャンスの順番」、12位「桜の栞」)と顕著に増加している。

このように近年、単独のアーティストが減少し、AKB48を中心に10人以上のアーティストが増加するというグループ化の傾向がみられる。

なお10人以上のアーティストはその他には、80年代はシャネルズ、90年代はZOO、J-FRIENDS、そして2000年代はモーニング娘。があげられる。

そのなかでモーニング娘。は、秋元康に対してつくというプロデューサーがおり、大人数の女性のみでのグループで、メンバーチェンジがあるなどの点でAKB48と類似している。ただモー娘。と比較してAKBは、人数がさらに多くなり(したがっているいろいろなメンバーのファンになれる)、ライブを大切に「身近なアイドル」として、より素人っぽく＝芸能人らしくなくなっている(一昔前なら、「クラスにいるカワイイ子」という感じの前田敦子より、より芸能人らしい小嶋陽菜、篠田麻里子らがセンターになっていた可能性があった)。だからAKB48は(今のところ)あまりセクシーな感じがなく、調査でも明らかになったように、「恋愛の対象」より、友だちや妹のような感じとなっている。なお一時はAKB48に押されていたモーニング娘。も、近年はメンバーの歌唱力、ダンス力などを高めて人気を復活させつつある。このようにグループ間においても、後に考察するが「差異化による個々のアイデンティティの明確化」が重要である。

#### 1-4 グループアイドルの時代?

そして人数も多くなり、素人っぽくなっている現代のアイドルであるAKB48は、アイドルのグループ(集まり)という「アイドルグループ」ではなく、グループでいることで、個々の、そして全体のアイドル性が高まるという「グループアイドル」と定義できる。

もちろん調査でもみたように、AKBは個々人が非常に努力をし、歌、ダンスともにそのパフォーマンスは決して低くない。しかしそれをこえて、グループであることによって、1 差異化による個々のアイデンティティの明確化、2 ライバル、友情などのコミュニケーション関係 が生まれてくる。それぞれについて、説明していくことにしたい。

##### 1-4-1 差異化による個々のアイデンティティの明確化

まず「差異化による個々のアイデンティティの明確化」とは、さまざまなメンバーと顔やスタイル、歌唱力、ダンス、キャリアなどを比較、差異化(distinction)することにより、そのアイドルのアイデンティティが明確化されることをいう。

たとえば高橋みなみは、他のメンバーと比べると背が低い、初期からのメンバーとして新しいメンバーを引っ張ってきた、ダンスやファッションも独自のセンスがある、トークもスベるところがおもしろい、などといろいろと他のメンバーと差異化することによって、その個性が際立つことが考えられる。

## 1-4-2 ライバル、友情などのコミュニケーション関係の存在

また「ライバル、友情などのコミュニケーション関係の存在」とは、たとえばファンが投票する選抜総選挙で、第1回は1位前田敦子、2位大島優子だったので、第2回は大島優子に投票した、などが考えられる（もちろん第2回も大島優子に負けないように前田敦子に投票する、というファンもいただろう。いずれにせよライバル関係の存在により、あるアイドルへの思い入れがより強くなるわけである）。

また友情についても、たとえばチームA、チームK、チームBとしてじょじょにデビューしていったメンバー間の歴史をともなつた友情もあるし、ソロデビューをした者を皆で応援するように、AKB48全体としての友情もある。そしてこれらの友情と、そのなかのさまざまなシーンで個々のメンバーがリアルに笑ったり、泣いたりすることが、またそのアイドルのアイデンティティを鮮明にし、ファンの思い入れを強めるのである。そしてグループアイドルのメンバーの人数が増えれば増えるほど、これらのコミュニケーション関係は、増加し、複雑化していくのである。

なおこのグループアイドルの問題点としては、同じようなグループが量産される可能性があること、またメンバーチェンジをして年齢が高くなったメンバーを卒業させるとしても、グループの磁場から離れていった卒業生が一人立ちしてやっていけるのか？ということがあげられる。そしてこのような問題は、近年現実化しつつある。

## 1-4-3 グループに参加しているような 役割実験

そしてさらに学生たちは、このような特徴を持つグループアイドルに対して、「グループに参加しているような 役割実験」を経験できる。

E・H・エリクソンは青年が社会の中でさまざまな役割を遊戯的におこなう役割実験 (semi-deliberate role experimentation) について、それは子ども時代の遊びを引き継いだ「社会的な遊び」であり、青年の自我の発達は、そのような「遊技的な実験」を必要とするようになる、としている。そしてそれは、「正常な場合にはむしろ、その結果、自我の統制力がより有効なものになる諸経験を得ようとする一種の実験である」といい、遊技的な役割実験が青年の自我の発達をより有効にする点を強調している。そして大人がこのような役割実験を「不必要で、不合理なもののみなし、純粹に退行的で神経症的な意味を持つもの」とみなしてはいけない、と力説している<sup>(3)</sup>。

この役割実験はグループアイドルに対しては、メンバーのアイデンティティの特徴を発見する、ライバル、友情などのコミュニケーション関係を体感するなどによって、あたかも自分が、たとえばAKB48の友だちとなっているような疑似体験となる。そしてさらにAKB48の熱心なファンにとっては、リアルに総選挙で投票する（政治の分野でも選挙は国民参加の手段である）、ライブへ行ってミックスという声援などで名前を叫ぶなどによって、より現実の世界のものとしても「体験」できるわけである。

ところでZ・バウマンは、現代社会を近代の流体的な段階であり、「液状化した社会」ととらえられている<sup>(4)</sup>。そこにおいては、たとえば共同体も一時的なものとなり、劇場のクロークのように、公演の前には人々が集まるが、そこで個々の関心が「集团的関心」に

統一されることはなく、公演が終わると雲散霧消する「クローク型共同体」になってしまう、としている。そして現代の学生は、このような共同体も一時的になってしまう液状化した社会の中で、がんばって生きている AKB48 と一緒に、明るく、夢を追おうとしている。そしてその「グループアイドル」としてのさまざまなアイデンティティやコミュニケーション関係を楽しみ、グループに参加しているような「役割実験」をしている。そしてそれが逆に、エリクソンのいう「社会的な遊び」として学生のアイデンティティの発達に有効な影響を与えていく可能性がある、と考えられるのである。

## 2 「仲間」というキーワードと正義が混沌とした社会——エリクソンの発達論による

### 「ONEPIECE」の質的分析

#### 2-1 文化反映論とエリクソンの発達論から

音楽の分野での AKB48 と共に、「ONEPIECE」は、単行本が累計 3 億 2000 万部以上売れているという (2014 年末)、超人気のマンガである。実際に私のまわりでも学生たちが食事をしながらその週のストーリーを回し読みをしたり、卒論のテーマにとりあげて論じたりしている。また大学の若い女性職員も、その子どもも読んでいたりしている。

「ONEPIECE」は少年マンガなので、あまり細かい心理描写などはない。また物語は学園生活などの日常ではなく、海賊たちが宝を探しに航海するという壮大な物語である。そして海賊どうしや、海賊と世界政府の間などでさまざまな闘いが展開され、また闘いの中での、特に悪魔の実を食べた能力者の武器や技などが非常に面白く、さまざまな物語の中へ読者は引き込まれていく。

ただし本章ではあまりそれらの物語のおもしろさに引き込まれずに、学生に人気のある「ONEPIECE」のキャラクターを分析していく。なぜなら文化反映論の視点からすれば、学生に人気があるマンガ、音楽、小説、映画などの文化<sup>カルチャー</sup>には何らかの学生たちの意識が反映されており、したがってその文化<sup>カルチャー</sup>を分析すれば学生の意識が理解できる、と考えられるからである。先行研究としては、たとえば見田宗介の流行歌の分析は、学生を対象としているわけではないが、流行歌を民衆の意識を反映したものととらえ、その社会心理史を長期間にわたって分析している<sup>5)</sup>。

また「ONEPIECE」のキャラクターを分析するにあたっては、エリクソンの発達論をあてはめて分析していくことにしたい。なぜならエリクソンの発達論で分析することによって、それぞれのキャラクターの心理的・発達的問題と、その背後にある歴史的・社会的問題が明らかになることが期待されるからである。なお「ONEPIECE」は現在も連載中だが、本章ではその巻 1 (1997 年)～巻 61 (2011 年)を対象として、分析していく。

## 2-2 忠誠の対象を持つ男性主人公たち

## 2-2-1 アイデンティティの忠誠の対象の存在

まず「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の、ルフィ、ゾロ、サンジという中心的な男性主人公たちのアイデンティティを考察していくことにしたい。

モンキー・D・ルフィは主人公として、海賊王になるというゆるぎない目標を持ち、悪魔の実を食べた能力者として戦闘にも強く、そして仲間を絶対的に信頼するという、いわば青少年マンガにおける理想的なヒーローである。

ロロノア・ゾロも、世界の剣豪になるために、より強いアイデンティティを形成していかうとする。したがって世界最強の剣士ミホークと闘ったときも、たとえ剣を突き刺されても退くよりは「死んだ方がマシだ」と言い、「背中への傷は剣士の恥だ」と言ってあえて正面を向いて切られる。そして、からくも一命を取り留めたあとも、「おれは もう!! 二度と敗けねえから!!!!」 「あいつに勝って大剣豪になる日まで」と叫ぶのである（巻6第51,52話）。

そしてサンジは、コックとして世界中の海の食材がそろっているオールブルーへ行くという大きな目標を持っている。

ところでエリクソンは青年期のアイデンティティ形成において、その核となるような何らかの忠誠（fidelity）の対象が重要であることを、いろいろな論文で書いている<sup>(6)</sup>。そして現代は、なかなか忠誠の対象を見つけにくい社会であるが、これらの中心的な主人公である男の子たち（クールに見えるゾロ、サンジもまた10代である）は、それぞれ海賊王、世界の剣豪、オールブルーという忠誠の対象となるゆるぎない目標があり、それは青少年マンガにおける、古典的だが永遠の理想像である。そしてこれらの中心的な3人の男たちが、仲間となって一緒に船に乗って冒険の海へ繰り出していくことが「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の物語の中心になっているのである。

前述したバウマンによれば、「液状化した社会」の中でのアイデンティティと社会との関係は、かつてのように社会にアイデンティティが「根」を下ろす、あるいは逆にそこから「根絶」される、という関係ではなくなっている。そしてアイデンティティはある港に「錨」を下ろして自らの資格をチェックし、承認してもらい、また「錨」を上げて出港し、次の港に「錨」を下ろして承認を受ける、という関係になる。そしてまさにルフィたちのアイデンティティも、一つの土地に「根」を下ろすことなく、「錨」を下ろしては上げて、航海を続けているのである<sup>(7)</sup>。

## 2-2-2 青少年期の早い段階での決定的な経験

またルフィ、ゾロ、サンジという「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の中心的な男たちは、その忠誠の対象を、それぞれの青少年期の早い段階での体験で決定している。

まずルフィは、海賊の赤髯のシャンクスが、片腕を怪物にかみ切られても少年のルフィ

を助けてくれたことに「こんな男にいつかなりたい」と心から思う。そして「俺はいつかこの一味にも負けない仲間を集めて!!世界一の財宝みつけて!!!海賊王になってやる!!!」とシャンクスに叫び、大切にしている麦わら帽子を預けられる。そしてその10年後の、まずはたった一人での船出から、「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の物語は始まるのである(巻1第1話)。

またゾロも、少年時代に剣道で2001回戦って負けた女友だちが、事故で急逝してしまうという体験をする。そこでその遺体を前にして、「おれ あいつのぶんも強くなるから!!!」、「天国までおれの名前が届くように 世界一強い大剣豪になるからさ!!!」と固く誓うのである(巻1第5話)。

そしてサンジも、海で85日間遭難したときに、全ての食料をサンジに与え、自分は自分の足を食べていたゼフを人生の師匠と定める。そしてゼフと、世界中の海の食材がそろっているオールブルーを見出す、という夢を共有するのである。(巻7第58話)

このように青少年期の早い段階での、我が身を犠牲にしてでも自分を守ってくれた等の人との強いコミュニケーション関係により、ルフィ、ゾロ、サンジたちは、そのアイデンティティの忠誠の対象を決定している。それは「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の物語の中でしばしば死に直面しても、揺らぐことがない。そして彼らが仲間を非常に大切にすることも、その青少年期の早い段階での忠誠の対象を見出すことができた人との強いコミュニケーション関係が原点になっているのである。

## 2-3 女性たちの発達的問題とその克服

### 2-3-1 ナミの不信感とその仲間による克服

#### 2-3-1-1 義母が殺されたことによる不信感

これらの男性たちのアイデンティティと比べると、女性のアイデンティティはより複雑である。まずナミは、海賊専門の泥棒としてルフィの前に姿を現すが、ルフィを縛って敵に手渡したり(巻2第9話)、宝を全部持って逃げたりする(巻6第49話)。そして追ってきたゾロに「これ以上私に関わると 死ぬわよ!!!」(巻8第71話)といい、それでも「お前はおれの仲間だろ」というルフィに、「仲間?!?笑わせないで くだらない助け合い(……)の集まりでしょ?」と冷たく突き放すのである。

実はナミは、幼いときに自分がいたばかりに義母ベルメールが、海賊に払うお金が足りなくなると殺されしまうという過酷な体験をしている。そこで「私が誰かに助けを求めたら……また人が傷つくから……!!」(巻9第79話)とかたくなに思い、仲間をつくらずに一人でお金を貯め、故郷の村を守るために買いとる、と心密かに誓っていたのである。

これはエリクソンの八つの発達段階論に示される発達の問題でいうと、第1の発達段階である幼児期の「信頼対不信」の問題にあたる<sup>8)</sup>。そこでは子どもが、お腹がすいた時、おしめが濡れている時などにおける保護者からの適切な世話により、アイデンティティの基礎となるような他人や自分に対する「信頼」感を持つようになる。そしてそれがうまく形成されない場合は、他人や自分に対して「不信」感を抱いてしまう。そしてナミにおいては自分が原因で義母が殺されてしまうという過酷な体験により、他人や自分に対する深い「不信感」を抱いてしまったのである。

### 2-3-1-2 「仲間」による不信感の克服

それではナミはこの不信感をどのように克服していったのだろうか？それはせつかく貯めたお金を海軍に取られそうになり、ついにルフィたちに「助けて…」と言ったときに、即座に「当たり前だ!!!!」（巻9第81話）と叫んでルフィたちがナミのために命をかけて戦ってくれたことによる。そこでナミも最後には仲間を信頼して「私と一緒に死んで!!!」（巻10第88話）と言い、共に戦ってついに海賊たちに勝利する。そしてルフィに「お前はおれの仲間だ!!!!」（巻11第94話）と叫ばれて「うん!!!」とうなずいて涙をこぼし、航海士として世界地図を描くという新たな目的を持って、ルフィたちと共に航海へ旅立つのである。

このようにナミは、青年期の危機的な状態の最中で、ルフィたちの「仲間」という絶対的な関係により自分の不信感を克服していく。そして世界地図を描くという新たな忠誠の対象も見つけて、海賊専門の泥棒から航海士としてのアイデンティティを形成していくのである。

### 2-3-2 ロビンの罪悪感とその仲間による克服

#### 2-3-2-1 存在そのものが罪という罪悪感

そしてもう一人の女性主人公であるニコ・ロビンのアイデンティティはさらに複雑である。ロビンは最初はルフィたちの敵として現れ、世界政府の海軍大将が「今日までニコ・ロビンの関わった組織は全て壊滅している」（巻34第320話）と告げたりする、謎を秘めた女性であった。そして世界政府に逮捕されてしまうが、ロビンを助けに来た麦わら海賊団を、「何度言わせるの!?私のことは放つといて!!」（巻39第374話）と冷たく突き放すのである。

実はロビンは子どもの時に、禁じられていた「歴史の本文」を研究していた母親たちが政府に皆殺しにされた、という深いトラウマを抱えていた。そして世界でただ一人「歴史の本文」を解読でき、古代兵器を復活できるので、子どものころから賞金がかかったお尋ね者として、どこにいてもやっかい者にされたり、政府に売られそうになったりした。したがって「自分の存在そのものが”罪”」とかたくなに信じ、「私は一緒にいるだけで彼らを傷つける…!!!」（巻39第375話）とルフィたちを拒み続けていたのである。

これはエリクソンの発達の問題でいうと、第3の発達段階である遊戯期の「自主性対罪悪感」の問題にあたる。そこでは子どもたちは現実にかかわっていき、動き回り、遊びの中などで自主性を形成しようとする。そしてその自分らしい活動がうまくいかないときに、自分自身に罪悪感を持ってしまう、というわけである。

#### 2-3-2-2 仲間による罪悪感の克服

そしてこのようなロビンの罪悪感も、ルフィたちが政府に連行されたロビンを追って列車の中の敵と次々と戦い、司法の島を守る者とも戦って、どこまでも仲間としてロビンを救出しようとすることによって克服されていく。

これまでのつらい人生経験から、「いつか私を裏切って捨てるに決まってる!!!それが一番こわいの!!!…………だから助けに来て欲しくもなかった!!!」とかたくなに叫ぶロビンを、

強大な力を持つ世界政府に宣戦布告してまでもルフィたちが助けようとしたとき、ついにロビンは「生きたいっ!!!!」 「・・・!!!私も一緒に海に連れてって!!!」 (巻41 第398話) と叫ぶのである。

このように母親たちを皆殺しにされ、少女のころから賞金首として追われたというあり得ない経験によるロビンの自己への罪悪感も、青年期の危機的な状況の中での、ルフィたちの死も恐れない「仲間」という関係によって克服されていく。そして誰も知らない歴史を解明するという新たな忠誠の対象を見つけ、麦わら海賊団の仲間として一緒に航海に旅立つのである。

## 2-4 他のキャラクターのアイデンティティの発達的問題と仲間による克服

### 2-4-1 チョッパーの自己への恥・疑惑とその克服

#### 2-4-1-1 青っ鼻のしゃべるトナカイとしての恥・疑惑の感覚

トニー・トニー・チョッパーは、自分を受け入れてくれた医師ヒルルクの跡を継ごうとしているトナカイにして医師である。しかし一緒に医師として船に乗って欲しいというルフィたちの誘いを拒み続ける。

それはチョッパーが、青っ鼻のトナカイとしてトナカイ仲間から仲間はずれにされ、さらに悪魔の実(ヒトヒトの実)を食べて人間の言葉をしゃべれるようになったが完全な人の形にはなれず、人間たちからもバケモノ扱いにされたというトラウマによっている。

このようなチョッパーは、エリクソンの発達の問題でいうと、第2の発達段階の早期幼児期の「自律性対恥・疑惑」の問題にあたる。そこでは子どもたちは自分の意思を発揮して体を動かし、身体を自律的にコントロールしようとする。そしてそれがうまくいかないと、自分や自分の身体にたいして恥や疑惑を抱いてしまう、というわけである。

そしてチョッパーも、バケモノ扱いにされた経験から自分の身体に対する恥・疑惑を強く抱いている。したがって初対面のナミに、「おれを見て・・・恐くないのか……………!?!」「おれは・・・トナカイなのに2本足で立ってるし 喋るし・・・」「……………青っ鼻だし・・・」(巻16 第140話) と呟るのである。

#### 2-4-1-2 仲間による恥・疑惑の克服

そしてチョッパーのこの恥・疑惑も、ルフィたちの執拗な仲間としての呼びかけによって克服されていく。「おれは”人間”の仲間でもないんだぞ!!」、「バケモノだし・・・!!」と拒むチョッパーに、ルフィはただ「うるせえ!!!」「いこう!!!!!!」と叫ぶ。この少年のような無邪気さがルフィの持ち味である。

そこでチョッパーは自分を受け入れてくれる仲間の存在を体感して涙を流し、ついに自分に対する恥・疑惑を克服して、医者としてルフィたちと一緒に航海へ出発するのである。

### 2-4-2 フランキーの劣等感とその克服

#### 2-4-2-1 師トムを守れなかったという劣等感

35巻 335話から登場するフランキーは、多くの子分をしたがえたギャングであり、水の都ウォーターセブンの裏の顔である。しかしかつては伝説の船大工トムの弟子として、

腕をみがいていた若者であった。しかし自分がつくった戦艦を悪用されて、師トムが襲撃犯のぬれ衣を着せられて連行されてしまい、それを阻止することができなかった自分に深い劣等感を抱いてしまったのである。

これはエリクソンの発達の問題でいうと、第4の発達段階である学童期の「勤勉対劣等感」にあたる。エリクソンによればこの勤勉は工場で仕事をすることも意味しており<sup>(9)</sup>、フランキーもまさにトムの弟子として、勤勉に働いていた。しかしその自分がつくったまま放置していた戦艦が悪用されてトムが連行されてしまい、フランキーは「自分を不適格であると感じたり、劣等感を抱いたりする」<sup>(10)</sup>という劣等感の状態におちいってしまったのである。

#### 2-4-2-2 麦わら海賊団と共に戦い、共に航海へ

そしてこのフランキーの劣等感も、仲間を助けるために命を賭けて戦う麦わら海賊団と共に、自分も政府と戦っていく中で克服されていく。決してあきらめずに戦っていくルフィたちを目の当たりに見て、フランキーは、「あのおれに力があつたら」「何が何でもトムさんを奪い返したかった……!!!」と回想する。そして「今日までおれはトムさんの死を忘れた事はねェ!」と叫んで敵を倒し、「あいつらのお陰で……おれは思いを遂げた!!」（巻44第423話）というのである。

このように、自分が原因で師トムが濡れ衣を着せられ、それを見殺しにしてしまったというトムの劣等感も、麦わら海賊団と共に敵を倒していくことによって克服されていく。そしてもう一度船大工となることを忠誠の対象として、麦わら海賊団の一員として船に乗り込むのである。

#### 2-5 その他のキャラクターのアイデンティティの特徴

##### 2-5-1 ふつうの人ウソップの弱さを了解しながらのアイデンティティ形成

ウソップは父も射撃の名手の海賊で、それを非常に誇りに思っている。そして勇敢なる海の戦士になることを目指して、麦わら海賊団の一員となって海へと旅立つ。

このようにウソップは、「勇敢なる海の戦士」というアイデンティティの忠誠の対象がある。またルフィの海賊王になるという夢を笑われたときには、「そいづだけは笑わせねェ!!!!」（巻20第186話）と叫んで命を賭けて戦うというように、仲間を大切にし、また仲間からも大切にされている。

しかしまたウソップはしばしば、戦いから逃げたり、死んだふりをしたり（巻10第87話）、強い敵に睨まれて謝ったりしたりし（巻38第358話）、「勇敢なる海の戦士」というアイデンティティが拡散（diffusion）する場合がある。しかしまた、敵から逃れようと死んだふりをしていたが「今ここで全力で戦わなかったおれに」「あいつらと本気で笑いあっていいはずがねえ!!!」（巻10第87話）と、再び立ち上がって戦ったりもするのである。

このようにウソップは、少年マンガのヒーローというよりはふつうの人に一番近く、戦いから逃げようとするなどのふつうの人の弱さを持っている。また武器もそれなりに威力はあるが、パチンコによる狙撃である。しかしまたウソップは、一緒に航海をしてきたメ

リー号を廃船にしないためにルフィと決闘をしたり（巻35第331, 332, 333話）、決闘に負けて一時麦わら海賊団から離れたときも、（バレバレであるが）仮面を着けて「そばキング」としてルフィたちと一緒に戦い続けたりする、そんなやさしさも持ちあわせている。

このようにウソップは、「勇敢なる海の戦士」というアイデンティティが拡散しようとしていたり、しかしまたそんな自分を否定して、ふたたび戦ったりしている。また「8000人の部下がいる」という決めセリフで自分を過大評価したり、逆に「おれは元から!!!ネガティブだア!!!!」（巻48第461話）と自分をネガティブに評価したりもする。そしてルフィたちのように目標に向かってまっすぐにアイデンティティ形成をするのではなく、ふつうの人のような弱さを了解しながらの、ゆるやかなアイデンティティ形成をおこなおうとしている。そのような点でもウソップは、等身大のふつうの人として「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の物語に独自の位置をしめており、ルフィたちのようなヒーローについていけない青年や、中年以上に人気があることが考えられる<sup>(11)</sup>。

### 2-5-2 ブルックの音楽家としてのアイデンティティ

その他に麦わら海賊団の仲間としては、ガイコツのブルックがいる。しかしブルックは巻46第442話でやっと登場し、わりとあっさりルフィたちの仲間になっているので、細かい分析は省略することにする。ただブルックも、ルフィたちが仲間として、ブルックの奪われた「影」を取り返してくれ、思い出の唄と一緒に合唱してくれたことなどによって、麦わら海賊団の音楽家としてのアイデンティティを持って一緒に航海することを決意したことは確かである。

### 2-5-3 命をかけて絆を守る動物たちのアイデンティティ

なお「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の中でも特に仲間との約束を守り、絆を守るため時には命も捧げたりするキャラクターは、動物たちに多い。

たとえば犬のシュシュは大好きだった主人の店を猛獣からも死守しようとし（巻2第13話）、鳥のカルーは殴られても鳴いて主人を呼ぼうとはせず沈黙を守る（巻14第120話）。またルフィに助けられたウサギのラバーンは恩返しに命をかけてルフィを守り（巻16第137, 138話）、鳥のファルコンは時限爆弾を抱えて飛び立って自爆し、国を守る。（巻23第208話）、そして鯨のラバーンは、ブルックたちが世界を一周して帰ってくることを、50年も壁に向かって待っているのである（巻50第488話）。

これはやはりマンガの中とはいえあまりに「人間離れ」しており、また時には人との絆を守るため命を落としたりするので、人間ではなく動物として描かれているのではないかと考えられる。

### 2-6 「敵役」たちのアイデンティティの多面性

また「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」には、麦わら海賊団の「敵役」として、多くの他の海賊や政府側

の人間などが登場している。しかし彼らは、俳優の田中邦衛がモデルで、ニヒルで「怖いねェ」などつつぶやき、縦縞の背広などで決めている海軍大将・黄猿のように(12)、どこか憎めなく、愛嬌があるキャラクターとして描かれている。そして彼らは海賊や政府側としての役割に悩み、ルフィたちの味方になったりする者も出てきたりする。

たとえば王国守備隊隊長だったドルトンは、国の政策に愛想が尽きて国と戦うようになる(巻15第136話)。また政府がロビンの母親たちを皆殺しにしたとき、のちに海軍大将となる青雉は「徹底した正義は……時に人を狂気に変える」と言って、少女だったロビンを見逃したりする(巻41第397話)。そして海賊でありながら世界政府に上納金を納め、海軍に協力するはずの王家七武海のくまも、戦いの中でルフィたちを殺したりせず、生かしておいて遠くの島へ飛ばしたりする(巻53第513話)。このようにルフィの「敵役」たちは、さまざまなアイデンティティの多面性を示しているのである。

## 2-7 「ONEPIECE」にみる現代の学生と社会の問題

### 2-7-1 さまざまな発達的問題と「仲間」というキーワードによる克服

このように「ONEPIECE」では、まだまだ紹介しきれないほどの驚くべきほど多様なアイデンティティが登場している。そしてその中心には、忠誠の対象があり、揺るぎないアイデンティティを持つ男性の主人公たちのゾロ、サンジ、そしてルフィが存在している。特にルフィは、その「ししし」という無邪気な笑いとともに、海賊王になるという揺るぎない忠誠の対象がある、永遠の青少年マンガのヒーローである。なおルフィに限らず、

「ONEPIECE」のキャラクターたちはその笑顔がとても魅力的である。それに対して彼らの後に登場したキャラクターたちは、それぞれが、義母が殺されたことによる不信感(ナミ)、自分という存在への深い罪悪感(ロビン)、自己への恥・疑惑の感覚(チョッパー)、師トムを守れなかったという劣等感(フランキー)という発達的問題を抱えていた。そしてこれらの発達的問題が、ルフィたちのどんな敵に対しても仲間を見捨てないという行動にうらうちされた「仲間」というキーワードによって受け入れられ、克服されていくのである。

ところでエリクソンの発達段階論は、漸成的(epi genesis)発達理論であり、その、epi=upon(上に)、genesis=emergence(現れる)という言葉に示されるように、ある発達段階の問題が、それ以降の発達段階にも影響を与える、としている。したがって逆に第5の発達段階である青年期の体験によって、それ以前の段階の危機を克服できる、と考えることができる。たとえばカウンセリングにおいては、カウンセラーが何度も青年期までの体験を掘り下げて、ナミのような場合は義母の死によって一人取り残されたことによる他者への不信という幼児期の発達課題のトラウマを解消していくことが考えられる。

そして「ONEPIECE」では特にルフィが、たとえばナミがルフィたちを追い返そうと「さっさと出ていけ!!目障りなのよ!!!」(巻9第76話)と叫んだときも、聴く耳を持たず

に急に道の真ん中で眠り込んだり、ロビンを助けるために170ヶ国以上が加盟する世界政府の旗をためらわず撃ち抜いたりして、常に「仲間」という絶対的信頼を発信し続けている。そのことによって、それぞれのキャラクターの不安定なアイデンティティが支えられ、その発達の問題が克服されていったのである。

## 2-7-2 目標や仲間を求める現代社会

こうしてナミ、ロビン、チョッパー、フランキーたちは、それぞれの発達の問題を、仲間というキーワードにより克服して、麦わら海賊団に入っていく。そしてこの「仲間」と

いう言葉は、「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」の物語全体のなかの重要なキーワードとなっている。たとえば物語の初めの、巻1の第1話「<sup>ロマンス</sup>ROMANCE <sup>ドーン</sup>DAWN—冒険の夜明け—」でも、海賊シャンクスがルフィがいじめられているのを見て、「どんな理由があろうと!!おれは友達を傷つける奴は許さない!!!!」(1巻第1話)と叫んだりしている。そしてその他にも、「仲間」というキーワードはたくさん出てきており、また動物たちに限らずに、相手を思い、そして相手には告げずに、自分を犠牲にする場面はたくさんみられる。

これは、<sup>カルチャー</sup>文化が人々の意識を反映するという文化反映論の視点からみれば、現代社会においてはルフィたちが持っているような揺るぎない目標が見つげがたく、またなかなかルフィのような仲間も見つげがたいので、人々が<sup>カルチャー</sup>文化にそれを求める、と解釈することができる。

ところでU・ベックは「リスク社会」という観点から、現代社会を分析している。ベックによれば、現代社会は「産業化された近代の生活と思想が準拠している座標系——その座標軸は家族と職業であり、科学と進歩への信仰である——は動揺」<sup>(13)</sup>しはじめ、さまざまなリスクが出現してきている。そして個人化が進行し、たとえば階級や家族から「解放」された個人が労働市場へ放り出され、「あらゆる危険やチャンスや矛盾に満たされた労働市場における自分個人の運命に、注意を向けられるようしむけられた」<sup>(14)</sup>ことになる。このようにベックは、現代社会では家族、職業、「科学と進歩への信仰」などが揺らぎはじめ、労働市場へ放り出された個人が、さまざまなリスク(危険)にさらされていることを指摘している。これはたとえば、学生たちの就職難の問題などとして考えることができる。

しかしまたベックによれば、このような社会ではリスクに対するさまざまな動きも生まれてくることになる。そしてベックは、「若者のサブカルチャーという形態で、社会関係や自分の人生や身体とのつきあい方を実験」<sup>(15)</sup>したりする動きが生まれるとし、「若者のサブカルチャー」におけるさまざまな実験に期待をよせている。

そして学生たちは、ナミやフランキーたちほどではないにせよそれぞれの発達の問題を抱えており、それぞれの心にルフィのような存在を求めて<sup>カルチャー</sup>文化の中を航海しているのではないかと考えられる。

## 2-7-3 役割との距離と正義が混沌とした社会

また「ONEPIECE」の、特に「敵役」のさまざまなキャラクターは、海賊や世界政府などの役割に完全に埋没する役割固着 (role fixation) におちいらずに、役割と自己の内面との間に役割距離 (role distance) をおき、アイデンティティの多面性をみせていた。そして彼らヘルフィと戦うなどの役割を強いる海賊や世界政府も、そしてルフィたち自身も、ともに絶対的な悪や正義としては描かれていない。

たとえば「ONEPIECE」の世界では、非協力的な市民への人殺しを許可されている政府の諜報機関が存在したり、それにたいして「身勝手な……!!正義と名のつく殺しがあつてたまるか!!!」と抗議が叫ばりたりする (巻 36 第 349 話)。

そして世界政府の側も、海軍大将青雉が「正義なんてのは立場によって形を変える——だからお前の”正義”も責めやしない」 (巻 41 第 397 話) と言ったり、また世界政府諜報機関のスパンダム長官が「1000 人の命を救う為に 100 人の死が必要ならば 我々は迷わずその場で 100 人殺してみせる 真の正義にゃ非情さも必要なのさ」 (巻 41 第 409 話) と自分の「正義」を説明しようとしたりしている。

そして囚われてしまった兄のエースを助けに海底監獄に突入したルフィにたいしても、監獄のハンニバル副署長が「何が兄貴を助けるだ!!」「貴様等が海へ出て存在するだけで……!!!庶民は愛する者を失う恐怖で夜も眠れない!!!」という抗議があり、またそれに対して海賊の黒ひげが「やめときな 正義だ悪だと口にするのは!!この世のどこを探しても」「答えはねエだろくだらねエ!!!」と叫ぶ、というシーンが展開されたりする。(巻 56 第 542 話)。そしてそれは、さまざまな正義、神が存在し、それらによってテロや戦争が起こっている現代のグローバル化した社会を反映している。

このように現実のグローバル化した社会を反映した正義が混沌とした世界と、そのなかでさまざまな役割距離を持つとするアイデンティティの多面的なありようも、

「ONEPIECE」の大きな魅力となっている。そうしたなかで世界政府と海賊団との間で勃発した大戦争は、ルフィの幼なじみコピーの、海軍の兵士という役割から距離をおいた (兵士一人一人に……!!帰りを待つ家族がいるのに!!!)「命がも”っただいっ!!!!」 (巻 59 第 579 話) という、一人の人間としての叫びによって終わった。これはさまざまな正義や巨大な組織があるにせよ、小さな一人の人間としての叫びによって戦争も終わらせることができるという作者のメッセージとして読むことができる。

## 3 おわりにかえて——個人化・液状化した社会における「仲間」志向

以上のように本章では、学生に非常に人気がある AKB48 と「ONEPIECE」の量的・質的研究をおこなった。

そして AKB48 に関する量的研究から、大学生たちの、がんばって生きている AKB48 と共に、人とつながりたい、一緒に明るく夢を追いたいという心理を分析した。また学生側からも、アイドル側からも、現代のアーティストが「グループアイドル」化しているこ

とを示した。

また「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」に対するエリクソンの発達論による質的研究から、それぞれのキャラクターの発達の問題を克服していく「仲間」というキーワードの重要性を分析した。そして「<sup>ワンピース</sup>ONEPIECE」には現代の正義が混沌とした社会が反映されており、「敵役」たちも多面的なアイデンティティをもって役割との距離を保っていることを示した。

このように現代の学生は、個人化・液状化した社会の中で、音楽やマンガという<sup>カルチャー</sup>文化の中に「仲間」を求めている、と考えることができる<sup>(16)</sup>。そして彼らがそのような<sup>カルチャー</sup>文化の中に単にオタクとして閉じこもってしまうのか、あるいはベックのいうように「社会関係や自分の人生や身体とのつきあい方を実験」<sup>(15)</sup>し、エリクソンのいうように「遊技的な実験」<sup>(3)</sup>によってアイデンティティを形成していけるかは今後の課題といえよう。

#### <注>

- (1) 本章の、ファンであることと性別などの2つの項目の関係を調べるクロス集計では、煩雑になるので基本的に図表や数値は示さないが、全てその関係が統計的に意味があるかどうかの検定(カイ2乗検定で、95パーセント以上の確率で意味があるかどうかを検定)をおこなっている。
- (2) 93年は坂井泉水がボーカルのZARD(6位「負けなで」、9位「揺れる想い」の2曲がランクイン)を4人グループとし、また中山美穂&WANDS(10位「世界中の誰よりきっと」)を7人グループとしてカウントしている。また95年は2人組のB'z(10位「LOVE PHANTOM」、13位「ねがい」、14位「love me,I love you」、17位「MOTEL」)、4人組のMr.Children(4位「Tomorrow never knows」、5位「シーソーゲーム～勇敢な恋の歌～」、桑田佳祐&で7位「奇跡の地球」、12位「【es】～Theme of es～」)が非常に人気があり、それぞれ4曲もランクインしている。  
98年は2人組のKinKi Kids(8位「愛されるより愛したい」、10位「全部だきしめて／青の時代」、18位「ジェットコースター・ロマンス」)、4人組のSPEED(3位「my graduation」、13位「ALL MY TRUE LOVE」、16位「ALIVE」)、そしてラルク・アン・シエル(7位「HONEY」、14位「花葬」、15位「snow drop」、20位「浸食～lose control～」)が非常に人気があった。  
なおオリコンのランキングなどは、アイドルの変遷を知る上で重要である。ただし作品の質を考えると、売り上げが一番多い曲がそのアーティストの最高の作品かというところ必ずしもそうとはいえず、ピークに行くまでの登り坂における作品の方が良い場合がある。またマンガにしても、おそらく出版社の意向なのだろうが、ここで終わったら作品としては一番いいと言うところで話が終わらずに、同じようなライバル、場面、ストーリーが繰り返されるという、ライバルのインフレのような場合がある。
- (3) E・H・エリクソン(小此木啓吾訳)『自我同一性』誠信書房、1973年、154ページ。
- (4) Z・バウマン(森田典正訳)「5 共同体 クロック型共同体」『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店、2001年。
- (5) 見田宗介『近代日本の心情の歴史——流行歌の社会心理史』講談社学術文庫、1967年。

- (6) (岡堂・中園訳)「忠誠心の意味」『エリクソンは語る』新曜社、1982年、37-38ページなど。
- (7) Z・バウマン (伊藤茂訳)「日本語版への序文」『アイデンティティ』日本経済評論社、2007年。
- (8) なお「信頼対不信」は幼児期の発達課題ではあるが、1 エリクソンの発達段階論の図で、対角線に書かれた発達段階の課題は、上下に空白があることに示されるように、生涯の課題として他の発達段階でも存在していること、2 エリクソンはそれぞれの発達段階の年齢をあまり厳密に定義していないこと、3 その後のエリクソンの発達段階論をもちいた研究でも、年齢は、たとえば青年期を30歳以上とするなど、かなり柔軟にもちいられていること、により、本稿でもエリクソンの発達段階論を
- ワンピース  
「ONEPIECE」のキャラクターに当てはめる場合、その対象年齢をかなり柔軟に考えていくことにしたい。
- (9) 『エリクソンは語る』33ページ。
- (10) E・H・エリクソン (仁科弥生訳)『幼児期と社会 I』みすず書房、1977年、334ページ。
- (11) このように自分の弱さやネガティブな部分を了解しながら、ゆるやかにアイデンティティ形成をしていこうという傾向は、「エヴァンゲリオン」の主人公のシンジや、BUMP OF CHICKEN の歌な
- カルチャー  
どの文化に幅広くみられる。

ワンピース  
そして私も「ONEPIECE」のキャラクターの中で、青少年期ならヒーローとしてサンジなどが一番好きだったかも知れないが、現在はふつうの人ウソップのさまざまな言動が身につまされ、一番共感するのである。

- ワンピース  
(12) 尾田栄一郎『ONEPIECE GREEN』2010年、集英社、357ページ。
- (13) U・ベック (東廉・伊藤美登里訳)『危険社会』法政大学出版局、1998年、17ページ。
- (14) 同、138ページ。
- (15) 同、142～143ページ。
- (16) この点については震災との関係においても、2011年6～7月に関東地方の4つの大学の学生327人におこなったアンケート調査によれば、AKB48のファンほど「被災地以外の場所で、ボランティア活動をした」が多く、また AKB48 および「ONEPIECE」のファンほど、震災後の生き方として「助け合って生きていこう」と思う者が多かった。

<参考文献>

- 『AKB48 総選挙公式ガイドブック』講談社 MOOK、2010年。  
『日経エンタテインメント!』2011年1月号

## 第10章

## 生徒から学生へのキャリア教育の実践 ～教育社会学による学生再生アプローチ～ 「大学生のキャリア」を理解させる授業

鈴木美伸（法政大学特任教員）

### 1 はじめに

小職は日米企業における人材育成業務を経てキャリアカウンセラー（GCDF：Global Career Development Facilitator）の資格取得後、継続学習のために2004年の上智大学コミュニティカレッジに通学した。ここでの教育社会学の学びが、大学生のキャリア研究の領域に足を踏み出すきっかけとなり、その後の大学院進学での研究を経て、現職の大学キャリア教育担当教員となるに至った。

本章は、その経緯において得られた教育社会学（大学生文化研究会）の知見を大学教育現場に取り込んだ実践報告であり、実際の授業<sup>(1)</sup>で用いているレジュメと図表を用いて書き下ろした。大学入学間もない新入生や新任のキャリア教育担当者を読者に想定し、教育社会学の視点から大学キャリア教育を整理して入り口を示しそうという試みである。

多くのキャリア教育は社会で働くための知識やスキルが持ち込まれることが多いが<sup>(2)</sup>、それ故に大学内で身に付けられる「大学生のキャリア」が忘れられがちである。大学には「大学生のキャリア」があり、それは適切な教育と充実した大学生活によって立派に社会でも通用する。ここに大学生を生徒から学生に導くものが大学におけるキャリア教育である、との教育社会的な定義も導き出される。

### 2 大学キャリア教育の教育社会的な視点

2005（平成17）年に社団法人国立大学協会から出された「大学におけるキャリア教育のあり方—キャリア科目を中心に—」は、大学キャリア教育についてよく整理している。この報告の中で着目すべきは図10-1に示した後段（筆者による下線部）の、大学生のキャリアは授業だけではなく学生生活全般から育成されるという文言である。この報告書では本研究会が提唱してきた大学の教育力は「大学力+教員力+職員力+学生力」の総和であるということを明示している。それを図式化したのが図10-2である。

しかしながら、これまでのキャリア教育論議では、授業メソッドである反転学習やインターンシップ等の手法についての論議は盛んなものの、大学生のキャンパスライフ全般をキャリア教育の舞台・素材として十分には扱ってはこなかったのではないだろうか。

## キャリア教育とは

「キャリア教育を、学生(以下院生を含む)のキャリア発達を促進する立場(目的)から、それに必要な独自の講義的科目やインターンシップなどを中核として、大学の全教育活動の中に位置づけられる取り組みであると考え、このようなキャリア教育のねらいは大学の正規の教育活動だけでなく、学生による様々な自発的活動、広く企業等の事業所や地域社会における活動や仕事、家庭生活や交友関係等を通して実現されるものである。」

社団法人国立大学協会 教育・学生委員会「大学におけるキャリア教育のあり方」平成17年12月1日

\* 下線は筆者による。

図 10-1 : 大学キャリア教育の定義

## 大学は、自らの可能性を広げる場

大学の教育力は「大学力+教員力+職員力+学生力」で形成される。故に「大学生のキャリア」は授業だけではなく、課外・学外活動全般を視野に入れると様々な資質が得られる。

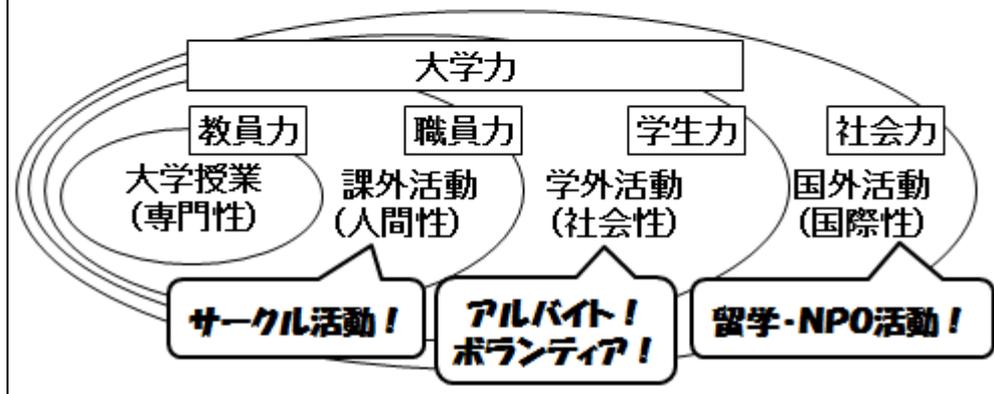


図 10-2 : 大学の教育力

### 3 大学とは、キャリア教育とは

大学キャリア教育を学生が理解するためには、まずは大学とは何かを理解し、そしてキャリアとは何か<sup>(3)</sup>、キャリア教育とは何かを理解する必要がある。ところが大学大衆化時代の現代を生きる多くの若者にとって、大学とは疑問をもたずに入ってしまったものであり、選考した学部も学びたい学問や教員を視点に選ぶ者は少数で、多くの若者は大学に入学してから大学について考え始める（または考えず4年間を過ごしてしまう）。

本来であれば大学選択前の高校時代にこうした教育社会学の領域（大学の歴史等）を学んでおくべきであるが、大学大衆化の時代は学部専攻と職業の結びつきが弱いので、将来の職業を見据えずに選択するのも無理もなく、高校生が「生徒」たる所以であろう。

そこで1年次キャリア教育のガイダンスでは、図10-3のような学問の関係図を示しながら、大学と社会の成り立ちを教えることが第一歩である。こうした各学問の関係や歴史的背景を学べるのも教育社会学なのであり、大学生のキャリアの案内役として最適な理由である。

同時に、各専門分野で指導する教員の盲点になりがちな、学問間の関係を考える機会や、学問間の共通技術（筆者はこれをアカデミックスキルと呼んでいる）に大学生が主体的に気づける機会の提供にもなる。つまり学問を統合して理解するのも大学生のキャリア教育の意義なのである。

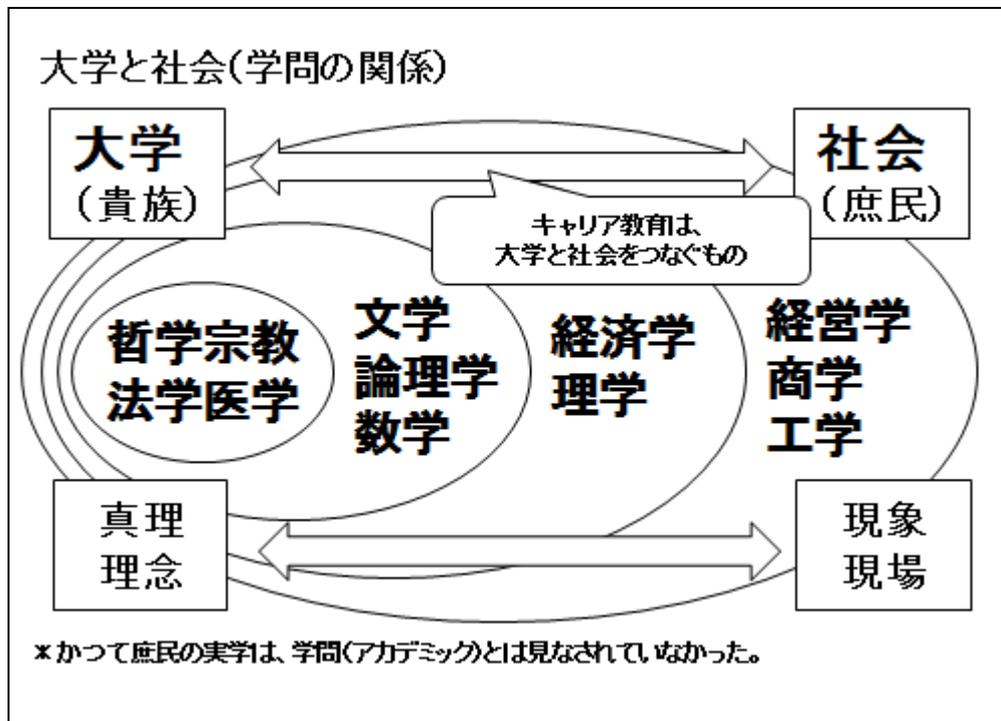


図10-3 : 大学と社会 (学問の関係)

大学のキャリア教育は、1999 (平成 11) 年の中央教育審議会の答申に端を発し、産官学で様々な取組がなされてきたが、2010 (平成 22) 年に大学設置基準にキャリア教育が加わったことにより、大学教育に一気にキャリア教育が展開されたが、まだまだ試行錯誤の段階といえよう。その理由は「大学生のキャリア」が十分に研究されて認知される前に社会的要請 (若年離職率の上昇・無目的フリーターの増加等) の方が顕在化してしまったからである。つまり大学ユニバーサル化による弊害である。

キャリア教育の知見が十分でなかった今ひとつの理由は、図 10-3 のとおり、この分野が伝統的な大学の領域とは縁遠かったことも指摘できる。実社会は多くの伝統的教員には未経験の世界であり、研究が追いつく前に新たな社会現象が発生してくる。故に、ここからキャリア教育とは大学と社会をつなぐもの、という役割と困難さが生まれる。

#### 4 キャリア教育の必要性

キャリア教育の意義を理解するためには、こうした大学の歴史的背景に続いて、21 世紀の大学の現状を重ね合わせて学ぶのが効果的である。最近、一般新聞記事にまで取り上げられるようになってきた教育社会学の知見に米国社会学者マーチン・トロウの大学進学率による分類がある。これに図 10-4 のように大学卒業後の進路選択の変遷をあわせて指導すれば、大学生に現状を理解させると同時に教育社会学の有効性とキャリア教育の必要性を理解させることができる。

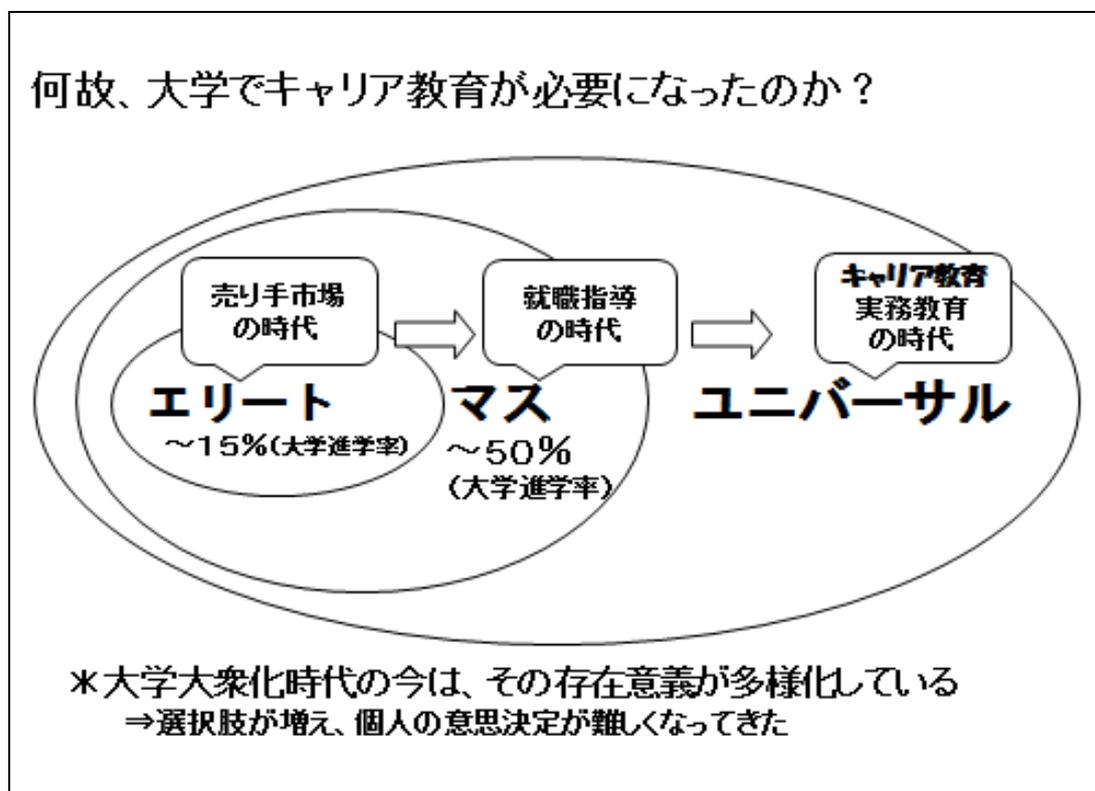


図 10-4 : 大学キャリア教育の必要性

キャリア教育の必要性を学生に更に強烈に理解させるためには、客観的・定量的なデータを見せることも有効である。図 10-5 は学校基本調査のデータから作成したものである(4)。この図で衝撃的なのは、昭和 50（1975）年には 156 万人だった 18 歳人口が平成 20（2008）年には 124 万人までに落ち込んでいるのに対し、進学率の向上から大学生数は、42 万人から 61 万人に増加していることである。大学を卒業しても就職できない学生は 7 万人にもなり、社会問題化してきている。

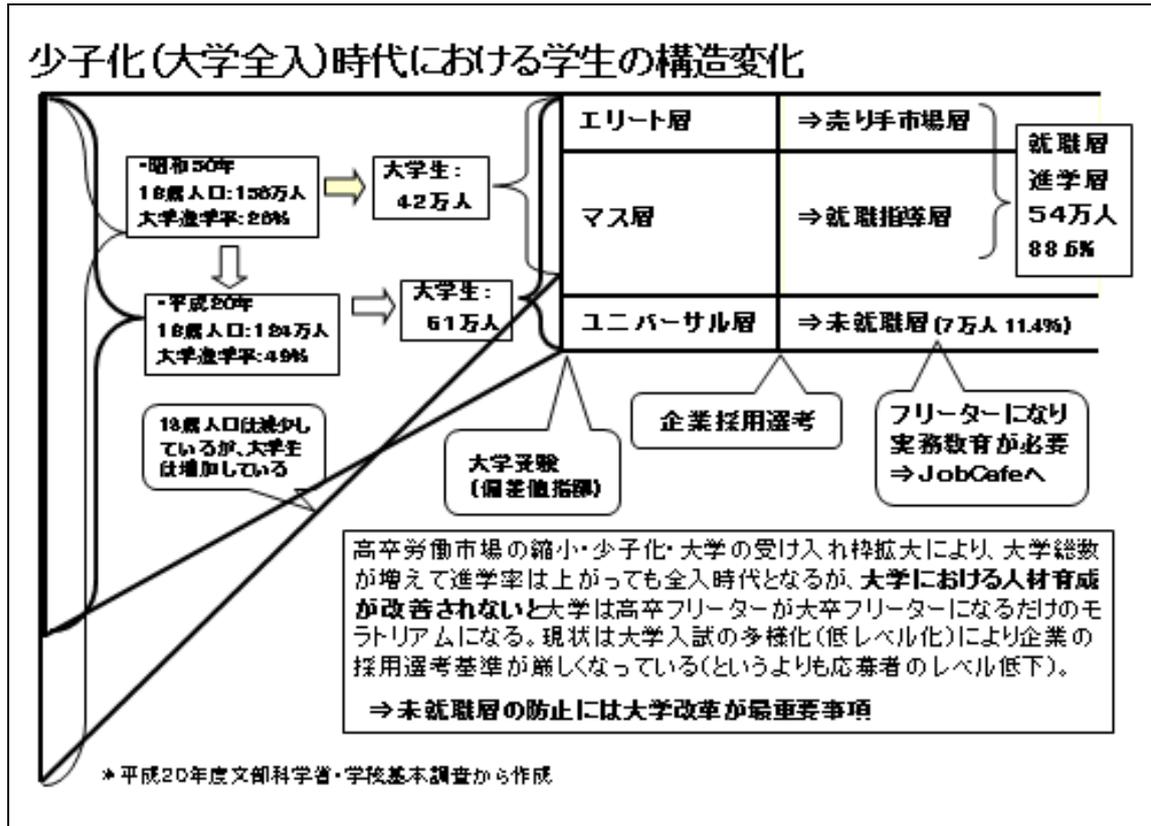


図 10-5 : 少子化（大学全入）時代における学生の構造変化

この背景には、規制緩和による大学の急増（1975 年の約 420 校から現在は約 780 校）がある。企業の求人以上に大学生が増えてしまったのである。勿論、大学生が大学でしっかり学び、大学生としてのキャリアを考えて形成していれば、就職活動ではよほどの大企業ばかりを狙わない限り就職できないことはない。（現状は大学生の急増&多様化により、大学生の就職率を一括りに平均値で語ることは非現実的である。）

高度成長期の時代と現代では大学生が職に求める価値観が大きく変わってきたことも悩ましい課題だ。社会経済生産性本部の働く若者の意識調査(5)を分析している岩間(2009)によると若者の働く目的は「経済的に豊かな生活（リッチ）」「楽しい生活（エンジョイ）」「自分の能力を試す（チャレンジ）」の 3 つが時代とともに変化しており、現在

ではリッチとチャレンジが減少し、エンジョイが突出して高くなってきている。日本の高度成長期にしっかり働いた親の資産をバックに、無理に働かなくても許されるパラサイト生活も可能になったのである。

## 5 大学キャリア教育の整理

このように教育社会学のキャリア教育への知見は、大学生に社会の現状を理解させ主体的な行動をとる、つまり生徒から学生への意識と行動の変換をはかるためには有効である。一方、前述の社会的要請から、その知見が十分に進む前に大学キャリア教育は広範囲に展開してしまい、就職指導にあたるキャリアサービスとの区分も曖昧模糊となってきた。民間人材情報企業やキャリアカウンセラー等、必ずしも大学や大学教育には詳しくないが、就職スキルを指導するサービス等が発展導入され、今の大学キャリア教育は百花繚乱になっている。

そこで拡大膨張を続ける大学キャリア教育を、指導者のキャリアに着目して分類整理したのが表 10-1 である。たとえばリベラル・アーツ系の大学教員は伝統的な大学の一般教養に依拠した教育を行い、愛校心育成の自校教育は母校出身の大学職員や OB 会等が担っている。キャリア教育は大学と社会をつなぐものだという視点からは、多様な指導者が大学授業に登壇することは良いことだ。ここで大切なのは、様々な指導者の知見が展開される場を、正解探しの生徒への情報提供ではなく、多くの知見を統合理解できる学生への成長機会にできているかどうかである。

カリキュラムのタイプ 教育メソッド	育成ポイント	指導者・関係組織
リベラル・アーツ系授業	伝統的 <sup>1</sup> 大学教育	伝統的 <sup>1</sup> 教員
母校の創立精神理解・ 愛校心育成教育	自校理解・愛校心・人間性	学長・理事・職員・同窓会
キャリアカウンセラー系 講義・ワークショップ	自己理解・ライフプラン	キャリアカウンセラー資格 取得者・NPO団体
卒業生・社会人による オムニバス講座	社会・勤労観理解	就職課・卒業生・同窓会
企業人ゲストによる オムニバス講座	業界・企業・職業理解	就職課・学部教員・同窓会
企業の新人研修系 インターンシップ	社会人常識・対人スキル	教育研修民間企業
地域開発系 インターンシップ	社会貢献・産学連携意識	社会学系教員・産学連携推 進室

表 10-1：指導者のキャリアに着目した「キャリア教育」のタイプ

## 6 法政大学のキャリア教育の取組

法政大学にはキャリアデザイン学部をはじめとして、キャリア教育について様々な取組がなされている。小職が取り組んでいるのは文科省の補助金事業(6)で「産学連携 3D 教育プロジェクト」と名付けられており、主な事業は以下の3つである。

1. 社会のニーズに合わせた授業の開発
2. 社会のニーズを理解させるワークショップの実施
3. 大学生のキャリアを測定するアセスメントツールの開発

以下では、1の社会のニーズに合わせた授業について解説する。

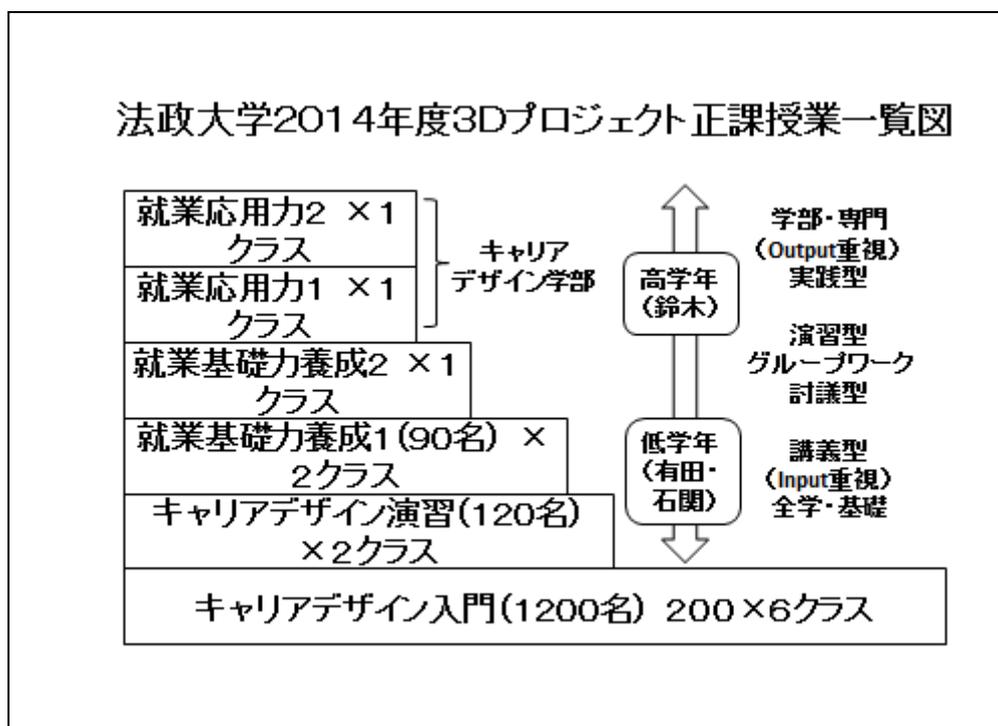


図 10-6 : 法政大学 2014 年度 3D 教育プロジェクトの正課授業群

当事業群は3名の民間企業出身の教員が、市ヶ谷キャンパスを中心に低学年から高学年までを担当している。「大学生のキャリア」を入学時から理解させるための低学年の「キャリアデザイン入門」に始まり、PBL型授業が組み込まれた高学年向け授業が展開されている。低学年ではオーソドックスな講義型授業が中心で学び取る力を育成しているが、高学年になるに従って少人数形式になり分析力・発信力・チームワーク力を求められるワークショップ型の授業になる。いずれも正課授業として単位化されており、段階的に「大学のキャリア」を学び・発揮する力を養っている。

図10-7は、1年生対象のキャリアデザイン入門のシラバスである。特徴的なのは、大学とは何かに始まり、大学生活における学生の様々な舞台（授業・サークル・アルバイト・留学・ボランティア等）をとりあげていることである。参考文献には教育社会学の書籍(7)を紹介し、統計データからも大学生活を客観視できるようにしている。

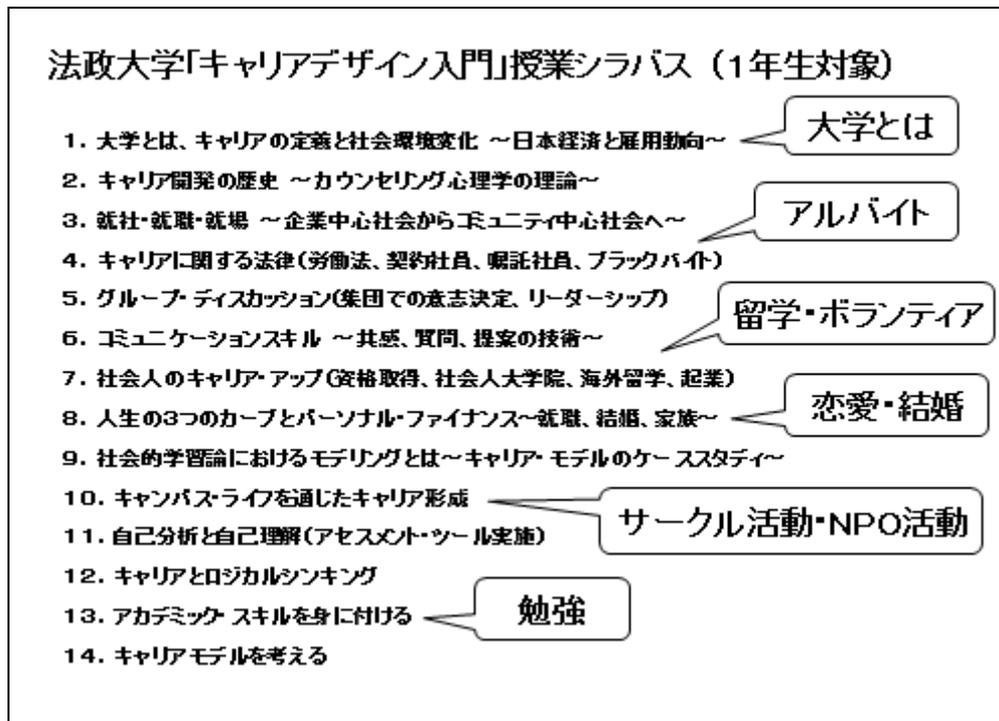


図 10-7：法政大学「キャリアデザイン入門」授業シラバス

授業では毎回、かならずリアクションペーパー（A4用紙で1枚）の記入と提出を求め、良いコメントには翌週の授業で講評しながら解説をしている。リアクションペーパーは多くの大学授業で用いられているが、この授業で工夫しているのは授業後に簡単なコメントを付けて全学生に返却していることである（リアクションペーパーの返却は、前半7回分、後半8回分の2回に分けて行われる）。受講生は返却されたリアクションペーパーを見直し、更にその内容についてのレポート提出を求められる。この作業を通じて、学生は自分自身の成長（または未成長）を客観的に理解できるようになる。遅刻等の時間管理も厳しい授業なので、学期中に脱落する学生もいるが、大学で真面目に学びたい学生には好評(8)である。

この授業の副産物として、こうした真面目に学ぶ学生と学生とが出会える場が今の大学では少ないということがわかった。「この授業を通じて他学部の良い学生と出会えた」という学生の文言に触れる度、今の大学生の行動様式を理解する重要性を感じさせられる。

## 7 学生からの感想

この授業群を受講した学生のリアクションペーパーの中から、生徒から学生への成長を感じさせるコメントについて以下に記載する。（下線は筆者による）

### ▼低学年授業から(キャリアデザイン入門、キャリアデザイン演習)

「大学1年生でキャリアデザインを受講したのは、自分の就職に関してのことを早めに考えてみようと思ったからである。しかしこの授業を受講して、未来を先に考えるよりも、今やりたいことを精一杯やった結果が自分のキャリアにつながっていくということを学びました。」

「大学の中で一番自分のためになる授業だと思います。一年生のうちにこの授業をとることで将来の自分について考えたり、大学生活の過ごし方など基盤を固めてもらった気がします。他の教科を受けて寝ている位なら取っていなくてもこの授業に潜り込むべき！と思うくらいです。」

「この授業は、大学でどのように学ぶか、さらには人生をどのように送るかのヒントをくれる授業です。「授業は単位をとるために仕方なく受けている」という学生が多いですが、そんな意識を変えさせてくれます。」

### ▼高学年授業から(就業基礎力養成 1・2、就業応用力養成 1・2)

#### \*広報の小冊子を作成するワークショップから

「冊子作成の改善すべき点は、企画の段階から教員と生徒で考えるべきだと思う。最初から生徒の意見を汲み上げながら冊子の企画をすれば、より生徒は冊子作成にコミットするであろう。また、教員と生徒が一体となれば、責任感が芽生え、自分たちの力で行ったという自信が付き達成感がより生まれると私は考える。」

「コンセプトや冊子を作る目的が人それぞれで、共有ができていなかった。（中略）だが、コンセプトが共有できた後の各班の活躍は目を見張るものがあり、冊子作成自体も大きく一歩前進した。何よりも皆の迷いが消えたのを実感した。」

「この授業では、机上で受動的に学ぶのではなく、生徒自身が能動的自発的に授業を作っていくもので、そこにはコミュニケーションが自然と生まれてくる。ということは、それらをまとめるリーダーが居ること、板書する人が居ること、意見に賛成する人、さらに情報を与えることというものが自然と役割分担できる。」

「授業ではコンセプトや狙いが決まらず、なかなか作成進行に移れないことがありました。しかし、チームとして一貫したゴールが構築されると、みるみる進行スピードが向上しました。もう一つは、チームであるものの自らが主体性をもって自分がやりたいこともやりたくないことも自分がやるんだという強い気持ちがチームをつくるのだと感じました。（中略）この授業を通して物事に対して主体的に取り組むことができました。」

8 キャリア教育の大学と社会の連続性

さいごに触れておきたいのは、この授業と社会（企業）との人材育成の連続性である。当プロジェクトでも「産学連携」という言葉が使われており、各大学の取組報告(9)を聞くと、多くの大学関係者がこれを課題にあげていた。法政大学のプロジェクトではその課題に大学と企業との共働作業を通じて取り組んでいる。

例えばビデオ教材の共働制作(10)である。実際に企業で起きた仕事の事例を 25 分程度のドラマに映像化し、グループ・ディスカッションの素材にしている。このビデオ教材は企業の新人研修でも使われはじめており、他大学の教員の要望に応じて提供もしている(11)。

こうした工夫を進めていけば、図 10-8 に描いたように、大学と社会（企業）とは若者の育成において連続性をもって取り組むこともできるのである。

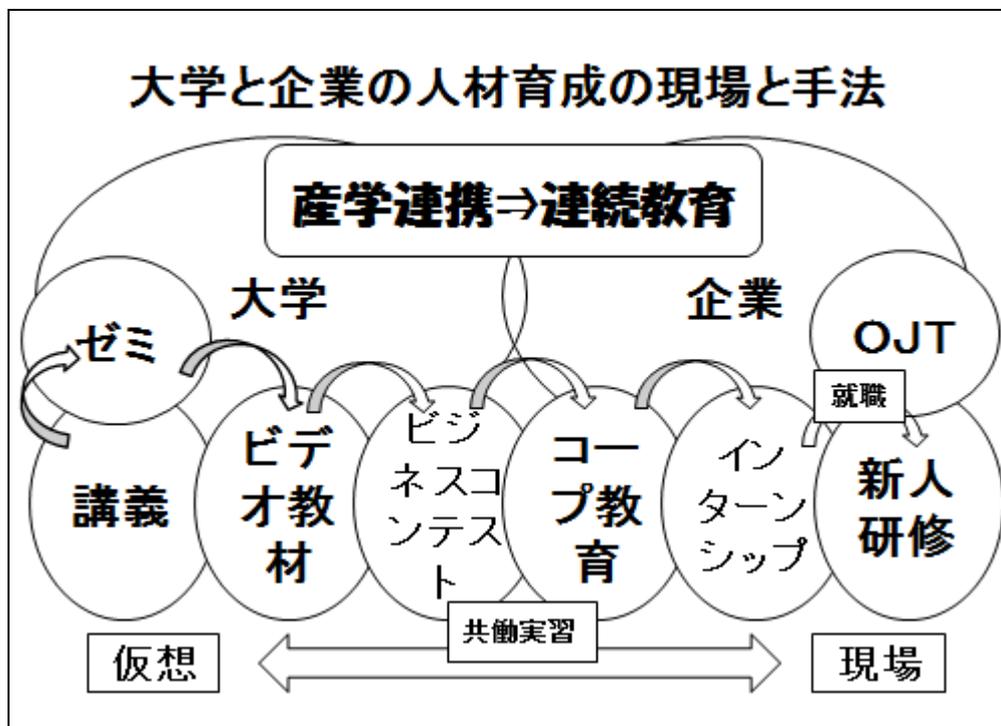


図 10-8 : 大学と企業の人材育成の現場と手法

9 おわりに

2004 年の上智大学コミュニティカレッジに通学し始めた時、なぜこのような教育社会学の素晴らしいデータと分析が社会に活用されていないのかと疑問に思った。指導戴いた武内教授（当時）の言葉を今でも思い出す。「この分野の研究者が居ないからです。」

この小論がその恩師と社会に対するささやかな貢献になれば幸いである。筆者にとってキャリア教育に取り組むことは、筆者を育ててくれた社会への恩返しだと考えるからだ。

<注>

- (1) 法政大学「キャリアデザイン入門」ほか。
- (2) 経済産業省の提唱する社会人基礎力等。
- (3) キャリアについては「キャンパスライフと大学の教育力」平成21年3月を参照。
- (4) 2005年慶應義塾大学産業経済研究所主催のHRM研究会で筆者が報告した資料をアップデートした。
- (5) 昭和46（1971）年から継続的に調査している。
- (6) 文科省平成24年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」  
法政大学産学連携3Dプロジェクトについては以下のサイトURLを参照。  
  
<http://3dep.hosei.ac.jp/>
- (7) 武内清編,2003,『キャンパスライフの今』玉川大学出版部等。
- (8) このプロジェクト教員は法政大学2014年度ベストティーチャー賞を受賞した。
- (9) 平成27年2月6日 文科省報告会。
- (10) これまでに業界別に8本を作成し、ビデオ教材を使った授業の研究会も開催中。
- (11) 平成25年6月7日 日刊工業新聞記事。

<参考文献>

1. 武内清(研究代表),2009,『キャンパスライフと大学の教育力』  
(平成19-21年度文部科学省研究補助金報告書)
2. 武内清編,2003,『キャンパスライフの今』玉川大学出版部
3. 武内清編,2005,『大学とキャンパスライフ』ぎょうせい
4. 潮木守一, 2004,『世界の大学危機』中公新書
5. 谷内篤博,2005,『大学生の職業意識とキャリア教育』勁草書房
6. 金子元久,2007,『大学の教育力』ちくま新書
7. 岩間夏樹,2009,『若者のトリセツ』生産性出版
8. 吉見俊哉,2011,『大学とは』岩波新書

## 第 11 章

公設民営大学<sup>(1)</sup>の公立化に伴う大学生文化への影響

## —名桜大学の事例をもとにした試論—

竺原雅人 (有限会社ソフィアート) (2)

## 1 はじめに

## 1-1 問題意識

大学生文化に影響を与える要因の代表的なものとして「政治状況、経済状況(就職状況等)、社会・文化状況(価値観等)、大学状況(進学率、大学改革等)や若者文化(メディア、遊び、心理等)」などをあげることができる(3)。

また、大学を取り巻く外部要因、とりわけマクロ環境を把握する場合、PEST 分析 (Political : 政治・政策的側面、Economical : 経済的側面、Socio-cultural : 社会文化的側面、Technological : 技術的側面) も有効であろう。

ただし、これらはマクロな要因であるゆえ、個別の大学についての限定的影響にとどまるものではなく、大学全体、あるいは大学類型(「伝統総合大学」、「中堅大学」、「新設大学」)に向けた「共通の」時代的背景として影響を及ぼしていると考えられる(4)。

とはいえ、少子化、低成長時代の中で大学運営の「経営化」が推進され、生き残りをかけて各種ランキングを意識した動きが加速する中で、大学改革は、その設置者、学部学科構成、伝統、立地、規模、偏差値といった外形的特徴や定量的指標に基づく類型では捉えることが困難なほど独自の動きや個性が見られるようになっている。

したがって、大学生文化へのアプローチにおいては、大学類型別の調査のみならず、個々の大学事情に着目したミクロな視点も必要とされよう。各大学における「大学改革」は、その中身が何であれ、たいいてい場合は直接的に当該大学の組織運営、教職員をはじめ、学生に対して当該組織固有の影響を及ぼしていると考えられる。実際、民間企業における経営改革が当該組織成員の思考や行動の変化を促し、固有の企業文化を形成または変革したという事例は枚挙に暇がない(5)。

本稿は、個々の大学における大学改革が学生文化に及ぼす影響に着目し、従来の統計的な調査(時系列の調査や大学間の比較調査)では扱われることの少なかった領域についてアプローチを試みるものである。

まず、大学改革の性質と学生の文化との関係を探るために、大学改革の性質を便宜上、「外からの改革=財政面などハード主導の改革」と「内からの改革=カリキュラム面などソフト主導の改革」に単純に分類してみよう。

**A: 「外からの改革」型** 設置者の変更を伴う財政面の強化に代表されるハードな改革によって、入学者層が従来と大きく変わるもの。具体的には、出身地域など各種学生の属性の変化、学力偏差値や競争率に代表される選抜性の強まりが認められる。

**B: 「内からの改革」型** 個性的なエンロールメントマネジメントの展開やカリキュラム改革、学生支援の充実などソフト主導の改革によって学生の満足度を高めようというもの。入学者層の急激な変化はなく、連続的であるか緩やかな段階的変化が見られる。

表 11-1 大学改革のパターンと入学者層の連続性

	大学改革の特徴	改革の中身など	出身地	選抜性	代表例
A-1	外からの改革	設置者の変更、授業料引き下げ	連続的	連続的	公設民営大学の公立化
A-2	(ハード主導型、財務重視)		非連続	非連続	
B-1	内からの改革	エンロールメントマネジメントの強化	連続的	連続的	嘉悦大学
B-2	(ソフト主導型、支援重視)	カリキュラム改革、各種学生支援サービス	連続的	段階的	共愛学園前橋国際大

本稿では、大学改革の特徴として、「外からの改革（ハード主導型、財務重視）A-2」のパターンを取り上げ、当該大学における改革が学生にどのような影響を及ぼしているのか、その実像に迫りたい。大学の設置者の変更、具体的には公設民営大学の公立大学法人への移管が相次ぐ中、公立化の前後で学生の文化、生態(6)がどのような変化を見せるのか(あるいは見せないのか)について考察する。

### 1-2 転機を迎えた公設民営大学と公立化に伴う変化

2009年の高知工科大学の公立大学法人化以降、2010年の名桜大学と静岡文化芸術大学、さらに鳥取環境大学、長岡造形大学が公立大学化され、今後いくつもの大学の移管が予定されている。しかし、それぞれの大学における学生文化がどう変わっていくのかについては現在進行中のことゆえ、その様子はいかがい知れないのが実情である。公立に移管された大学の多くは、かつて（私立大学時代に）志願者の減少にさらされており、定員割れの常態化がみられるなどの財政的な危機が公立化の契機となっている(7)。これまでのところ、移管後は各大学とも志願者数の増加と経営の安定、受験偏差値の上昇に伴う大学の威信の高まりが認められる(8)。

また、公立化に伴う大学の認知度上昇に伴い、設立母体たる当該自治体以外からの入学者の割合が顕著に増加していることも注目し得る(9)。こうした事実は、公立化の前後において入学者の属性・特性が非連続的であることを裏付けるものである。

しかし、入学者層が変化しようとも、また大学の設置者が移管されようとも、当該大学固有の学生文化は大学の伝統や実績、大学行事、その他の活動を通じて、少なからず引き継がれると思われる。大学ならびに大学生の文化は一朝一夕に変わるものではなく、文化を規定する要素は個人的特性や組織の内部に留まるものではないからである(10)。

現在、各地で私立大学の公立化が議論されているが、こうした改革で期待される成果は、一般に志願者数、経営状態といった目に見える形での投資対効果、すなわちハードな側面に偏重しがちである。反面、肝心の学生の文化、生活がどのように変わったのかは外部からは見えづらい。大学の主役、大学の顧客は学生である。「目に見える成果」を持続させるためには、それを支える大学および大学生の文化や行動様式が必要ではないか。短期的な視点だけで大学改革の成否を論ずることは危険である。

なお、一口に公立化といっても、その後の歩みはさまざまである。従来からの継続性を重視するものもあれば、公立化を機に設置者サイドの要請に基づき、トップマネジメント主導による大胆な改革（経営改革、カリキュラム改革）を行うものなどがある。したがって、一律に公立大学法人化という事実だけで学生文化の動向を説明することはできない。それゆえ、公立大学化した大学という一括りではなく、個別の大学の動向に着目し、大学改革の下で大学生がどのような学生生活を送っているかを把握する必要がある。

本格的な大学淘汰の時代を迎え、今後、ますます設置者の変更や統廃合が加速するものと思われる。また、これまでの例にみられるように大学改革が入学者の属性・特性の転換を招くこともある。こうした中で、本稿では大学改革(=私立大学の公立大学化に限定する)の下で、学生のキャンパスライフがどのように変わるのか、それとも変わらないのかという「連続性と非連続性」(あるいは形成と変容)に注目し、学生の生態や学生が求める支援がどのようなものなのかを探りたい。

### 1-3 取材対象：名桜大学

本稿では、公設民営としてスタートし公立大学法人へと移管された大学のうち、沖縄県にある名桜大学(名護市)を事例として取り上げる。

名桜大学を取材対象とした理由は主に次の 3 つである。

(1) 沖縄県北部に立地するローカル色の強い大学として誕生したが、公立化後は志願者数・入学者数ともに県外、とりわけ九州からの学生が増加し、2014 年の時点では県外出身者が県内出身者を上回るようになった。さらに、公立大学化後に女子学生の割合が急増し、現在、女子学生が過半になっている。このような学生層の「非連続性」の下で、学生文化がどう変わってきたのかを探る事例としてふさわしいと思われる。

(2) 名桜大学においては、看護系(人間健康学部看護学科)を除けば、私立大学時代も授業料を比較的安く抑えていたため、志願者数の増加を説明する要因として公立大学としての「授業料等学生納付金」に大きく左右されにくいと考えられる (11)。

(3) 他地域、とりわけ本土からの物理的な遠さゆえ、県外からの入学志願者にとっては当該地域および大学の情報が少ない。また、帰省費用も嵩み、就職事情も異なる(就職率 75%前後)。こうした中で名桜大学が県外出身者から選ばれる理由、進路選択の実態を把握したい。上掲の事情ゆえ当大学においては、国公立大学志願者に特徴的な「センター試験結果で進学先を決める」割合は高くないかもしれない(12)。

今回の取材調査においては、次の方法によって情報を収集した。

- ① 2014 年 11 月 6 日に実施した名桜大学における教職員 4 人へのインタビュー(13)
- ② 事前に名桜大学に依頼した調査希望項目についての回答(統計資料)
- ③ 名桜大学の大学案内、広報誌、HP 情報、他、一般公開資料、書籍、他大学資料等これらの情報に基づき、当大学の公立化前後の学生像や生活実態にアプローチした。

### 1-4 名桜大学のプロフィール

「名桜大学は 1994 年、沖縄県並びに名護市を中心とする北部 12 市町村によって設立された沖縄県唯一の公設民営の私立大学であったが、2010 年「平和・自由・進歩」の建学の精神はそのまま継承され、公立大学に生まれ変わるようになった。」(14)

大学創設の趣意は「1. 産業振興への対応、2. 教育の機会均等(15)、3. 沖縄北部の地域活性化」の 3 つがあげられている。

開学当初は国際学部のみ単科大学であったが、2001 年に大学院を、2005 年に人間健康学部(スポーツ健康学科)を開設、2007 年 4 月に国際学部を学群・学類制に変更するとともに人間健康学部看護学科を新設している。2014 年 5 月 1 日時点での学生在籍者数は学部・学群が 2,063 人(定員 1,870 人)、大学院 32 人という 2,000 人規模の大学である。

現在の学部・学群は、国際学群（3 年次から観光産業、語学教育、経営などの専攻に所属）、人間健康学部(スポーツ健康学科、看護学科)に大別される。

教員総数は 96 人（2014 年 4 月 1 日現在）で、内訳は教授 36 人、上級准教授 33 人、准教授 13 人、助教 14 人である。職員数は 47 人である(16)。

### 1-5 本稿の構成

名桜大学での取材を中心にして、学生の当大学への入学動機や学生生活の満足度、学生生活の実態に迫り、何がどう変わったのか、変わっていないのかを探ることとする。

以下、関係者へのインタビューをもとに、「公立大学化に伴う入学者・在学者の属性の変化」と「学生生活の実態」(その変化)についてまとめたものである。最後に若干の考察を加えている。

現時点では筆者の問題意識が先行し、実際の取り組みは緒に就いたばかりであるため、公立大学化による学生の変化の実態を把握することをねらうものの、昨今の公立大学化という大学改革と大学生文化との関連を説明できるものではない。

したがって、本稿は、今後の研究への着眼点の発見、あくまでも可能性の追求であり、何がどのように変化し、変化していないのかという実態の確認にとどまるものであることを断っておきたい。

## 2 名桜大学の事例にみる公立大学化の影響

### 2-1 公立大学化に伴う志願者と入学者の変化

公設民営大学として 1994 年に開学した名桜大学は、1994 年の最初の志願者数(創設学部である国際学部～国際学群のみ)は 1,823 人(うち県内が 1,663 人、91%)である。翌年の志願者数は初年度の 71%の 1,294 人となり、3 年目も同水準(1,285 人)を維持したものの、その後、志願者数は減り続け、2009 年春の志願者数は 225 人(うち県内が 181 人、80%)まで落ち込んでいる。入学者は 94 年に 384 人(うち県内 334 人、87%)から 09 年は 180 人(うち県内 150 人、83%)まで減り、厳しい状態であったことがわかる(17)。

しかし、2010 年 4 月の公立大学化とともに志願者数が増え、志願者および入学者に占める県外出身者の割合が急上昇した。入学希望の学生は全国から集まるだけでなく、公立大学化とともに女子学生の比重が高くなり、2014 年 5 月現在、学生総数約 2,063 人のうち女子学生は 1,172 人(56.8%)に達している。ほんの数年前の私立大学時代、男女比がほぼ 2:1 であった(2009 年 5 月時点における女子学生比率は 38.3%) ことから、短期間で大きく変化していることがわかる。公立化以降、「学内の雰囲気は大きく変化した」(18)といわれるが、それを裏づけるものであろう。

表 11-2 は、開設当初からの学部である「国際学部」(2007 年 4 月から国際学群に改組)、への志願者、入学者の内訳である(19)。

表 11-2-1 公立大学化に伴う志願者および入学者の変化 (国際学部、2006 年度まで)

国際学部													
	1994年度	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年
県内志願者(人)	1,663	1,096	1,010	745	474	657	457	417	507	445	439	474	516
県外志願者(人)	160	198	275	231	147	174	92	100	114	108	119	168	76
志願者合計	1,823	1,294	1,285	976	621	831	549	517	621	553	558	642	592
県外者の比率	8.8%	15.3%	21.4%	23.7%	23.7%	20.9%	16.8%	19.3%	18.4%	19.5%	21.3%	26.2%	12.8%
県内入学(人)	334	339	337	347	324	351	317	288	363	342	326	300	344
県外入学(人)	50	68	64	76	65	67	54	65	69	64	71	116	44
入学者合計	384	407	401	423	389	418	371	353	432	406	397	416	388
県外者の比率	13.0%	16.7%	16.0%	18.0%	16.7%	16.0%	14.6%	18.4%	16.0%	15.8%	17.9%	27.9%	11.3%
競争率(倍)	4.7	3.2	3.2	2.3	1.6	2.0	1.5	1.5	1.4	1.4	1.4	1.5	1.5

表 11-2-2 公立大学化に伴う志願者および入学者の変化 (国際学群、2007 年度から)

国際学群								
	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
県内志願者(人)	296	266	181	308	338	351	280	319
県外志願者(人)	49	40	44	127	806	1,041	601	668
志願者合計	345	306	225	435	1,144	1,392	881	987
県外者の比率	14.2%	13.1%	19.6%	29.2%	70.5%	74.8%	68.2%	67.7%
県内入学(人)	241	197	150	224	149	135	131	137
県外入学(人)	31	29	30	46	159	172	171	160
入学者合計	272	226	180	270	308	307	302	297
県外者の比率	11.4%	12.8%	16.7%	17.0%	51.6%	56.0%	56.6%	53.9%
競争率(倍)	1.3	1.4	1.3	1.6	3.7	4.5	2.9	3.3

2009 年までは入学者に占める県外出身者の割合は 11%~28%であり、ほぼ 15%前後で推移している。公立大学化の準備が進む前の 3 年間 (2006 年~2008 年) においては志願者、入学者とも県外出身者の割合が最も低くなっている。そればかりか県内からの志願者数も伸び悩んでいることが明確に読み取れる。

公立大学化した翌年から県外からの志願者数が急増し 2007 年~2009 年の 3 年間の合計に対して、2011 年~2014 年の 3 年間の合計は 18.4 倍になっている。しかし、県内からの志願者数は 2011 年~2014 年まで毎年 300 人前後にとどまっておき、2006 年度以前のどの年よりも少ないという厳然たる事実がある。公立大学化によって県外からの志願者数が伸び、結果として県外からの入学者が過半を占めるようになってきているが、このまま推移すれば過度に県外出身者依存になるおそれもある。現在、県内からの入学者が AO 入試に偏っていることも大学の課題であると考えられる。

表 11-3 年度別志願者数 (全学群/学部)

年度別志願者数(単位:人)											
	志願者数	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	合計
国際学群	県内(北部)	63	64	55	38	76	77	60	53	66	552
	県内(北部外)	453	232	211	143	232	261	291	227	253	2,303
	県外	76	49	40	44	127	806	1,041	601	668	3,452
小計		592	345	306	225	435	1,144	1,392	881	987	6,307
人間健康学部 (スポーツ健康学科)	県内(北部)	14	9	18	16	23	15	13	15	14	137
	県内(北部外)	100	85	87	106	147	112	133	112	94	976
	県外	66	51	36	37	69	381	375	301	287	1,603
小計		180	145	141	159	239	508	521	428	395	2,716
人間健康学部(看護学科) (看護学科)	県内(北部)		38	36	33	83	50	45	33	39	357
	県内(北部外)		188	144	117	410	247	222	174	185	1,687
	県外		18	33	28	71	198	196	84	139	767
小計		0	244	213	178	564	495	463	291	363	2,811
全 体	県内(北部)	77	111	109	87	182	142	118	101	119	1,046
	県内(北部外)	553	505	442	366	789	620	646	513	532	4,966
	県外	142	118	109	109	267	1,385	1,612	986	1,094	5,822
合計		772	734	660	562	1,238	2,147	2,376	1,600	1,745	11,834

表 11-4 年度別入学者数 (全学群/学部)

年度別入学者数(単位:人)		2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	合 計
国際学群	入学者数										
	県内(北部)	45	57	40	33	62	22	30	30	38	357
	県内(北部外)	299	184	157	117	162	127	105	101	99	1,351
	県外	44	31	29	30	46	159	172	171	160	842
小 計		388	272	226	180	270	308	307	302	297	2,550
人間健康学部	入学者数										
	県内(北部)	13	25	40	38	34	26	26	21	27	250
	県内(北部外)	79	140	133	139	132	72	60	62	72	889
	県外	23	27	25	36	33	89	96	101	93	523
小 計		115	192	198	213	199	187	182	184	192	1,662
全 体	入学者数										
	県内(北部)	58	82	80	71	96	48	56	51	65	607
	県内(北部外)	378	324	290	256	294	199	165	163	171	2,240
	県外	67	58	54	66	79	248	268	272	253	1,365
合 計		503	464	424	393	469	495	489	486	489	4,212

表 11-3、および 11-4 は、全学部/学群の公立大学化前後の推移を見たものである(19)。県内からは公立化元年 2010 年からの志願者数が急増しているのに対して、いずれの学部においても県外出身者の動きは 1 年ほどのタイムラグがみてとれる。県内出身者は、地元ゆえ公立化の動きについて関心が高かったと思われるし、県外出身者の場合は、公立大学志望者が確かな情報が入手できるタイミングにズレがあるためと考えられる。

なお、公立大学化に伴う学生納付金の特典(入学金が半額になる)は、北部 12 市町村出身者(以下、「地域内」と略記)だけである(21)。沖縄県内出身者であっても北部以外の出身者については地域外として県外出身者と同じ額が適用される。

志願者および入学者について県内出身者の内訳をみると、圧倒的に地域外(すなわち北部 12 市町村以外)が多い。また、地域内(現在は 7 つの高校がある)からの志願者は、公立大学化の後あまり増えておらず、入学者数はむしろ減っている。これは北部以外の県内出身者も同様の傾向が見てとれる。

なお、県外出身者の分布については大学が発行する「名桜大学の概要」に示されている。「概要」によれば、九州各県からまんべんなく志願者を集めていることがわかる。

在学生(2014 年 5 月 1 日現在)を出身都道府県別にみると、沖縄の 1,007 人に続くのが鹿児島県 134 人、福岡県 87 人であり、総じて九州地区が多く、九州 7 県で約 500 人に及ぶ。本州以北の大都市圏でいえば、東京都 26 人、大阪府 16 人、京都府 17 人に対して、北海道 45 人、静岡県と愛知県がそれぞれ 38 人、広島県 32 人、茨城県と兵庫県がともに 31 人、岡山県 30 人と地方の中堅都市からの入学者が目立ち、飛び地的に学生を集めている実態が浮かび上がる(22)。

入試課によれば、「九州はもちろん、本州では、東京、横浜、名古屋、大阪、福岡をはじめ、広島、岡山、静岡、茨城などでも学校巡りをし、説明会を開いている」ということであつた。地理的に離れている茨城県(在学生 31 人、出身学校 6 校)からの学生が多い理由を尋ねたところ、「茨城からは修学旅行で沖縄に来る人(学校)が多く、沖縄に良いイメージを持っているのではないか」とのことであつた。遠隔地であるゆえ沖縄体験の有無は沖縄の大学への進学という選択肢に進路決定に少なからぬ影響を及ぼしているのかもしれない。

## 2-2 公立大学化の教員への影響

公立大学化は、大学や教職員に対してどのような変化をもたらしたのであろうか。

中里教務部長(教授)にうかがったところ、「教員としての立場で言えば、学生向けの(過剰なまでの)サービスが減った」ということであつた。以前であれば定員割れのリスクが

あったため教員も職員と一緒にあって高校巡りをしていたが、公立大学化に伴う人気化、志願者増によって、教員としてはそうした活動から解放されているということである。

しばしば指摘されるように、学生支援、さらには学生募集といった、かつては主に職員が担うとされていた活動も昨今では教員も一緒にあって行っているところが多いし、学生募集に苦慮する大学に特徴的に見られるが、このあたりの変化が見てとれる。

2012年に公立大学に移管された鳥取環境大学がまとめた資料「公設民営大学から公立大学法人に移行(公立化)した大学」(23)には、先行した3大学の設置者や時期、理由等が記されている。自らの移管計画中に示されたものであり、いずれの大学についてもポジティブな面が書かれており、「志願者が急増」、「県外者比率がアップ」、「学生の質が格段に向上」などは3大学にほぼ共通している。

このほかに、「県財政との関係」、「教職員の処遇」、「公立化後の新たな取り組み」、「大学経営での工夫」、「運営にあたっての設置者との取り組み」等が簡潔に示されている。この中で、教職員に関係の深い3項目を紹介する。ただし、下記No.は引用者による。

(ここでいう3大学とは高知工科大学、名桜大学、静岡文化芸術大学を指し、以下この順で転載する。)

#### (1) 教職員の処遇

「教職員全員を引き継ぐ、給与体系変更なし」(3大学に共通)

#### (2) 大学経営での工夫

「教員の年俸制・任期制、給与に反映する教員評価システム」(高知工大)

「新規採用教員は任期制、キャリア開発委員会が中心となり全学的な就職支援体制」  
(名桜大)

「公募により企業から教員を募集、・就職対策のため3年生全員と面談」(静岡芸大)

#### (3) 運営にあたって設置者との取り決め

「公立化後3年間は85%、その後は90%の定員充足率を確保、総支出に占める人件費比率は50.6%上限」(高知工大)

「運営費交付金は交付税措置額を上限、総支出に占める人件費の目安は55%」(名桜)

「支出額は公立化前の範囲内」(静岡芸大)

この資料からも教員への期待が学生募集から就職活動の支援に代表される在学生の満足度向上にシフトしている様子をうかがうことができる。

### 2-3 公立大学化に伴う学費等納付金の変化と学生募集活動への影響

一般に私立大学が公立大学化することにより授業料が低廉になるが、名桜大学ではどうであろうか。表 11-5 は、学費等納付金について 2009 年度(私立大学の最後の年)と直近の 2014 年度を比較したものである(24)。

表 11-5 学費等納付金の比較

2009年入学者の授業料、入学金等					
学群／学部・学科名	授業料(年額)	入学金	施設拡充費(年額)	諸経費	初年度納付金
国際学群	655,000	125,000	100,000	43,200	923,200
人間健康学部スポーツ健康学科	780,000	125,000	200,000	43,900	1,148,900
人間健康学部看護学科	900,000	125,000	300,000	47,100	1,372,100

2014年入学者の授業料、入学金等					初年度納付金	初年度納付金
学群／学部・学科名	授業料(年額)	入学金(地域内)	入学金(地域外)	諸経費	(地域内)	(地域外)
国際学群	535,800	125,000	250,000	44,660	705,460	830,460
人間健康学部スポーツ健康学科	535,800	125,000	250,000	44,660	705,460	830,460
人間健康学部看護学科	535,800	125,000	250,000	63,300	724,100	849,100

表を見ると、公立化に伴い、人間健康学部とりわけ看護学科の納付金は大きく下がっている(ディスカウント率は38%)が、開設学部である国際学部(現在の国際学群)においては、それほど大きな差がないことがわかる。(地域外の学生／家計にとってディスカウント率は1割ほどである。)この点、2009年度に公立大学化した理工系中心の高知工科大学とは事情が異なる。

公立化に伴う人気上昇の理由を尋ねたところ、「授業料は以前から安く抑えていたので、むしろ公立大学であるという信頼が大きいと思われる」(教務部)とのことであった。

ちなみに、名桜大学と距離的に最も近く、比較されることの多い沖縄国際大学(宜野湾市)の授業料・入学金等をみると、初年度年間納付金は総額で970,120円(全学部学科共通)、うち入学金は120,000円である。文系の学科で比較すると私立大学当時の名桜大学とほぼ同じ水準であるといえよう(25)。

名桜大学志願の理由は次の項に譲るが、入試課では、県外出身者が名桜大学を選ぶ理由として「公立大学を志願している中でセンター入試等を経て、進学先の候補となってきている」と受けとめている。

## 2-4 名桜大学志願の理由

### (1)2014年度入学者の場合

名桜大学では、2014年度の「新入生アンケート」(4月2日実施、新1年生489人対象、回収率は98.6%=482人)で、「名桜大学を受験しようと思った理由」を尋ねている(26)。

全25項目をあげ、「当てはまるもの全てを選択」としているが、県内出身者、県外出身者の上位5つは次のとおりである。(カッコ内は回答総数)

【県内】 ①希望する学部・学科がある(157)、②国公立大学である(153)、③沖縄県にある(123)、④推薦入試・AO入試の制度がある(99)、⑤希望する資格・免許が取得できる(95)、⑥大学のイメージがよい(87)

【県外】 ①国公立大学である(167)、②希望する学部・学科がある(129)、③高校の先生からの薦め(91)、④希望する資格・免許が取得できる(72)、⑤大学のランキング・難易度(偏差値)(66)、⑥受験科目が適切(61)

この結果からは、両者ともに「国公立大学である」と「希望する学部・学科がある」の2項目が高い。その他をみると、県外出身者では「高校の先生からの薦め」が目立つが、県内出身者からは「沖縄県にある」「大学のイメージがよい」が選ばれている。

なお、県内出身者で第4位となっている「推薦入試・AO入試の制度がある」に関して

は、「県内者の一般入試受験者を増やしたい」(総務企画部長)という大学側が認識する課題の裏返しでもあるといえよう。

ちなみに、ある国立大学で、工学部の前期志願者に志願先を決めた時期を尋ねたところ、62%もの志願者が「高 3 のセンター試験以降」と回答したという(27)。はじめに国公立大学志望という動機があり、次いで偏差値に基づいて行先を決める傾向が見てとれる。この事実から、私立大学が公立大学化する場合、志願理由が大きく変わることも考えられる。すなわち、当該大学の個性、たとえば伝統や文化といった要素ではなく、センター試験の結果を参考に進路を定めるという学生が増えることも予想される。

## (2)2001 年度入学者の場合

ところで、名桜大学では 2001 年にも同様の「新入生アンケート」をとっている(28)。単純集計であり、比較が難しい事情もあるが、私立大学時代の貴重な記録のため紹介しておきたい。(2001 年 5 月 1 日時点での学生総数は 1,582 人、内訳は男 1,029 人、女 553 人である。当時は国際学部のみ (28)。)

名桜大学を選んだ理由として、20 項目用意された回答群のすべてについて、「非常に当てはまる=5 点」から「どちらにも当てはまらない=3 点」を中央に置き、「全く当てはまらない=1 点」まで、5 段階で回答してもらっている。

このうち上位をあげると、

- ①卒業生の就職状況(平均 4.1 点)、②希望する学部・学科(4.0)、③施設や設備が充実(3.9)、④推薦入試・AO 入試(3.8)、⑤沖縄県内にある(3.7)、⑥大学イメージ(3.7)と続く。

一方、得点が下位のもの、とりわけ 3 点未満のものは、

- ⑳自宅通学可能(2.2)、⑲他に選択肢がなかった(2.4)、⑱大学関係者の勧め(2.8)である。

この時期はリーマンショックの前であり、就職先として著しくサービス業、なかんずく観光業に偏る沖縄県の就職事情は今よりも恵まれていた面もあるが、「新設大学」としての特徴があらわれているといえよう。

また、同じアンケートで、「あなたが、大学でやっておきたいことは何ですか」として、用意した 13 項目(その他を含む)から 3 つを選んでもらったものがある。もっとも低い「その他」を除いて、上位から 6 項目、下位から 6 項目ずつをあげてみよう。

### 【大学でやっておきたいこと (上位項目から)】

- ①専門的知識(52%)、②コンピュータ技術(44%)、③英会話(41%)、④免許・資格(35%)  
⑤友人関係・恋愛関係(30%)、⑥幅広い教養(29%)、と続く。

### 【大学でやっておきたいこと (下位項目から)】

- ⑫アルバイトをする、⑪海外留学、⑩趣味や特技を磨く、⑨クラブ・サークル活動、⑧人生・生き方を考える、⑦よい条件で就職、と続く。

この結果から、2001 年当時の名桜大学生の入学時の希望を垣間見ることができる。

2001 年調査の回答者の属性は不明であるが、県内出身者が入学者の大半を占めていた時のものである。2014 年調査における「県内出身者」との類似性を認めることはできる。

### 3 名桜大学におけるキャンパスライフの諸相

#### 3-1 女子学生の増加

名桜大学では、2007 年に人間健康学科に看護学科を新設した。2014 年の看護学科への在籍者（全学年合計）を性別にみると、男 69 人に対して女 288 人であり、男女の比率はおよそ 2:8 となっている。しかし看護学科以外の推移も興味深い。私立大学当時、圧倒的に男子の割合が高かった国際学群においても 2011 年~2012 年にかけてその差は一気に縮まり、2013 年度には在籍者に占める男女の割合は逆転している。

したがって、大学の公立化に伴い、県外出身者の増加にとどまることなく、女子学生も増加しキャンパスライフの風景に新たなシーンが加わっている。

#### 3-2 退学者数の動向

次に、退学者の動向も見ておきたい。昨今、新興大学を中心に退学者の増加に悩まされるところが多い(29)。公立化前後の退学者の割合とその変化はどうであっただろうか。

名桜大学の退学率の変化について尋ねたところ、「現在は 2000 人中 70 人弱、率にして 3~4%程度で、私立大学時代は 4~6%程度であった」（総務企画部）とのことである。とくに高いことはなく、また公立化に伴って劇的に変化したわけでないことがわかる。(29) また、「(自主退学以外に)学業不振は除籍対象になるが、その基準は公立化する前と変わっておらず、毎年 20 人程度が親も含めて面談対象となる」（教務部長）とのことで、該当者については、県内だけではなく県外からも親も含めて面談しているという。

なお、退学理由であるが、申請書では経済的事情となっても、実際に面談して聞いてみると、たいていの場合は、「親がお金を出せないといった家計の支払い能力によるものではなく、このままずるずるいてもお金がもったいない」（教務部長）ということであった。

#### 3-3 大学生活の評価—期待と現実—

学生は名桜大学でのキャンパスライフをどう受けとめているのであろうか。また、学生(卒業生)が名桜大学に満足していることとしてどのようなことがあげられるのだろうか。これらに関して、名桜大学では、10 項目からなるアンケートによって入学時の期待と卒業時の満足度を聞いている。(ただし、この結果は「非公表」扱いであるため、筆者が了解を得た範囲での概要の紹介にとどめる。)

満足度のトップ 3 は、①「友人をつくる」、②「ボランティア活動をする」、③「情報活用能力を伸ばす」であり、これらは総じて入学時の期待が高く、卒業時にその期待を大きく上回っている。

反対に、入学時の期待に対して満足度の低かったこととして、「外国語の習得や留学に関するもの」があげられていた。その理由として、教務部では、「留学経験が少ないこと」が影響していると捉えている。

では、こうした現状を踏まえて、大学が認識する課題は何であろうか。

教務部によれば、「留学に関して不足しているのは 2, 3 週間のショートプログラムである」という。現実には 1 年単位の留学ができる人は語学力等の条件もあり、対象も限られているため、名桜大学では、3 年前から「海外スタディツアー」を始めている。学生にとっての身近な海外体験を後押しする企画である。その概要は次に示すとおりである。

＜海外スタディツアーについて＞

- ・教員が 2 人引率者となって、夏休み期間中に 4, 5 日程度、海外を訪問する
- ・今年 4 コース実施。1 コースの定員の目安は 10 人前後（実際の参加は各 7, 8 人）
- ・行先は主に近場のアジア（タイ、マレーシア、ミャンマー、台湾など）
- ・近場を選んでいるのは学生の経済面に配慮するため
- ・学生はこのツアーに備えてアルバイトをする人が多い
- ・このツアーへの参加をきっかけにパスポートを取得する人も多い

海外スタディツアーの視察内容の詳細は省くが、入学者の期待に応えられる体験を目指した取り組みといえよう

海外スタディツアー以外にも、学生課では英語や留学に関する不満解消のために留学生センターの活用を考えているという。全 95 室からなる留学生センターは収容力に余裕があるため地元出身者以外の日本の学生にも交流を目的に入居させているほか、4 月と 10 月には、この施設や大学の寮に住んでいる人だけでなく、広く学生に呼びかけて留学生の歓迎会を開催しているとのことであった。

#### 3-4 名桜大生の特色、傾向についての印象

大学生文化研究会では、いくつかの調査を通して、特に新興大学における「学生の生徒化、大学の学校化」を裏付けているが、実際に名桜大学で教鞭をとっている教員は、授業中の学生の態度や授業風景からどのようなことを感じているのであろうか。

名桜大学の学生の特徴について、中里教務部長(国際学群教授)に聞いたところ、「学生は素直で、中にはスマホをしている人もいるが、まじめな人が多い。たいていの授業で出席をとっていることも影響しているかもしれない。先日、あるフォーラムの講演会が開催されたとき学生の様子を見ていたところ、ケータイをする者も私語をする者もいなかった。」

一部の大学では、教室内は「爆睡、猛烈な私語」が常態化していることなどが報告されているが、名桜大生のまじめさがうかがえる(31)。

また、出欠確認の工夫についても聞いてみた。筆者が学生時代、ある教授は、出欠確認の際、ごまかしが効かないように非常勤先の大学の出席カードを配布したり、席によってカードの色を変えて出席点に差をつけていたことがあった。この例を引き合いに出したところ、「その点、本学の学生は素直であり、ごまかしたり、駆け引きしたりする人はほとんどいない。仮に代返したとしても、こちらが確認すれば、ごまかしとおすということはない」というものであった。ここでも、素直という名桜大生の様子が見てとれる。

ところで、最近の大学生は自分の PC を使わない人（あるいは PC そのものを持っていない人）が増えていると聞くことがある。関東の初等教員養成系の大学(1 年次、59 人対象)で教員が授業中にアンケートを取ったところ、自分の PC を持っている人は 28%に過ぎず、6 割の学生は家族と共用、PC を持っていない人も 10%いたという(32)。一方、このクラスの 59 人中 58 人は自分のスマートフォンを持っていたことから、PC がある程度スマートフォンに取って代わられている可能性を示唆している。

名桜大学ではどうであろうか。調査は存在しないが、中里教授によれば「自分の担当は経営情報なので、皆が PC をもって使っている。(担当のクラス外では)、最近ではスマートフォンで済ます学生もいると聞いているが、わずかではないか」とのことであった。

### 3-5 通学方法、空き時間の過ごし方

沖縄には鉄道がなく、特に郊外にキャンパスを持っているところでは自動車通学をしている学生が多い。筆者が以前に訪問した沖縄国際大学(宜野湾市)では学生の大半が自動車通学であり学生専用の広大な駐車場がいくつもあった。また国立の琉球大学も広大なキャンパスであるが、自動車を利用しないと通学も移動も不便である。

名桜大学は市街地から離れた丘の上にある。筆者が訪問した正午過ぎはキャンパスから出る車が続いていた。運転しているのは学生のものであったので名桜大生の通学について尋ねてみたところ、「この大学の珍しいところは、午前と午後の間の休み時間にわざわざ車で食事のために帰る人が多いこと。ただし、それらのほとんどは自動車通学の学生であり、県外から来た人は車を使わない人が多い。県外出身者は学生時代にも運転免許を取らずにバス利用だけで済ます人も少なくない。だから、大学が用意している巡回バスはどの時間帯も学生がよく利用している。」(教務部) というものであった(33)。

昼に車で帰宅する人も多い地元出身の学生と、バスで行き来し、日中をキャンパス内で過ごす県外出身者が混在している様子が見えらる。筆者が訪問した時、お昼休み中ながら、どの教室にも学生が見られたが、学生食堂が改装中で休業していたためらしい。

では、お昼休みに家に帰らない他の人はどこで過ごすのであろうか。図書館は昼休み中も混んでいる様子は見られない。(筆者はインタビューの日の正午から1時間程度と午後3時からの30分間ほど図書館に滞在したが、おしゃべりをしている人はおらず館内は静かであった。)

学生課からは、「大学としても学生の『居場所』を確保するということが課題と認識している」として、新学生会館を建設中であり(34)、学生の居場所としてとても重要な役割を担うことが期待していることを確認することができた。

名桜大学は、すでに入学者(全学部、学群合計)のうち県外者が62.7%を占めるようになっている(2014年度)が、学生のキャンパス内での過ごし方を探るうえでは県内者の内訳の推移にも注目する必要があるだろう。昼に帰宅している学生の大半は自動車通学者であると考えられる。したがって、キャンパスライフの性格を探る際は、「県内出身者(ウチナーンチュ)」と「県外出身者(ナイチャー)」という観点からの分析のみならず、「自動車通学の学生」と「バス等、その他の通学形態の学生」という区分で見ることかもしれない。また、キャンパス内の過ごし方については、居住形態(「自宅」、「自宅外」)の区分、さらに後者においては「寮」かどうか)による差も考えられよう。

### 3-6 学生への支援—その変化、今後の課題—

昨今、新興大学を中心に学生サービスが強化され、経済支援、学習支援にとどまることなく、生活支援、その他諸々の支援を全学的に推進しているところが多い。公立大学となって5年目(2014年度)を迎え、入学者層が変わりつつある中、名桜大学ではどのような支援がなされ、学生はいかなる悩みを持っているのであろうか、最近の変化も含めて聞いてみた。

学生課によれば、支援に関する問い合わせは経済的支援に関するものが多く、経済支援の対象はほとんどが県内の学生とのことである。沖縄県の県民所得は全国平均の3/4であ

り、経済的に恵まれているとはいえないことが背景にあるという。

居住に関していえば、県内出身者が在学生の 9 割程度を占めていた私立大学時代においても北部地域外の県中南部出身者は多数自宅外通学していたこともあり、公立化後、自宅外通学者が目立って増えたわけではないことがわかる。居住形態については後述するように 7 割強の学生が自宅外通学者である。

また、大学入学者層が変わりつつあるなかで、新たな問題と思われる指摘もあった。

「悩みの相談で多いのは、大学で他の学生に馴染めないというもので、県内の学生に見られる。積極的に外に出て人に交わることが苦手な人が多いからなのかもしれない。その意味でも、学生会館などの居場所づくりが大切であると考える。」(学生課)

「県外から来た学生はある程度積極性があるが、地元出身者はパスポートも持っていない人が多く、(海外スタディツアーなど) 特別なことがない限り取得することもない。おとなしく、外に出たがらない人もいる。」(教務部)

こうした状況を踏まえて、大学として積極的に取り組んでいることは、「キャンパス内に学生にとっての居場所をつくるということであり、学生生活相談(ウエルナビコーナー)活動を通じて様々に学生を支援する」(35)ことであるようだ。

大学の公立化とともに知名度が上昇し、県外からの、ある程度積極的な学生が増えるなど多様化が進んでいる。多様化に伴う融合という面だけではなく、二層化もみられるのではないだろうか。大学入学までの間、他地域の人々との交わりが少なかった生活を送ってきた学生の中には、こうした変化のなかで孤立感を抱いているのかもしれない。他の人に「馴染めない」という悩みは、他地域出身者や活動的な学生などと交わることによって自覚した、「大学という文化」へのカルチャーショックといえるのではないだろうか。

### 3-7 学生生活の実態—アルバイトや暮らしぶり—

多くの大学生の生活と密接な関係にあるものがアルバイトである。アルバイトをしている学生の割合はどうか。また、その暮らしはどのようなものであろうか。

2014 年 3 月発行の『MEIO 名桜大学広報、vol39』では、「名桜大学生の暮らしぶり—学生生活実態調査より—」が特集されている(36)。この特集からアルバイトや学生生活の実態の一面をみてみよう(同調査は 2013 年 10 月実施、調査回答者数 1268 人、回収率 63.8%、女性 58.4%。男性 41.6%)。以下は、主要データについての抜粋である。

#### (1) 生活環境と暮らし

「現在の居住形態について」

① 単身(民間アパート) 69.4%、② 実家(家族と同居) 26.1%、③ 留学生センター 2.5%

「授業のない日や休日にはどのように過ごしていますか(主なもの 3 つまで)」

① アルバイト(46.6%)、② 寝る(38.2%)、③ 身の回りのこと(掃除・洗濯)(37.5%)

④ 買い物(34.0%)、⑤ テレビ・雑誌(33.4%) ⑥ インターネット、パソコン(23.1%)、

⑦ ドライブやレジャー(18.1%)。⑧ 学内のサークル・クラブ活動に参加(37)(15.8%)

ほかに、食事のあり方、朝食摂取の有無、平均的な睡眠時間についての質問がある。

これらの特徴として「高い朝食欠食率(48.3%)」、「短い睡眠時間(5~6 時間程度が中心)」が学内関係者からも指摘されている(38)。

## (2)経済状況

- ・奨学金を受けていますか (はい：64.8%、いいえ：35.2%)、
- ・アルバイトはしていますか (はい：57.5%、いいえ：42.5%)

「アルバイトの週平均時間」

- ① 10 時間~20 時間未満(29.2%)、②20 時間~30 時間未満(29.2%)、③5 時間~10 時間未満(21.1%)と続く。

「家族からの仕送りの平均月額」、

- ① 2 万円以内 (52.5%)、②2 万~4 万円未満 (23.4%)、③4 万~6 万円未満 (13.5%)と続く (以下略)。

なお、アルバイトの中身など、「学生生活実態調査」からはわからないところがあるため学生部に聞いたところ、授業のないときにアルバイトという学生が多く、主なアルバイト先はスーパーのレジで、ほかに外食関係といったところが多いようである。

沖縄は就職事情が厳しく、名桜大学においてもリーマンショック以降、就職率が 75%にとどまっている (『大学概要、2014-2015 年』) が、学生のアルバイトは難なく見付き、探すのに苦労はないようである。

## 3-8 キャンパスライフの変容

公立大学化に伴い、県外からの学生比率の増加、女子学生比率の増加、入学の競争率の上昇などがあり、学内では「華やかになった」とも言われている。学生のキャンパスライフにおいては、どのような変化が見られたのであろうか。

近年目立った動きとして学園祭への取り組み、ならびに学生のボランティア意識の高まりがあるという。学生課の話をまとめてみよう。

「大学では 10 月に学園祭を開催しているが、近年は実行委員になる人が増えている。以前はせいぜい 20~30 人程度であったが、最近は 70~80 人規模になっている。県外から来た人、特に女性が増えていて学園祭実行委員も今や半数が女性である。こういう経験がきっかけとなって『学生のボランティアについての満足度』(39)が高まっているのではないか」ということであった。

## 4 おわりに ー今後の課題と若干の考察ー

取材の最後に、それぞれの担当に関連して、認識している課題について聞いてみた。

「まず全国に本学を知ってもらうこと。公立化に伴い地元の優先枠を求める声もあるが、それはしていない。」(入試課)

「県内出身者の一般入試への志願者を増やすこと。また、県外出身者は地元に戻って就職を希望する人が多いので、県外の就職先の開拓が課題である。」(総務企画部)

「学業だけでなく、社会人としての基礎的な力を養うこと。社会人としての基本的なことが欠けていて高校生化している。手取り足取りの指導には限界があるが。」(教務部)

「学生のメンタル面は保健センターで対応しているほか、カウンセリングも充実させている。課題というよりも、学生支援に関する本学の特徴であるが、本学では学生の課外活動にも支援が手厚い。通常、国公立大学では課外活動の支援はせず同窓会などが行っているが、本学では大学の予算で支援している。」(学生課)

以上で示された課題認識には、学生の「高校生化」についての指摘のみならず、現在の名桜大学が置かれている状況が如実に映し出されている。沖縄県における厳しい就職事情への対応のみならず、学生のもともとの志向でもある「卒業したら地元もしくは出身地の近くで就職したい」という意向への対応など課題も多いと思われる。

最後に取材を踏まえ、筆者の印象と若干の考察を述べて、本稿を括りたい。

筆者が名桜大学を訪問するのは、2012年、2013年に続いて3回目である。毎回、キャンパス内ですれ違う学生の多くが挨拶を交わした。ほかの大学、とりわけ大規模大学においては経験しないことである。また、学生と教員、職員の3者の距離の近さを感じられる。こうした関係者の一体感や近しさ、そして外部の人に礼儀正しく接するという行動様式は、たとえ入学者像が変わろうとも今後も受け継がれる大学文化の一つの姿ではないだろうか。在籍する学生にとっては当たり前のことかもしれないが、キャンパス内の共通の「居場所」で仲間と過ごす中で、大学の文化は独自の進展を遂げていくと思われる。

公立大学化とともに注目され、全国から学生が集まるようになってきているという点では、名桜大学も他大学も事情は同じである。それゆえ独自の魅力が関係者に伝わらなければ、全国的に公立大学化が相次ぐ中で、名桜大学としても成長の壁に直面しかねない。全国の高校生にとっては名護が遠隔地であるがゆえに、在校生、卒業生の満足の度合いが後輩の進路を規定する大きな力となるに違いない。また、志願者を増やすうえでは“沖縄体験”も重要な要素かもしれない。

名桜大学では、公立大学化によって入学者が多様化し、積極性のある学生が増えたことで、キャンパス内に新しい“カルチャーの種”が蒔かれつつあるように思える。一方で、一部の内向的學生は、学内に居場所を求めるといふより、昼休み時間に「帰宅する」ということで、自らの居場所を確保しようとしているのかもしれない。(これは筆者の勝手な想像である。)

旧来からのカルチャーと新しいカルチャーとが二層化して並走するのではなく、融合した、独自の、沖縄ならではの、そして名桜大学らしい、他のどこにもないカルチャーが大学の魅力につながる。

本稿の問題意識は、名桜大学の取材を通して公設民営大学の公立大学法人化がもたらす学生文化への影響を探ろうという試みからスタートした。まだ手探りの段階にとどまるが、今後も継続して学生のキャンパスライフを観察していきたい。

昨今の大学改革の大波の中で、公立化し躍進した大学の姿が取り上げられると、様々な大学が公立化を目指す動きをはじめている。しかし、今や、公立化を支持する動きだけではなく、公立化へのハードルは高まっていると思われる。

今こそ、それぞれの大学の使命、存在意義を日々の活動に反映させるための取り組みが求められる。公立化は、大学にとって一つの通過点に過ぎない。その先に求められるのは、経営的視点での成果だけではなく、学生目線での成果、たとえばその大学ならではの希少性のある経験や人間的成長などがある。これからの大学を発展させる原動力としての、その大学ならではの「学生、教員、職員」を軸とした大学の文化の行方に注目し、本稿を締めくくりたい。

(取材においてお世話になりました名桜大学の皆さまに感謝し、厚く御礼申し上げます。本稿の内容に関して、誤解等があればすべて筆者の責任であることを申し添えます。)

<注>

- (1) 公設民営大学とは法令上の用語ではなく、「一様な定義はないが、地方自治体が主体となって大学設置を計画し、設置経費のすべて公費でまかなった場合に公設民営大学と呼ぶことについては異論がない」高橋寛人編著『公設民営大学設立事情』東信堂、2004年)とされる。同書4ページ。
- (2) 筆者の所属は有限会社ソフィアートであり、当社は主に企業向け人材育成事業のほか、大学におけるSD活動(職員研修等)や自治体の職員向け能力開発を手掛けている。また、筆者は、一般社団法人日本能率協会(JMA)学校経営支援センター主任研究員として、本稿の取材先の大学をはじめ、いくつかの大学と接点を持った。ただし、本稿の内容に関する責任はあくまでも筆者個人が負うものである。
- (3) 武内清, 2014, 『学生文化・生徒文化の社会学』(敬愛大学学術叢書) ハーベスト社
- (4) 「大学生文化研究会」(研究代表、武内清)の調査から、大学生といっても一様ではなく、大学格差等に規定された大学類型によりキャンパスライフや大学生の意識は大きく違っていることが明らかになっている。それによれば、「伝統総合大学」には、教養志向、モラトリアム志向の学生が多く、学生に自主性があり、学生の「生徒化」もそれほど進んでいないのに対して、「新興大学」の学生は、学生の自主性は乏しく、学生の受け身化、「生徒化」が進んでいる。
- (5) M&A や経営統合など資本の変更を伴う改革ではしばしばみられる、また米国 GE で見られたような内部昇格型リーダーに下での「組織文化変革への取り組み」(当時のウエルチ CEO による 20 年にわたる変革)など例には事欠かない。
- (6) ここで生態という言葉を用いているのは、文化は容易に変わるものでもつくられるものでもないからである。生活の実態、様子を扱う場合(例:授業中態度など)、文化というより生態という方がふさわしいと思われる。「生態:社会生活をしているもののありのままの姿。」(『大辞林』第三版)
- (7) 危機的状況の程度は大学によって異なり、定員割れといった事情は静岡文化芸術大学については当てはまらない。
- (8) これまでのところ公立化した公設民営化は、私立大学当時に比べると志願者数が急増し受験偏差値が著しく上昇する傾向をみることができる。たとえば、高知工科大学では公立化が決まった 2009 年度入試では前年度比 7.8 倍もの志願者数(ただし、同年の入試は他の国公立大学とは異なる日程で試験が実施されたため、他の国公立大学との併願が可能であった)となり、同年春の入学者は 4 年ぶりに定員を超えている。
- (9) 各大学の HP および大学案内より。各大学の入試競争率の上昇、定員充足率、受験偏差値の上昇などの一連の状況を概観するうえで、福知山市による資料(「市政情報」「4 年制大学のあり方に関する有識者会議」が参考になる。<http://www.city.fukuchiyama.kyoto.jp/shisei/government/cat466/>)
- (10) 組織の文化は、その組織が有する要因、構成する成員が有する要因のみならず、外部からの期待や役割の認知などによっても築かれる。地域における立場や役割、期待されることが継続されれば組織成員が入れ替わったとしても、文化は基本的に継承されると考えられる。
- (11) 高知工科大学の年間の授業料は、私立大学当時、1,240,000 円(工学部)、940,000 円(マネジメント)であり、ほかに入学金が 300,000 円、入学検定金が 30,000 円であった。2009 年の公立大学法人化に伴い、授業料自体の年額は 535,800 円となった。現在の初年度納付金の合計は 909,100 円(高知県外)、759,100 円(高知県内)である。一方、静岡文化芸術大学は私立大学当時から政策的に納付金額

を静岡県立大学と同額に設定していた。

- (12) 福井大学では、2011年に前期志願者(工学部)を対象に福井大学を受験することを決めた時期として、「高校入学前」、「高1」、「高2」、「高3の4月~12月」、「高3のセンター試験以降」、「浪人時代」に分けて聞いたところ、「高3のセンター試験以降」という回答が62%に達していたという。  
日本能率協会「大学マネジメント改革総合大会」2014年11月14日発表資料。
- (13) インタビューの相手は次のとおりである。役職は2014年11月4日時点のもの。  
総務企画部部長 山城耕政氏、教務部長・経営情報教育研究学系教授 中里収氏、  
教務部入試課課長 大城洋氏、学生部学生課課長 荻堂盛淳氏
- (14) 『名桜大学 大学概要 2014-2015』(以下、『概要』と略記)
- (15) 教育の機会均等に関して「大学設立当時、沖縄県の大学進学率は28.8%(全国:43.3%、平成6年)であったこと、県民所得も全国比率70%であったことから、県内に大学を創設して、高等教育機会を提供する必要があった。」(前掲『概要』)と記載されている。
- (16) 前掲『概要』。この他に、教員枠とは別に助手が4名。
- (17) 前掲『概要』1994年度入学者のデータについては、『名桜大学 概要 2011-2012』にて確認。
- (18) 『MEIO 名桜大学広報』(以下、『広報』と略記)2014年3月。Vol39における同大学高瀬幸一教授のコメントより。
- (19) 前掲『名桜大学 概要 2011-2012』
- (20) 2014年11月6日の取材時に名桜大学から提供された入試課作成の資料に基づく。
- (21) 『2015年度キャンパスガイド名桜大学』(以下『2015ガイド』と略記)より。
- (22) 『概要』、『2015ガイド』
- (23) 鳥取環境情報大学「公設民営大学から公立大学法人に移行(公立化)した大学」。一部は鳥取県のHPで確認することができる。<http://www.pref.tottori.lg.jp/secure/6429/065sanko.pdf>
- (24) 名桜大学作成の資料による。2014年度の納付金は大学のHPおよび『2015年案内』参照。
- (25) 沖縄国際大学ホームページ(<http://www.okiu.ac.jp/job/index.html>)より。
- (26) 名桜大学作成の資料(本インタビュー用に作成したもの)による。
- (27) 注(9)参照のこと。福井大学の監査役を務める福島一政氏による。日本能率協会「大学マネジメント改革総合大会」2014年11月14日発表資料。
- (28) 「新入生アンケートー名桜大学を選んだ理由と希望ー」(『名桜大学広報』2001年7月号、Vol.7)現在と比較するうえで次の3点は留意しておく必要がある。①当時は、学生の大半が沖縄県出身者であった、②入学における選抜性が今ほど高くなかった、③就職先として著しくサービス業、とりわけ観光業に依存する沖縄県においては、リーマンショック以降、就職状況が低迷し現在に至っているためである。2000年以降、リーマンショック直前までは名桜大学の就職内定率は82~91%で推移していたが、2009年度の就職内定率は71%となり、直近3年間も74~75%にとどまっている。
- (29) たとえば、嘉悦大学(大学としては新設大学の部類に入るが、前身の私立女子商業学校は1903年創設である)は2004~2007年の4年間を通じて退学率が31%に達していたという。その主な理由は、①志望大学ではなかった、②授業料が払えないためであったことから、2008年に着任した故加藤寛学長のリーダーシップの下、キャンパス整備委員会の設置、経済面での対応(学費分納制の導入、給付型奨学金制度の導入、学内アルバイトの用意など)、24時間キャンパスの実施などにより2009年4月~7月の時点で退学率はゼロにまで改善されたことが報告されている。加藤寛、2010、『『人の改革』が大学を変えるーさらなる大学のマネジメント改革に向けて-』

(『JMAマネジメントレビュー』Vol. 16 No.3)、日本能率協会。

(30)名桜大学企画広報課からの回答。なお、近年の退学率については、同大学HPの「教育情報の公表」で確認することができる。て公開されている。

[http://www.meio-u.ac.jp/files/kyjho\\_khyou2014/h26\\_cyutairitsu1.pdf](http://www.meio-u.ac.jp/files/kyjho_khyou2014/h26_cyutairitsu1.pdf)

(31)大学名は伏せるが、某大学(大阪府内、学生数 5000 人以上)の授業風景を取材したテレビ番組が放映された。同大学関係者によれば、それは常態化している光景らしい。爆睡、大声での私語にとどまることなく、時には教室内でのカラオケ騒ぎまで起こることがあるという。

(32)武内清 (教育社会学) 研究室 HP <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/k-takeut/> 2014 年 7 月 9 日。

(33)送迎バスは 7:35 大学発の第 1 便から、21:05 大学着の便まで 1 日 9 便(午前 3 便、午後 6 便)用意されている。

(34)新学生会館 Sakuraum は、取材の一月後の 2014 年 12 月竣工。サクラウムとは名桜のシンボルのサクラと空間を意味する RAUM (独)を掛け合わせた造語。

(35)名桜ウェルナビとは、学生ボランティアで構成される新入生支援組織。先輩学生が新入生に大学生活や履修方法などをアドバイスするというもので、学内イベントの企画・運営も行っている。

<http://www.meio-u.ac.jp/facility/welcomenavigation.html>

(36)『広報』2014 年、3 月。Vol39 所収の「特集:名桜大学生の暮らしぶりー学生生活実態調査よりー」

(37)クラブ・サークル活動に参加している人は 47.3%、参加していない人が 52.7%である。

『広報』2014 年、3 月。Vol39

(38)上掲注(18)に同じ。

(39)本稿 11 ページ記載の「3-3 大学生生活の評価ー期待と現実-」における満足度について。

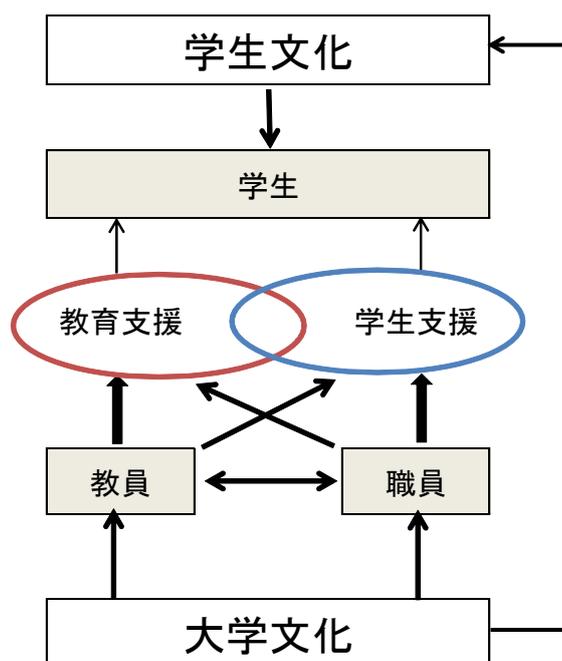
#### <参考文献>

- ① 武内清, 2014, 『学生文化・生徒文化の社会学』(敬愛大学学術叢書) ハーベスト社
- ② 高橋寛人, 2004, 『公設民営大学設置事情』東信堂
- ③ 名桜大学,2014, 『大学概要 2014-2015 名桜大学』
- ④ 名桜大学,2012, 『大学概要 2011-2012 名桜大学』
- ⑤ 名桜大学,2014, 『キャンパスガイド 2015』
- ⑥ 名桜大学,2013, 『名桜大学広報』Vol.39
- ⑦ 名桜大学,2011, 『名桜大学広報』Vol.29
- ⑧ 名桜大学,2001, 『名桜大学広報』Vol.7
- ⑨ 日本能率協会,2014, 『第 6 回 大学マネジメント改革総合大会 発表資料』
- ⑩ 日本能率協会,2010, 『JMAマネジメントレビュー』Vol.16,No3
- ⑪ 特集「地方大学の使命と課題を見据え、公立大に転換ー鳥取環境大学に見る公設民営大学から公立大学法人への転換のねらい」『学研・進学情報』2013 年,1 月,11~15 ページ。

## おわりに

本研究では、学生文化と教員や職員との関係、学生支援との関係を、下記のような図式で考えた。

図終-1 学生文化と教職協同、学生支援



現在各大学は、学生の入学から卒業までのさまざまな学生支援を展開している。これまで学生支援は大学職員が中心であったが、教員のかかわりも重要になっている。教員と職員の役割分担は再考を迫られ、学生の教育支援に職員もかかわるようになってきている。

現在大学にもさまざまなタイプがあり、その伝統や格差に規定された大学文化の影響を受けて学生文化は形成され、学生に影響を与えている。各大学の学生文化に対応した学生支援の在り方はどうあるべきなのか。学生文化と各大学の学生支援の実態を調査し、有効な学生支援策を探ろうとした。

我々の研究は、過去に調査対象にした大学の学生達に再度調査し、学生達の時系列の変化に注目した。また、大学類型や個別の大学文化によっても学生のキャンパスライフは違っているので、その大学（類型）差にも注目し、さらに学生文化差にも注目し、学生文化と学生支援の関係を実証的に探ろうとした。

時系列の変化では、この間の経済不況・就職難などの時代的背景及び文部科学省の教育改革などで、大学の「学校化」や学生の「生徒化」が進み、それが大学教育や学生のキャンパスライフに様々な影響を与えていることを明らかにしてきた（3章、4章、5章）。

大学の「学校化」、学生の「生徒化」は、次のようにもまとめられよう。

- 1 文部科学省の大学改革が、大学の研究より教育を重視するようになってきている。
- 2 学問の進化により、どの分野でも基礎的な部分の積み重ねがあり、その部分の学習は

必須になっている。

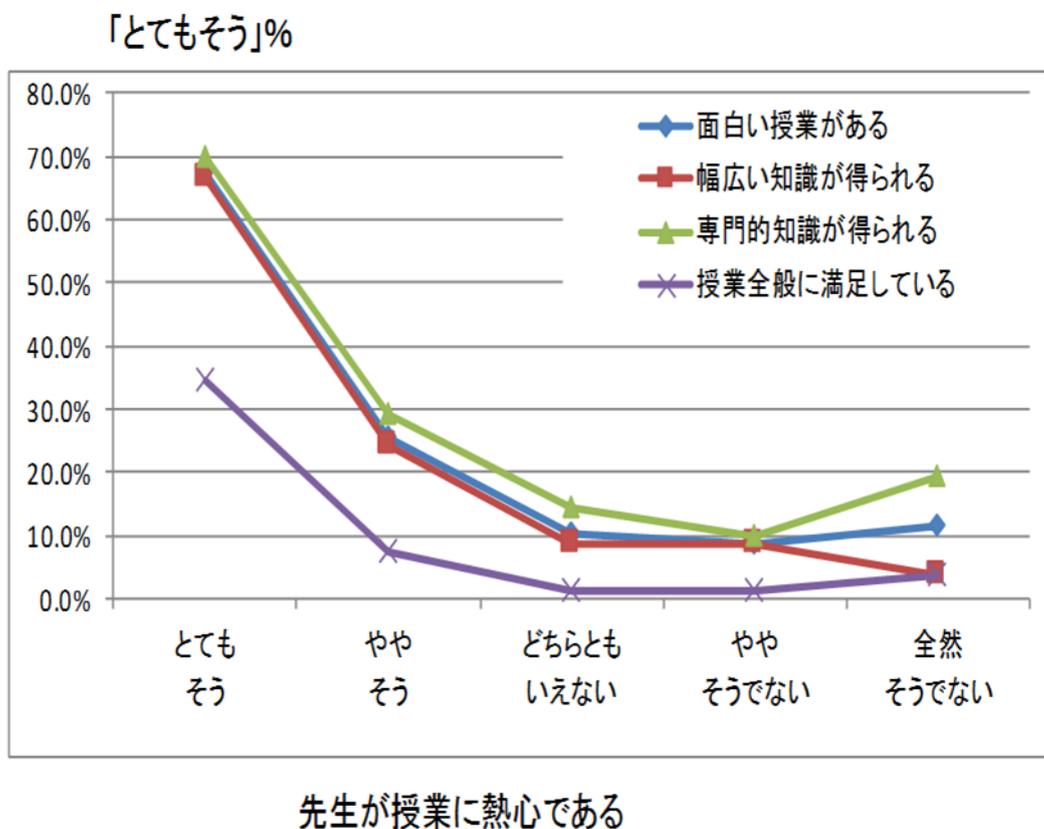
- 3 経済不況の中で、資格の修得、仕事に役立つ技術、知識の習得が求められ、実学志向が強まっている。
- 4 各大学も、初年次からの教育を重視し、教員も職員も、学生に手厚い教育&指導を行うようになっている。
- 5 学生は、大学の勉強を重視し、素直に、大学の教育や支援に従うようになっている。
- 6 一方、学生文化の広範な広がりや深さが失われ、実利（俗）のみが追求され、聖や遊へ離脱が少なくなり、学生の自立性も失われがちである。

これまで、我々は大学類型別分析を重視してきた。そのことでは、大学類型差はあるものの、その差は入学の時の差の拡大ではなく、その差の縮小や逆転のあることも指摘しておきたい。

大学に入学してから「勉強」に重点を置く割合は、「伝統総合大学」で高く、「新興大学」で低いわけではない。「先生に満足する」割合は、「新興大学」の方が高い（『敬愛大生のキャンパスライフ』2014年3月、67ページ）。

図終-2のように、教員の授業熱心が、学生授業への満足度を高めるという現象は、どのような大学でも見られ、教員や職員の教育支援や学生支援の努力の余地は十分に残されている。

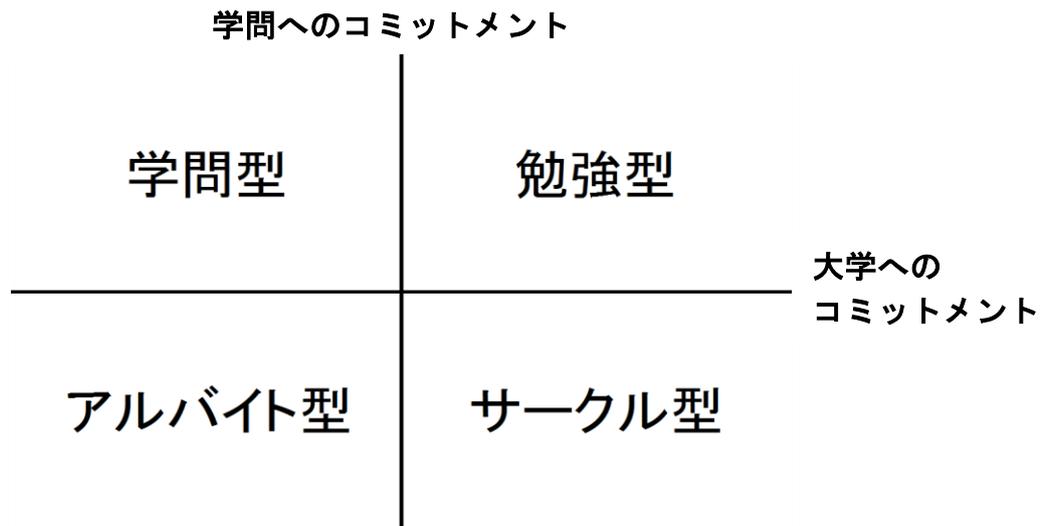
図終-2 教員の授業熱心×授業満足度 （2013年14大学調査）



主体的存在である学生は、大学の勉強だけでなく、学問、部・サークル、アルバイト、友人関係、趣味、メディア接触など、自ら選びコミットして、成長していくことが大切である（図終-3）。

大学や教員、職員はそれの支援を、一人ひとりの成長を見守りながら、きめ細かくしていく必要がある

図終-3 学生文化の類型



本冊子の報告は、学生文化の実態に実証的に迫るという意味合いが濃く、学生支援の具体的方策に関しては、あまり言及はできなかった。

それに関しては、我々共同研究者の他の著作（大島勇人・浜島幸司・清野雄多『学生支援に求められる条件——学生支援 GP の実践と新しい学びのかたち——』2013年、東信堂）や、下記の日々の実践を参照されたい。

- ・同志社大学良心館ラーニング・コモンズ HP[<http://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp>]
- ・敬愛大学での武内による取り組み [<http://www.takeuchikiyoshi.com/>]

学生文化と学生支援に関する本冊子のさまざまなデータや知見が活用され、実証的なデータにもとづき、学生支援の方策が提言そして実施されることを期待したい。

資料

調查票

集計表

自由記述

# 現代大学生の生活と意識 2013

--	--	--	--	--

大学生文化研究会

武内 清 (敬愛大学) 大野道夫 (大正大学) 小林雅之 (東京大学) 白石義郎 (久留米大学) 岩田弘三 (武蔵野大学)

## お願い

これは、皆さんの大学生活に関してお聞きして、今後の大学のあり方を考える資料にするものです。お忙しいところ恐縮ですが、ご回答くださるようお願いいたします。

Q1 大学名 \_\_\_\_\_ 大学 \_\_\_\_\_ 学部 \_\_\_\_\_ 学科 \_\_\_\_\_

あなたの学部・学科は、次のどれにあたりますか。

- 1 人文科学系 (文学、語学)      2 社会科学系 (法、経済、商、社会)      3 社会福祉系  
4 教員養成系・教育系・子ども系      5 その他 ( )

Q2 国籍      1 日本      2 日本以外 (どこの国ですか→ )

Q3 性別      1 男      2 女

Q4 学年      1 1年      2 2年      3 3年      4 4年      5 その他

Q5 あなたは、現役で大学に入学しましたか。

- 1 現役      2 1年浪人      3 2年以上浪人      4 その他 ( )

Q6 あなたが、今の大学に入学した方法はどれですか。

- 1 一般入試 (センター試験利用入試含む)      2 推薦入試      3 帰国子女入試  
4 編入学・学士入学      5 社会人入試      6 AO入試      7 その他 ( )

Q7 大学に自宅から通学していますか。それとも自宅外から通学していますか。

- 1 自宅      2 アパート、マンション、下宿  
3 学生寮、学生会館      4 親戚、知人の家  
5 その他 ( )

Q8 今の大学は、第一志望の大学ですか。

- 1 はい      2 いいえ

Q9 今の学部 (学科) は、第一志望の学部 (学科) ですか。

- 1 はい      2 いいえ

Q10 あなたが大学に入学した理由は何ですか。主なもの2つに○をつけてください。

- 1 大学卒の学歴を得るために
- 2 (さまざまな)資格(教員免許、学芸員など)をとるために
- 3 友人関係、サークル、スポーツ、趣味を楽しむために
- 4 自分の将来の進路や仕事について考えるために
- 5 専門的な知識や技術を得るために
- 6 幅広い教養を身につけるために
- 7 みなが大学に行き、行くのが当たり前だった
- 8 親が勧めるので
- 9 その他(具体的に )

Q11 今の大学を選んで、入学した理由は何ですか。主なもの2つに○をつけてください。

- 1 学びたい専門分野があるから
- 2 自分の学力(偏差値)に合っているから
- 3 雰囲気自分に合いそうだから
- 4 通学に便利だから(自宅から通えるから)
- 5 社会に名前が知られているから(有名だから)
- 6 就職に有利になりそうだから
- 7 学費が安かったから
- 8 受かった大学がここだけだったから
- 9 その他(具体的に )

Q12 あなたの現在の生活の中で、次のものは、どの程度の比重を占めていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	大部分	かなり	少し	ほとんどなし
1 学業、勉強	1.....	2.....	3.....	4.....
2 ダブルスクール	1.....	2.....	3.....	4.....
3 サークル、部活動	1.....	2.....	3.....	4.....
4 アルバイト	1.....	2.....	3.....	4.....
5 趣味	1.....	2.....	3.....	4.....
6 友人との交友	1.....	2.....	3.....	4.....
7 異性(恋人)との交際	1.....	2.....	3.....	4.....
8 就職活動	1.....	2.....	3.....	4.....

Q13 あなたの授業への出席率は平均すると、どのくらいですか。あてはまる番号に○をしてください。

- 1 90%以上
- 2 89~80%
- 3 79~60%
- 4 59~40%
- 5 39%以下

Q14 あなたは、今の（自分が在籍する）大学の授業について、どのように感じていますか。  
それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	とても そう	やや そう	どちらとも いえない	ややそう でない	全然 そうでない
1 先生が授業に熱心である	1	2	3	4	5
2 面白い授業がある	1	2	3	4	5
3 幅広い知識が得られる	1	2	3	4	5
4 専門的知識が得られる	1	2	3	4	5
5 将来のキャリアに関連した授業がある	1	2	3	4	5
6 自分の人生について考えられるような授業がある	1	2	3	4	5
7 小人数、ゼミ形式の授業がある	1	2	3	4	5
8 グループで討論や作業をする授業がある	1	2	3	4	5
9 私語の多い授業がある	1	2	3	4	5
10 授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	1	2	3	4	5
11 授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい	1	2	3	4	5
12 就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	1	2	3	4	5
13 授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	1	2	3	4	5
14 授業全般に満足している	1	2	3	4	5
15 大学での自分自身の成績は良いほうだ	1	2	3	4	5

Q15 あなたは、大学（他大学を含む）の部やサークル（同好会）に入っていますか（複数加入の場合は主なもの1つに○をつけてください）。

- 1 運動系の部（体育会）
- 2 運動系のサークル、同好会
- 3 文化系の部、サークル、同好会(音楽、演劇等)
- 4 社会活動関係の部、サークル、同好会（ボランティア団体等）
- 5 その他（具体的に )
- 6 以前は参加していたが、やめた
- 7 最初から入っていない

Q16 あなたの友達、今の大学の人が多いですか。今の大学以外の人が多いですか。

- 1 今の大学の人が多い    2 今の大学以外の人が多い    3 どちらともいえない

Q17 大学での友だちとの付き合いについてお聞きします。次のようなことを、大学の友だちとどの程度しますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	よくする	まあする	あまりしない	ぜんぜんしない
1 お昼ご飯を一緒に食べる	1	2	3	4
2 学外でも遊んだり食事をしたりする	1	2	3	4
3 悩みを相談する	1	2	3	4
4 ライン、ツイッター、フェイスブックなど、インターネットでやり取りをする	1	2	3	4

Q18 あなたは、今の大学の施設・設備や環境についてどの程度満足していますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	とても満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	とても不満
1 校舎、教室	1	2	3	4	5
2 図書館	1	2	3	4	5
3 食堂	1	2	3	4	5
4 コンピュータールーム	1	2	3	4	5
5 購買部（売店など）	1	2	3	4	5
6 部やサークル活動の場、広場	1	2	3	4	5
7 キャリアセンター、就職課	1	2	3	4	5
8 大学の周辺の環境	1	2	3	4	5

Q19 あなたは、今の大学の人間関係や雰囲気、学科、大学全体について、どの程度満足していますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	とても満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	とても不満
1 学科やクラスの友人関係	1	2	3	4	5
2 部やサークルの人間関係	1	2	3	4	5
3 異性との出会いや交際関係	1	2	3	4	5
4 先生との関係	1	2	3	4	5
5 大学職員の対応	1	2	3	4	5
6 就職ガイダンスや就職支援	1	2	3	4	5
7 大学全体の雰囲気	1	2	3	4	5
8 今の学部・学科に入ったこと	1	2	3	4	5
9 今の大学に入ったこと	1	2	3	4	5

Q20 あなたは、ふだんの日（平日）、次のことをどのくらいしていますか。  
それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	ほとんど しない	30分 くらい	1時間 くらい	2時間 くらい	3時間 くらい	3時間 以上
1 授業の予習・復習をする	1	2	3	4	5	6
2 本を読む（読書）	1	2	3	4	5	6
3 スマートフォン・携帯電話を使う	1	2	3	4	5	6
4 アルバイトをする	1	2	3	4	5	6

Q21 大学入学以来、アルバイトをどの程度していますか。

1 まったくしていない → Q22へ

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 2 長期休暇期間（夏、冬、春休み）のみ  | 3 学期中に不定期に          |
| 4 学期中に定期的に           | 5 学期中に定期的に、長期休暇期間にも |
| 6 学期中に不定期的に、長期休暇期間にも | 7 その他（ ）            |

（Q21で、2～7と答えた人にお尋ねします。）

SQ これまでに主にどのようなアルバイトをしてきましたか  
（複数ある場合は、主なもの1つについて答えてください）。

- |                  |                        |
|------------------|------------------------|
| 1 家庭教師・塾講師       | 2 コンビニ、スーパーなどでのレジや販売など |
| 3 飲食店などでの調理や接客など | 4 事務的な仕事、受付など          |
| 5 運搬、梱包、清掃等の労働   | 6 その他（具体的に ）           |

Q22 あなたの子どものころ（小学校時代）のことをお聞きます。家族との関係で、次のようなことがよくありましたか。それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	よく あった	まあ あった	あまり なかった	ぜんぜん なかった
1 家族に本を読んでもらうこと	1	2	3	4
2 家族に勉強を見てもらうこと	1	2	3	4
3 家族に美術館や博物館へ連れて行って もらうこと	1	2	3	4
4 家でクラシック音楽を聞いたり、家族と クラシック音楽のコンサートに行ったり すること	1	2	3	4
5 家族と社会のしくみや時事問題などに ついて話すこと	1	2	3	4



**Q27** あなたの普段していることについてお聞きします。  
それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	とても そう	やや そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1 スポーツなどで体を鍛えている	1	2	3	4
2 新聞をよく読む	1	2	3	4
3 占いをチェックしている	1	2	3	4
4 ファッションについての情報をチェックしている	1	2	3	4
5 カラオケに行く	1	2	3	4
6 映画を観に行く	1	2	3	4
7 料理をよくする	1	2	3	4
8 休日や長期休みに旅行をする	1	2	3	4

**Q28** あなた自身の性格や考え方についてお聞きします。  
それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	かなり そう	やや そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1 スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていると不安だ	1	2	3	4
2 アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある	1	2	3	4
3 人と一緒にいるより1人でいる方が好きだ	1	2	3	4
4 異性の視線が気になる	1	2	3	4
5 音楽は自分の生活の一部だ	1	2	3	4
6 自由に使える時間がたくさんある	1	2	3	4
7 将来のことより、現在を大切にしたい	1	2	3	4
8 毎日が充実している	1	2	3	4
9 将来就きたい職業を決めている	1	2	3	4
10 就職するなら正社員がよい	1	2	3	4
11 労働についての法律や労働者の権利について知っている	1	2	3	4
12 自分のためより社会のために働きたい	1	2	3	4
13 自分の将来に関して、不安を感じる	1	2	3	4

Q29 あなたの日頃の行動に関してうかがいます。  
それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	かなり そう	やや そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1 お年寄りや体の不自由な人に席を譲る	1	2	3	4
2 ボランティア活動をしている	1	2	3	4
3 ゴミやカンを決められた場所に捨てている	1	2	3	4
4 選挙で投票に行く (選挙権のない人はあると仮定して)	1	2	3	4

Q30 あなたは次のような意見についてどう思いますか。  
それぞれについて、あてはまる番号に○をしてください。

	とても そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ	1	2	3	4
2 今後の日本は、経済や国の発展よりも、社会的に恵まれないものへの福祉に力をいれるべきだ	1	2	3	4
3 第2次世界大戦で日本がアジアで行ったことにもっと反省をすべきだ	1	2	3	4
4 基地や環境などの問題を決める時、住民より国が最終的な決定をすべきだ	1	2	3	4
5 原子力発電は廃止した方がよいと思う	1	2	3	4

Q31 あなた自身は、将来についてどのように考えていますか。また、結婚相手の生き方としてどのタイプの人が好ましいと考えていますか。1つずつ選んでください。

- 1 仕事につき、一生働き続ける (キャリア志向)
- 2 結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る (家族志向)
- 3 自分の趣味や好きなことに打ち込む (趣味志向)
- 4 社会活動やボランティア活動に打ち込む (社会志向)
- 5 結婚相手の事情や意向に合わせる (相手志向)
- 6 その他 (具体的に )

自分自身	結婚相手

Q32 あなたの大学について、また大学の先生や職員や学生について、感じることや希望することがあれば自由に書いてください。

以上です。ご協力ありがとうございました。

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
<b>大学名</b>							
A大学	7.2%	13.8%	3.1%	0.2%	17.3%	1.2%	1.1%
C大学	10.6%	8.9%	11.6%	12.1%	10.8%	9.3%	7.5%
D大学	6.4%	6.5%	6.4%	5.2%	5.2%	7.7%	12.6%
F大学	9.8%	7.7%	11.1%	11.8%	7.9%	8.0%	13.2%
G大学	12.4%	16.3%	10.0%	15.1%	8.4%	15.4%	13.2%
H大学	10.6%	13.4%	8.9%	11.6%	11.6%	3.1%	16.7%
J大学	5.4%	4.2%	6.1%	0.0%	10.6%	5.9%	2.3%
L大学	8.4%	10.1%	7.4%	14.9%	2.9%	7.1%	10.9%
W大学	5.8%	1.2%	8.6%	0.0%	14.6%	0.3%	0.6%
Z大学	5.0%	0.0%	8.1%	9.5%	3.8%	2.5%	0.0%
イ大学	7.5%	9.9%	6.0%	5.7%	4.8%	10.8%	18.4%
ロ大学	4.7%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	24.7%	2.3%
ニ大学	3.8%	5.0%	3.0%	11.4%	0.0%	0.3%	0.0%
ホ大学	2.4%	3.0%	2.0%	2.4%	2.0%	3.7%	1.1%
<b>Q1.学部・学科</b>							
人文科学系(文学、語学)	21.5%	18.3%	23.4%	28.3%	19.8%	13.0%	20.7%
社会科学系(法、経済、商、社会)	38.6%	49.0%	32.2%	43.2%	32.5%	39.6%	46.6%
社会福祉系	6.8%	6.0%	7.3%	6.6%	5.9%	5.0%	13.8%
教員養成系・教育系・子ども系	28.5%	18.6%	34.7%	17.5%	35.7%	39.9%	17.2%
その他	4.6%	8.0%	2.5%	4.4%	6.2%	2.5%	1.7%
<b>Q2.国籍</b>							
日本	98.5%	99.4%	98.0%	98.6%	98.8%	97.5%	98.9%
日本以外	1.5%	0.6%	2.0%	1.4%	1.2%	2.5%	1.1%
<b>Q3.性別</b>							
男	38.1%	100.0%	-	39.2%	38.3%	32.9%	42.0%
女	61.9%	-	100.0%	60.8%	61.7%	67.1%	58.0%
<b>Q4.学年</b>							
1年	32.6%	33.5%	32.1%	100.0%	-	-	-
2年	38.8%	39.0%	38.8%	-	100.0%	-	-
3年	18.3%	15.7%	19.8%	-	-	100.0%	-
4年	9.8%	10.8%	9.2%	-	-	-	100.0%
その他	0.4%	0.9%	0.1%	-	-	-	-
<b>Q5.現役入学か</b>							
現役	87.3%	80.4%	91.5%	88.9%	85.3%	87.9%	90.2%
1年浪人	10.5%	16.1%	7.0%	9.9%	12.8%	7.7%	6.9%
2年浪人	0.7%	1.5%	0.3%	0.5%	0.9%	0.6%	1.1%
3年以上浪人	1.5%	2.1%	1.2%	0.7%	1.0%	3.7%	1.7%
<b>Q6.大学に入学した方法</b>							
一般入試(センター試験含む)	62.2%	69.9%	57.4%	63.8%	66.2%	51.9%	60.9%
推薦入試	28.6%	24.2%	31.3%	28.4%	23.3%	38.3%	32.2%
帰国子女入試	0.6%	0.4%	0.6%	0.5%	0.7%	0.6%	0.0%
編入学・学士入学	0.7%	0.6%	0.8%	0.0%	0.1%	3.1%	1.1%
社会人入試	0.2%	0.1%	0.2%	0.0%	0.3%	0.3%	0.0%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
100.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	100.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	100.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	100.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	100.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	100.0%	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	100.0%	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	100.0%	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	100.0%	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0%	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0%	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0%	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0%	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0%
36.5%	0.0%	0.0%	65.9%	0.0%	32.4%	12.6%	38.8%	0.0%	67.1%	0.8%	0.0%	43.3%	7.1%
4.8%	0.0%	0.0%	4.0%	100.0%	44.7%	77.9%	48.3%	0.0%	26.8%	99.2%	0.0%	50.7%	71.4%
0.0%	0.0%	46.5%	8.1%	0.0%	16.0%	7.4%	9.5%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
27.0%	100.0%	51.8%	11.6%	0.0%	6.9%	0.0%	0.7%	99.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	7.1%
31.7%	0.0%	1.8%	10.4%	0.0%	0.0%	2.1%	2.7%	0.0%	6.1%	0.0%	0.0%	6.0%	14.3%
98.4%	100.0%	96.5%	97.7%	98.2%	100.0%	100.0%	96.6%	100.0%	96.6%	100.0%	97.6%	98.5%	97.6%
1.6%	0.0%	3.5%	2.3%	1.8%	0.0%	0.0%	3.4%	0.0%	3.4%	0.0%	2.4%	1.5%	2.4%
73.2%	32.1%	38.6%	30.1%	50.2%	47.9%	29.5%	45.6%	7.8%	-	50.4%	-	50.7%	47.6%
26.8%	67.9%	61.4%	69.9%	49.8%	52.1%	70.5%	54.4%	92.2%	100.0%	49.6%	100.0%	49.3%	52.4%
0.8%	37.4%	26.3%	39.3%	39.9%	35.6%	0.0%	57.7%	0.0%	61.8%	24.8%	0.0%	98.5%	33.3%
93.7%	39.6%	31.6%	31.2%	26.6%	42.6%	76.0%	13.4%	98.0%	29.2%	24.8%	0.0%	0.0%	33.3%
3.1%	16.0%	21.9%	15.0%	22.9%	5.3%	19.8%	15.4%	1.0%	9.0%	26.3%	95.2%	1.5%	28.6%
1.6%	7.0%	19.3%	13.3%	10.6%	15.4%	4.2%	12.8%	1.0%	0.0%	24.1%	4.8%	0.0%	4.8%
0.8%	0.0%	0.9%	1.2%	0.0%	1.1%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
66.9%	85.0%	82.5%	85.6%	93.6%	84.0%	92.7%	92.6%	98.0%	86.5%	96.2%	97.6%	77.6%	71.4%
31.5%	12.8%	13.2%	8.6%	4.1%	14.4%	5.2%	3.4%	2.0%	12.4%	3.8%	2.4%	19.4%	28.6%
0.8%	0.0%	0.9%	1.1%	0.5%	1.6%	1.0%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%
0.8%	2.1%	3.5%	4.6%	1.8%	0.0%	1.0%	2.7%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
97.6%	80.2%	84.2%	54.6%	60.7%	60.6%	67.7%	62.4%	39.2%	68.5%	31.6%	19.0%	52.2%	88.1%
0.0%	8.6%	12.3%	25.3%	36.5%	33.0%	22.9%	30.2%	33.3%	16.9%	62.4%	75.0%	35.8%	9.5%
1.6%	0.5%	0.0%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%
0.0%	0.0%	0.9%	2.9%	0.9%	0.0%	1.0%	1.3%	1.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
AO入試	6.6%	3.3%	8.7%	5.7%	8.7%	4.3%	4.6%
その他	1.2%	1.5%	1.0%	1.6%	0.6%	1.5%	1.1%
<b>Q7.通学</b>							
自宅	63.2%	58.3%	66.3%	63.4%	62.1%	64.5%	64.9%
アパート、マンション、下宿	30.6%	35.8%	27.3%	29.8%	31.0%	29.9%	31.6%
学生寮	5.4%	5.3%	5.4%	5.5%	6.1%	4.9%	2.9%
親戚知人の家	0.8%	0.4%	1.0%	1.0%	0.7%	0.6%	0.6%
その他	0.1%	0.1%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%
<b>Q8.第一志望の大学</b>							
はい	59.0%	60.8%	58.0%	52.2%	65.3%	59.0%	55.7%
いいえ	41.0%	39.2%	42.0%	47.8%	34.7%	41.0%	44.3%
<b>Q9.第一志望の学部(学科)</b>							
はい	82.9%	81.0%	84.0%	81.3%	83.8%	84.6%	81.6%
いいえ	17.1%	19.0%	16.0%	18.8%	16.2%	15.4%	18.4%
<b>Q10.大学に入学した理由(大学卒の学歴を得るために)</b>							
選択	36.8%	40.4%	34.6%	37.7%	34.5%	41.5%	35.6%
<b>Q10.大学に入学した理由((さまざまな)資格(教員免許、学芸員など)をとるために)</b>							
選択	32.5%	27.4%	35.6%	33.0%	31.7%	36.2%	26.4%
<b>Q10.大学に入学した理由(友人関係、サークル、スポーツ、趣味を楽しむために)</b>							
選択	15.8%	20.4%	13.1%	19.4%	14.0%	13.3%	16.1%
<b>Q10.大学に入学した理由(自分の将来の進路や仕事について考えるために)</b>							
選択	49.6%	46.2%	51.7%	48.6%	51.5%	46.4%	50.0%
<b>Q10.大学に入学した理由(専門的な知識や技術を得るために)</b>							
選択	22.9%	22.2%	23.2%	19.6%	27.6%	19.2%	20.1%
<b>Q10.大学に入学した理由(幅広い教養を身につけるために)</b>							
選択	17.3%	19.7%	15.7%	18.8%	16.9%	14.6%	19.0%
<b>Q10.大学に入学した理由(みなが大学に行き、行くのが当たり前だった)</b>							
選択	18.2%	17.1%	18.9%	16.1%	18.1%	20.4%	22.4%
<b>Q10.大学に入学した理由(親が勧めるので)</b>							
選択	2.2%	1.0%	2.9%	1.2%	2.5%	3.4%	2.3%
<b>Q10.大学に入学した理由(その他)</b>							
選択	1.4%	1.8%	1.1%	1.7%	0.7%	1.5%	2.3%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(学びたい専門分野があるから)</b>							
選択	58.4%	46.3%	65.8%	56.3%	59.9%	58.0%	60.3%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(自分の学力(偏差値)に合っているから)</b>							
選択	36.5%	45.9%	30.7%	35.4%	37.5%	33.6%	42.0%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(雰囲気自分が合いそうだから)</b>							
選択	25.1%	21.5%	27.3%	25.3%	22.8%	28.1%	27.0%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(通学に便利だから(自宅から通えるから))</b>							
選択	17.8%	16.8%	18.4%	18.4%	17.8%	17.6%	16.7%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(社会に名前が知られているから(有名だから))</b>							
選択	17.4%	21.8%	14.6%	22.2%	16.5%	14.5%	10.3%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(就職に有利になりそうだから)</b>							
選択	11.9%	11.8%	12.1%	11.8%	11.7%	14.8%	8.0%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
0.0%	9.1%	0.0%	13.8%	0.5%	5.3%	8.3%	2.7%	26.5%	10.1%	6.0%	6.0%	4.5%	2.4%
0.8%	0.0%	2.6%	0.6%	1.4%	1.1%	0.0%	3.4%	0.0%	2.2%	0.0%	0.0%	6.0%	0.0%
48.8%	48.7%	36.8%	61.8%	69.9%	66.0%	79.2%	57.7%	90.2%	58.4%	81.2%	73.8%	73.1%	35.7%
30.7%	47.6%	55.3%	24.3%	28.3%	28.7%	18.8%	39.6%	8.8%	37.1%	18.0%	15.5%	22.4%	50.0%
19.7%	2.7%	7.0%	12.7%	1.4%	3.7%	1.0%	2.7%	1.0%	2.2%	0.0%	10.7%	3.0%	14.3%
0.8%	1.1%	0.9%	0.6%	0.5%	1.6%	1.0%	0.0%	0.0%	2.2%	0.8%	0.0%	1.5%	0.0%
0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
100.0%	81.8%	58.8%	67.8%	64.8%	40.1%	33.3%	42.3%	66.7%	28.1%	50.4%	64.3%	37.3%	66.7%
0.0%	18.2%	41.2%	32.2%	35.2%	59.9%	66.7%	57.7%	33.3%	71.9%	49.6%	35.7%	62.7%	33.3%
92.1%	78.6%	62.3%	84.5%	79.5%	79.3%	78.1%	89.2%	96.1%	75.3%	94.0%	90.5%	80.6%	83.3%
7.9%	21.4%	37.7%	15.5%	20.5%	20.7%	21.9%	10.8%	3.9%	24.7%	6.0%	9.5%	19.4%	16.7%
24.8%	25.1%	28.9%	24.7%	57.5%	33.5%	51.0%	39.2%	13.7%	56.2%	53.4%	31.3%	41.8%	26.2%
8.0%	52.4%	52.6%	33.9%	5.0%	35.1%	12.5%	50.7%	86.3%	6.7%	13.5%	77.1%	10.4%	0.0%
20.8%	13.9%	12.3%	10.9%	20.1%	18.6%	15.6%	11.5%	5.9%	20.2%	24.8%	7.2%	20.9%	16.7%
44.8%	49.7%	50.0%	44.8%	55.3%	46.8%	54.2%	42.6%	40.2%	53.9%	54.1%	41.0%	59.7%	78.6%
36.0%	20.3%	29.8%	43.7%	9.1%	23.9%	14.6%	23.6%	40.2%	7.9%	3.8%	22.9%	17.9%	31.0%
32.8%	17.1%	7.9%	22.4%	15.5%	19.1%	15.6%	15.5%	3.9%	19.1%	12.8%	3.6%	31.3%	33.3%
30.4%	15.0%	6.1%	13.8%	30.1%	19.7%	26.0%	10.8%	5.9%	27.0%	22.6%	7.2%	14.9%	11.9%
0.8%	1.1%	5.3%	0.0%	2.7%	0.5%	4.2%	1.4%	0.0%	4.5%	6.0%	4.8%	0.0%	2.4%
0.0%	1.1%	4.4%	1.7%	2.3%	1.1%	2.1%	1.4%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	1.5%	0.0%
33.6%	62.6%	64.0%	75.3%	34.7%	60.1%	60.4%	67.6%	91.2%	38.2%	41.4%	79.8%	67.2%	69.0%
48.0%	38.5%	43.0%	21.8%	37.4%	47.3%	38.5%	35.1%	17.6%	28.1%	56.4%	14.3%	23.9%	47.6%
25.6%	21.4%	13.2%	43.7%	27.9%	33.0%	15.6%	11.5%	22.5%	16.9%	22.6%	41.7%	14.9%	28.6%
2.4%	28.9%	13.2%	7.5%	18.3%	10.6%	25.0%	22.3%	37.3%	14.6%	26.3%	13.1%	17.9%	9.5%
42.4%	10.2%	3.5%	29.3%	46.6%	5.9%	0.0%	1.4%	1.0%	28.1%	1.5%	1.2%	41.8%	19.0%
20.8%	8.6%	14.9%	8.6%	14.2%	6.9%	1.0%	7.4%	12.7%	37.1%	3.8%	22.6%	10.4%	9.5%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(学費が安かったから)</b>							
選択	9.4%	11.5%	8.2%	6.6%	12.3%	8.3%	9.2%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(受かった大学がここだけだったから)</b>							
選択	12.8%	14.0%	12.1%	12.7%	12.7%	11.4%	16.7%
<b>Q11.今の大学を選んで、入学した理由(その他)</b>							
選択	5.8%	5.5%	5.9%	6.9%	4.1%	6.8%	6.3%
<b>Q12-1.(現在の生活比重)学業、勉強</b>							
大部分	14.9%	15.5%	14.5%	13.2%	17.1%	13.0%	13.3%
かなり	43.3%	38.9%	45.8%	42.0%	45.3%	42.0%	41.6%
少し	37.0%	38.2%	36.4%	39.9%	32.8%	41.4%	38.2%
ほとんどなし	4.8%	7.5%	3.2%	4.9%	4.8%	3.7%	6.9%
<b>Q12-2.(現在の生活比重)ダブルスクール</b>							
大部分	0.5%	0.6%	0.5%	0.0%	0.4%	1.9%	0.0%
かなり	1.6%	2.8%	0.9%	1.8%	1.6%	0.9%	2.4%
少し	4.9%	6.3%	3.9%	5.6%	3.9%	5.7%	4.7%
ほとんどなし	93.0%	90.3%	94.7%	92.7%	94.0%	91.5%	92.9%
<b>Q12-3.(現在の生活比重)サークル、部活動</b>							
大部分	19.1%	22.1%	17.3%	18.7%	19.0%	20.2%	18.0%
かなり	25.7%	31.3%	22.3%	34.5%	23.9%	19.6%	16.3%
少し	24.4%	22.5%	25.6%	28.5%	23.3%	18.6%	25.0%
ほとんどなし	30.8%	24.1%	34.9%	18.2%	33.8%	41.6%	40.7%
<b>Q12-4.(現在の生活比重)アルバイト</b>							
大部分	11.0%	11.8%	10.5%	7.5%	10.1%	16.7%	16.1%
かなり	38.5%	35.6%	40.3%	37.1%	37.9%	39.5%	44.3%
少し	33.4%	31.8%	34.4%	31.7%	37.4%	29.9%	28.2%
ほとんどなし	17.1%	20.8%	14.8%	23.7%	14.5%	13.9%	11.5%
<b>Q12-5.(現在の生活比重)趣味</b>							
大部分	14.0%	16.6%	12.3%	12.4%	14.8%	14.6%	15.0%
かなり	35.3%	38.7%	33.4%	34.0%	34.0%	34.8%	45.7%
少し	40.7%	37.2%	42.8%	40.9%	41.3%	42.2%	34.1%
ほとんどなし	10.0%	7.5%	11.5%	12.7%	9.8%	8.4%	5.2%
<b>Q12-6.(現在の生活比重)友人との交友</b>							
大部分	19.6%	17.7%	20.8%	20.3%	18.5%	17.9%	24.3%
かなり	47.7%	46.9%	48.3%	50.0%	45.6%	47.5%	49.7%
少し	29.5%	31.1%	28.6%	27.8%	32.0%	30.6%	23.7%
ほとんどなし	3.1%	4.3%	2.3%	1.9%	4.0%	4.0%	2.3%
<b>Q12-7.(現在の生活比重)異性(恋人)との交際</b>							
大部分	7.1%	6.7%	7.4%	6.3%	7.0%	9.1%	6.4%
かなり	18.2%	17.6%	18.4%	16.6%	19.3%	15.6%	23.8%
少し	24.6%	26.9%	23.2%	24.3%	22.3%	26.9%	29.1%
ほとんどなし	50.1%	48.7%	51.0%	52.8%	51.4%	48.4%	40.7%
<b>Q12-8.(現在の生活比重)就職活動</b>							
大部分	3.0%	4.0%	2.4%	1.2%	1.0%	7.1%	8.0%
かなり	8.6%	9.1%	8.4%	3.9%	3.2%	22.0%	20.7%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
22.4%	17.1%	21.1%	0.6%	1.8%	1.1%	34.4%	21.6%	0.0%	2.2%	3.8%	2.4%	1.5%	2.4%
0.8%	4.3%	13.2%	5.2%	10.5%	21.3%	17.7%	23.6%	8.8%	23.6%	24.1%	11.9%	9.0%	2.4%
4.0%	5.3%	9.6%	1.7%	6.8%	9.0%	2.1%	6.1%	2.0%	4.5%	6.8%	7.1%	11.9%	2.4%
18.1%	9.1%	19.3%	31.0%	4.1%	18.7%	9.4%	21.5%	20.6%	12.4%	6.1%	14.3%	10.4%	7.1%
41.7%	48.1%	48.2%	48.3%	32.0%	49.2%	37.5%	36.9%	54.9%	44.9%	39.7%	41.7%	47.8%	35.7%
34.6%	39.0%	28.1%	20.1%	55.3%	28.3%	49.0%	38.9%	23.5%	36.0%	46.6%	36.9%	32.8%	52.4%
5.5%	3.7%	4.4%	0.6%	8.7%	3.7%	4.2%	2.7%	1.0%	6.7%	7.6%	7.1%	9.0%	4.8%
0.0%	1.1%	0.0%	0.6%	0.5%	0.5%	2.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	2.4%
0.8%	0.6%	0.9%	2.4%	1.9%	2.7%	0.0%	2.7%	0.0%	2.3%	2.4%	1.2%	3.0%	0.0%
3.1%	3.4%	7.5%	4.1%	6.6%	6.6%	6.3%	6.1%	0.0%	0.0%	7.1%	3.6%	7.5%	2.4%
96.1%	95.0%	91.6%	92.9%	91.1%	90.1%	91.6%	91.2%	100.0%	97.7%	90.6%	94.0%	89.6%	95.1%
31.7%	18.8%	24.6%	17.4%	19.8%	19.8%	10.4%	14.1%	3.9%	10.2%	22.9%	16.7%	21.2%	50.0%
36.5%	32.8%	28.9%	26.7%	23.5%	25.7%	25.0%	24.8%	7.8%	26.1%	19.8%	9.5%	39.4%	35.7%
12.7%	27.4%	15.8%	23.8%	32.7%	25.1%	25.0%	27.5%	25.5%	37.5%	26.0%	10.7%	19.7%	14.3%
19.0%	21.0%	30.7%	32.0%	24.0%	29.4%	39.6%	33.6%	62.7%	26.1%	31.3%	63.1%	19.7%	0.0%
5.5%	8.1%	17.5%	7.0%	12.4%	8.6%	14.6%	10.7%	9.1%	12.4%	16.5%	17.9%	6.0%	14.3%
18.1%	39.8%	32.5%	34.3%	48.2%	44.1%	43.8%	33.6%	48.5%	38.2%	40.6%	35.7%	38.8%	33.3%
52.8%	42.5%	36.0%	40.1%	22.5%	34.4%	24.0%	24.8%	31.3%	34.8%	26.3%	28.6%	29.9%	45.2%
23.6%	9.7%	14.0%	18.6%	17.0%	12.9%	17.7%	30.9%	11.1%	14.6%	16.5%	17.9%	25.4%	7.1%
11.0%	11.8%	13.3%	11.0%	11.5%	9.7%	29.5%	13.4%	12.9%	10.1%	27.3%	16.7%	16.4%	4.8%
33.9%	40.1%	32.7%	29.7%	38.2%	38.4%	32.6%	39.6%	32.7%	34.8%	41.7%	31.0%	31.3%	14.3%
51.2%	38.5%	42.5%	46.5%	41.5%	40.5%	31.6%	38.3%	38.6%	43.8%	26.5%	41.7%	38.8%	59.5%
3.9%	9.6%	11.5%	12.8%	8.8%	11.4%	6.3%	8.7%	15.8%	11.2%	4.5%	10.7%	13.4%	21.4%
11.1%	19.9%	13.2%	14.5%	21.9%	14.0%	20.8%	24.2%	27.7%	24.7%	28.6%	17.9%	20.9%	19.0%
40.5%	52.7%	53.5%	51.2%	47.0%	51.1%	38.5%	51.0%	45.5%	42.7%	43.6%	44.0%	53.7%	42.9%
42.9%	24.7%	29.8%	32.6%	27.9%	32.3%	34.4%	21.5%	25.7%	28.1%	24.1%	35.7%	23.9%	38.1%
5.6%	2.7%	3.5%	1.7%	3.2%	2.7%	6.3%	3.4%	1.0%	4.5%	3.8%	2.4%	1.5%	0.0%
7.1%	4.8%	7.9%	5.8%	6.9%	7.1%	5.3%	4.7%	8.9%	9.2%	9.2%	10.7%	7.5%	11.9%
16.5%	22.5%	20.2%	18.0%	12.9%	22.8%	10.5%	20.1%	14.9%	16.1%	18.5%	20.2%	14.9%	28.6%
19.7%	29.4%	33.3%	25.6%	28.1%	22.3%	18.9%	22.1%	18.8%	18.4%	26.9%	21.4%	25.4%	28.6%
56.7%	43.3%	38.6%	50.6%	52.1%	47.8%	65.3%	53.0%	57.4%	56.3%	45.4%	47.6%	52.2%	31.0%
0.0%	1.6%	5.3%	2.9%	0.9%	2.2%	4.2%	4.7%	1.0%	0.0%	7.6%	9.5%	1.5%	4.9%
1.6%	7.5%	16.7%	4.1%	6.0%	9.7%	7.3%	12.8%	0.0%	3.4%	15.9%	25.0%	4.5%	12.2%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
少し	16.5%	14.5%	17.6%	8.1%	12.2%	34.7%	27.0%
ほとんどなし	71.9%	72.3%	71.6%	86.8%	83.6%	36.2%	44.3%
<b>Q13.授業への出席率</b>							
90%以上	66.7%	61.1%	70.1%	73.0%	64.5%	65.0%	56.6%
89-80%	19.7%	19.8%	19.6%	17.0%	21.8%	19.5%	20.8%
79-60%	11.0%	15.0%	8.6%	8.7%	11.2%	12.1%	16.8%
59-40%	1.9%	3.0%	1.2%	0.7%	2.0%	2.8%	3.5%
39%以下	0.7%	1.2%	0.5%	0.7%	0.4%	0.6%	2.3%
<b>Q14-1.(大学の授業について)先生が授業に熱心である</b>							
とてもそう	11.0%	10.4%	11.4%	11.0%	10.1%	13.0%	10.3%
ややそう	48.9%	47.2%	50.0%	52.0%	44.8%	47.8%	58.0%
どちらともいえない	30.7%	30.8%	30.4%	29.9%	34.2%	29.0%	22.4%
ややそうでない	7.9%	8.6%	7.5%	6.4%	8.9%	9.0%	6.9%
全然そうでない	1.5%	2.8%	0.6%	0.7%	2.0%	1.2%	2.3%
<b>Q14-2.(大学の授業について)面白い授業がある</b>							
とてもそう	24.0%	24.7%	23.7%	26.9%	21.5%	22.8%	24.7%
ややそう	51.4%	48.1%	53.5%	49.9%	53.4%	50.0%	52.3%
どちらともいえない	14.6%	14.6%	14.5%	13.5%	14.6%	17.0%	13.8%
ややそうでない	7.8%	9.1%	6.9%	7.3%	8.0%	9.0%	6.9%
全然そうでない	2.2%	3.6%	1.4%	2.4%	2.5%	1.2%	2.3%
<b>Q14-3.(大学の授業について)幅広い知識が得られる</b>							
とてもそう	22.8%	24.3%	21.9%	21.4%	22.4%	23.5%	25.9%
ややそう	49.7%	45.0%	52.6%	50.7%	50.7%	46.9%	48.3%
どちらともいえない	20.6%	22.1%	19.7%	21.9%	19.6%	21.6%	19.0%
ややそうでない	5.6%	6.6%	5.0%	5.4%	5.9%	6.8%	3.4%
全然そうでない	1.3%	2.1%	0.8%	0.7%	1.3%	1.2%	3.4%
<b>Q14-4.(大学の授業について)専門的知識が得られる</b>							
とてもそう	27.6%	26.0%	28.7%	23.8%	30.0%	29.3%	26.4%
ややそう	47.6%	44.6%	49.5%	49.6%	47.9%	45.4%	46.6%
どちらともいえない	16.7%	18.4%	15.6%	18.4%	15.2%	17.3%	16.7%
ややそうでない	6.5%	8.8%	5.0%	7.0%	5.3%	6.8%	8.0%
全然そうでない	1.5%	2.2%	1.1%	1.2%	1.6%	1.2%	2.3%
<b>Q14-5.(大学の授業について)将来のキャリアに関連した授業がある</b>							
とてもそう	24.9%	22.4%	26.5%	26.1%	23.5%	29.3%	17.9%
ややそう	39.1%	35.9%	41.1%	40.7%	37.8%	40.1%	38.2%
どちらともいえない	23.7%	26.9%	21.6%	24.3%	25.1%	19.8%	23.7%
ややそうでない	9.7%	10.9%	9.0%	6.6%	10.9%	9.0%	15.6%
全然そうでない	2.6%	3.9%	1.8%	2.3%	2.8%	1.9%	4.6%
<b>Q14-6.(大学の授業について)自分の人生について考えられるような授業がある</b>							
とてもそう	20.9%	20.1%	21.4%	24.7%	17.8%	21.7%	17.8%
ややそう	37.6%	32.6%	40.6%	39.0%	37.5%	36.8%	36.2%
どちらともいえない	25.7%	29.5%	23.4%	25.0%	25.3%	26.9%	27.0%
ややそうでない	11.9%	11.5%	12.1%	8.3%	14.6%	10.8%	14.9%
全然そうでない	3.9%	6.3%	2.5%	3.0%	4.8%	3.7%	4.0%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	二	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
3.9%	16.0%	17.5%	12.8%	18.9%	17.8%	17.7%	19.5%	11.0%	13.6%	22.7%	25.0%	17.9%	17.1%
94.5%	74.9%	60.5%	80.2%	74.2%	70.3%	70.8%	63.1%	88.0%	83.0%	53.8%	40.5%	76.1%	65.9%
65.4%	78.0%	72.8%	84.5%	58.9%	64.7%	63.5%	71.8%	55.4%	56.2%	56.4%	66.3%	68.7%	47.6%
14.2%	12.9%	17.5%	11.5%	23.7%	24.6%	18.8%	18.1%	33.7%	25.8%	23.3%	20.5%	19.4%	11.9%
15.7%	6.5%	8.8%	3.4%	14.6%	9.1%	15.6%	8.1%	8.9%	15.7%	17.3%	9.6%	11.9%	21.4%
3.9%	1.6%	0.9%	0.6%	1.8%	1.1%	2.1%	2.0%	1.0%	1.1%	1.5%	2.4%	0.0%	14.3%
0.8%	1.1%	0.0%	0.0%	0.9%	0.5%	0.0%	0.0%	1.0%	1.1%	1.5%	1.2%	0.0%	4.8%
6.3%	16.0%	12.3%	25.9%	9.6%	8.1%	3.1%	7.4%	4.9%	16.9%	6.8%	15.5%	9.0%	0.0%
42.9%	56.1%	52.6%	53.4%	53.0%	43.2%	35.4%	47.7%	46.1%	46.1%	48.9%	47.6%	53.7%	52.4%
38.9%	22.5%	27.2%	16.7%	29.7%	36.2%	47.9%	34.9%	34.3%	30.3%	30.1%	32.1%	32.8%	23.8%
9.5%	5.3%	6.1%	4.0%	6.8%	9.2%	12.5%	8.7%	13.7%	6.7%	11.3%	4.8%	3.0%	14.3%
2.4%	0.0%	1.8%	0.0%	0.9%	3.2%	1.0%	1.3%	1.0%	0.0%	3.0%	0.0%	1.5%	9.5%
23.0%	23.0%	29.8%	37.9%	14.6%	22.5%	9.4%	24.2%	24.5%	31.5%	19.5%	15.5%	46.3%	26.2%
63.5%	54.5%	45.6%	46.0%	55.3%	43.3%	52.1%	49.7%	54.9%	52.8%	51.1%	56.0%	40.3%	57.1%
6.3%	15.0%	17.5%	14.4%	19.2%	13.9%	25.0%	12.8%	11.8%	7.9%	19.5%	16.7%	7.5%	4.8%
6.3%	6.4%	5.3%	1.7%	9.1%	14.4%	10.4%	10.7%	7.8%	6.7%	6.0%	9.5%	3.0%	9.5%
0.8%	1.1%	1.8%	0.0%	1.8%	5.9%	3.1%	2.7%	1.0%	1.1%	3.8%	2.4%	3.0%	2.4%
29.4%	25.8%	26.3%	36.4%	20.5%	20.9%	8.3%	22.1%	18.0%	16.9%	14.3%	20.2%	28.4%	26.2%
52.4%	53.8%	46.5%	42.2%	50.7%	48.1%	50.0%	48.3%	58.0%	48.3%	47.4%	53.6%	50.7%	50.0%
13.5%	15.6%	22.8%	17.9%	20.5%	19.8%	21.9%	24.2%	20.0%	31.5%	30.8%	19.0%	16.4%	14.3%
4.0%	4.8%	2.6%	2.9%	7.3%	9.1%	15.6%	3.4%	3.0%	2.2%	5.3%	7.1%	4.5%	7.1%
0.8%	0.0%	1.8%	0.6%	0.9%	2.1%	4.2%	2.0%	1.0%	1.1%	2.3%	0.0%	0.0%	2.4%
29.4%	28.9%	37.7%	46.6%	16.9%	27.4%	10.4%	27.0%	49.5%	18.0%	7.6%	38.1%	28.4%	19.0%
45.2%	56.7%	50.0%	37.4%	51.6%	42.5%	57.3%	52.0%	42.6%	50.6%	38.6%	53.6%	44.8%	42.9%
14.3%	11.2%	9.6%	12.1%	20.5%	19.4%	20.8%	14.2%	7.9%	24.7%	37.9%	7.1%	16.4%	11.9%
9.5%	2.7%	2.6%	3.4%	9.1%	9.1%	9.4%	4.1%	0.0%	5.6%	12.1%	1.2%	9.0%	19.0%
1.6%	0.5%	0.0%	0.6%	1.8%	1.6%	2.1%	2.7%	0.0%	1.1%	3.8%	0.0%	1.5%	7.1%
19.0%	31.6%	36.8%	27.9%	11.0%	21.4%	9.4%	20.3%	45.0%	25.8%	9.8%	51.2%	52.2%	9.5%
38.9%	50.8%	38.6%	33.1%	29.8%	33.7%	26.0%	56.8%	44.0%	47.2%	36.1%	39.3%	35.8%	40.5%
27.8%	12.3%	19.3%	26.2%	39.0%	26.7%	35.4%	17.6%	10.0%	21.3%	33.1%	7.1%	9.0%	28.6%
11.1%	4.3%	4.4%	9.9%	17.9%	14.4%	21.9%	4.1%	1.0%	3.4%	15.0%	2.4%	1.5%	16.7%
3.2%	1.1%	0.9%	2.9%	2.3%	3.7%	7.3%	1.4%	0.0%	2.2%	6.0%	0.0%	1.5%	4.8%
15.1%	20.3%	26.3%	25.3%	11.5%	20.4%	10.4%	18.8%	23.5%	27.0%	11.3%	32.1%	62.7%	11.9%
34.9%	40.1%	43.0%	39.1%	32.7%	33.9%	30.2%	49.0%	48.0%	43.8%	34.6%	32.1%	26.9%	31.0%
31.0%	24.1%	19.3%	21.8%	35.5%	27.4%	29.2%	19.5%	20.6%	23.6%	34.6%	25.0%	7.5%	26.2%
13.5%	12.8%	7.9%	9.2%	16.6%	13.4%	21.9%	8.7%	4.9%	4.5%	15.8%	10.7%	3.0%	19.0%
5.6%	2.7%	3.5%	4.6%	3.7%	4.8%	8.3%	4.0%	2.9%	1.1%	3.8%	0.0%	0.0%	11.9%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
<b>Q14-7.(大学の授業について)小人数、ゼミ形式の授業がある</b>							
とてもそう	37.2%	36.2%	37.9%	32.9%	28.9%	54.6%	50.0%
ややそう	38.9%	38.5%	39.1%	39.0%	41.2%	34.3%	39.7%
どちらともいえない	12.8%	14.7%	11.7%	16.3%	14.0%	7.4%	7.5%
ややそうでない	7.3%	6.7%	7.8%	8.3%	10.2%	2.8%	1.7%
全然そうでない	3.7%	3.9%	3.6%	3.5%	5.7%	0.9%	1.1%
<b>Q14-8.(大学の授業について)グループで討論や作業をする授業がある</b>							
とてもそう	30.7%	31.1%	30.5%	30.4%	26.8%	36.7%	35.1%
ややそう	43.2%	42.7%	43.5%	44.4%	44.4%	39.8%	40.8%
どちらともいえない	15.1%	14.8%	15.3%	14.2%	15.6%	16.7%	13.8%
ややそうでない	8.8%	9.0%	8.7%	9.0%	10.1%	4.9%	9.8%
全然そうでない	2.2%	2.4%	2.1%	1.9%	3.1%	1.9%	0.6%
<b>Q14-9.(大学の授業について)私語の多い授業がある</b>							
とてもそう	23.3%	27.1%	21.0%	18.6%	24.5%	26.5%	27.0%
ややそう	36.9%	34.4%	38.5%	37.2%	35.2%	40.1%	36.8%
どちらともいえない	22.4%	21.6%	22.8%	26.4%	21.0%	19.1%	21.3%
ややそうでない	13.8%	13.1%	14.2%	14.9%	15.6%	9.9%	11.5%
全然そうでない	3.6%	3.7%	3.5%	3.0%	3.7%	4.3%	3.4%
<b>Q14-10.(大学の授業について)授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ</b>							
とてもそう	14.5%	16.4%	13.4%	11.8%	15.5%	16.7%	15.5%
ややそう	25.9%	26.0%	25.8%	25.3%	26.1%	24.5%	29.3%
どちらともいえない	39.8%	36.9%	41.5%	42.7%	37.1%	40.9%	39.7%
ややそうでない	14.3%	12.6%	15.3%	14.6%	16.4%	11.5%	9.8%
全然そうでない	5.5%	8.0%	4.0%	5.6%	5.0%	6.5%	5.7%
<b>Q14-11.(大学の授業について)授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい</b>							
とてもそう	28.4%	29.3%	27.9%	28.8%	29.6%	28.7%	23.0%
ややそう	38.0%	33.2%	41.1%	40.2%	38.8%	36.7%	28.7%
どちらともいえない	20.6%	22.8%	19.3%	19.9%	18.7%	21.6%	28.7%
ややそうでない	9.0%	9.4%	8.7%	6.2%	9.8%	8.6%	15.5%
全然そうでない	4.0%	5.4%	3.1%	4.9%	3.1%	4.3%	4.0%
<b>Q14-12.(大学の授業について)就職活動に役立つことをもっと教えてほしい</b>							
とてもそう	27.6%	24.9%	29.3%	26.8%	29.1%	30.9%	18.4%
ややそう	34.8%	29.4%	38.2%	36.2%	34.6%	34.3%	30.5%
どちらともいえない	22.5%	24.3%	21.2%	26.3%	20.3%	21.3%	21.8%
ややそうでない	9.2%	11.5%	7.9%	5.9%	9.6%	8.6%	20.1%
全然そうでない	5.9%	10.0%	3.5%	4.9%	6.3%	4.9%	9.2%
<b>Q14-13.(大学の授業について)授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい</b>							
とてもそう	18.6%	17.6%	19.2%	20.1%	18.5%	17.3%	14.9%
ややそう	34.2%	31.3%	36.0%	35.1%	35.6%	32.4%	29.9%
どちらともいえない	29.6%	31.5%	28.5%	31.4%	27.9%	32.7%	24.7%
ややそうでない	12.7%	11.6%	13.3%	9.4%	13.7%	12.0%	21.3%
全然そうでない	4.9%	8.0%	2.9%	4.0%	4.2%	5.6%	9.2%
<b>Q14-14.(大学の授業について)授業全般に満足している</b>							
とてもそう	8.1%	8.8%	7.7%	6.9%	6.7%	10.8%	12.1%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
23.0%	29.4%	31.6%	40.8%	41.1%	38.0%	25.0%	45.0%	8.8%	50.6%	50.4%	57.1%	40.3%	45.2%
48.4%	43.9%	30.7%	28.2%	40.6%	44.4%	35.4%	41.6%	41.2%	43.8%	36.8%	32.1%	38.8%	26.2%
15.1%	18.7%	22.8%	15.5%	11.9%	9.6%	17.7%	9.4%	17.6%	4.5%	6.8%	7.1%	10.4%	2.4%
11.9%	5.9%	12.3%	10.3%	4.6%	5.3%	12.5%	2.7%	16.7%	1.1%	4.5%	3.6%	4.5%	14.3%
1.6%	2.1%	2.6%	5.2%	1.8%	2.7%	9.4%	1.3%	15.7%	0.0%	1.5%	0.0%	6.0%	11.9%
17.5%	33.7%	31.9%	36.8%	33.0%	31.4%	15.6%	25.7%	25.5%	30.3%	31.6%	34.5%	53.7%	31.7%
51.6%	52.4%	39.8%	33.3%	43.1%	47.0%	30.2%	43.9%	46.1%	49.4%	42.1%	36.9%	40.3%	36.6%
17.5%	9.1%	20.4%	13.8%	11.5%	11.4%	27.1%	16.9%	19.6%	18.0%	17.3%	21.4%	3.0%	12.2%
11.9%	4.3%	7.1%	12.6%	9.6%	8.6%	17.7%	11.5%	5.9%	1.1%	7.5%	6.0%	3.0%	17.1%
1.6%	0.5%	0.9%	3.4%	2.8%	1.6%	9.4%	2.0%	2.9%	1.1%	1.5%	1.2%	0.0%	2.4%
15.1%	12.3%	12.4%	12.1%	26.0%	31.6%	17.7%	17.7%	35.3%	13.5%	42.9%	45.2%	38.8%	14.6%
29.4%	32.6%	31.9%	30.1%	42.5%	40.1%	43.8%	41.5%	38.2%	50.6%	39.1%	34.5%	28.4%	24.4%
19.8%	29.9%	34.5%	24.9%	21.9%	18.7%	21.9%	24.5%	22.5%	18.0%	12.8%	17.9%	17.9%	22.0%
27.8%	21.4%	15.0%	23.1%	9.1%	8.6%	13.5%	12.9%	3.9%	15.7%	3.0%	1.2%	13.4%	29.3%
7.9%	3.7%	6.2%	9.8%	0.5%	1.1%	3.1%	3.4%	0.0%	2.2%	2.3%	1.2%	1.5%	9.8%
12.7%	9.7%	15.9%	15.5%	13.2%	20.9%	10.4%	12.1%	16.7%	13.5%	15.0%	19.0%	16.4%	11.9%
22.2%	20.4%	14.2%	26.4%	28.3%	30.5%	20.8%	22.1%	30.4%	30.3%	34.6%	26.2%	34.3%	21.4%
34.9%	41.9%	39.8%	35.6%	42.0%	34.8%	44.8%	43.0%	40.2%	43.8%	43.6%	38.1%	37.3%	35.7%
17.5%	21.5%	15.0%	12.6%	12.8%	10.2%	21.9%	18.1%	11.8%	10.1%	5.3%	14.3%	9.0%	23.8%
12.7%	6.5%	15.0%	9.8%	3.7%	3.7%	2.1%	4.7%	1.0%	2.2%	1.5%	2.4%	3.0%	7.1%
21.4%	21.9%	31.6%	28.7%	30.1%	31.0%	31.3%	27.5%	38.2%	23.6%	28.6%	38.1%	19.4%	26.2%
31.7%	38.5%	27.2%	34.5%	37.0%	34.8%	43.8%	43.0%	45.1%	42.7%	43.6%	34.5%	47.8%	35.7%
26.2%	21.9%	25.4%	21.3%	20.1%	26.7%	15.6%	18.8%	8.8%	23.6%	21.8%	15.5%	11.9%	16.7%
13.5%	15.0%	9.6%	8.6%	9.6%	4.8%	8.3%	8.1%	6.9%	5.6%	4.5%	9.5%	10.4%	11.9%
7.1%	2.7%	6.1%	6.9%	3.2%	2.7%	1.0%	2.7%	1.0%	4.5%	1.5%	2.4%	10.4%	9.5%
6.3%	19.4%	36.0%	13.8%	28.8%	30.5%	32.3%	28.4%	39.2%	39.8%	35.3%	39.3%	34.3%	16.7%
14.3%	33.9%	36.8%	27.6%	38.4%	28.9%	46.9%	41.2%	46.1%	47.7%	39.8%	27.4%	32.8%	28.6%
29.4%	30.1%	20.2%	24.7%	19.2%	31.0%	12.5%	24.3%	12.7%	11.4%	17.3%	23.8%	22.4%	21.4%
24.6%	10.2%	3.5%	20.7%	8.7%	7.5%	7.3%	4.1%	1.0%	0.0%	6.8%	6.0%	4.5%	21.4%
25.4%	6.5%	3.5%	13.2%	5.0%	2.1%	1.0%	2.0%	1.0%	1.1%	0.8%	3.6%	6.0%	11.9%
11.1%	15.6%	21.9%	21.3%	16.4%	20.3%	14.6%	18.8%	23.5%	20.2%	18.0%	27.4%	16.4%	19.0%
20.6%	31.2%	36.8%	30.5%	32.0%	38.0%	33.3%	36.9%	41.2%	38.2%	42.9%	31.0%	37.3%	31.0%
31.0%	30.6%	28.9%	27.6%	32.4%	28.9%	36.5%	30.9%	24.5%	27.0%	27.1%	31.0%	29.9%	23.8%
27.8%	17.2%	7.9%	12.6%	13.7%	8.6%	12.5%	10.7%	9.8%	9.0%	9.0%	8.3%	10.4%	21.4%
9.5%	5.4%	4.4%	8.0%	5.5%	4.3%	3.1%	2.7%	1.0%	5.6%	3.0%	2.4%	6.0%	4.8%
5.5%	11.8%	16.7%	22.4%	4.6%	7.0%	1.0%	2.7%	2.0%	5.6%	3.8%	10.7%	9.0%	2.4%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
ややそう	37.4%	36.8%	37.9%	38.1%	35.7%	37.0%	42.2%
どちらともいえない	35.5%	31.7%	37.9%	36.0%	37.6%	35.2%	26.0%
ややそうでない	14.9%	18.0%	12.9%	14.7%	15.2%	14.5%	15.6%
全然そうでない	4.1%	4.8%	3.7%	4.2%	4.8%	2.5%	4.0%
<b>Q14-15.(大学の授業について)大学での自分自身の成績は良いほうだ</b>							
とてもそう	6.5%	8.0%	5.6%	4.3%	6.4%	9.3%	8.0%
ややそう	28.0%	22.6%	31.3%	25.8%	28.0%	27.5%	35.6%
どちらともいえない	39.0%	37.0%	40.2%	43.7%	37.9%	37.0%	32.2%
ややそうでない	18.7%	20.2%	17.8%	18.4%	19.1%	19.1%	17.2%
全然そうでない	7.9%	12.2%	5.1%	7.8%	8.6%	7.1%	6.9%
<b>Q15.部やサークル(同好会)</b>							
運動系の部(体育会)	13.3%	20.4%	9.0%	12.3%	15.2%	11.7%	12.7%
運動系のサークル(同好会)	20.0%	20.3%	19.9%	27.5%	17.5%	14.8%	14.5%
文科系の部、サークル	26.3%	27.2%	25.7%	28.6%	26.6%	22.2%	26.6%
社会活動関係の部、ボランティア団体等	13.6%	10.0%	15.9%	15.6%	13.4%	10.8%	12.1%
その他	0.9%	0.4%	1.1%	0.5%	0.9%	1.5%	0.6%
以前は参加していたが、やめた	11.3%	10.1%	11.9%	5.8%	12.1%	14.2%	20.8%
最初から入っていない	14.5%	11.5%	16.4%	9.6%	14.3%	24.7%	12.7%
<b>Q16.あなたの友達は、今の大学の人が多いですか</b>							
今の大学の人が多い	34.7%	36.5%	33.7%	29.8%	33.8%	40.7%	43.7%
今の大学以外の人が多い	33.8%	34.1%	33.5%	37.6%	33.2%	31.2%	27.6%
どちらとも言えない	31.4%	29.4%	32.7%	32.6%	32.9%	28.1%	28.7%
<b>Q17-1.(友だちとの付き合い)お昼ご飯を一緒に食べる</b>							
よくする	66.6%	52.7%	75.3%	76.4%	66.9%	59.3%	47.7%
まあする	21.5%	28.3%	17.3%	15.3%	20.8%	25.9%	35.1%
あまりしない	7.8%	11.4%	5.5%	5.4%	7.9%	10.2%	10.9%
ぜんぜんしない	4.1%	7.6%	1.9%	3.0%	4.4%	4.6%	6.3%
<b>Q17-2.(友だちとの付き合い)学外でも遊んだり食事をしたりする</b>							
よくする	38.7%	35.9%	40.4%	37.8%	37.8%	38.6%	45.4%
まあする	39.1%	36.5%	40.7%	38.9%	39.9%	38.3%	36.8%
あまりしない	16.8%	19.6%	15.0%	17.0%	16.8%	17.0%	16.1%
ぜんぜんしない	5.5%	8.0%	3.8%	6.3%	5.5%	6.2%	1.7%
<b>Q17-3.(友だちとの付き合い)悩みを相談する</b>							
よくする	31.2%	20.5%	37.8%	28.8%	30.1%	36.7%	32.8%
まあする	34.0%	30.2%	36.4%	34.4%	34.5%	30.9%	36.8%
あまりしない	25.5%	33.5%	20.5%	27.8%	24.9%	24.4%	21.8%
ぜんぜんしない	9.3%	15.8%	5.3%	9.0%	10.5%	8.0%	8.6%
<b>Q17-4.(友だちとの付き合い)ライン、ツイッター、フェイスブックなど、インターネットでやり取りをする</b>							
よくする	56.8%	48.6%	61.9%	58.7%	56.2%	58.0%	50.6%
まあする	30.5%	32.2%	29.6%	31.9%	29.9%	28.7%	32.2%
あまりしない	7.9%	11.3%	5.8%	6.1%	8.2%	8.3%	12.1%
ぜんぜんしない	4.8%	7.9%	2.7%	3.3%	5.7%	4.9%	5.2%
<b>Q18-1.(施設・設備)校舎、教室</b>							
とても満足	14.4%	15.6%	13.7%	16.0%	12.1%	15.1%	16.7%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	二	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
48.8%	42.8%	29.8%	46.6%	42.0%	33.9%	31.3%	33.6%	29.4%	43.8%	30.8%	33.3%	32.8%	23.8%
33.1%	33.2%	28.1%	19.5%	38.8%	33.9%	35.4%	45.6%	45.1%	31.5%	46.6%	35.7%	37.3%	40.5%
9.4%	10.2%	16.7%	8.6%	12.8%	17.7%	25.0%	15.4%	21.6%	12.4%	15.0%	19.0%	17.9%	23.8%
3.1%	2.1%	8.8%	2.9%	1.8%	7.5%	7.3%	2.7%	2.0%	6.7%	3.8%	1.2%	3.0%	9.5%
6.3%	3.7%	14.9%	10.3%	3.7%	6.4%	4.2%	4.7%	1.0%	6.7%	11.3%	8.3%	4.5%	4.8%
37.8%	28.9%	28.1%	39.1%	25.6%	25.1%	24.0%	28.9%	20.6%	33.7%	24.1%	16.7%	25.4%	23.8%
33.1%	39.6%	35.1%	28.7%	37.9%	42.8%	36.5%	45.0%	51.0%	37.1%	40.6%	44.0%	43.3%	33.3%
16.5%	20.3%	15.8%	12.6%	21.9%	18.2%	28.1%	16.8%	25.5%	13.5%	17.3%	21.4%	19.4%	14.3%
6.3%	7.5%	6.1%	9.2%	11.0%	7.5%	7.3%	4.7%	2.0%	9.0%	6.8%	9.5%	7.5%	23.8%
22.0%	13.4%	36.8%	13.8%	4.1%	18.7%	1.1%	15.3%	2.0%	5.6%	16.5%	13.1%	10.9%	4.8%
15.0%	27.3%	10.5%	12.6%	39.3%	22.5%	12.6%	11.8%	23.5%	34.8%	14.3%	2.4%	23.4%	2.4%
41.7%	26.7%	16.7%	38.5%	21.5%	21.4%	38.9%	25.0%	19.6%	6.7%	36.1%	13.1%	40.6%	7.1%
5.5%	17.1%	8.8%	9.2%	12.3%	12.8%	12.6%	16.7%	7.8%	28.1%	6.0%	9.5%	6.3%	83.3%
0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	0.9%	1.1%	0.0%	2.1%	2.9%	1.1%	0.8%	1.2%	0.0%	2.4%
7.9%	9.1%	14.0%	16.1%	13.7%	12.8%	15.8%	8.3%	11.8%	6.7%	12.8%	10.7%	4.7%	0.0%
7.9%	6.4%	13.2%	9.2%	8.2%	10.7%	18.9%	20.8%	32.4%	16.9%	13.5%	50.0%	14.1%	0.0%
44.9%	42.8%	41.2%	40.8%	32.0%	31.9%	22.9%	30.9%	19.8%	28.1%	30.1%	33.3%	37.3%	57.1%
21.3%	30.5%	20.2%	31.0%	40.6%	33.5%	53.1%	43.0%	36.6%	36.0%	39.8%	33.3%	23.9%	11.9%
33.9%	26.7%	38.6%	28.2%	27.4%	34.6%	24.0%	26.2%	43.6%	36.0%	30.1%	33.3%	38.8%	31.0%
36.2%	71.1%	73.7%	59.8%	58.9%	66.8%	68.8%	67.1%	96.1%	75.0%	68.4%	73.8%	77.6%	52.4%
38.6%	19.8%	18.4%	28.7%	27.4%	21.9%	17.7%	18.8%	3.9%	14.8%	16.5%	19.0%	13.4%	31.0%
18.1%	3.2%	7.0%	7.5%	8.2%	8.0%	5.2%	8.7%	0.0%	6.8%	11.3%	7.1%	7.5%	11.9%
7.1%	5.9%	0.9%	4.0%	5.5%	3.2%	8.3%	5.4%	0.0%	3.4%	3.8%	0.0%	1.5%	4.8%
23.6%	46.5%	48.2%	37.9%	37.4%	39.0%	31.3%	40.3%	43.1%	43.2%	42.1%	39.3%	19.4%	40.5%
45.7%	39.6%	36.8%	40.2%	38.4%	36.9%	36.5%	35.6%	44.1%	40.9%	27.1%	40.5%	55.2%	42.9%
24.4%	10.2%	14.9%	17.2%	18.3%	15.5%	18.8%	17.4%	11.8%	12.5%	21.8%	17.9%	19.4%	16.7%
6.3%	3.7%	0.0%	4.6%	5.9%	8.6%	13.5%	6.7%	1.0%	3.4%	9.0%	2.4%	6.0%	0.0%
14.2%	37.4%	42.1%	31.0%	23.4%	28.0%	21.9%	34.9%	42.2%	39.8%	24.8%	50.0%	23.9%	38.1%
33.1%	30.5%	37.7%	35.6%	36.2%	31.2%	37.5%	26.8%	40.2%	35.2%	31.6%	34.5%	34.3%	42.9%
40.9%	25.7%	15.8%	24.7%	30.3%	28.5%	25.0%	25.5%	16.7%	19.3%	29.3%	11.9%	25.4%	19.0%
11.8%	6.4%	4.4%	8.6%	10.1%	12.4%	15.6%	12.8%	1.0%	5.7%	14.3%	3.6%	16.4%	0.0%
48.8%	56.7%	65.8%	56.3%	47.0%	58.1%	52.1%	64.4%	68.6%	61.4%	48.1%	60.7%	67.2%	52.4%
28.3%	33.7%	23.7%	31.6%	38.4%	30.1%	24.0%	23.5%	28.4%	29.5%	36.8%	34.5%	20.9%	33.3%
14.2%	5.3%	7.0%	6.3%	10.5%	8.1%	9.4%	8.7%	2.0%	6.8%	9.0%	2.4%	7.5%	14.3%
8.7%	4.3%	3.5%	5.7%	4.1%	3.8%	14.6%	3.4%	1.0%	2.3%	6.0%	2.4%	4.5%	0.0%
7.1%	26.9%	8.8%	13.8%	17.8%	21.4%	9.4%	10.1%	0.0%	11.2%	19.5%	4.8%	20.9%	11.9%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
やや満足	51.7%	50.0%	52.8%	55.9%	45.0%	54.0%	59.8%
どちらともいえない	18.2%	18.0%	18.4%	15.5%	22.0%	17.6%	13.8%
やや不満	12.8%	13.2%	12.4%	10.8%	16.6%	10.8%	8.0%
とても不満	2.9%	3.3%	2.7%	1.9%	4.2%	2.5%	1.7%
<b>Q18-2.(施設・設備)図書館</b>							
とても満足	32.0%	31.1%	32.6%	36.1%	30.5%	26.6%	33.3%
やや満足	43.0%	43.5%	42.8%	41.5%	44.6%	42.7%	43.1%
どちらともいえない	12.3%	11.6%	12.7%	12.7%	12.1%	14.2%	8.6%
やや不満	9.0%	8.9%	9.1%	7.1%	9.5%	11.8%	9.2%
とても不満	3.6%	4.9%	2.8%	2.6%	3.4%	4.6%	5.7%
<b>Q18-3.(施設・設備)食堂</b>							
とても満足	10.8%	11.7%	10.3%	13.7%	9.1%	10.2%	9.2%
やや満足	29.4%	27.0%	30.9%	34.4%	26.1%	25.9%	31.8%
どちらともいえない	24.4%	22.8%	25.4%	23.0%	24.5%	27.5%	23.1%
やや不満	25.3%	25.7%	25.0%	21.9%	27.2%	27.5%	24.9%
とても不満	10.1%	12.8%	8.3%	7.0%	13.1%	9.0%	11.0%
<b>Q18-4.(施設・設備)コンピュータールーム</b>							
とても満足	17.3%	17.4%	17.2%	20.7%	13.3%	17.0%	21.3%
やや満足	44.8%	43.2%	45.8%	48.2%	43.0%	43.8%	43.7%
どちらともいえない	23.6%	24.1%	23.4%	21.7%	26.0%	25.0%	17.2%
やや不満	11.6%	11.7%	11.4%	6.8%	14.5%	11.4%	16.7%
とても不満	2.7%	3.6%	2.2%	2.6%	3.2%	2.8%	1.1%
<b>Q18-5.(施設・設備)購買部(売店など)</b>							
とても満足	12.9%	13.6%	12.5%	16.7%	11.0%	10.2%	12.1%
やや満足	37.5%	38.4%	37.1%	43.9%	32.9%	31.0%	46.0%
どちらともいえない	21.0%	24.0%	19.0%	20.1%	18.7%	27.2%	22.4%
やや不満	20.6%	18.0%	22.2%	16.7%	23.0%	26.3%	13.8%
とても不満	8.0%	5.9%	9.3%	2.6%	14.5%	5.3%	5.7%
<b>Q18-6.(施設・設備)部やサークル活動の場、広場</b>							
とても満足	10.5%	13.1%	9.0%	13.9%	9.9%	7.8%	6.3%
やや満足	23.4%	24.3%	22.9%	31.3%	20.3%	18.0%	20.7%
どちらともいえない	37.6%	31.8%	41.2%	33.6%	37.5%	40.7%	45.4%
やや不満	19.2%	18.2%	19.7%	16.3%	20.6%	22.0%	17.8%
とても不満	9.3%	12.6%	7.2%	4.9%	11.8%	11.5%	9.8%
<b>Q18-7.(施設・設備)キャリアセンター、就職課</b>							
とても満足	7.9%	7.9%	8.0%	8.9%	5.5%	10.2%	10.3%
やや満足	25.5%	22.1%	27.6%	27.5%	18.2%	31.6%	36.2%
どちらともいえない	54.9%	57.9%	52.9%	58.8%	62.2%	43.0%	36.2%
やや不満	8.2%	7.6%	8.6%	3.7%	9.6%	10.8%	10.9%
とても不満	3.5%	4.5%	2.9%	1.2%	4.4%	4.3%	6.3%
<b>Q18-8.(施設・設備)大学の周辺環境</b>							
とても満足	11.7%	13.2%	10.7%	14.6%	8.7%	12.3%	11.5%
やや満足	28.9%	28.5%	29.1%	34.5%	27.0%	21.3%	31.6%
どちらともいえない	25.8%	25.1%	26.3%	23.6%	29.4%	22.8%	24.7%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
42.5%	57.0%	36.0%	51.7%	57.5%	56.1%	60.4%	58.4%	18.6%	55.1%	62.4%	47.6%	53.7%	50.0%
28.3%	12.4%	21.9%	21.3%	13.7%	15.0%	15.6%	24.8%	24.5%	19.1%	11.3%	26.2%	7.5%	16.7%
18.1%	3.2%	22.8%	13.2%	10.5%	6.4%	13.5%	4.7%	41.2%	13.5%	4.5%	17.9%	14.9%	19.0%
3.9%	0.5%	10.5%	0.0%	0.5%	1.1%	1.0%	2.0%	15.7%	1.1%	2.3%	3.6%	3.0%	2.4%
29.1%	54.5%	7.0%	32.8%	47.5%	36.6%	14.6%	23.5%	27.5%	36.0%	36.8%	13.3%	13.4%	28.6%
54.3%	32.1%	20.2%	46.6%	42.5%	45.7%	42.7%	48.3%	51.0%	48.3%	48.9%	44.6%	31.3%	45.2%
7.1%	6.4%	18.4%	11.5%	6.8%	11.3%	17.7%	19.5%	10.8%	10.1%	10.5%	27.7%	22.4%	2.4%
6.3%	7.0%	27.2%	9.2%	3.2%	4.3%	21.9%	7.4%	10.8%	4.5%	1.5%	13.3%	20.9%	7.1%
3.1%	0.0%	27.2%	0.0%	0.0%	2.2%	3.1%	1.3%	0.0%	1.1%	2.3%	1.2%	11.9%	16.7%
11.8%	22.5%	14.9%	4.6%	9.2%	9.1%	4.2%	21.6%	2.0%	6.8%	8.3%	6.0%	13.4%	7.1%
37.0%	31.6%	35.1%	17.8%	28.0%	36.9%	18.9%	46.6%	15.7%	26.1%	27.8%	25.0%	25.4%	26.2%
25.2%	26.7%	21.1%	23.6%	24.3%	25.7%	13.7%	19.6%	27.5%	28.4%	29.3%	29.8%	19.4%	26.2%
18.9%	16.6%	19.3%	35.1%	33.5%	19.8%	40.0%	11.5%	31.4%	31.8%	19.5%	32.1%	26.9%	31.0%
7.1%	2.7%	9.6%	19.0%	5.0%	8.6%	23.2%	0.7%	23.5%	6.8%	15.0%	7.1%	14.9%	9.5%
12.6%	21.4%	12.4%	17.2%	22.4%	20.9%	8.4%	30.4%	6.9%	7.9%	15.0%	11.9%	21.2%	14.3%
48.0%	38.0%	43.4%	50.6%	45.2%	48.7%	33.7%	50.0%	33.3%	49.4%	46.6%	51.2%	42.4%	38.1%
28.3%	26.7%	25.7%	21.3%	23.7%	23.0%	22.1%	11.5%	26.5%	30.3%	26.3%	23.8%	16.7%	28.6%
8.7%	13.4%	11.5%	8.0%	8.2%	7.0%	28.4%	8.1%	27.5%	9.0%	7.5%	11.9%	12.1%	16.7%
2.4%	0.5%	7.1%	2.9%	0.5%	0.5%	7.4%	0.0%	5.9%	3.4%	4.5%	1.2%	7.6%	2.4%
16.5%	28.5%	12.3%	9.2%	14.2%	17.1%	5.2%	13.6%	0.0%	3.4%	7.5%	4.8%	19.4%	14.3%
52.8%	40.9%	43.0%	41.4%	42.9%	45.5%	14.6%	44.9%	2.0%	30.3%	40.6%	16.9%	37.3%	42.9%
17.3%	16.7%	17.5%	27.6%	21.0%	21.4%	21.9%	23.8%	6.9%	25.8%	27.8%	22.9%	20.9%	19.0%
10.2%	12.9%	14.9%	19.5%	21.0%	12.8%	35.4%	17.0%	35.3%	31.5%	17.3%	44.6%	19.4%	21.4%
3.1%	1.1%	12.3%	2.3%	0.9%	3.2%	22.9%	0.7%	55.9%	9.0%	6.8%	10.8%	3.0%	2.4%
15.0%	11.8%	7.9%	6.9%	15.5%	15.0%	2.1%	10.1%	2.9%	7.9%	13.6%	1.2%	18.2%	9.5%
30.7%	23.7%	26.3%	20.7%	29.2%	24.1%	10.4%	32.2%	6.9%	19.1%	26.5%	10.8%	27.3%	26.2%
31.5%	37.1%	33.3%	39.1%	32.4%	39.6%	41.7%	38.9%	41.2%	49.4%	42.4%	49.4%	25.8%	14.3%
17.3%	19.9%	12.3%	25.9%	15.1%	16.0%	30.2%	12.1%	23.5%	21.3%	12.1%	25.3%	24.2%	35.7%
5.5%	7.5%	20.2%	7.5%	7.8%	5.3%	15.6%	6.7%	25.5%	2.2%	5.3%	13.3%	4.5%	14.3%
1.6%	7.0%	11.5%	6.3%	8.7%	9.1%	3.1%	7.4%	0.0%	6.7%	11.3%	19.3%	14.9%	9.5%
6.3%	19.5%	36.3%	21.8%	27.4%	26.7%	15.6%	35.6%	18.6%	24.7%	35.3%	39.8%	28.4%	21.4%
81.1%	63.8%	34.5%	60.3%	58.9%	51.9%	59.4%	46.3%	55.9%	60.7%	42.1%	27.7%	55.2%	59.5%
7.1%	7.6%	8.0%	7.5%	4.1%	9.6%	13.5%	7.4%	19.6%	6.7%	8.3%	8.4%	1.5%	9.5%
3.9%	2.2%	9.7%	4.0%	0.9%	2.7%	8.3%	3.4%	5.9%	1.1%	3.0%	4.8%	0.0%	0.0%
9.4%	16.7%	4.4%	23.6%	21.5%	9.6%	5.2%	6.7%	1.0%	10.1%	5.3%	0.0%	25.4%	9.5%
29.9%	38.7%	10.5%	37.4%	48.9%	19.8%	30.2%	28.9%	25.5%	20.2%	15.8%	6.0%	41.8%	23.8%
30.7%	26.9%	25.4%	24.1%	21.0%	19.8%	34.4%	29.5%	35.3%	29.2%	28.6%	13.1%	23.9%	23.8%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
やや不満	22.7%	20.8%	23.9%	19.6%	23.6%	26.9%	21.8%
とても不満	10.9%	12.3%	10.1%	7.6%	11.2%	16.7%	10.3%
<b>Q19-1.(満足度)学科やクラスの友人関係</b>							
とても満足	32.4%	29.0%	34.6%	34.9%	30.9%	31.3%	31.6%
やや満足	46.5%	45.2%	47.3%	45.1%	47.5%	44.0%	52.9%
どちらともいえない	14.8%	18.5%	12.5%	14.8%	14.7%	16.7%	10.9%
やや不満	5.4%	5.5%	5.1%	4.5%	5.8%	6.5%	4.6%
とても不満	1.0%	1.8%	0.5%	0.7%	1.0%	1.5%	0.0%
<b>Q19-2.(満足度)部やサークルの人間関係</b>							
とても満足	30.6%	34.3%	28.3%	33.2%	27.9%	28.5%	35.8%
やや満足	31.4%	31.8%	31.3%	35.5%	31.1%	26.3%	28.3%
どちらともいえない	31.4%	27.9%	33.5%	25.6%	34.5%	37.2%	29.5%
やや不満	4.5%	3.0%	5.5%	4.0%	4.7%	5.6%	4.0%
とても不満	2.0%	3.0%	1.4%	1.7%	1.9%	2.5%	2.3%
<b>Q19-3.(満足度)異性との出会いや交際関係</b>							
とても満足	12.8%	13.1%	12.6%	12.8%	13.0%	11.2%	13.2%
やや満足	20.2%	22.5%	18.8%	18.4%	19.6%	19.9%	28.2%
どちらともいえない	46.9%	42.1%	49.8%	50.9%	44.9%	45.5%	46.0%
やや不満	12.1%	11.8%	12.3%	11.5%	12.7%	12.8%	9.8%
とても不満	8.1%	10.4%	6.6%	6.4%	9.7%	10.6%	2.9%
<b>Q19-4.(満足度)先生との関係</b>							
とても満足	9.6%	11.6%	8.3%	8.0%	6.3%	14.9%	17.2%
やや満足	33.9%	28.2%	37.5%	28.6%	31.1%	38.1%	54.0%
どちらともいえない	44.8%	48.0%	42.8%	51.6%	48.5%	36.8%	23.6%
やや不満	10.5%	10.5%	10.5%	10.6%	12.4%	9.6%	5.2%
とても不満	1.2%	1.6%	0.9%	1.2%	1.8%	0.6%	0.0%
<b>Q19-5.(満足度)大学職員の対応</b>							
とても満足	5.8%	6.8%	5.2%	6.9%	3.7%	8.1%	6.9%
やや満足	28.0%	25.4%	29.5%	31.0%	25.9%	26.7%	28.9%
どちらともいえない	43.3%	44.7%	42.4%	49.9%	44.2%	35.1%	34.1%
やや不満	16.2%	15.9%	16.4%	9.0%	18.4%	21.4%	20.2%
とても不満	6.7%	7.1%	6.4%	3.1%	7.9%	8.7%	9.8%
<b>Q19-6.(満足度)就職ガイダンスや就職支援</b>							
とても満足	5.8%	5.5%	6.0%	5.0%	2.9%	10.5%	10.9%
やや満足	22.4%	19.4%	24.2%	18.1%	16.2%	36.8%	33.3%
どちらともいえない	59.8%	62.3%	58.2%	69.7%	65.8%	42.7%	36.8%
やや不満	9.2%	8.6%	9.6%	5.9%	12.0%	7.1%	12.6%
とても不満	2.8%	4.2%	1.9%	1.2%	3.1%	2.8%	6.3%
<b>Q19-7.(満足度)大学全体の雰囲気</b>							
とても満足	15.2%	15.1%	15.3%	16.5%	12.1%	16.4%	19.5%
やや満足	47.0%	41.4%	50.4%	49.7%	45.5%	45.5%	47.1%
どちらともいえない	26.8%	30.4%	24.5%	25.3%	27.7%	28.5%	24.7%
やや不満	9.2%	10.1%	8.6%	7.3%	11.4%	8.7%	7.5%
とても不満	1.9%	3.0%	1.3%	1.2%	3.2%	0.9%	1.1%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
22.8%	16.1%	34.2%	13.2%	7.8%	29.9%	24.0%	27.5%	25.5%	27.0%	29.3%	47.6%	4.5%	26.2%
7.1%	1.6%	25.4%	1.7%	0.9%	20.9%	6.3%	7.4%	12.7%	13.5%	21.1%	33.3%	4.5%	16.7%
23.6%	45.5%	30.1%	35.6%	30.6%	33.7%	25.0%	32.4%	43.1%	25.8%	20.3%	36.9%	34.3%	28.6%
52.8%	39.0%	48.7%	40.2%	44.3%	47.6%	50.0%	51.4%	43.1%	56.2%	52.6%	40.5%	52.2%	33.3%
17.3%	10.7%	11.5%	16.1%	12.8%	13.9%	19.8%	14.2%	11.8%	11.2%	21.8%	15.5%	10.4%	31.0%
5.5%	3.2%	8.0%	6.9%	11.0%	4.3%	4.2%	0.7%	2.0%	6.7%	5.3%	6.0%	1.5%	7.1%
0.8%	1.6%	1.8%	1.1%	1.4%	0.5%	1.0%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	1.5%	0.0%
32.3%	35.3%	27.4%	36.2%	37.6%	29.0%	18.8%	30.9%	23.8%	25.0%	22.6%	17.9%	38.8%	52.4%
38.6%	32.6%	34.5%	28.2%	29.8%	30.6%	30.2%	31.5%	18.8%	34.1%	36.1%	26.2%	34.3%	40.5%
26.0%	27.2%	30.1%	28.7%	24.8%	30.6%	39.6%	34.9%	51.5%	35.2%	32.3%	47.6%	25.4%	7.1%
2.4%	3.8%	5.3%	4.6%	6.9%	5.9%	6.3%	0.7%	5.0%	5.7%	6.0%	6.0%	0.0%	0.0%
0.8%	1.1%	2.7%	2.3%	0.9%	3.8%	5.2%	2.0%	1.0%	0.0%	3.0%	2.4%	1.5%	0.0%
14.2%	19.8%	11.5%	13.8%	11.9%	13.4%	8.3%	10.8%	7.0%	9.0%	10.6%	10.8%	17.9%	19.0%
17.3%	18.2%	32.7%	15.5%	21.0%	26.3%	16.7%	18.2%	11.0%	15.7%	22.7%	12.0%	26.9%	35.7%
41.7%	47.6%	41.6%	52.9%	46.1%	42.5%	50.0%	54.1%	60.0%	47.2%	45.5%	42.2%	41.8%	31.0%
12.6%	8.0%	8.0%	10.9%	16.4%	9.1%	14.6%	10.8%	14.0%	21.3%	14.4%	13.3%	7.5%	7.1%
14.2%	6.4%	6.2%	6.9%	4.6%	8.6%	10.4%	6.1%	8.0%	6.7%	6.8%	21.7%	6.0%	7.1%
3.9%	13.9%	12.4%	18.4%	4.6%	9.6%	6.3%	10.1%	2.9%	9.0%	8.3%	16.7%	9.1%	2.4%
22.8%	36.4%	51.3%	32.2%	29.7%	31.0%	29.2%	35.8%	42.2%	39.3%	27.1%	44.0%	27.3%	35.7%
55.9%	41.2%	27.4%	39.1%	55.7%	43.9%	53.1%	43.2%	48.0%	41.6%	53.4%	22.6%	50.0%	40.5%
15.7%	6.4%	8.0%	9.8%	10.0%	12.3%	10.4%	10.8%	5.9%	10.1%	9.0%	16.7%	12.1%	19.0%
1.6%	2.1%	0.9%	0.6%	0.0%	3.2%	1.0%	0.0%	1.0%	0.0%	2.3%	0.0%	1.5%	2.4%
2.4%	5.3%	8.0%	5.2%	5.5%	6.4%	3.1%	8.1%	1.0%	10.1%	5.3%	12.0%	6.0%	4.8%
22.0%	24.6%	30.4%	32.2%	25.7%	27.3%	17.7%	28.9%	38.6%	32.6%	25.6%	34.9%	31.3%	26.2%
48.0%	44.4%	36.6%	42.0%	50.0%	38.5%	36.5%	46.3%	37.6%	43.8%	52.6%	30.1%	49.3%	38.1%
22.0%	19.8%	15.2%	13.8%	14.2%	19.8%	21.9%	10.7%	16.8%	11.2%	14.3%	16.9%	9.0%	21.4%
5.5%	5.9%	9.8%	6.9%	4.6%	8.0%	20.8%	6.0%	5.9%	2.2%	2.3%	6.0%	4.5%	9.5%
0.8%	3.8%	10.6%	5.2%	2.7%	6.4%	3.1%	5.4%	2.0%	6.7%	9.0%	23.8%	4.5%	4.8%
3.1%	14.6%	32.7%	24.1%	26.9%	19.3%	14.6%	29.7%	17.6%	15.7%	27.8%	44.0%	22.4%	26.2%
75.6%	71.9%	39.8%	62.6%	59.8%	57.2%	63.5%	52.7%	65.7%	68.5%	54.9%	27.4%	73.1%	54.8%
17.3%	8.1%	10.6%	6.3%	9.6%	13.4%	9.4%	7.4%	13.7%	9.0%	6.8%	2.4%	0.0%	9.5%
3.1%	1.6%	6.2%	1.7%	0.9%	3.7%	9.4%	4.7%	1.0%	0.0%	1.5%	2.4%	0.0%	4.8%
10.2%	28.3%	12.4%	26.0%	19.7%	11.8%	8.3%	11.4%	2.0%	10.1%	6.8%	17.9%	11.9%	23.8%
56.7%	47.1%	47.8%	53.8%	45.9%	48.7%	43.8%	42.3%	39.2%	53.9%	37.6%	46.4%	49.3%	40.5%
19.7%	18.2%	29.2%	15.0%	26.1%	33.2%	29.2%	31.5%	38.2%	21.3%	42.1%	22.6%	23.9%	28.6%
11.8%	5.9%	5.3%	4.0%	6.9%	5.3%	16.7%	12.1%	17.6%	11.2%	10.5%	11.9%	13.4%	7.1%
1.6%	0.5%	5.3%	1.2%	1.4%	1.1%	2.1%	2.7%	2.9%	3.4%	3.0%	1.2%	1.5%	0.0%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
<b>Q19-8.(満足度)今の学部・学科に入ったこと</b>							
とても満足	33.4%	33.3%	33.5%	32.6%	29.9%	37.2%	40.8%
やや満足	40.3%	37.7%	41.9%	41.6%	40.9%	38.4%	38.5%
どちらともいえない	16.9%	18.3%	16.0%	16.8%	18.4%	15.8%	13.2%
やや不満	7.0%	8.5%	5.9%	6.6%	7.6%	7.1%	5.7%
とても不満	2.5%	2.2%	2.7%	2.4%	3.2%	1.5%	1.7%
<b>Q19-9.(満足度)今の大学に入ったこと</b>							
とても満足	35.3%	34.3%	36.0%	35.9%	33.4%	34.4%	41.4%
やや満足	37.5%	36.8%	38.0%	39.5%	36.2%	38.4%	35.6%
どちらともいえない	17.0%	17.5%	16.6%	15.9%	18.7%	16.4%	15.5%
やや不満	7.4%	8.2%	6.9%	6.8%	8.2%	8.4%	5.2%
とても不満	2.7%	3.1%	2.5%	1.9%	3.6%	2.5%	2.3%
<b>Q20-1.(平日時間)授業の予習・復習をする</b>							
ほとんどしない	52.5%	52.9%	52.1%	43.7%	50.7%	65.3%	65.5%
30分くらい	24.9%	24.1%	25.5%	29.6%	25.0%	20.4%	18.4%
1時間くらい	16.2%	15.8%	16.5%	20.5%	18.0%	9.6%	7.5%
2時間くらい	4.1%	4.0%	4.2%	4.9%	3.8%	2.2%	6.3%
3時間くらい	1.0%	1.6%	0.6%	0.9%	0.9%	1.2%	1.7%
3時間以上	1.2%	1.5%	1.0%	0.5%	1.6%	1.2%	0.6%
<b>Q20-2.(平日時間)本を読む(読書)</b>							
ほとんどしない	48.7%	42.2%	52.7%	51.4%	51.6%	46.9%	33.5%
30分くらい	24.0%	23.0%	24.6%	24.3%	21.8%	24.5%	31.2%
1時間くらい	17.6%	21.5%	15.2%	14.6%	17.1%	18.9%	26.6%
2時間くらい	6.5%	9.1%	4.9%	6.4%	6.1%	6.8%	5.8%
3時間くらい	1.2%	2.1%	0.6%	1.4%	1.5%	0.3%	0.6%
3時間以上	2.0%	2.1%	2.0%	1.9%	1.9%	2.5%	2.3%
<b>Q20-3.(平日時間)スマートフォン・携帯電話を使う</b>							
ほとんどしない	2.3%	4.5%	0.9%	2.1%	2.8%	2.5%	1.2%
30分くらい	5.4%	7.9%	3.9%	5.7%	6.0%	3.4%	5.8%
1時間くらい	18.5%	22.3%	16.2%	18.4%	19.7%	15.8%	19.7%
2時間くらい	24.7%	28.4%	22.4%	24.3%	23.5%	25.1%	28.9%
3時間くらい	15.0%	11.6%	17.1%	15.6%	14.9%	14.6%	14.5%
3時間以上	34.0%	25.3%	39.5%	34.0%	33.2%	38.7%	30.1%
<b>Q20-4.(平日時間)アルバイトをする</b>							
ほとんどしない	24.8%	27.8%	22.9%	32.6%	23.1%	18.6%	17.8%
30分くらい	1.1%	2.2%	0.5%	1.0%	1.0%	1.5%	1.1%
1時間くらい	4.1%	6.2%	2.8%	4.0%	4.7%	3.4%	2.3%
2時間くらい	9.9%	10.8%	9.3%	8.5%	11.0%	10.5%	9.8%
3時間くらい	13.2%	11.9%	13.9%	15.3%	11.1%	13.3%	14.4%
3時間以上	46.9%	41.0%	50.5%	38.6%	49.1%	52.6%	54.6%
<b>Q21.アルバイト</b>							
まったくしていない	8.8%	10.7%	7.6%	16.2%	5.8%	5.1%	3.6%
長期休暇期間のみ	3.1%	3.7%	2.6%	3.7%	3.1%	1.9%	3.0%
学期中に不定期に	6.3%	6.5%	6.2%	7.6%	6.3%	5.1%	4.7%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
39.4%	44.9%	32.7%	46.0%	28.8%	26.2%	23.2%	25.5%	26.5%	27.0%	30.1%	36.9%	40.3%	42.9%
37.8%	29.9%	44.2%	39.1%	39.7%	46.0%	41.1%	43.6%	48.0%	42.7%	42.9%	40.5%	35.8%	26.2%
18.9%	16.0%	14.2%	9.8%	20.1%	18.2%	24.2%	19.5%	15.7%	20.2%	16.5%	10.7%	11.9%	19.0%
2.4%	4.8%	7.1%	4.0%	8.7%	8.0%	9.5%	7.4%	4.9%	7.9%	10.5%	7.1%	9.0%	11.9%
1.6%	4.3%	1.8%	1.1%	2.7%	1.6%	2.1%	4.0%	4.9%	2.2%	0.0%	4.8%	3.0%	0.0%
48.0%	52.9%	33.6%	56.3%	34.7%	27.8%	17.7%	24.2%	20.6%	24.7%	24.1%	31.0%	37.3%	52.4%
38.6%	28.3%	44.2%	29.9%	42.9%	39.0%	31.3%	36.9%	42.2%	43.8%	32.3%	42.9%	46.3%	38.1%
11.8%	12.8%	15.0%	10.9%	15.5%	22.5%	26.0%	22.1%	23.5%	19.1%	24.1%	13.1%	7.5%	7.1%
0.0%	3.7%	4.4%	1.7%	5.9%	8.6%	17.7%	12.1%	9.8%	7.9%	16.5%	8.3%	7.5%	2.4%
1.6%	2.1%	2.7%	1.1%	0.9%	2.1%	7.3%	4.7%	3.9%	4.5%	3.0%	4.8%	1.5%	0.0%
40.2%	59.9%	36.3%	28.9%	69.7%	43.1%	64.6%	49.0%	57.8%	42.7%	75.9%	69.0%	34.3%	64.3%
23.6%	25.1%	31.0%	28.3%	21.6%	28.7%	29.2%	28.9%	16.7%	32.6%	18.0%	16.7%	20.9%	23.8%
24.4%	12.3%	23.9%	22.5%	7.3%	19.7%	5.2%	14.8%	24.5%	21.3%	3.8%	11.9%	35.8%	9.5%
7.9%	2.1%	3.5%	13.3%	1.4%	6.9%	1.0%	2.7%	1.0%	3.4%	0.8%	2.4%	4.5%	2.4%
3.1%	0.5%	0.9%	2.9%	0.0%	0.5%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	3.0%	0.0%
0.8%	0.0%	4.4%	4.0%	0.0%	1.1%	0.0%	3.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%
37.0%	42.2%	48.7%	33.9%	56.6%	37.1%	50.5%	47.0%	76.5%	58.0%	63.6%	60.2%	49.3%	28.6%
18.9%	32.6%	23.9%	28.2%	24.7%	25.3%	27.4%	22.1%	12.7%	19.3%	16.7%	20.5%	22.4%	45.2%
29.9%	16.6%	15.0%	24.7%	14.6%	26.3%	17.9%	14.1%	7.8%	12.5%	13.6%	10.8%	13.4%	16.7%
7.9%	7.0%	10.6%	8.0%	2.7%	7.5%	3.2%	10.1%	2.0%	5.7%	4.5%	6.0%	9.0%	7.1%
3.1%	0.5%	1.8%	1.1%	0.5%	1.6%	0.0%	2.7%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	3.0%	2.4%
3.1%	1.1%	0.0%	4.0%	0.9%	2.2%	1.1%	4.0%	1.0%	3.4%	1.5%	2.4%	3.0%	0.0%
4.7%	2.7%	2.7%	1.7%	1.4%	3.2%	3.1%	3.4%	1.0%	0.0%	1.5%	1.2%	3.0%	2.4%
17.3%	5.4%	5.3%	6.3%	3.7%	9.0%	1.0%	5.4%	2.0%	0.0%	0.0%	3.6%	10.4%	2.4%
29.1%	23.7%	10.6%	24.7%	21.0%	20.7%	15.6%	14.1%	14.7%	14.6%	9.8%	9.5%	19.4%	19.0%
22.8%	26.9%	38.9%	20.1%	26.5%	25.5%	26.0%	19.5%	20.6%	16.9%	22.7%	20.2%	26.9%	42.9%
9.4%	13.4%	13.3%	14.9%	19.2%	15.4%	13.5%	14.1%	11.8%	23.6%	15.9%	17.9%	13.4%	9.5%
16.5%	28.0%	29.2%	32.2%	28.3%	26.1%	40.6%	43.6%	50.0%	44.9%	50.0%	47.6%	26.9%	23.8%
39.4%	20.4%	22.1%	25.9%	21.5%	19.9%	25.0%	36.2%	19.6%	19.1%	24.8%	22.6%	32.8%	16.7%
2.4%	1.1%	3.5%	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	2.7%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	9.5%
15.0%	3.8%	7.1%	7.5%	2.3%	2.2%	0.0%	2.0%	0.0%	3.4%	2.3%	1.2%	6.0%	7.1%
22.0%	15.6%	14.2%	13.8%	5.0%	9.1%	3.1%	4.7%	2.9%	4.5%	4.5%	10.7%	9.0%	28.6%
10.2%	19.4%	9.7%	19.5%	11.4%	16.1%	10.4%	11.4%	3.9%	15.7%	11.3%	14.3%	9.0%	14.3%
11.0%	39.8%	43.4%	33.3%	58.9%	52.7%	61.5%	43.0%	73.5%	57.3%	57.1%	50.0%	43.3%	23.8%
12.1%	4.9%	8.5%	11.4%	7.0%	6.6%	6.5%	18.4%	3.1%	6.1%	9.3%	7.5%	20.0%	0.0%
3.2%	1.6%	2.8%	4.2%	2.8%	1.6%	4.3%	5.9%	5.2%	0.0%	3.9%	2.5%	3.1%	0.0%
10.5%	3.8%	7.5%	6.6%	7.4%	6.0%	3.2%	6.6%	6.2%	4.9%	8.5%	3.8%	3.1%	7.1%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
学期中に定期的に	23.8%	26.3%	22.3%	22.1%	25.4%	20.9%	26.6%
学期中に定期的に、長期休暇中にも	46.7%	43.1%	49.0%	42.1%	46.3%	55.3%	47.3%
学期中に不定期に、長期休暇中にも	11.3%	9.6%	12.2%	8.1%	12.9%	11.6%	14.8%
その他	0.1%	0.0%	0.2%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%
<b>Q21SQ.主な職種※該当者のみ「アルバイト経験のある学生」=100.0%</b>							
家庭教師・塾講師	21.7%	26.4%	18.9%	21.0%	22.5%	20.4%	22.5%
コンビニ、スーパーなどでのレジや販売など	19.6%	19.1%	19.8%	16.7%	19.9%	23.5%	20.0%
飲食店などでの調理や接客など	45.2%	38.4%	49.3%	49.3%	45.0%	41.5%	41.9%
事務的な仕事、受付など	5.2%	4.5%	5.6%	4.1%	4.9%	6.6%	5.6%
運搬、梱包、清掃等の労働	4.0%	7.1%	2.2%	5.0%	3.1%	4.2%	5.0%
その他	4.3%	4.5%	4.2%	3.8%	4.7%	3.8%	5.0%
<b>Q22-1.(子どものころ)家族に本を読んでもらうこと</b>							
よくあった	35.8%	28.0%	40.7%	38.5%	34.8%	28.8%	42.8%
まああった	33.6%	33.5%	33.6%	30.7%	35.4%	34.7%	34.7%
あまりなかった	21.4%	26.3%	18.3%	21.5%	21.2%	24.5%	15.0%
ぜんぜんなかった	9.2%	12.3%	7.4%	9.2%	8.5%	12.1%	7.5%
<b>Q22-2.(子どものころ)家族に勉強を見てもらうこと</b>							
よくあった	28.2%	21.2%	32.4%	28.5%	27.2%	29.4%	28.9%
まああった	37.1%	37.5%	36.8%	37.0%	39.5%	30.3%	42.2%
あまりなかった	24.8%	28.0%	22.8%	24.8%	23.2%	28.2%	23.1%
ぜんぜんなかった	10.0%	13.3%	8.0%	9.7%	10.1%	12.1%	5.8%
<b>Q22-3.(子どものころ)家族に美術館や博物館へ連れて行ってもらうこと</b>							
よくあった	16.1%	11.7%	18.8%	18.6%	14.9%	14.2%	15.1%
まああった	32.9%	31.3%	33.9%	32.1%	33.4%	30.0%	40.1%
あまりなかった	33.1%	34.4%	32.4%	32.8%	34.3%	32.5%	30.2%
ぜんぜんなかった	17.9%	22.6%	15.0%	16.5%	17.4%	23.2%	14.5%
<b>Q22-4.(子どものころ)家でクラシック音楽を聞いたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったりすること</b>							
よくあった	10.8%	7.2%	13.1%	12.2%	10.8%	9.9%	8.2%
まああった	16.2%	11.6%	19.0%	17.2%	15.4%	16.1%	16.4%
あまりなかった	30.0%	29.1%	30.5%	31.4%	28.7%	28.5%	33.3%
ぜんぜんなかった	43.0%	52.1%	37.4%	39.2%	45.1%	45.5%	42.1%
<b>Q22-5.(子どものころ)家族と社会のしくみや時事問題などについて話すこと</b>							
よくあった	15.2%	14.5%	15.7%	18.1%	14.5%	12.1%	15.6%
まああった	34.8%	36.2%	34.0%	36.3%	34.1%	30.3%	40.5%
あまりなかった	32.7%	31.4%	33.5%	29.0%	34.4%	36.5%	31.8%
ぜんぜんなかった	17.2%	17.9%	16.7%	16.7%	17.1%	21.1%	12.1%
<b>Q23-1.(高校時代)部活動をした</b>							
かなりした	54.7%	62.5%	49.9%	54.1%	54.2%	53.4%	59.8%
まあした	20.3%	15.7%	23.1%	19.1%	23.0%	18.5%	17.2%
あまりしなかった	8.8%	6.7%	10.1%	11.4%	7.3%	7.7%	8.0%
ぜんぜんしなかった	16.3%	15.1%	16.9%	15.4%	15.5%	20.4%	14.9%
<b>Q23-2.(高校時代)異性とつきあった</b>							
かなりした	12.3%	13.8%	11.4%	13.0%	11.1%	13.3%	12.6%
まあした	28.9%	28.2%	29.4%	28.4%	26.4%	33.3%	31.6%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
23.4%	28.0%	41.5%	22.9%	14.0%	26.8%	20.4%	22.8%	22.7%	30.5%	20.9%	20.0%	18.5%	26.2%
37.1%	48.9%	34.0%	46.4%	59.1%	50.3%	50.5%	32.4%	43.3%	48.8%	45.7%	52.5%	47.7%	52.4%
13.7%	12.1%	5.7%	8.4%	9.8%	8.7%	15.1%	14.0%	18.6%	9.8%	11.6%	13.8%	7.7%	14.3%
0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
65.1%	31.4%	23.7%	42.4%	13.2%	18.5%	3.6%	11.7%	0.0%	13.2%	1.8%	13.5%	16.0%	46.3%
0.9%	15.4%	18.6%	14.6%	25.4%	13.7%	44.0%	23.3%	22.7%	15.8%	28.1%	27.0%	14.0%	12.2%
11.9%	45.0%	42.3%	31.3%	48.2%	57.7%	41.7%	45.6%	61.4%	60.5%	54.4%	44.6%	52.0%	36.6%
15.6%	4.1%	3.1%	8.3%	4.1%	3.6%	1.2%	3.9%	2.3%	5.3%	3.5%	10.8%	4.0%	0.0%
2.8%	2.4%	5.2%	1.4%	5.1%	4.2%	7.1%	7.8%	1.1%	1.3%	8.8%	1.4%	2.0%	4.9%
3.7%	1.8%	7.2%	2.1%	4.1%	2.4%	2.4%	7.8%	12.5%	3.9%	3.5%	2.7%	12.0%	0.0%
38.6%	38.0%	43.9%	46.8%	29.2%	35.5%	21.9%	32.9%	32.7%	49.4%	23.1%	28.6%	44.8%	47.6%
34.6%	33.2%	30.7%	29.5%	39.3%	30.1%	39.6%	34.2%	38.6%	37.1%	29.2%	36.9%	20.9%	33.3%
19.7%	23.0%	16.7%	17.3%	24.2%	22.6%	27.1%	26.2%	20.8%	9.0%	27.7%	25.0%	14.9%	9.5%
7.1%	5.9%	8.8%	6.4%	7.3%	11.8%	11.5%	6.7%	7.9%	4.5%	20.0%	9.5%	19.4%	9.5%
24.4%	32.6%	26.3%	35.3%	22.8%	32.3%	13.5%	24.8%	34.3%	42.7%	20.0%	32.1%	22.4%	31.0%
34.6%	27.3%	39.5%	32.4%	35.6%	38.2%	42.7%	43.0%	45.1%	40.4%	39.2%	36.9%	40.3%	33.3%
27.6%	26.2%	20.2%	24.9%	32.4%	20.4%	31.3%	24.8%	15.7%	12.4%	31.5%	23.8%	22.4%	19.0%
13.4%	13.9%	14.0%	7.5%	9.1%	9.1%	12.5%	7.4%	4.9%	4.5%	9.2%	7.1%	14.9%	16.7%
13.4%	19.3%	23.7%	23.1%	9.1%	15.6%	15.6%	16.8%	10.9%	30.3%	5.4%	13.1%	17.9%	16.7%
35.4%	38.0%	24.6%	36.4%	32.9%	31.2%	32.3%	30.2%	46.5%	28.1%	28.7%	33.3%	29.9%	23.8%
36.2%	27.8%	29.8%	30.1%	38.8%	38.7%	35.4%	30.9%	24.8%	31.5%	30.2%	36.9%	32.8%	42.9%
15.0%	15.0%	21.9%	10.4%	19.2%	14.5%	16.7%	22.1%	17.8%	10.1%	35.7%	16.7%	19.4%	16.7%
15.7%	9.1%	15.0%	17.9%	6.4%	11.3%	4.2%	10.7%	7.8%	19.1%	3.9%	13.1%	10.4%	7.1%
22.0%	18.2%	19.5%	25.4%	11.4%	14.0%	10.4%	14.8%	7.8%	24.7%	10.2%	16.7%	11.9%	21.4%
24.4%	32.6%	31.0%	29.5%	28.3%	36.0%	28.1%	24.8%	29.4%	30.3%	29.7%	34.5%	23.9%	40.5%
37.8%	40.1%	34.5%	27.2%	53.9%	38.7%	57.3%	49.7%	54.9%	25.8%	56.3%	35.7%	53.7%	31.0%
14.2%	17.6%	18.4%	22.0%	7.8%	16.1%	12.5%	15.4%	11.8%	21.3%	10.0%	20.2%	19.4%	7.1%
43.3%	32.6%	35.1%	29.5%	36.5%	37.1%	32.3%	41.6%	27.5%	40.4%	29.2%	32.1%	40.3%	23.8%
29.9%	33.2%	31.6%	35.8%	34.2%	30.6%	31.3%	28.2%	37.3%	27.0%	35.4%	33.3%	28.4%	47.6%
12.6%	16.6%	14.9%	12.7%	21.5%	16.1%	24.0%	14.8%	23.5%	11.2%	25.4%	14.3%	11.9%	21.4%
53.5%	57.8%	61.4%	48.9%	54.8%	63.3%	44.8%	54.4%	54.9%	38.6%	54.1%	60.7%	55.2%	57.1%
32.3%	20.3%	21.1%	26.4%	15.5%	14.9%	22.9%	12.1%	22.5%	26.1%	12.0%	17.9%	28.4%	28.6%
5.5%	9.1%	6.1%	11.5%	9.6%	10.6%	7.3%	14.1%	9.8%	13.6%	3.8%	2.4%	7.5%	2.4%
8.7%	12.8%	11.4%	13.2%	20.1%	11.2%	25.0%	19.5%	12.7%	21.6%	30.1%	19.0%	9.0%	11.9%
4.7%	14.4%	12.3%	12.1%	10.5%	14.9%	8.3%	13.4%	15.7%	13.6%	11.3%	17.9%	11.9%	11.9%
22.0%	31.6%	32.5%	21.3%	29.2%	32.4%	20.8%	34.2%	25.5%	26.1%	31.6%	42.9%	26.9%	23.8%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
あまりしなかった	16.4%	17.1%	16.0%	15.3%	18.4%	13.6%	18.4%
ぜんぜんしなかった	42.3%	40.9%	43.1%	43.3%	44.2%	39.8%	37.4%
<b>Q23-3.(高校時代)髪形や服装に気がつかった</b>							
かなりした	14.8%	11.4%	16.9%	15.6%	13.0%	15.8%	17.2%
まあした	43.8%	33.7%	50.0%	48.4%	40.7%	42.4%	42.0%
あまりしなかった	29.2%	35.2%	25.5%	25.8%	31.2%	31.3%	29.9%
ぜんぜんしなかった	12.2%	19.6%	7.5%	10.2%	15.0%	10.5%	10.9%
<b>Q23-4.(高校時代)本をたくさん読んだ</b>							
かなりした	14.1%	14.1%	14.2%	15.4%	12.9%	15.4%	12.6%
まあした	25.1%	22.6%	26.6%	25.1%	24.7%	22.5%	31.0%
あまりしなかった	38.5%	37.1%	39.3%	39.9%	37.9%	38.3%	36.2%
ぜんぜんしなかった	22.3%	26.3%	19.9%	19.6%	24.6%	23.8%	20.1%
<b>Q23-5.(高校時代)受験勉強をした</b>							
かなりした	37.6%	36.7%	38.2%	40.2%	39.1%	32.2%	33.3%
まあした	37.1%	34.3%	38.8%	38.3%	36.0%	34.7%	42.0%
あまりしなかった	16.6%	16.5%	16.5%	13.3%	17.6%	21.1%	14.4%
ぜんぜんしなかった	8.8%	12.5%	6.5%	8.1%	7.3%	12.1%	10.3%
<b>Q23-6.(高校時代)アルバイトをした</b>							
かなりした	5.3%	4.2%	6.0%	4.0%	5.7%	5.6%	8.0%
まあした	11.4%	10.2%	12.1%	11.8%	10.2%	13.0%	11.5%
あまりしなかった	8.5%	9.3%	8.0%	8.1%	8.3%	9.0%	9.2%
ぜんぜんしなかった	74.8%	76.3%	73.9%	76.1%	75.8%	72.5%	71.3%
<b>Q23-7.(高校時代)ボランティア活動をした</b>							
かなりした	4.3%	3.6%	4.8%	4.7%	3.9%	4.6%	3.4%
まあした	15.3%	10.1%	18.6%	15.6%	14.4%	17.0%	14.9%
あまりしなかった	24.4%	22.8%	25.3%	26.7%	24.1%	22.2%	21.8%
ぜんぜんしなかった	56.0%	63.5%	51.4%	53.0%	57.6%	56.2%	59.8%
<b>Q24.出身高校は、次のどれにあたりますか</b>							
国公立や難関大学が多い	38.5%	40.7%	37.3%	39.2%	39.8%	33.1%	42.5%
ふつうの大学が多い	51.5%	49.6%	52.7%	52.7%	50.0%	52.9%	49.4%
短大・専門学校等が多い	4.9%	3.9%	5.5%	4.0%	5.0%	6.2%	5.7%
就職者が多い	3.0%	4.2%	2.3%	2.3%	3.4%	4.3%	1.7%
その他	2.0%	1.8%	2.2%	1.9%	1.9%	3.4%	0.6%
<b>Q25.感じ方や考え方(価値観)が変わりましたか</b>							
かなり変わった	28.5%	32.4%	26.2%	23.3%	27.0%	31.9%	43.1%
すこし変わった	49.5%	43.5%	53.1%	50.4%	50.6%	48.8%	44.8%
ほとんど変わらない	18.6%	18.5%	18.8%	21.4%	19.5%	16.9%	10.3%
ぜんぜん変わらない	3.4%	5.7%	1.9%	4.9%	2.9%	2.5%	1.7%
<b>Q26-A.大学観A</b>							
大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生	45.6%	47.2%	44.8%	45.9%	48.1%	40.8%	45.0%
大学は学問よりさまざまな体験をする場であ	54.4%	52.8%	55.2%	54.1%	51.9%	59.2%	55.0%
<b>Q26-B.大学観B</b>							
単位が楽に取れる科目を選択したい	31.7%	38.8%	27.3%	31.0%	30.5%	36.6%	29.8%
単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目	68.3%	61.2%	72.7%	69.0%	69.5%	63.4%	70.2%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
13.4%	16.6%	16.7%	18.4%	19.2%	15.4%	16.7%	14.8%	17.6%	19.3%	17.3%	13.1%	9.0%	19.0%
59.8%	37.4%	38.6%	48.3%	41.1%	37.2%	54.2%	37.6%	41.2%	40.9%	39.8%	26.2%	52.2%	45.2%
7.1%	13.4%	12.3%	17.2%	16.0%	20.7%	11.5%	14.2%	20.8%	17.0%	9.8%	17.9%	13.4%	11.9%
23.6%	48.1%	37.7%	37.4%	48.9%	38.3%	40.6%	42.6%	54.5%	54.5%	55.6%	45.2%	49.3%	40.5%
40.9%	28.9%	38.6%	29.9%	28.8%	26.1%	35.4%	31.1%	21.8%	22.7%	23.3%	26.2%	19.4%	35.7%
28.3%	9.6%	11.4%	15.5%	6.4%	14.9%	12.5%	12.2%	3.0%	5.7%	11.3%	10.7%	17.9%	11.9%
10.2%	13.9%	16.7%	19.0%	8.7%	21.8%	11.6%	17.4%	10.9%	12.5%	7.5%	16.7%	19.4%	7.1%
25.2%	27.3%	25.4%	31.0%	23.7%	25.5%	24.2%	32.9%	15.8%	23.9%	16.5%	14.3%	29.9%	33.3%
44.9%	39.6%	34.2%	35.1%	41.1%	31.9%	35.8%	32.2%	45.5%	39.8%	42.9%	45.2%	32.8%	45.2%
19.7%	19.3%	23.7%	14.9%	26.5%	20.7%	28.4%	17.4%	27.7%	23.9%	33.1%	23.8%	17.9%	14.3%
58.7%	55.1%	42.1%	53.4%	38.4%	40.4%	19.8%	30.2%	20.6%	28.4%	12.8%	14.3%	34.3%	59.5%
32.5%	33.2%	35.1%	33.9%	41.1%	31.4%	42.7%	40.3%	40.2%	48.9%	38.3%	31.0%	41.8%	35.7%
6.3%	8.6%	16.7%	9.8%	13.2%	16.0%	25.0%	22.1%	29.4%	17.0%	27.8%	33.3%	9.0%	2.4%
2.4%	3.2%	6.1%	2.9%	7.3%	12.2%	12.5%	7.4%	9.8%	5.7%	21.1%	21.4%	14.9%	2.4%
0.8%	4.3%	0.9%	2.3%	4.1%	4.8%	9.4%	5.4%	16.7%	4.5%	8.3%	10.7%	6.0%	0.0%
1.6%	7.5%	6.1%	7.5%	12.3%	14.4%	15.6%	8.7%	23.5%	11.4%	21.1%	11.9%	16.4%	0.0%
3.1%	6.4%	4.4%	6.3%	8.2%	10.6%	10.4%	10.7%	12.7%	6.8%	13.5%	10.7%	7.5%	7.3%
94.5%	81.8%	88.6%	83.9%	75.3%	70.2%	64.6%	75.2%	47.1%	77.3%	57.1%	66.7%	70.1%	92.7%
0.8%	3.7%	8.8%	8.6%	1.4%	4.8%	2.1%	6.7%	6.9%	0.0%	0.8%	3.6%	7.5%	7.1%
5.5%	15.5%	9.6%	21.3%	11.4%	13.8%	11.5%	17.4%	26.5%	19.3%	9.8%	28.6%	19.4%	11.9%
25.2%	23.0%	28.9%	23.0%	16.9%	29.8%	14.6%	30.2%	36.3%	28.4%	17.3%	29.8%	20.9%	16.7%
68.5%	57.8%	52.6%	47.1%	70.3%	51.6%	71.9%	45.6%	30.4%	52.3%	72.2%	38.1%	52.2%	64.3%
81.9%	62.0%	51.8%	42.5%	42.0%	38.3%	9.4%	20.1%	10.0%	27.3%	11.3%	24.1%	38.8%	71.4%
15.0%	36.4%	39.5%	50.0%	53.0%	53.2%	74.0%	55.7%	83.0%	65.9%	69.9%	53.0%	50.7%	21.4%
0.8%	0.0%	6.1%	1.1%	4.1%	4.8%	8.3%	11.4%	4.0%	4.5%	9.8%	8.4%	6.0%	4.8%
0.8%	1.6%	0.9%	2.9%	0.5%	2.1%	6.3%	9.4%	1.0%	0.0%	6.8%	9.6%	0.0%	0.0%
1.6%	0.0%	1.8%	3.4%	0.5%	1.6%	2.1%	3.4%	2.0%	2.3%	2.3%	4.8%	4.5%	2.4%
29.1%	29.0%	36.0%	34.3%	23.3%	28.2%	22.9%	26.2%	25.0%	19.5%	25.2%	28.9%	40.3%	48.8%
49.6%	46.2%	50.0%	46.5%	49.3%	47.9%	50.0%	50.3%	56.0%	54.0%	51.1%	53.0%	46.3%	46.3%
16.5%	20.4%	11.4%	17.4%	25.1%	19.1%	20.8%	18.1%	18.0%	23.0%	22.1%	15.7%	9.0%	4.9%
4.7%	4.3%	2.6%	1.7%	2.3%	4.8%	6.3%	5.4%	1.0%	3.4%	1.5%	2.4%	4.5%	0.0%
56.0%	46.7%	36.4%	69.2%	33.8%	53.3%	24.2%	46.4%	54.0%	44.7%	33.1%	46.4%	44.8%	33.3%
44.0%	53.3%	63.6%	30.8%	66.2%	46.7%	75.8%	53.6%	46.0%	55.3%	66.9%	53.6%	55.2%	66.7%
29.1%	30.6%	38.5%	16.3%	46.6%	31.7%	33.7%	29.5%	23.5%	30.6%	38.5%	31.0%	22.4%	31.0%
70.9%	69.4%	61.5%	83.7%	53.4%	68.3%	66.3%	70.5%	76.5%	69.4%	61.5%	69.0%	77.6%	69.0%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
<b>Q26-C.大学観C</b>							
大学での授業も出席を厳しくとるべきだ	45.8%	38.4%	50.4%	50.4%	44.1%	42.9%	41.8%
出席が少なくても、試験やレポートがよ	54.2%	61.6%	49.6%	49.6%	55.9%	57.1%	58.2%
<b>Q26-D.大学観D</b>							
大学ではもっと社会に出た時に役立つ	45.4%	39.3%	49.2%	43.3%	47.0%	46.1%	45.3%
大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激に	54.6%	60.7%	50.8%	56.7%	53.0%	53.9%	54.7%
<b>Q26-E.大学観E</b>							
大学の先生は指導したほうがよい	17.4%	16.2%	18.2%	18.3%	15.9%	18.8%	18.7%
学生の自主性にまかせたほうがよい	82.6%	83.8%	81.8%	81.7%	84.1%	81.3%	81.3%
<b>Q28-1.(普段していること)スポーツなどで体を鍛えている</b>							
とてもそう	12.6%	20.9%	7.5%	12.0%	12.8%	13.0%	12.6%
ややそう	19.4%	27.4%	14.4%	21.7%	17.3%	15.7%	25.9%
あまりそうでない	30.8%	28.8%	31.9%	34.2%	29.8%	29.9%	24.7%
ぜんぜんそうでない	37.2%	22.8%	46.2%	32.1%	40.0%	41.4%	36.8%
<b>Q28-2.(普段していること)新聞をよく読む</b>							
とてもそう	3.2%	4.9%	2.2%	3.0%	1.9%	4.9%	5.2%
ややそう	13.7%	17.1%	11.7%	13.4%	11.8%	14.2%	21.8%
あまりそうでない	31.9%	32.2%	31.7%	32.1%	30.0%	34.0%	34.5%
ぜんぜんそうでない	51.1%	45.8%	54.4%	51.6%	56.3%	46.9%	38.5%
<b>Q28-3.(普段していること)占いをチェックしている</b>							
とてもそう	2.7%	2.1%	3.0%	3.3%	1.9%	3.4%	2.3%
ややそう	10.5%	4.5%	14.3%	11.3%	9.9%	9.9%	9.8%
あまりそうでない	21.4%	15.9%	24.8%	21.7%	20.7%	23.1%	21.4%
ぜんぜんそうでない	65.4%	77.6%	58.0%	63.8%	67.5%	63.6%	66.5%
<b>Q28-4.(普段していること)ファッションについての情報をチェックしている</b>							
とてもそう	13.1%	7.4%	16.6%	12.7%	13.4%	12.0%	15.5%
ややそう	32.7%	20.1%	40.4%	35.2%	30.9%	29.6%	35.6%
あまりそうでない	28.8%	31.6%	26.9%	28.8%	27.2%	34.9%	24.7%
ぜんぜんそうでない	25.5%	40.9%	16.1%	23.3%	28.5%	23.5%	24.1%
<b>Q28-5.(普段していること)カラオケに行く</b>							
とてもそう	13.0%	10.7%	14.4%	12.7%	13.1%	13.9%	12.1%
ややそう	37.7%	35.4%	39.2%	39.9%	36.9%	37.3%	35.6%
あまりそうでない	27.2%	29.1%	25.8%	28.4%	25.5%	27.5%	28.7%
ぜんぜんそうでない	22.1%	24.8%	20.5%	19.1%	24.5%	21.3%	23.6%
<b>Q28-6.(普段していること)映画を観に行く</b>							
とてもそう	11.8%	10.7%	12.4%	9.7%	11.8%	13.0%	13.8%
ややそう	39.1%	29.7%	44.9%	39.5%	37.5%	40.2%	42.5%
あまりそうでない	33.1%	36.4%	31.0%	32.9%	35.1%	31.6%	28.7%
ぜんぜんそうでない	16.1%	23.3%	11.6%	17.9%	15.6%	15.2%	14.9%
<b>Q28-7.(普段していること)料理をよくする</b>							
とてもそう	14.3%	11.4%	16.1%	14.7%	12.8%	15.7%	15.5%
ややそう	26.2%	21.2%	29.3%	29.1%	22.9%	24.7%	32.8%
あまりそうでない	33.9%	32.2%	34.9%	31.4%	35.2%	36.7%	32.2%
ぜんぜんそうでない	25.6%	35.2%	19.7%	24.8%	29.1%	22.8%	19.5%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
29.1%	45.9%	45.0%	54.7%	40.6%	46.2%	35.8%	53.6%	59.0%	42.4%	43.1%	51.2%	59.7%	33.3%
70.9%	54.1%	55.0%	45.3%	59.4%	53.8%	64.2%	46.4%	41.0%	57.6%	56.9%	48.8%	40.3%	66.7%
17.3%	43.4%	56.0%	33.3%	43.8%	47.6%	50.5%	47.9%	64.4%	61.2%	48.5%	53.6%	41.8%	40.5%
82.7%	56.6%	44.0%	66.7%	56.2%	52.4%	49.5%	52.1%	35.6%	38.8%	51.5%	46.4%	58.2%	59.5%
8.7%	8.7%	22.9%	13.4%	18.3%	17.3%	22.1%	22.1%	23.8%	16.5%	22.3%	23.8%	14.9%	16.7%
91.3%	91.3%	77.1%	86.6%	81.7%	82.7%	77.9%	77.9%	76.2%	83.5%	77.7%	76.2%	85.1%	83.3%
19.7%	12.8%	24.6%	17.2%	8.2%	16.0%	2.1%	10.8%	2.9%	1.1%	15.0%	14.3%	16.4%	7.1%
16.5%	20.3%	28.1%	19.5%	26.9%	19.7%	11.5%	18.2%	10.8%	22.5%	19.5%	7.1%	25.4%	9.5%
29.9%	35.8%	22.8%	27.0%	33.3%	37.8%	24.0%	31.8%	34.3%	33.7%	19.5%	31.0%	29.9%	38.1%
33.9%	31.0%	24.6%	36.2%	31.5%	26.6%	62.5%	39.2%	52.0%	42.7%	45.9%	47.6%	28.4%	45.2%
3.9%	3.2%	7.9%	3.4%	2.7%	1.6%	2.1%	4.7%	0.0%	2.2%	1.5%	2.4%	9.0%	2.4%
19.7%	8.6%	17.5%	20.1%	13.7%	19.1%	6.3%	14.9%	4.9%	5.6%	7.5%	13.1%	22.4%	16.7%
30.7%	29.9%	28.1%	37.4%	31.1%	34.6%	31.3%	29.7%	21.6%	37.1%	30.8%	42.9%	25.4%	40.5%
45.7%	58.3%	46.5%	39.1%	52.5%	44.7%	60.4%	50.7%	73.5%	55.1%	60.2%	41.7%	43.3%	40.5%
0.0%	2.7%	3.5%	0.6%	1.8%	4.3%	1.1%	4.0%	2.9%	4.5%	3.8%	2.4%	4.5%	2.4%
3.1%	10.2%	15.8%	8.0%	7.3%	9.6%	12.6%	16.1%	15.7%	15.7%	9.1%	15.5%	6.0%	4.8%
15.0%	16.0%	26.3%	27.0%	24.2%	24.5%	18.9%	15.4%	20.6%	29.2%	18.2%	31.0%	16.4%	11.9%
81.9%	71.1%	54.4%	64.4%	66.7%	61.7%	67.4%	64.4%	60.8%	50.6%	68.9%	51.2%	73.1%	81.0%
3.1%	4.3%	12.3%	14.4%	17.4%	14.4%	10.4%	13.5%	19.6%	27.0%	18.0%	9.5%	13.4%	2.4%
19.7%	39.0%	33.3%	29.3%	32.4%	33.5%	30.2%	33.1%	38.2%	40.4%	34.6%	36.9%	23.9%	26.2%
28.3%	32.1%	33.3%	28.2%	26.0%	27.7%	28.1%	24.3%	25.5%	22.5%	27.1%	36.9%	34.3%	42.9%
48.8%	24.6%	21.1%	28.2%	24.2%	24.5%	31.3%	29.1%	16.7%	10.1%	20.3%	16.7%	28.4%	28.6%
7.9%	11.2%	7.0%	13.8%	16.9%	9.6%	10.5%	12.8%	12.7%	16.9%	15.0%	27.4%	7.5%	16.7%
36.2%	42.2%	39.5%	36.8%	38.8%	34.6%	37.9%	34.2%	41.2%	32.6%	39.8%	40.5%	41.8%	23.8%
19.7%	29.4%	35.1%	27.0%	24.7%	29.8%	25.3%	34.2%	25.5%	23.6%	26.3%	19.0%	17.9%	45.2%
36.2%	17.1%	18.4%	22.4%	19.6%	26.1%	26.3%	18.8%	20.6%	27.0%	18.8%	13.1%	32.8%	14.3%
3.9%	12.8%	11.4%	15.6%	10.5%	14.9%	4.2%	7.4%	13.7%	18.0%	14.4%	22.6%	7.5%	0.0%
23.6%	42.2%	34.2%	39.9%	41.6%	37.8%	34.4%	39.6%	51.0%	44.9%	37.1%	36.9%	49.3%	35.7%
42.5%	29.9%	44.7%	30.1%	34.7%	32.4%	39.6%	34.9%	22.5%	27.0%	29.5%	31.0%	19.4%	47.6%
29.9%	15.0%	9.6%	14.5%	13.2%	14.9%	21.9%	18.1%	12.7%	10.1%	18.9%	9.5%	23.9%	16.7%
9.4%	17.6%	21.1%	20.7%	5.5%	12.8%	12.5%	18.1%	8.8%	20.2%	9.0%	19.0%	13.4%	23.8%
19.7%	31.0%	25.4%	26.4%	25.6%	30.9%	16.7%	24.8%	29.4%	28.1%	29.3%	25.0%	23.9%	19.0%
33.1%	32.1%	38.6%	25.9%	38.4%	37.8%	36.5%	35.6%	38.2%	28.1%	27.1%	44.0%	25.4%	28.6%
37.8%	19.3%	14.9%	27.0%	30.6%	18.6%	34.4%	21.5%	23.5%	23.6%	34.6%	11.9%	37.3%	28.6%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
<b>Q28-8.(普段していること)休日や長期休みに旅行をする</b>							
とてもそう	18.4%	15.9%	20.0%	14.4%	18.5%	20.1%	27.6%
ややそう	35.5%	27.4%	40.4%	34.5%	36.4%	35.8%	34.5%
あまりそうでない	27.6%	31.5%	25.2%	28.8%	27.8%	26.5%	24.7%
ぜんぜんそうでない	18.6%	25.2%	14.4%	22.4%	17.3%	17.6%	13.2%
<b>Q27-1.(性格や考え方)スマートフォン・携帯電話を持ち歩いていないと不安だ</b>							
かなりそう	34.6%	28.8%	38.2%	35.9%	32.3%	35.8%	36.2%
ややそう	40.7%	39.5%	41.4%	39.5%	42.1%	41.4%	37.9%
あまりそうでない	18.7%	22.7%	16.3%	17.9%	20.5%	17.3%	17.8%
ぜんぜんそうでない	6.0%	9.1%	4.1%	6.8%	5.1%	5.6%	8.0%
<b>Q27-2.(性格や考え方)アニメ、鉄道、パソコンなど特定の分野に興味がある</b>							
かなりそう	21.0%	24.8%	18.7%	21.9%	22.2%	17.6%	20.1%
ややそう	21.9%	26.4%	19.0%	21.9%	19.8%	24.4%	25.9%
あまりそうでない	25.9%	26.1%	25.8%	25.2%	25.8%	26.9%	28.2%
ぜんぜんそうでない	31.2%	22.7%	36.5%	31.1%	32.2%	31.2%	25.9%
<b>Q27-3.(性格や考え方)人と一緒にいるより1人でいる方が好きだ</b>							
かなりそう	10.5%	13.5%	8.5%	10.9%	10.2%	11.8%	8.0%
ややそう	39.6%	39.8%	39.6%	38.0%	39.5%	44.6%	36.2%
あまりそうでない	42.2%	39.0%	44.1%	42.4%	43.9%	36.5%	45.4%
ぜんぜんそうでない	7.7%	7.7%	7.8%	8.7%	6.4%	7.1%	10.3%
<b>Q27-4.(性格や考え方)異性の視線が気になる</b>							
かなりそう	6.7%	10.2%	4.6%	7.6%	6.4%	7.7%	3.4%
ややそう	36.6%	41.8%	33.5%	37.8%	36.4%	34.1%	36.8%
あまりそうでない	42.8%	35.3%	47.5%	39.6%	44.1%	44.3%	47.1%
ぜんぜんそうでない	13.8%	12.6%	14.5%	14.9%	13.1%	13.9%	12.6%
<b>Q27-5.(性格や考え方)音楽は自分の生活の一部だ</b>							
かなりそう	30.7%	27.2%	32.9%	30.6%	29.3%	35.3%	26.4%
ややそう	35.0%	28.9%	38.6%	37.2%	32.6%	35.3%	37.4%
あまりそうでない	24.5%	28.6%	22.0%	24.3%	28.2%	18.9%	21.3%
ぜんぜんそうでない	9.8%	15.3%	6.5%	8.0%	9.9%	10.5%	14.9%
<b>Q27-6.(性格や考え方)自由に使える時間がたくさんある</b>							
かなりそう	18.3%	21.0%	16.6%	18.1%	16.7%	17.9%	23.7%
ややそう	38.3%	39.8%	37.2%	38.9%	37.0%	37.3%	43.4%
あまりそうでない	33.4%	29.6%	35.8%	33.0%	35.8%	35.8%	22.5%
ぜんぜんそうでない	10.1%	9.7%	10.3%	10.1%	10.5%	9.0%	10.4%
<b>Q27-7.(性格や考え方)将来のことより、現在を大切にしたい</b>							
かなりそう	11.4%	14.4%	9.5%	12.7%	11.2%	9.0%	11.5%
ややそう	38.8%	36.1%	40.5%	39.9%	38.6%	37.0%	39.7%
あまりそうでない	44.9%	43.6%	45.6%	43.2%	45.4%	47.5%	43.7%
ぜんぜんそうでない	5.0%	5.9%	4.4%	4.2%	4.8%	6.5%	5.2%
<b>Q27-8.(性格や考え方)毎日が充実している</b>							
かなりそう	25.2%	23.1%	26.4%	27.9%	20.8%	28.0%	27.6%
ややそう	49.3%	46.7%	50.9%	49.6%	51.2%	43.2%	51.7%
あまりそうでない	21.8%	24.8%	19.9%	19.8%	23.4%	23.6%	19.5%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	二	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
18.1%	24.1%	15.8%	19.0%	22.8%	20.7%	9.4%	13.4%	9.8%	22.5%	13.5%	23.8%	16.4%	23.8%
28.3%	37.4%	31.6%	42.5%	38.8%	29.8%	37.5%	22.1%	51.0%	44.9%	30.8%	32.1%	31.3%	50.0%
32.3%	27.3%	30.7%	23.0%	26.9%	32.4%	28.1%	34.9%	20.6%	21.3%	29.3%	28.6%	16.4%	19.0%
21.3%	11.2%	21.9%	15.5%	11.4%	17.0%	25.0%	29.5%	18.6%	11.2%	26.3%	15.5%	35.8%	7.1%
24.4%	30.5%	33.3%	41.4%	36.1%	31.9%	30.2%	28.9%	31.4%	46.1%	43.6%	36.9%	35.8%	40.5%
46.5%	42.8%	38.6%	31.0%	42.9%	39.4%	44.8%	46.3%	40.2%	40.4%	38.3%	45.2%	32.8%	35.7%
21.3%	19.8%	21.9%	19.0%	16.9%	19.1%	19.8%	17.4%	24.5%	12.4%	13.5%	16.7%	25.4%	16.7%
7.9%	7.0%	6.1%	8.6%	4.1%	9.6%	5.2%	7.4%	3.9%	1.1%	4.5%	1.2%	6.0%	7.1%
24.4%	19.8%	19.3%	23.0%	14.2%	18.6%	30.2%	23.5%	19.8%	16.9%	27.1%	17.9%	30.3%	11.9%
23.6%	17.6%	22.8%	20.1%	28.3%	18.1%	34.4%	29.5%	11.9%	18.0%	19.5%	15.5%	22.7%	19.0%
28.3%	27.8%	31.6%	23.6%	26.5%	27.7%	20.8%	22.1%	26.7%	22.5%	26.3%	26.2%	18.2%	35.7%
23.6%	34.8%	26.3%	33.3%	31.1%	35.6%	14.6%	24.8%	41.6%	42.7%	27.1%	40.5%	28.8%	33.3%
12.6%	8.6%	14.2%	12.6%	7.3%	10.6%	11.5%	12.1%	5.0%	12.4%	9.8%	10.7%	14.9%	4.8%
44.9%	37.4%	37.2%	44.3%	36.5%	45.2%	38.5%	32.2%	25.7%	36.0%	47.0%	48.8%	35.8%	45.2%
37.8%	44.4%	38.9%	37.4%	45.7%	38.8%	45.8%	47.7%	61.4%	44.9%	36.4%	31.0%	38.8%	38.1%
4.7%	9.6%	9.7%	5.7%	10.5%	5.3%	4.2%	8.1%	7.9%	6.7%	6.8%	9.5%	10.4%	11.9%
8.7%	2.7%	7.9%	8.0%	7.3%	7.4%	4.2%	4.7%	3.9%	4.5%	9.1%	10.7%	11.9%	4.8%
40.9%	40.6%	23.7%	33.9%	43.8%	39.4%	36.5%	35.1%	26.5%	37.1%	36.4%	29.8%	43.3%	35.7%
40.9%	41.2%	53.5%	43.1%	41.6%	38.3%	47.9%	43.2%	52.0%	44.9%	42.4%	41.7%	23.9%	47.6%
9.4%	15.5%	14.9%	14.9%	7.3%	14.9%	11.5%	16.9%	17.6%	13.5%	12.1%	17.9%	20.9%	11.9%
30.7%	25.1%	35.1%	38.5%	21.5%	33.5%	33.3%	27.0%	24.5%	27.0%	35.3%	45.8%	35.8%	23.8%
31.5%	34.2%	32.5%	36.2%	38.4%	31.4%	28.1%	31.8%	47.1%	37.1%	36.8%	41.0%	35.8%	23.8%
26.0%	27.3%	25.4%	17.8%	29.2%	23.4%	30.2%	33.1%	22.5%	27.0%	17.3%	9.6%	19.4%	28.6%
11.8%	13.4%	7.0%	7.5%	11.0%	11.7%	8.3%	8.1%	5.9%	9.0%	10.5%	3.6%	9.0%	23.8%
20.5%	19.8%	14.2%	16.7%	20.5%	19.7%	13.5%	22.1%	5.9%	20.2%	23.3%	15.5%	16.7%	19.0%
46.5%	43.9%	37.2%	45.4%	42.9%	30.3%	40.6%	38.9%	26.5%	37.1%	34.6%	35.7%	39.4%	11.9%
29.1%	30.5%	37.2%	30.5%	31.1%	30.9%	37.5%	32.9%	43.1%	33.7%	33.1%	40.5%	31.8%	42.9%
3.9%	5.9%	11.5%	7.5%	5.5%	19.1%	8.3%	6.0%	24.5%	9.0%	9.0%	8.3%	12.1%	26.2%
10.2%	15.5%	8.8%	15.5%	6.8%	12.2%	12.5%	14.9%	5.9%	5.6%	14.3%	13.1%	7.5%	9.5%
48.0%	29.4%	36.0%	37.4%	43.8%	34.0%	47.9%	41.9%	44.1%	37.1%	36.8%	28.6%	37.3%	47.6%
40.2%	52.4%	50.9%	37.4%	44.3%	45.2%	34.4%	39.9%	48.0%	52.8%	44.4%	50.0%	50.7%	42.9%
1.6%	2.7%	4.4%	9.8%	5.0%	8.5%	5.2%	3.4%	2.0%	4.5%	4.5%	8.3%	4.5%	0.0%
20.5%	34.8%	28.9%	31.0%	20.5%	25.0%	11.5%	22.1%	17.6%	24.7%	20.3%	34.1%	31.3%	35.7%
59.8%	50.8%	50.0%	48.9%	47.0%	55.9%	40.6%	49.7%	51.0%	51.7%	37.6%	41.5%	50.7%	52.4%
18.1%	12.3%	19.3%	18.4%	28.3%	15.4%	37.5%	24.8%	28.4%	18.0%	32.3%	22.0%	16.4%	11.9%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
ぜんぜんそうでない	3.7%	5.3%	2.7%	2.8%	4.5%	5.3%	1.1%
<b>Q27-9.(性格や考え方)将来就きたい職業を決めている</b>							
かなりそう	28.7%	31.0%	27.4%	26.7%	23.8%	34.1%	42.5%
ややそう	26.7%	27.4%	26.3%	26.2%	26.3%	27.9%	29.3%
あまりそうでない	26.9%	26.8%	27.1%	28.3%	30.4%	22.6%	17.2%
ぜんぜんそうでない	17.7%	14.9%	19.3%	18.8%	19.6%	15.5%	10.9%
<b>Q27-10.(性格や考え方)就職するなら正社員がよい</b>							
かなりそう	62.3%	63.5%	61.6%	56.2%	62.2%	70.3%	69.0%
ややそう	27.0%	23.9%	28.8%	31.1%	28.1%	18.9%	23.0%
あまりそうでない	8.0%	8.3%	7.7%	9.0%	7.3%	8.4%	6.3%
ぜんぜんそうでない	2.8%	4.3%	1.8%	3.7%	2.5%	2.5%	1.7%
<b>Q27-11.(性格や考え方)働についての法律や労働者の権利について知っている</b>							
かなりそう	7.1%	10.3%	5.2%	6.8%	5.2%	8.4%	12.1%
ややそう	29.1%	28.5%	29.5%	32.1%	26.3%	26.3%	35.1%
あまりそうでない	49.0%	45.6%	51.1%	48.7%	51.8%	50.8%	37.4%
ぜんぜんそうでない	14.7%	15.6%	14.2%	12.5%	16.6%	14.6%	15.5%
<b>Q27-12.(性格や考え方)自分のためより社会のために働きたい</b>							
かなりそう	11.9%	13.8%	10.8%	13.5%	9.5%	12.7%	12.6%
ややそう	31.2%	28.3%	33.0%	35.9%	29.2%	25.9%	33.9%
あまりそうでない	44.0%	41.7%	45.4%	39.7%	46.1%	49.7%	41.4%
ぜんぜんそうでない	12.8%	16.2%	10.8%	10.9%	15.3%	11.7%	12.1%
<b>Q27-13.(性格や考え方)自分の将来に関して、不安を感じる</b>							
かなりそう	42.1%	38.0%	44.7%	40.2%	41.8%	52.2%	31.6%
ややそう	40.0%	38.4%	40.9%	41.8%	41.0%	33.6%	42.0%
あまりそうでない	14.6%	17.4%	12.9%	14.7%	14.8%	9.9%	20.7%
ぜんぜんそうでない	3.3%	6.2%	1.6%	3.3%	2.3%	4.3%	5.7%
<b>Q29-1.(日頃の行動)お年寄りや体の不自由な人に席を譲る</b>							
かなりそう	27.2%	28.3%	26.6%	30.2%	24.6%	26.4%	28.2%
ややそう	54.6%	51.2%	56.5%	53.7%	53.4%	54.0%	62.6%
あまりそうでない	15.9%	16.8%	15.3%	13.2%	18.9%	18.9%	8.0%
ぜんぜんそうでない	2.4%	3.7%	1.6%	2.9%	3.1%	0.6%	1.1%
<b>Q29-2.(日頃の行動)ボランティア活動をしている</b>							
かなりそう	9.3%	7.1%	10.7%	7.6%	7.0%	14.9%	12.6%
ややそう	18.3%	15.2%	20.3%	16.0%	16.8%	22.7%	24.1%
あまりそうでない	33.1%	31.3%	34.1%	35.9%	34.0%	28.9%	28.2%
ぜんぜんそうでない	39.3%	46.4%	34.9%	40.5%	42.3%	33.5%	35.1%
<b>Q29-3.(日頃の行動)ゴミやカンを決められた場所に捨てている</b>							
かなりそう	57.0%	53.7%	59.0%	58.2%	55.3%	58.3%	56.3%
ややそう	36.4%	35.0%	37.2%	33.3%	38.3%	35.5%	40.8%
あまりそうでない	5.6%	9.2%	3.4%	7.6%	4.9%	5.3%	2.3%
ぜんぜんそうでない	1.1%	2.1%	0.5%	0.9%	1.5%	0.9%	0.6%
<b>Q29-4.(日頃の行動)選挙で投票に行く(選挙権のない人はあると仮定して)</b>							
かなりそう	41.3%	44.6%	39.2%	40.3%	39.2%	44.4%	47.1%
ややそう	29.0%	24.0%	32.1%	34.5%	30.2%	19.9%	23.0%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
1.6%	2.1%	1.8%	1.7%	4.1%	3.7%	10.4%	3.4%	2.9%	5.6%	9.8%	2.4%	1.5%	0.0%
15.0%	41.7%	40.4%	35.8%	16.5%	35.1%	8.3%	32.9%	38.2%	17.0%	20.3%	52.4%	17.9%	14.6%
22.8%	21.9%	33.3%	24.9%	20.2%	28.2%	19.8%	34.2%	36.3%	21.6%	26.3%	28.6%	37.3%	34.1%
47.2%	24.6%	18.4%	21.4%	31.7%	23.9%	29.2%	24.8%	18.6%	42.0%	30.1%	13.1%	19.4%	31.7%
15.0%	11.8%	7.9%	17.9%	31.7%	12.8%	42.7%	8.1%	6.9%	19.3%	23.3%	6.0%	25.4%	19.5%
56.7%	68.8%	63.2%	56.1%	63.0%	61.7%	61.5%	57.0%	59.8%	73.0%	64.7%	72.3%	59.7%	52.4%
29.1%	23.1%	24.6%	26.0%	28.3%	27.1%	25.0%	36.2%	32.4%	20.2%	26.3%	15.7%	29.9%	33.3%
11.8%	5.9%	9.6%	12.1%	5.9%	9.0%	8.3%	6.7%	4.9%	6.7%	5.3%	10.8%	6.0%	9.5%
2.4%	2.2%	2.6%	5.8%	2.7%	2.1%	5.2%	0.0%	2.9%	0.0%	3.8%	1.2%	4.5%	4.8%
3.1%	10.2%	19.3%	8.6%	3.7%	8.5%	2.1%	7.4%	0.0%	6.7%	6.0%	9.5%	7.5%	4.9%
22.8%	25.7%	38.6%	27.0%	18.7%	45.2%	32.3%	38.3%	26.5%	32.6%	23.3%	25.0%	32.8%	7.3%
52.0%	51.3%	36.0%	48.9%	63.9%	33.0%	40.6%	45.0%	57.8%	49.4%	48.1%	56.0%	44.8%	68.3%
22.0%	12.8%	6.1%	15.5%	13.7%	13.3%	25.0%	9.4%	15.7%	11.2%	22.6%	9.5%	14.9%	19.5%
8.7%	13.9%	20.2%	19.5%	5.9%	14.9%	9.4%	14.1%	4.9%	4.5%	9.0%	10.7%	11.9%	19.0%
29.9%	34.8%	33.3%	37.4%	26.5%	35.6%	19.8%	34.2%	22.5%	34.1%	25.6%	26.2%	41.8%	35.7%
45.7%	36.4%	38.6%	34.5%	55.3%	38.8%	45.8%	43.0%	62.7%	45.5%	41.4%	54.8%	40.3%	35.7%
15.7%	15.0%	7.9%	8.6%	12.3%	10.6%	25.0%	8.7%	9.8%	15.9%	24.1%	8.3%	6.0%	9.5%
22.0%	37.4%	42.1%	35.1%	41.1%	38.8%	63.5%	36.9%	43.1%	46.1%	58.6%	60.7%	52.2%	26.2%
52.8%	40.1%	36.0%	33.3%	43.4%	46.8%	28.1%	49.0%	41.2%	42.7%	31.6%	32.1%	28.4%	38.1%
25.2%	18.7%	17.5%	22.4%	12.8%	10.6%	8.3%	11.4%	14.7%	11.2%	6.0%	7.1%	14.9%	23.8%
0.0%	3.7%	4.4%	9.2%	2.7%	3.7%	0.0%	2.7%	1.0%	0.0%	3.8%	0.0%	4.5%	11.9%
17.3%	23.0%	40.7%	31.0%	19.2%	38.3%	18.8%	28.9%	25.5%	32.6%	18.8%	27.4%	41.8%	24.4%
54.3%	61.0%	50.4%	54.6%	57.1%	51.6%	53.1%	50.3%	61.8%	53.9%	55.6%	53.6%	40.3%	61.0%
23.6%	15.5%	8.0%	11.5%	20.1%	9.6%	22.9%	17.4%	10.8%	11.2%	21.8%	19.0%	16.4%	14.6%
4.7%	0.5%	0.9%	2.9%	3.7%	0.5%	5.2%	3.4%	2.0%	2.2%	3.8%	0.0%	1.5%	0.0%
1.6%	9.6%	21.2%	11.5%	5.5%	11.7%	3.1%	10.7%	5.9%	6.7%	1.5%	27.4%	10.4%	10.0%
8.7%	17.6%	37.2%	20.7%	14.6%	18.1%	16.7%	20.8%	16.7%	11.2%	13.6%	25.0%	16.4%	30.0%
31.5%	40.6%	28.3%	39.7%	24.7%	35.1%	18.8%	32.9%	47.1%	37.1%	32.6%	31.0%	26.9%	30.0%
58.3%	32.1%	13.3%	28.2%	55.3%	35.1%	61.5%	35.6%	30.4%	44.9%	52.3%	16.7%	46.3%	30.0%
55.9%	62.0%	54.5%	74.7%	44.7%	57.4%	61.5%	51.0%	45.1%	55.1%	58.6%	58.3%	67.2%	51.2%
35.4%	34.8%	36.6%	20.7%	46.6%	37.2%	36.5%	36.2%	49.0%	37.1%	33.1%	40.5%	25.4%	41.5%
4.7%	3.2%	6.3%	4.0%	8.2%	4.8%	2.1%	10.7%	4.9%	6.7%	6.0%	1.2%	7.5%	7.3%
3.9%	0.0%	2.7%	0.6%	0.5%	0.5%	0.0%	2.0%	1.0%	1.1%	2.3%	0.0%	0.0%	0.0%
44.9%	42.2%	38.9%	52.3%	34.9%	51.1%	34.4%	32.2%	36.3%	31.8%	35.3%	42.9%	55.2%	48.8%
26.8%	36.4%	28.3%	23.6%	31.2%	27.7%	26.0%	34.9%	36.3%	33.0%	19.5%	21.4%	28.4%	29.3%

有効回答(無回答除く)で集計	全体	性別		学年別			
		男	女	1年	2年	3年	4年
N(=100.0%、目安(無回答は集計していないため))→	1771	674	1095	577	687	324	174
あまりそうでない	16.0%	16.4%	15.7%	16.0%	16.3%	16.1%	13.2%
ぜんぜんそうでない	13.8%	15.0%	13.0%	9.2%	14.3%	19.6%	16.7%
<b>Q30-1.(ジェンダー・社会意識) 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ</b>							
とてもそう思う	3.6%	5.5%	2.4%	4.2%	3.3%	2.8%	4.0%
ややそう思う	19.2%	24.4%	16.0%	21.0%	18.2%	17.6%	20.1%
あまりそう思わない	49.7%	46.5%	51.7%	49.2%	52.0%	46.7%	48.9%
ぜんぜんそう思わない	27.6%	23.6%	30.0%	25.6%	26.5%	32.8%	27.0%
<b>Q30-2.(ジェンダー・社会意識) 今後の日本は、経済や国の発展よりも、社会的に恵まれないものへの福祉に力をいれるべきだ</b>							
とてもそう思う	10.9%	10.1%	11.4%	14.3%	8.3%	11.8%	8.0%
ややそう思う	49.8%	41.8%	54.8%	49.6%	51.4%	48.9%	46.0%
あまりそう思わない	35.2%	41.2%	31.6%	32.0%	36.4%	34.7%	43.1%
ぜんぜんそう思わない	4.0%	7.0%	2.2%	4.2%	3.9%	4.6%	2.9%
<b>Q30-3.(ジェンダー・社会意識) 第2次世界大戦で日本がアジアで行ったことにもっと反省をすべきだ</b>							
とてもそう思う	9.8%	11.8%	8.6%	12.2%	9.0%	8.8%	8.0%
ややそう思う	36.9%	29.6%	41.4%	39.4%	35.7%	37.2%	33.9%
あまりそう思わない	43.1%	42.1%	43.7%	37.8%	45.1%	44.7%	47.7%
ぜんぜんそう思わない	10.1%	16.5%	6.3%	10.6%	10.1%	9.4%	10.3%
<b>Q30-4.(ジェンダー・社会意識) 基地や環境などの問題を決めるとき、住民より国が最終的な決定をすべきだ</b>							
とてもそう思う	5.4%	9.4%	2.9%	6.8%	4.0%	6.5%	4.6%
ややそう思う	20.2%	27.4%	15.8%	21.6%	19.7%	20.4%	17.8%
あまりそう思わない	54.9%	46.1%	60.2%	53.5%	56.7%	53.9%	55.2%
ぜんぜんそう思わない	19.5%	17.1%	21.1%	18.1%	19.7%	19.2%	22.4%
<b>Q30-5.(ジェンダー・社会意識) 原子力発電は廃止した方がよいと思う</b>							
とてもそう思う	17.2%	15.5%	18.3%	18.7%	16.3%	14.9%	19.5%
ややそう思う	33.4%	26.0%	38.0%	33.1%	34.0%	34.8%	29.3%
あまりそう思わない	39.7%	40.1%	39.4%	38.5%	38.5%	44.4%	41.4%
ぜんぜんそう思わない	9.7%	18.4%	4.3%	9.7%	11.3%	5.9%	9.8%
<b>Q31-1.自分の将来志向</b>							
仕事に就き一生働き続ける(キャリア志向)	27.0%	39.6%	19.3%	28.2%	25.2%	28.2%	27.1%
結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る(家族志向)	31.8%	15.9%	41.4%	30.5%	34.4%	30.4%	29.4%
自分の好きなことに打ち込む(趣味志向)	20.9%	25.2%	18.3%	19.6%	19.7%	22.6%	26.5%
社会活動やボランティア活動に打ち込む(社会志向)	2.4%	2.6%	2.2%	2.8%	1.6%	2.8%	2.4%
結婚相手の意向や事情に合わせる(相手志向)	15.6%	14.4%	16.4%	17.0%	16.6%	12.2%	13.5%
その他	2.4%	2.3%	2.4%	1.8%	2.5%	3.8%	1.2%
<b>Q31-2.結婚相手の生き方</b>							
仕事に就き一生働き続ける(キャリア志向)	36.9%	8.1%	54.3%	35.2%	38.8%	36.8%	36.2%
結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る(家族志向)	25.1%	44.1%	13.8%	28.8%	24.0%	21.0%	26.4%
自分の好きなことに打ち込む(趣味志向)	13.8%	20.2%	9.9%	12.4%	13.1%	15.5%	16.6%
社会活動やボランティア活動に打ち込む(社会志向)	1.7%	1.9%	1.6%	2.4%	1.2%	1.6%	1.8%
結婚相手の意向や事情に合わせる(相手志向)	20.1%	24.0%	17.9%	18.8%	20.9%	21.9%	17.2%
その他	0.0%	1.7%	2.6%	2.4%	2.0%	3.2%	1.8%

大学別													
A	C	D	F	G	H	J	L	W	Z	イ	ロ	ニ	ホ
127	187	114	174	219	188	96	149	102	89	133	84	67	42
8.7%	13.9%	17.7%	14.4%	17.0%	17.6%	19.8%	16.8%	11.8%	19.3%	21.8%	14.3%	14.9%	14.6%
19.7%	7.5%	15.0%	9.8%	17.0%	3.7%	19.8%	16.1%	15.7%	15.9%	23.3%	21.4%	1.5%	7.3%
2.4%	2.1%	4.4%	2.9%	5.5%	4.8%	2.1%	4.0%	0.0%	4.5%	5.3%	3.6%	4.5%	0.0%
17.3%	15.0%	20.4%	14.9%	22.8%	24.5%	17.7%	22.8%	11.8%	23.6%	21.1%	9.5%	19.4%	26.2%
49.6%	51.3%	43.4%	53.4%	50.2%	42.6%	50.0%	46.3%	67.6%	44.9%	51.1%	52.4%	43.3%	52.4%
30.7%	31.6%	31.9%	28.7%	21.5%	28.2%	30.2%	26.8%	20.6%	27.0%	22.6%	34.5%	32.8%	21.4%
5.5%	13.4%	21.2%	11.5%	11.0%	13.4%	4.2%	14.1%	7.8%	6.7%	6.0%	11.9%	11.9%	7.1%
40.2%	46.5%	59.3%	46.0%	40.4%	53.5%	52.1%	50.3%	71.6%	55.1%	50.4%	59.5%	41.8%	38.1%
48.8%	35.3%	15.9%	39.1%	43.6%	29.9%	40.6%	33.6%	19.6%	36.0%	36.8%	26.2%	35.8%	52.4%
5.5%	4.8%	3.5%	3.4%	5.0%	3.2%	3.1%	2.0%	1.0%	2.2%	6.8%	2.4%	10.4%	2.4%
7.9%	11.3%	13.4%	12.6%	7.3%	14.0%	7.3%	9.4%	3.1%	12.4%	8.3%	7.2%	10.6%	9.8%
31.0%	32.8%	43.8%	33.3%	36.5%	38.7%	33.3%	45.0%	39.8%	43.8%	29.5%	39.8%	36.4%	41.5%
46.0%	46.8%	36.6%	46.0%	44.7%	40.3%	45.8%	36.2%	51.0%	38.2%	43.9%	47.0%	33.3%	41.5%
15.1%	9.1%	6.3%	8.0%	11.4%	7.0%	13.5%	9.4%	6.1%	5.6%	18.2%	6.0%	19.7%	7.3%
6.3%	4.3%	8.8%	7.5%	3.7%	6.9%	4.2%	2.7%	1.0%	4.5%	9.0%	4.8%	6.0%	4.8%
27.6%	17.1%	13.3%	20.8%	22.4%	18.1%	21.9%	21.6%	13.5%	22.7%	22.6%	20.2%	16.4%	26.2%
55.9%	62.0%	46.9%	50.3%	55.7%	52.1%	56.3%	58.8%	60.4%	54.5%	49.6%	53.6%	56.7%	54.8%
10.2%	16.6%	31.0%	21.4%	18.3%	22.9%	17.7%	16.9%	25.0%	18.2%	18.8%	21.4%	20.9%	14.3%
15.0%	20.9%	14.2%	25.3%	12.8%	26.1%	12.5%	10.7%	16.3%	24.7%	10.5%	14.5%	16.4%	14.3%
29.1%	28.9%	36.3%	30.5%	33.3%	32.4%	34.4%	35.6%	38.8%	40.4%	30.1%	38.6%	41.8%	26.2%
37.8%	42.8%	35.4%	35.6%	44.7%	35.1%	39.6%	41.6%	41.8%	29.2%	45.9%	45.8%	29.9%	47.6%
18.1%	7.5%	14.2%	8.6%	9.1%	6.4%	13.5%	12.1%	3.1%	5.6%	13.5%	1.2%	11.9%	11.9%
38.1%	25.8%	27.0%	31.8%	24.3%	38.4%	16.0%	28.4%	10.0%	19.8%	23.8%	20.2%	26.9%	40.5%
15.1%	35.5%	37.8%	23.5%	33.6%	25.9%	41.5%	28.4%	66.0%	40.7%	18.5%	44.0%	23.9%	19.0%
28.6%	17.2%	19.8%	17.6%	19.6%	18.4%	23.4%	18.2%	11.0%	20.9%	35.4%	20.2%	25.4%	26.2%
2.4%	2.2%	5.4%	3.5%	3.7%	1.6%	1.1%	0.7%	0.0%	3.5%	1.5%	0.0%	3.0%	4.8%
12.7%	17.7%	9.9%	21.2%	16.4%	13.0%	14.9%	20.9%	12.0%	14.0%	18.5%	13.1%	16.4%	4.8%
3.2%	1.6%	0.0%	2.4%	2.3%	2.7%	3.2%	3.4%	1.0%	1.2%	2.3%	2.4%	4.5%	4.8%
24.0%	40.1%	30.8%	37.6%	33.2%	33.1%	39.4%	30.3%	53.0%	59.8%	35.4%	50.6%	29.7%	31.7%
22.3%	24.9%	28.8%	19.1%	28.0%	29.3%	24.5%	31.0%	26.0%	13.4%	29.9%	10.8%	28.1%	26.8%
22.3%	17.5%	11.5%	17.2%	15.6%	11.0%	9.6%	11.3%	6.0%	8.5%	13.4%	13.3%	14.1%	17.1%
1.7%	1.7%	1.9%	2.5%	1.9%	1.1%	2.1%	2.1%	0.0%	3.7%	0.8%	0.0%	1.6%	4.9%
26.4%	14.1%	26.0%	21.7%	19.9%	21.5%	22.3%	21.1%	14.0%	13.4%	17.3%	22.9%	23.4%	19.5%
3.3%	1.7%	1.0%	1.9%	1.4%	3.9%	2.1%	4.2%	1.0%	1.2%	3.1%	2.4%	3.1%	0.0%

<自由記述> (大学別に掲載)

Q32 あなたの大学について、また大学の先生や職員や学生について、感じることや希望することがあれば自由に書いてください。

A

もっと自由に発言出来る雰囲気が増えてほしい。	女	2年
マンモス授業を減らして少人数授業をふやし、レポートや課題をもっと出してほしい。また、フィードバックもちゃんとほしい。	女	2年
楽に単位を取得しようとする人が意外と多い。教える気のない教員が多いと感じる。(研究熱心?)	女	2年
教務課が不親切	男	2年
専攻選択より flexible にしてほしい。(サブメジャーの充実 etc…)	男	2年
学生は積極性に欠ける傾向がある。	男	2年
入試は一般入試だけで良い。	男	2年
講義に双方向性を持たせて欲しい。	男	2年
学生にわかりやすいシラバス・学部便覧を作してほしい。	男	2年
学生はもっと奔放に生きるべき。	男	2年
flexible に。	男	2年
大学の先生方は研究が本業なので仕方ないのかもしれませんが、教え方の下手な方々があまりに多くいらっしゃるのではないのでしょうか。教員を務める以上、生徒の立場を考えていただきたいと強く思っています。	男	2年
皆自分がかかなり優秀であることに気づいていない。	男	2年
学生を不要に締めつけるのは止めてほしい。(授業ノートを共有するのがなぜいけないのかわからない)	男	2年

C

留学生と関わる機会や、留学について、教育学部内でもっと広めてほしい。	女	1年
もっと学生に興味を持ってほしい。	女	1年
学務の職員の方の対応が不親切すぎる。	女	1年
一年時に受けられる専門科目の授業が非常に限られている。大学とは、自分が学びたいことを学びたいときに学べるのが望ましいのではないだろうか。普遍教育の幅広さは良いことだと思うが、それが原因で、個々の学びへの意欲や高い志を大無しにするような現在の履修制度は見直してほしい。	男	1年
私語で聞こえない、マイクの音が小さいなどの講義が無駄になることは無くしてほしい。	男	1年
先生も学生も対極の人間が居ると、感じる。面白さを伝えようと熱心に教える先生、自分の喋りたい事をひたすら喋る先生(学生はポカンとして聞いている)、学びたい事を進んで学ぶ学生、とりあえず単位がとれば良い学生。そのギャップに悩まされる事が多い。まじめに学んでも、将来に繋がらないような不安に襲われる事もある。(この事は、他大学の学生と話していても感じる。)	女	2年

他学科の先生や学生と関わるチャンスがほしい。	女	2年
大学の教員はかなりしかりと教えてくれるが、自分の考え方を押しつける方もいて、困ることがある。職員はかなり事務的で、学生の活動のことをあまり考えてくれないように感じる。	女	2年
情報をけいじ板以外に、メールでもっと受け取りたい。	女	2年
学生でも、学業優先の人がいる一方で、サークルや部活動、バイトにうちこんでしまう学生がいるので、もう少し学生という身分を考えた方が良いのではないかと思います。学業を優先した生活の過ごした方が好ましいと考えています。	女	2年
教育学部の生徒はもっと外で遊ぶべきであるし、アルバイトも塾講ではなく様々な体験をすべきだと思う。	女	2年
授業カリキュラム、単位認定などの相談が雑である。もっと学生に寄りをつけた相談場所が多い。	女	2年
大学の先生で、まれにひねくれた先生がいる。先生はもっと生徒に尊敬される存在であるべきだと思う。	男	2年
他の大学と比べ、閉鎖的な感じがする。(インカレサークルがない、外部団体が活動しにくいなど)	男	2年
現状で満足はしているが、もっと教員の方々とかかわりたいとは思っています。	男	2年
1年時の必修授業が多い。	男	2年
座学が好きなので、増やしてほしい。	女	3年
自分さえ良ければ他はどうだっていい、という学生が多く、精神的に疲れることが多いが、大学での生活は充実しているほうだと思う。	女	3年
もっと学生と関わりを持った教授が増えてほしいです。	女	3年
自転車の利用規定を、勝手に変更されて遺憾です。	男	3年
感じることはくはくなく、希望することもない。	男	3年
開講されていない授業が多い。また同じ時間帯にたくさんあっても1つしか取れないのでかなり厳しい。	女	4年
進路について考えることを、強く！すすめてほしい。入学してからの転力について。	女	4年

## D

もっと、生徒の声を聞いてほしい。教員主体の授業で好き勝手に進めるのではなく、アンケートを実施し、皆に合わせた授業を行ってほしい。また、教師の発言はつじつまが合わないことが多く授業に対して非常に不満を感じる。(おもに木曜2限、ハンダールⅡに対して)	女	1年
学生課はもう少し学生の意向にそった行動をとるべきだと思う。あまりに教員にへこへこしすぎた。	女	1年
ある授業の先生が、生徒に対して理不尽なことをよく行ってきます。理不尽なことをされるのは、ある意味、社会の常なので仕方ないかと思いますが、それを理由に先生が逆ギレするのは筋違いかな、と感じることがあります。それ以外は特になにもありません。	女	1年
生徒の事をよく気にかけてくださる職員や先生方は、本当に細かいところまで気にかけて下さり、ありがたいです。D大は周りに何もありませんが充実した生活ができる理由でもあると思います。	女	1年
高校とはだいぶ違って自分から何か行動しないと先生は動いてくれないので自分からもっと先生をたよって行動したいと思う。質問や相談をしやすい雰囲気(フレンドリーな感じ)があれば話しかけやすい。	女	1年

学生に対しての配慮が足りないと感じる。自分でやるということにも、さすがに限界というものはある。もう少し、手助けをしてくれてもよいのではないだろうか。	男	1年
その日の気分で授業の仕方がかわる人をどうにかしたい。	男	1年
見るからに理不尽なことはやめていただきたい。どの授業とは言わないが先生が明らかに横暴で生徒がついていくことができない授業がある。	男	1年
教員の授業が面白くない。	男	1年
図書館をはやくあけてほしい。もしくは自習できる場所を増やしてほしい。	女	2年
支援課の受付の態度が冷たく話しかけにくい。また、喫煙所の場所を変えてほしい。	女	2年
大人のエゴが強いときがある。学生だからってなめないでほしい。	女	2年
学生の授業態度がとても悪いと感じる。(意識の低さ) 前回のプリントを先生が持ってきてくれたりと、そこまで甘やかす必要はないのではと思うことがよくある。	女	2年
親身になって話をきいてくれるので助かる。	女	2年
少人数制で仲よしなところが魅力的だと思います。	女	2年
学長を変えて下さい。	女	2年
もっと年と立場相応の言動と責任感をもつこと。	女	2年
いいと思います。	男	2年
大学の職員(教育支援課)の対応が悪すぎるので、学生みんなが知っているのを改善してほしいです。	男	2年
学長を変えて下さい。	男	2年
それぞれが自分の意志でこの学校をえらんでいるのだから、自分の興味・関心のあることに没頭すべきだと思う。	男	2年
もっと音楽活動を積極的にしてほしい。演奏ホールを作ってほしい。	男	2年
アカハラ、パワハラが目立つ。	女	3年
大学は遠い、坂とかつらい!!	女	3年
もう少し丁寧に対応してほしい。(大学職員)	女	3年
休み時間の時間を昨年のように10分にしてほしい。	男	3年
人文社会棟をもっとキレイにしてほしい。	男	3年
アットホーム。	男	3年
大学は、知識を学ぶ場所だけではなく、人間関係や趣味作りの所です。学校の環境はだんだん変わって、教室の改装、よりよい環境を作ってもらっています。とても満足です。豊かで、雰囲気がいい学校です。	女	4年
自分の進路について相談に乗っていただき、進路決定を実現することができて感謝しています。	男	4年
体育館を整備してほしい。	男	4年
大学内の教員同士の仲があまり良くなく、学生達が気をつかう。	男	4年
やる気が欲しいです。	男	4年
キャリア支援をもう少し力を入れて欲しいです。	男	4年

## F

第1志望ではありませんでしたが、今は満足しています。	女	1年
F大の学食をふやして下さい!!!!	女	1年
自分が本当にやりたいことが何なのかはっきりさせたい。	女	1年
先生方と交流する機会がもう少し多いといい。	女	1年
生物分野の授業のレベルが中高なので、新たに知ることがない。	女	1年

毎日とても楽しい。	女	1年
授業中にお喋りするのには本当に止めてほしいです（大学について）。感じる事、希望することは特にほかにはありません。	女	1年
トイレを洋式にしていただけるとありがたい。	男	1年
好きな授業はなんでもとれるようにしてほしい。5分休憩をはさむことで集中の維持につながる。	男	1年
大学の先生は好きなことをしているのですから、学生相手に媚びたり、逆に凶険になったりせず、楽しんでいて充実していることを示してくれればそれでいい。	男	1年
先生方は分かりやすく、質問にもきちんと答えてくださいます。しかし職員の方はあいまいな返答をしたりするので不満があります。	女	2年
普段授業にろくにでていない人が上級生からの過去問で点数をそこそことって、進級したり単位がとれるのが不満。人の宿題を写している人も同じ。	女	2年
大学でもなんでも大体自分次第でしょう。	女	2年
ほとんどの先生は大丈夫だが、ごくまれに、全く聞きとれない授業をする先生がいることが不満だ。学生は学問をするために大学にいるのだから、もっと意識してほしい。	女	2年
とても充実して満足できる生活を送れています！	女	2年
細かいことはさておき、なんだかんだこの学校は嫌いではないですし、入学をここに決めたことは後悔していません。改めて考えると。	女	2年
課程科目の中の選択科目の選択肢をもっと充実させてほしい。	女	2年
職員対応よくない。	女	2年
教員免許を持ってほしい。	男	2年
特に大人数の授業では、やむを得ないかもしれないが、生徒と教員の距離が遠すぎるように感じる。	男	2年
専門的なことを十分に学べ満足しています。ただ履修が少しわかりにくいです。	女	3年
コンピューター室の、パソコンの起動がおそい。あと使ってる人のマナーがよくない。うるさい。	女	3年
学事センターの人の態度が悪すぎるため改善してほしい。社会人としてお金をもらっているのであるから、その分はしっかり働くべき。社会人失格と言っても、過言ではないくらいの態度の悪さ。	女	3年
大学が大好きです。学問もサークルも充実していると思っています。	男	3年
もっと意欲的な授業をする先生が増えると良い。	女	4年
学事の人や課程センターの人が舌打ちをしたり、あきらかにイラついた態度で接してくることがあるので改善してほしい。	女	4年
志が高い人が周りにはとても多く大変刺激になります。	女	4年
とても勉強のしやすい環境で満足しています。	男	4年

## G

授業中に話をするのはやめてほしい。また、ある授業ではスマホで動画を見始めた学生もいて、大変気が散った。	女	1年
先生にもよりますが、先生が一方的に話をするだけでなく、授業中に学生同士が意見を話し合ったりするなど、もっとコミュニケーションを取りたいと思っています。	女	1年
もう少し板書をしてほしい。	女	1年
大学の雰囲気は好きだが、授業があまりおもしろくない。受講できる授業が少なすぎると思う。	女	1年
すごい。	男	1年

全体的に勢いが無い。	男	1年
少し距離があるのかなと思う。	男	1年
授業で「友だちとグループを作りましょう」みたいなことをすると、友人がいない人が不快な思いをします。	男	1年
1時限目を遅くしてほしい。	男	1年
交通のアクセスが不便で、行きも帰りも学生で満員なのが辛いです。私語が多いと思います。	女	2年
とても充実した大学生活を送ることが出来て満足している。	女	2年
自分も含めて、将来に不安のある人と将来の希望がしっかりしている人の差が大きいので、少し焦っている。できることなら、学部、専攻選びからやり直したい。	女	2年
先生と生徒の関係がうすいと思う。分からないことがあっても、どの先生なら親身になってくれるか分からないので、相談できない。あと、私は社会学部なのでお金の授業とか、全然ないのですが、今後絶対そういう知識が必要だと思う。いちいち独学で勉強しなくてはいけないので大変です。	女	2年
大学の授業はおもしろくない。人数が多いほど、誰もきいていない。先生も話す気をなくしているように思える。おもしろい授業をすれば、ケータイさわる人もねる人も減ると思う。	女	2年
授業を受けたい意志はちゃんとある。もともと勉強は嫌いではないし。だから、その私のやる気に見合った授業を行ってほしい。でないと、私は大学に行けなくなってしまふ。今の自分にとっては、全てを失うに等しいことであるから。	男	2年
大学内でもっと高校の時のような修学旅行、体育大会などあればはば広い交友関係ができそう。	男	2年
単位はもっと簡単に取れるようにして、大学はもっと学生の自主性に任せるべき。	男	2年
事務の対応が気になる。あまりよくない。臨機応変に対応して頂きたい。全学科目である授業で7割もの人が試験に落ちたものがあつた。ありえない。(ルネサンス文化を学ぶ。××先生)	女	3年
今は学祭は年に1度だけですが、他校にはないG大だけの大きなイベントを増やして盛り上げたい。	女	3年
私は、この大学に入学してとても満足しています！職員さんも先生も友達もとても大好きです！	女	3年
アンケート調査(授業評価)を実施しているので、その内容に促した形で授業する人が多いと思います。それでも、面白い授業が多いので、来て良かった、学べて楽しいと思っています。	女	3年
大学の事務職員などの対応は、素っ気ないと感じることが多く、悩みや相談事があつてもあまり親身になってくれないので、打ち明けることができない。	女	3年
私の通う大学には、本当に様々な人がいる。部活に一生懸命にはげむ人、学問をきわめる人、アルバイトに精を出す人など…それぞれが学生生活を送りやすい環境をととのえてくれていると思います。あと1年ちょっとで卒業してしまうのが惜しいです…。	女	3年
大学職員の学生への対応時の態度が悪い気がする。(話の仕方など)	男	3年
講義をする先生によって、教え方の上手な人と下手な人両方がいる。下手な人の講義を聞いても楽しくない。興味のある分野だと思って受けに行ったのに、裏切られるようなことというのが実際にある。	男	3年
ごくまれですが、遅刻と休校をひんぱんに、予告もなしに繰り返す先生がいます。出席率でその先生に僕らがされているのと同じように成績をつけるなら、不可になるほどです。直してもらえれば幸いです。(社会学関連)印象に残ったこと。身近→社会的に。	男	3年

G 大学は自由な校風のすばらしい大学であるとは思いますが、自由すぎて自分で決定することが多く、自分の選択が本当に正しいのか将来を不安に感じることもある。	男	3年
昔はもっとまじめにすべきと思ったが、自分のやりたいことを自分でやれということだと思ふようになった。	女	4年
職員の対応が悪い。学生も勉強に対する意識が低い。	男	4年
社会学理論や領域社会学全般に対しての分かりやすい参考書をつくってほしい。	男	4年
生徒一人あたり、毎年約 100 万円の学費を徴収しているのだから、設備に投資すべきだ。	男	4年
大学の先生はゼミ等で深く知り合った人以外は顔も名前も知らない人が多い。大学側の人と密に接する機会が4年間でほぼなかったため、印象も希望も特にない。	男	4年
大学の職員の受け答えがとても冷たい印象がある。もっと学生の相談等に丁寧な対応をして欲しい。学生については、もっと意識的、積極的に授業に参加すべきだと思う。	男	4年
向上心のない学生が多い、と感じる。	男	4年
授業が自己満足の場合であり、やる気がない。学生が学生なら先生も先生、教える気もなければ、聞く側も聞く気のない授業ばかりで無意味に感じる授業は多く存在する。	男	4年

## H

学生は、はしゃいだり、大騒ぎするのをもう少し控えて落ちつきを持ってほしいと思う。	女	1年
大学であるにも関わらず、授業中の私語が絶えなかったり、意図的に授業の途中から遅刻してくる学生もいたり、まだ子供だなど思う人が多い。また、一人で行動することができないような人もいて、本来の大学生としての姿ではないと思う。	女	1年
私の大学では、先生は分からない問題に良く対応してくれていて良いです。	女	1年
祝日が授業日なのが不満。	女	1年
大学に4年間通って得られること、得るためにすべきことをもっと生徒に伝えるべき。	女	1年
今日、11月14日は埼玉県民の日です。	女	1年
そこそこ有名な大学だがこの程度なのか、と学生に思うところがある。そうした学生にはなりたくない。	女	1年
どの授業もむずかしいですが楽しいです。	女	1年
もっと学生に勉強させるように対策をとって欲しい。大学生は遊んでるイメージを作り出しているのは環境もあるからだと思うから！！	女	1年
黒板の字が略字であったり、見えにくく分からないことが多いので、もう少し丁寧に書いていただきたいです。	女	1年
スクールバスを運行してほしいです。	女	1年
勉強したくない人が大学には沢山いるなど感じる。	女	1年
大教室などで多くの人数が集まっている授業だと、私語を止めない人がいて、それについて先生が注意をして、授業が中断することがある。大学生のモラルが低下しているように感じ、そのまま社会人になると思うと、日本の未来がとても不安である。	男	1年
この学校の設備についてもう少し考えるべきことがあるのではないと思う（トイレ、コンピュータ、etc…）。	男	1年
かわいい子多い。	男	1年
学食がとても高い！！	男	1年
安価な通学バスが欲しいです。	男	1年
大学は駅近くにして！バスの本数増やして！ケイタイの電波をよくして！教室の移動が大変だから近くにまとめて！	男	1年
熱心な人の周りには熱心な人が集まりやすいと思います。	女	2年

良い先生はとても良く、やる気のない先生は本当にはないと思う。自分1人で資料を読んでいるような授業の先生もいれば、1つの授業のためにたくさんの準備をして質の良い授業をする先生もいる。学生も学校も落ちついていて雰囲気はいいけど、すごく魅力を感じるような面白い人はいない。	女	2年
立派な活動している人はたくさんいる！電車とか通学路とか、公共の場で自分がどう見られているか意識できると good！	男	2年
まだ大学2年なので、あまり分からないが、もう少し必修教員とコミュニケーションがとれるような場が欲しい。	男	2年
授業中話す人（私語）が多い。	男	2年
学生課の仕事が遅い。（例）ネットで情報を提示するといつて、指定日よりおくれて提示する時がある。	男	2年
授業にあまり興味がわからないのは自分のせいなのか教師のせいなのかよくわからない。	男	2年
教授との距離を縮めたい。	男	2年
学生のマナーが悪い。また、あまりにも講義中の私語が多く、集中出来ないなので、先生方は厳しく対処してほしい。	男	2年
祝日は休みにしてほしいです。	男	2年
自分は教職課程を履修しているのだが、私の学科の学生が教職課程を履修しようとする、2つのキャンパスを行き来する必要がある、非常に負担になっている。出来れば1つのキャンパスで一般科目と教職科目が履修できるようにしてほしい。	男	2年
学校が駅から遠いから、無料バスでも作ってほしい。	男	2年
教務課がゆうずうがきかず今年のシステム改修でとてつもなく使いにくくなりとても不便。	男	2年
教える側も教えられる側も、共に一人よがりが多い。互いの立場になって、物事を考える人が少ない。社会性が両方低い。教えるのなら、相手に、よりわかるように伝える一興味をひくような授業に努めるべきだし、教わる側は、教えて頂く姿勢、周りへの配慮をもって出席すべきであると思います。	女	3年
教務課の対応が良くない。	女	4年
大学のときにどれだけたくさんの経験をするのか（バイト、あそび、勉強、サークル、ボランティアなど）で今後の将来に変化が出てくると思う。「学生のうちに」いろんなことを見て感じて考えてこうどうすることをした方が良かった。	女	4年
“Do for others”という大学理念がしっかりと、しかし出しゃばることなく根付いていると思う。困ったとき、悩んでいるときに相談して、親身になってくれると感じる。相談できる大人がいてほしいと思う。	女	4年
もっと学生は常識や教養を身につけるべきだと思う。	男	4年
単位の相談、説明がわかりにくい。連絡等の発表が遅い。	男	4年

## J

人が増えたにも関わらず食事をする場所が減ったので、非常に困る。	女	2年
授業中におしゃべりがしたいなら、SNSで話してほしい。音を出さな。	女	2年
「担当外です」とよくお役所対応されて困っている。担当が決まっているのならば明示すべき（職員）。	女	2年
面積が狭い。リラックスできる場が少ない。	女	2年
大学の職員は学生に対してタメ口で接するが、不愉快なので直してほしいと思う。	女	2年
J-PO の運営に不満があります。便利なものでも使う人間がそれについていけない	女	2年

のならば、使わないほうが良いと思います。みんな振り回されていると感じました。先生方の連携が上手く行っていないと感じました。履修のガイダンスが履修登録(一回目)の後というのが解せなかったです。		
大学の職員はもっと学生側の立場にたって学生のために仕事をして欲しいと思うことがあります。また学生はもっと愛校心を持って大学内外の活動をするべきだと思います。	男	2年
食堂の拡張を！！	男	2年
ある程度よいです。	男	2年
非常にこじんまりとして息が詰まりそうだ。授業では講師の言っていることが何なのか、理解できないことばかりだ。人間関係においても環境としてもこの学校は自分に合わないところだと痛切に感じる。	男	2年
学生部は何のための学生部なのですか？学生のための学生部ではないのですか？	男	2年
力を入れるところがずれている気がする。新しい建物を建てるより、今あるものの足りない部分を補うべきだと思う。	女	3年
高校の先生みたいな感じを引きずっている人が多い。先生自身も大学を社会に出るための職業訓練所と考える人が多い。	男	3年
もう少し広い図書館などが欲しいです。	無回答	3年
設備はしっかりしているんだから、ちゃんと先生や教員は使いこなすべきだと思う。使わないなら使わないでいいけど、使うならやり方をしっかり覚えてから使ってほしい。悩んでいるのは時間の無駄。しっかり準備できてないのまるわかりな授業って生徒もそれなりの態度になるのは当然だと思う。	女	4年
程度の低い学生が目立つけれど、まあこんなものかと思っている。	男	4年
学生の「お客様化」と俗に言われているというが、大学の教員は学生に手厚く面倒を見すぎであると感じる。大学は本来、自発的に学ぶことで意味を持つ。そもそも大学にかかるお金も親が出しているのだから、学生側がきちんと自己管理し、学習に励むべき。やる気のない学生は淘汰されて当然。	男	4年

## L

たばこについての校則をもっと厳しくすべきだ。	女	1年
対応が悪い。	男	1年
大学は様々な人がいて面白いところです。	男	1年
・食堂に「スターバックス」や「モスバーガー」を導入してほしい。・エアコン(クーラー、暖房)の配慮をもう少しなんとかしてほしい。(暑いのにクーラーがつかない等)	男	1年
大学の周りにスタバやドトールなどのカフェが欲しい。	女	2年
教務課の職員はいつもやる気がなく、対応が雑だと感じる。	女	2年
教育の本質、つまらなすぎ	男	2年
人工芝にしてほしい！	男	2年
出席を気にするより、実力や知識で成績をつけるべき。	女	3年
編入学してきた人にもっとサポートしてほしい。分からないことが多すぎる。就職について不安な事ばかりである。	女	3年
大学の職員は学生にもっと優しくしてほしい。(あくまで教員ではない)	女	3年
出席をほとんどしなくても単位をくれる先生がいますが、それは頑張っている人たちにとっては不満です。AとCの差はあるかもしれないですが、大学は自分の意志で来てい	女	3年

るわけだから「全員に単位は（悪くても）あげたい」というのは間違っていると思います。		
グループディスカッションの場をもっと作って欲しい。	男	3年
大学→清掃の方はとても丁寧に掃除をしてくださっているが、校舎が古すぎるので、新しくして欲しい。	女	4年
大学の先生は気さくな人が多い。大学職員は対応が最悪。改善されるべき。	女	4年
教務課の人間が学生に対して冷たすぎると思う。理不尽なことで怒られても意味が分からないし、自分勝手すぎる。	女	4年
大学の先生については前期の講義を受講して大変満足しています。学生については志を同じくする友人が多いので、こちらも大変満足しています。	男	その他

## W

購買が小さすぎて欲しいものが揃わない。建物の移動をするときに外を通らず、建物内で移動できるようにしてほしい。機械系（プロジェクター等）壊れているものが多く、授業が進まない。実習で休む日を公欠にしてほしい。	女	2年
授業など先生は頑張っているかもしれないが、校舎や事務の方、食堂の人の対応が悪すぎる。実習担当の教師は最悪な対応である。食堂の料理はまずすぎる。しっかりと味見をしているのだろうか。	女	2年
コンビニ設置。	女	2年
やっぱり学費が高いです。	女	2年
講義が面白いと感じる先生もいるが、一方で映像だけを見せて全く講義をしない（受講する意味を見出せない）先生もいる。事務の職員さんに態度が冷たい（怖い）人が数名いる。	女	2年
1年の頃だけキレイな校舎での授業が多く、2年になると何だか後回しにされた授業構成、教室になっていると感じる。	女	2年
・どんなに適当な人でもやることをやっていたら何も言うことはないと思う。サボったりした分は自分でけりをつけなきゃいけないのに、それをしない人が多い。・教員との距離が遠い。	女	2年
教員免許を取るためにたくさん科目を履修しなくてはいけないことは分かるが、実習に行って課題をして、忙しすぎて辛い。私は趣味のことやアルバイトの為の時間がもう少し欲しいと感じる。	女	2年
設備をもっと整えてほしい。	女	2年
保健室の先生をもっと増やしてほしい。学食を栄養バランスの取れたものにしてほしい。	女	2年
設備が悪い。	女	2年
先生方同士、もっと連携を取って欲しい。事務と先生の間も同じ。	女	2年
先生達の中で連携を取り、発言に責任を持っていただきたい。	女	2年
学生と職員の温度差。	女	2年
もう少し人の意見を聞いて欲しい。	女	2年
購入品数増やしてください。食堂のメニューも増やしてください。	女	2年
映像を観ることの多い授業や、早く終わってしまう授業が多く、楽をした授業をしないでほしい。	女	2年
非常に考えて行動する人が多く、人柄が良い人が多い。大学の施設をもっと充実させて欲しいと思う。お金を多額払っているのに、授業に必要なものを大学が提供してくれないので（学費を使う場所が間違っているのでは？）、授業で（例：造形の木材など）必	男	2年

要なものは、大学が用意してくれると良い（例外、牛乳パックなど）。実習の休み分も欠席に入ってしまう（5回のうち1回に）というのをやめて欲しい。欠席届けを出さなくてはならない量が多すぎる。コンピューターなどで出来る様にして欲しい。		
対応の悪い職員さんがたまにいて、学生のことを考えてくれないと感じる。	男	2年
・授業中騒がれたり携帯のバイブレーションがなったりするのはイライラする。話すにしても度をわきまえてほしい。・別の学部が騒いでいてうるさい。	男	2年
経営学部がうるさい。	男	2年
別の学部の間人間がはしゃぎまくり、正直な話邪魔である。大学生生活は楽しむだけにあるものではないということを感じて欲しい。	男	2年
専門分野のこと以外にも成人してから必要な知識（例えば選挙のこと、年金のこと、保険のこと等）について教えてもらえるような講座が必要であると思う。	女	4年

## Z

みんな目標に向かって学習していて、私も動かされます。	女	1年
先生と触れ合う機会が少ないと感じる。もっと個人でコミュニケーションを取る方がいいと思う。	女	1年
・他大学と交流する授業があって欲しい。・他の大学の先生の授業を受講してみたい。・学食をもっとパワーアップさせてほしい。	女	1年
教員がZ大生のことをひとまとめにしてネガティブな発言をすることがある。全員一緒ではないし、やる気が下がるのでやめてほしい。	女	1年
ゆるい授業では修了10分前に入ってきた学生でも出席にしているものもあり、それは止めた方がいいと思います。それではしっかり時間通りに来た人のモチベーションが下がります。	女	1年
もっとパッションのある授業をして欲しい！（数%すぎる…）もっと仲良くなりたい。高校の頃のように。	女	1年
もっと積極的に熱意を持っておもしろいと思えるような授業をして欲しい。予備校の教師の方がおもしろくないことも興味をわくようなやり方をしてくれていたと感じている。	女	1年
先生の話聞くだけの授業よりも、映像や音を使うものや、ディスカッションなどの参加型の授業をもっと増やしてほしい。	女	1年
とても楽しい学校です。	女	2年
クリスマスのオーナメントがさみしいし、Z大っぽくないので、もっと派手に飾りつけてほしいです。	女	2年
大学の雰囲気、人の雰囲気にあわせて明るくて過ごしやすいところだと思う。	女	2年
あまり勉強している感のある授業がない。楽しい授業が一つしかない。テストもレポートも書けば単位もらえるような授業ばかりで不安になる。	女	2年
私がこの大学を受けたのは、たいした理由はなくネットで調べて、ほとんど最初に見つかったからです。大学もひとつしか受けていません。でもクラスの人や教員と楽しく授業を受けられているので、後悔していません。	女	2年
しいて言うならXX先生みたいにみんなで授業をつくっていく感じがいいです。	女	3年

## I

あまり話さないなので関係が薄く感じる。	女	1年
f i g h t !	男	1年

講義が楽しくない。	男	1年
食堂の飯をおいしくして欲しい。	男	1年
先生と生徒がもっと密になっていいと思う。	男	1年
学生の意見をもっと全面的に聞くべき。そうすればもっと良い学校になる。	女	2年
学生はあまりやる気のない人が多い印象。先生はみんなとてもいい人だが、少し意味の分からない授業をする人もいる。もっと学生の状況にあった先生を(クラス編成が必要な授業に)あてるべき。	女	2年
体育会の学生が使用する設備への投資を積極的に、まんべんなく全部活にしてほしい。	女	3年
キャリアセンターの対応がとても悪いので、改善して頂きたい。	女	3年
・チャラチャラした学生が多く感じ、大学自体のイメージダウンにつながっている気がする。・面白い授業をする先生がたくさんいる。	女	3年
自分とは関わってほしくないですね。	男	3年
上昇志向を強く持ち続けてほしい。	男	3年
たばこをどうにかしてほしい。	男	3年
他大学と比べて食堂が高い、あまり美味しくない。	男	3年
学外の講師の方々の講義ほど分かりにくかったりします。	男	3年
大学で「この先生が好き」と思える先生が少ない。理不尽なことをしたり、言ったりする先生が目立っている。(突然の休講。高額テキストを強制的に買わせ、所持をチェックし買っていないければレポートを受け付けない=単位を金で買わせる行為。遅れて入ってきててもあやまりもしない。初めに挙げた授業計画と違う評価方法にする)など。	女	4年
大学周辺が栄えていて欲しかった。	男	4年
クラブにもっとお金を出していただきたい。	男	4年
食堂のメニューを増やして欲しいです。	男	4年
社会学部の先生方は教育熱心な方々が多いと、4年間の大学生活を通じて感じました。	男	4年

ロ

授業で自分の話ばかりしていて授業なのか雑談なのか分からない講義があり、内容が全く分からなかったりする。しゃべる学生の多い授業は先生の話が聞こえず、大切な事を聞き逃してしまうので、注意しないのならプリントを渡すなどして欲しい。	女	3年
場所がとても不便なのにもかかわらず、高いバス代、電車代(とても高い。全国的に見ても)も払って来ている生徒は本当にえらいと思う。他の大学よりも真面目な子が多い。場所(と施設)さえよければ、本当に良い大学。もう少し都会の方に大学を作って、良い人材を取る方が良いと思う。いつかでいいので。	女	3年
常識のない学生が多い時に、先生がもっと注意すべきだと思う。	女	3年
・教務、学担の方の対応の悪さ・スクールバスの不便さ(高い定期代を払っているのに立たされたり、無駄に早い発車と授業の何時間も何分も早く大学につく意味が分からない)	女	3年
毎年学生総会があるが、学校側にとってつごうのよい実現しやすい提案しか採用せず、普段学生が学校へ訴える事も聞き入れず、学校は学生の意見に聞く耳を持たないのかと感じる。	女	3年
常に監視されている気がする。企業就職に優しい環境にもして欲しい。	女	3年
満足です。	女	3年
ロ大学は私がとっても入りたかった大学なので、不満はあまりないです。大学の雰囲気も大好きだし、先生とのコミュニケーションもたくさん取れるので、すごく楽しいです。のびのびしている所も大好きなところです。もうすぐ卒業で、4年間って本当にあつと	女	4年

いう間でしたが、心からロ大学に入学する事ができて良かったと思っています。		
学内にコンビニなど物を買える場所を増やして欲しい。	女	4年

二

4月になると皆が真面目に学校に来る為、昼食を食べる場所すらなくなり、3限に間に合わない。このことから、大学生は授業をさぼるとするのは本人だけの問題でなく、環境も影響すると思うから、対策を取って欲しい。	女	1年
あまり大学の先生と面と向かって話をする事があまりない様に感じる。もっと話をしたいし聞きたい事もたくさんあるので、先生と話す機会をもっと増やして欲しい。	女	1年
大学内が汚い、古いと思う。	女	1年
取れる科目の幅を増やしい欲しい。	女	1年
喫煙所をもっと少なくすべきだ。少なくとも一般の人達が歩いて通るような場所に作らないで欲しい。	女	1年
G I Sの授業は本を読んで勉強できる事ばかりで正直つまらない。そしてもっと心理学や経営学（マーケティングなど）の授業を増やすべきだと思う。	女	1年
自分はあまり知識もなく勉強もしてこなかったけど、推薦で入学したため他の人との学力の差が気になる。でも勉強の仕方が分かりません。	女	1年
先生と接する機会が少ないので、何かしらの形を作って欲しい。	女	1年
学食がもっと充実して欲しい。	女	1年
事務処理が悪いのか、見えにくい書類や冊子が多い。もう少し工夫して配布物を作成して欲しい。喫煙スペースをちゃんと分煙できる場所に作って欲しい。時々近くを通らねばならず気持ち悪くなることもある。	女	1年
先生自身が無気力に授業されると、こちらまで無気力になります。	女	1年
殆どの人（教授）が素晴らしい経歴を持っている事、そしてそれをあまり学生に自慢しない事が素直にすごいと思います。時々あまり学生について考えず、教えようと努力しない人がある様に感じられるので、みんな教師であるという自覚を持ってほしいです。	女	1年
もっと学生の近くにいて欲しい。	女	1年
あまりに大人数の授業が多いので、もっと少人数授業を増やして欲しい。あと政治学科の必須専門科目をもっと増やして欲しい。	女	1年
学食をもっと安くしてください。	女	1年
もっと大学らしい高度な勉強がしたい。文系でも研究して論文を書くような事がしたい。ほとんど寝てても単位が取れてしまうような授業は生徒には人気であろうが、個人的にはあまりよろしくないと思う。部活やサークルでもそうであるが、やはり大学なので勉強らしい勉強がしたい。	男	1年
もっとディスカッションの時間が欲しい。宿題を出して欲しい。	男	1年
講義に出席せず、効率よく単位を取るのが賢い大学生だ、というような風潮が広がっており、不快です。	男	1年
教員を若くしてください。経験はあるのかもしれませんが、耳が遠かったり変なギャグを飛ばしたりしてきます。	男	1年
興味惹かれる授業が少ない。	男	1年
とにかく二大は職員の態度、対応が悪い（笑）。	男	1年
一般常識だと思われるような事柄についても、0から学べる環境が欲しい。	男	1年
キャンパスが都心にあるのは良いと思うが、狭い敷地内に建物が密集していて、開放性、あるいは学生にとっての隠れ家的憩いの場がないと思う。緑が多く、歴史的建物とゆとりがある情緒あふれるキャンパス（××大学が理想）が望ましい。	男	1年

女子学生に対して極端に優しいご年配の男性教員がいるのですが、男女平等の扱いをして頂きたいです。	男	1年
学費高すぎ	男	1年
意識の低い学生が多いと思う。	男	1年
大学をもっと広くして欲しいです。	男	1年
書を捨てよ、町へ出よう	男	1年
左翼の大学だと思う。今だに学生運動をやっている。	男	1年
先生と生徒、生徒と先生がもっと触れ合う事ができるイベントみたいなものをやるべきだ。	男	1年
大学の教授も教師ではなくても教育者なわけだから、教える立場である以上、自分の研究成果を自己満足的に話す授業はしない方が良くと思う。大学といえども学生に教えるのなら、そうすべきだと思う。	男	1年
硬式野球部に所属しているので、出席を考慮して頂きたい！	男	1年
今の大学に行く事ができてとても良かったと思います。大学の雰囲気は学生主体で気取っている人があまりいなくて、そういう所が好きです。学部は授業面ではグループワークが多くいろいろな人との出会いがあり、生活面では美意識が高くおしゃれな人が多く、そういったところがとても自分に合っています。	女	3年

## ホ

お疲れ様です。	女	1年
今を生きたい。	女	1年
1週間を8日にして欲しい。	男	1年
モット繋がりを創り出したい。	男	1年
先生ともっと話す場が欲しい。	女	2年
学生に勉強に対する必死さがもっとあるような大学風土であればいいかなと思う。	男	2年
勉強ができる自習室の拡充と、図書館にある本で貸し出しっぱなしの本の回収を徹底して欲しい。	男	3年
提出したレポートに対して、もっと教員からのフィードバックがあればなあと思うっています。	女	4年
学生と教授とのつながりがもっとあれば、双方ともに刺激があるのではないかなと思う。一方的に話す、聞くだけの関係は面白くない。	男	4年

執筆分担（執筆順）

武内 清	（敬愛大学特任教授）	はじめに、第 1 章、おわりに
浜島幸司	（同志社大学准教授）	第 1 章、第 2 章、第 4 章
岩田弘三	（武蔵野大学教授）	第 3 章
黒河内利臣	（武蔵野大学講師（非））	第 5 章
山口晶子	（聖徳大学講師（非））	第 6 章、第 7 章
谷田川ルミ	（芝浦工業大学准教授）	第 8 章
大野道夫	（大正大学教授）	第 9 章
鈴木美伸	（法政大学特任講師）	第 10 章
竺原雅人	（有限会社ソフィアート代表取締役）	第 11 章

平成 24 年度～平成 26 年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））

課題番号 24531072 機関番号 32502

現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究  
——学生の「生徒化」に注目して——

2015 年 2 月 26 日 発行

発行者

〒263-8585 千葉市稲毛区穴川 1-5-21

敬愛大学国際学部こども学科

研究代表 武内 清

TEL 043-251-6363（代）

e-mail : fwne3137@mb.infoweb.ne.jp